

文化庁委託事業報告書

平成28年度

危機的な状況にある言語・方言の
アーカイブ化を想定した実地調査研究

2017年3月

琉球大学
国際沖縄研究所

はじめに

石原昌英（琉球大学）

本書は、平成28年文化庁委託事業「平成28年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究」の報告書である。「危機的な状況にある言語・方言」に関する文化庁の委託事業は、平成23年度から平成26年度までの4カ年間にわたり、「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」（平成23年度・平成25年）と「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業」（平成24年度・26年度）として実施された。八丈方言および奄美・琉球諸方言の危機の実態と保存・継承に係る取組等の実態については、これまでの研究である程度が目途がついたと思われる。（集落により方言に差異があるということを考慮すると、これまでの実態に関する研究で十分とは言えないことは明らかではある。）危機的な状況にある言語・方言の保存・継承にむけた取組のひとつとなるアーカイブ化を想定した記録・保存を目的とした実地調査研究が平成27年度から開始され、今年度は昨年度の調査対象となった方言（鹿児島県の喜界方言、瀬戸内方言、沖縄県の津堅方言、平安座方言、久高方言、奥武方言、宮良方言、黒島方言）について、調査内容を変えた実地調査を実施した。また、同様な実地調査が必要とされる方言（鹿児島県奄美大島の笠利方言、沖縄県伊平屋島の伊平屋方言及び西表島の船浮方言）について予備調査を実施した。

以下に、本事業の目的・計画を記しておく。本報告書を利用していただくことの参考となれば幸いである。

【業務の目的と概要】

我が国における言語・方言のうち、消滅の危機にあるものについて、ユネスコが平成21年に発行した”Atlas of the World’s Languages in Danger”の内容及び、平成23年度から平成26年度にかけて大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所及び琉球大学国際沖縄研究所が実施した文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業」及び「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究事業」を参照の上、消滅の危機にある6つ（奄美方言、国頭方言、沖縄方言、宮古方言、八重山方言、与那国方言）の区画において、昨年度に引き続き、調査研究が十分とは言えない区画内の地域の方言について、当該地域の方言の保存・継承に資するため、アーカイブとして公開することを想定した音声資料や映像資料の収録を中心とした実地調査研究を行う。

奄美・琉球諸島の消滅の危機に瀕した6つの方言については、研究蓄積の多い島・地域と不足している島・地域とがあり、その質と量は様々ではない。また、同じ島とはいっても大きな島もあれば小さな島もあり、一つの島の中にも大きな言語差がある。同じ島の中でも研究蓄積の多い地域と全く不足している地域がある。沖縄島、奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、久米島、宮古島、石垣島、西表島などの大きな島の内部には、母音の数や子音の数が異なったり、文法体系や語彙体系の大きく異なったりする個性的な下位方言が多くある。それほど大きな島とは言えない宮古伊良部島には六つ

の集落があるが、発音上の特徴及び文法上の特徴の違いによって個性的な4つの下位方言に区分される。沖縄島、奄美大島、喜界島、石垣島等の大きな島の内部には多くの個性的な下位方言が存在する。

島ごとの研究蓄積の多寡の差が大きいだけでなく、島の内部でも研究蓄積の多寡に大きな差がある。沖縄県の沖縄島南部の那覇方言、首里方言、北部の今帰仁方言に関しては数多くの研究と音声資料がある。しかし、那覇方言、首里方言、今帰仁方言以外の個性的な小規模集落や沖縄島の周辺離島については研究も研究蓄積も不足している。石垣島の中心市街地の方言については多くの研究があるが、その周辺の集落や地域、石垣島以外の離島では研究が不足している。奄美大島については、旧名瀬市市街地の方言の研究が多く、瀬戸内町の加計呂麻島、請島や与路島の研究が不足している。また、喜界島の方言も研究蓄積のある下位方言とほとんど無い下位方言がある。特に喜界島北部の方言の研究は不足している。一方で、公開されている音声・映像資料については、琉球大学附属図書館のホームページ上に公開している琉球語音声データ、日本放送協会編『全国方言資料第11巻琉球編Ⅰ』、『全国方言資料第12巻琉球列島編Ⅱ』等があるが、琉球諸語全体の多様性の維持と継承を考慮すると、質、量ともに絶対数が不足している。

本事業の調査対象地は、昨年度に引き続き、鹿児島県喜界町（喜界島）、鹿児島県瀬戸内町（奄美大島南部）、沖縄県うるま市平安座島、沖縄県うるま市津堅島、沖縄県南城市久高島、沖縄県南城市奥武島、沖縄県石垣市、沖縄県竹富町黒島の7地点である。また、昨年度の調査対象ではなかった、奄美大島笠利町（奄美方言）、伊平屋島（国頭方言）、西表島船浮（八重山方言）において、アーカイブ化を想定した研究の予備調査を行う。なお、現地調査についてはインフォームドコンセントを徹底し、調査協力者と同意書と取り交わし、同意した者のみを対象に音声資料・映像資料の収録を行う。

調査研究については、琉球大学東京オフィスでの報告会及び事業報告書によりその成果を公表する。また、琉球大学国際沖縄研究所のHPに本事業のHPを開設し、昨年度と今年度の研究成果等を公表する。

本調査で収録・編集した音声データ・映像データを調査協力者が同意した方法で公開するアーカイブの開設について琉球大学附属図書館との協議を開始する。なお、同図書館は、「琉球語音声データベース」を公開している。

本事業で調査対象地としている8地点での調査（音声資料・映像資料を含む）は2年計画のものである。2年目となる本年度は、当該方言のアーカイブ化を想定して、以下の調査を実施する。

- 1) 言語的な特徴（動詞・形容詞の用法）を収録する。
- 2) 日本放送協会編『全国方言資料第11・12巻』に示された場面を参考として、複数場面（計5分程度）の会話を収録する。
- 3) 当該方言バージョンの「大きな蕪」を収録する。
- 4) 新たに調査地点を若干追加し、アーカイブ化を想定した研究の予備調査を実施する。

【業務実施計画】

本年度の業務実施計画は次の通りである。

(1) 消滅の危機に瀕しているとされる琉球諸島の6方言の区画内で、緊急度の高い以下の8地点の伝統方言の調査を実施する。

鹿児島県

1. 喜界島（国頭方言）、2. 奄美大島瀬戸内町（奄美方言）

沖縄県

3. うるま市平安座島（沖縄方言）4. うるま市津堅島（沖縄方言）、5. 南城市奥武島（沖縄方言）、
6. 南城市久高島（沖縄方言）、7. 石垣市・宮良（八重山方言）、8. 竹富町黒島（八重山方言）

当該区画内での地域方言の調査については、将来のアーカイブ化を想定して、次の項目の臨地調査と、伝統方言話者をインフォーマントとした音声・映像記録の収録を行う。

- (1-1) 当該方言の文法概要がわかるような動詞、形容詞の基本的な活用形の一覧表と例文の記述と録音を行う。
- (1-2) 挨拶・依頼等の場面を設定した短い会話を、できるだけ自然会話に近い形で音声・映像記録として収録する。併せて、その文字化作業を行なう。
- (1-3) 「大きな燕」の当該方言訳をインフォーマントに読んでもらい音声・映像記録として収録する。併せて、その文字化作業を行なう。

(2) 危機度が高く、音声・映像資料を含めた既存の方言資料もほとんどなく、近年の実態についての情報も乏しい、下記の方言についての予備的な調査を実施し、今後の対策検討の基礎資料を得る。

- ・鹿児島県奄美大島笠利町
- ・沖縄県伊平屋島
- ・沖縄県竹富町西表島船浮

(3) 調査研究の結果については、国際沖縄研究所のHPに開設する本事業のHP、琉球大学東京オフィスで開催する報告会、及び事業報告書で発表する。

なお、言語・方言（例えば「奄美語」「沖縄語」）の名称については調査担当者が提出した原稿に記されて名称をそのまま使用し、報告書全体で統一させてはいない。

平成28年度
危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した
実地調査研究

目次

はじめに……………石原昌英

調査報告

鹿児島県喜界町小野津方言……………	白田理人	1
将来の「教材化」を目指した言語資料のコンテンツについての考察 奄美大島瀬戸内町での事例を通して……………	前田達朗	29
沖縄県うるま市平安座方言の動詞と形容詞の活用……………	當山奈那	57
沖縄県奥武島方言……………	中本謙	75
沖縄県久高島方言……………	新永悠人	97
沖縄県津堅方言の報告 — 動詞形態論と言語資料としての翻訳テキスト — ……	又吉里美	115
八重山語・宮良言葉(めーらむに) : 記述文法と学習資料に向けた形容詞の記述……………	Christopher Davis	137
沖縄県黒島方言の動詞・形容詞・談話……………	荻野千砂子・原田走一郎	145

予備調査報告

鹿児島県奄美大島佐仁方言……………	白田理人	177
沖縄県伊平屋方言の名詞の格体系……………	平良尚人・備瀬百合音	181
伊平屋島田名方言の動詞の活用……………	崎山拓真・上門梨緒	195
沖縄県西表船浮方言……………	荻野千砂子	203

調查報告

鹿児島県喜界町小野津方言

鹿児島県喜界島小野津方言

白田理人

1 はじめに

奄美語喜界島方言（以下喜界島方言）は、鹿児島県大島郡喜界町で話されている方言である。喜界島には 30 余の集落があり、語彙面・音韻面・形態面に渡る集落差が見られる。小野津（おのつ）集落¹（以下地図参照）で話される方言（以降小野津方言）を含む北部諸方言は、中舌母音を持つ点で中南部の諸方言と異なる（平山ほか 1966, 上村 1972・1992, 中本 1976, 松本 2000, 大野 2002・2003, 木部 2011・2012）。本稿では筆者が現地調査²で得たデータに基づき、小野津方言を対象に、動詞・形容詞の活用、小野津方言による童話「うふかぶー（おおきなかぶ）」及び会話例を報告する。

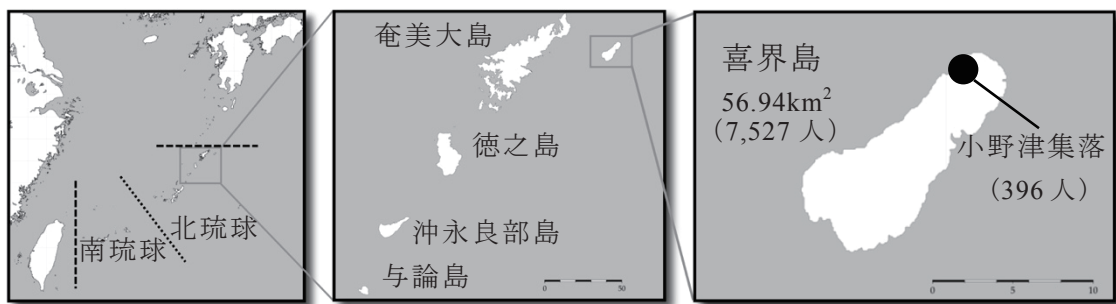


図 1 琉球列島／奄美群島／喜界島／小野津集落の位置³

2 前提

本節では、次節以降の前提として、まず 2.1 で小野津方言の音韻体系の概略について述べる。次に、2.2 では異形態の交替の分析に関して本稿が採る立場について述べる。

¹ 方言名は unucu [unutsu] である。神宮（かみや、方言名 hamya [hamja]）と前金久（まえがねく、方言名 mēnuku [m^ɤe:nuk^ɥu]）の二つの行政地区からなる。

² 小野津集落出身・在住の 70 代女性 2 名（梅田明子氏：昭和 12 年生、田畑繁子氏：昭和 20 年生）を調査協力者とした聞き取り調査である。本稿には、文化庁プロジェクトの調査で得たデータに加え、JSPS 科研費 15J02695「北琉球諸語の文法記述・ドキュメンテーション及び歴史的研究」の助成を受けて行った調査で得たデータも含まれる。なお、活用の調査のための語彙項目の選定に当たって上野（1995）を参考にした。

³ 本稿では、国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図を適宜加筆・編集して用いている。（ ）内は喜界町役場発行の資料に基づく 2015 年 4 月現在の人口である。

2.1 音韻体系について

以下に、本稿で用いる表記により、小野津方言の母音音素一覧を示す。[]内は音声実現である。音声上の長母音、二重母音は、短母音の連続として解釈する(例 *mii* [m^hi:]「見ろ」、*utai* [utai]「歌い(不定形)」)。前舌母音と中舌母音の対立があるのは両唇音あるいは軟口蓋音に後続する場合のみであり、歯茎音／歯茎硬口蓋音／声門音の後に前舌母音は分布するが中舌母音は分布せず、唇軟口蓋音の後に中舌母音は分布するが前舌母音は分布しない。中舌母音と前舌母音の(音声上の)相違は、母音自体の調音位置ではなく先行する子音及び子音から母音への渡りにある。前舌母音に先行する子音は口蓋化し(例 *mii* [m^hi:]「見ろ」、*iki* [ik^hi]「行き(不定形)」、*amee* [am^he:]「網は」、*k^hheeti* [k^he:ti]「来ました」)、中舌母音に先行する子音は口蓋化せず、両唇音の場合は軟口蓋化する(例 *mii* [m^vi:]「目」、*iki* [ik^vi]「行け」、*am^ve* [am^ve:]「網は」、*k^hheeti* [k^he:ti]「掛けた」)。構造主義的に立てる音素としては、母音の対立／子音の区別のどちらの解釈も可能であるが、本稿では先行研究に従って母音の対立として解釈する⁴。

表 1 母音音素一覧

	前舌	中舌	後舌
狭	i	ĩ	u
半狭	e	ě	o
広	a		

次に、本稿で用いる表記により、次頁の表に小野津方言の子音音素一覧を示す。借用語には以下に加えて子音音素として š[ɕ], ɟ も見られる。[]内は音声実現である。異音について、p^h, dz, dz はそれぞれ母音間で摩擦音[ɸ], [z], [z]で現れる。p^hについては老年層(80代以上)を除いては語頭(特に円唇母音 u, o の前)においても[ɸ]で現れることがある。無声摩擦音 s, h は i の前で口蓋化しそれぞれ[ɕ], [ɟ]で実現する。音節構造は(C)(y)V(V)(C)である。y に先行するオンセット子音は両唇音または軟口蓋音に限られる。母音及びコーダ子音はそれぞれ一モーラの長さを持つ。音節末子音は鼻音／阻害音の区別のみが弁別的であり、調音点の対立がなく、後続する子音に調音点が同化する。阻害音の連続の場合は重子音として解釈するが、音節末子音は音的に破裂音／破擦音の前で無声閉鎖音で(例 *abba* [aɸba]「油」、*muččii* [mut^hɰtci:]「餅」、*kujja* [k^hut^hɰdza]「鯨」)、摩擦音の前では摩擦音で現れる(例 *hassaŋi* [hassaŋ^vi:]「髪の毛」、*assi* [aɕci]「そう」)。語末のコーダ子音としては鼻音のみが分布し、[ũ]~[ɲ]で現れる。語末及び形態素末の音節末鼻音は n と交替する⁵ため音素としては n を立て、形態素中では音声実現に応じて m, n, ŋ を用いて表記する。

⁴ 服部(1959:284)は、子音の対立として解釈している。

⁵ 例として、*kin* [k^hiŋ]「着物」、*kinoo* [k^hiŋoo]「着物は」、*dzin* [dzin]「膳」、*kurudzinuu* [k^hurudziŋu:]「黒膳」、*numan* [numaŋ]「飲まない」、*numanu* [numanu]「飲まない(強調形)」などがある。

表 2 子音音素一覧

		両唇	歯茎	歯茎硬口蓋	軟口蓋	唇軟口蓋	声門
破裂音	無声無気	p[pʰ]	t[tʰ]		k[kʰ]	kʷ[kʰpʰ~kʰw]	
	無声有気	pʰ[pʰ~ϕ]	tʰ		kʰ		
	有声無気	b	d		g[g]	gʷ[gʰb~gʷ]	
破擦音	無声		c[ts]	č[tɕ]			
	有声		z[dz~z]	ʝ[dʒ~ʒ]			
摩擦音	無声		s				h
鼻音		m	n	ɲ	ŋ		
弾音			r[r]				
接近音				y[j]		w	

2.2 形態音韻論的分析の方針

小野津方言の動詞語幹と接辞の境界では異形態の交替が見られる。例えば、以下のよう
なデータに対し、(1), (2), (3)それぞれの語例の共通部分は *iji-*, *nu-*となるが、これらを語幹
として取り出すと、残りの部分は非過去が *-yui*, *-myui*, 過去が *-ti*, *-di* となり、接辞にそれぞ
れ二つずつの異形態を認めることとなる。一方、語末の共通部分を接辞として取り出すと
非過去が *-yui*, 過去が *-i* となり、語幹について(1)が *ijir-*, *ijit-*, (2)が *num-*, *nud-*のよう
にそれぞれ二つずつの異形態を認めることになる。

- (1) a. *ijiyui* 「出る」 b. *ijiti* 「出た」 (2) a. *numyui* 「飲む」 b. *nudi* 「飲んだ」

このような異形態の交替の分析に関して、大まかに二つの立場がある。一つは、異形態
を分布によって説明する構造主義的な立場である。もう一つは、基底形から（弁別素性を用いた）規則により表層形を導き出す生成音韻論的な立場である。この二つの立場の違い
が大きく現れるのは、音韻論的不透明性（opacity）が見られる場合である。不透明性は規則
による説明でいうところの「反奪取順序（counterbreeding order）による過剰適用（over-
application）」の場合と「反供給順序（counterfeeding order）による過少適用（underapplication）」
の場合に見られる。上の(1), (2)の異形態を例にとると、規則による分析では、次頁(3)のよ
うな基底形、規則及び適用順序により、(4)のように説明される。次頁の規則中の C は子音、
C[+voice]は有声子音、C[+labial]は両唇音、C[+coronal]は歯茎音、ϕ は分節音なしを表す。
すなわち、(i)は有声子音に後続する t が d と交替する規則、(ii)は歯茎音に先行する両唇音
が削除される規則である。規則の適用順序として、(i)は(ii)に先んじて適用される。もし順
序が逆の場合は(5)に示すように、(ii)の適用により m が削除され、(i)が適用されなくなる。
(ii)→(i)のような順序は規則の適用環境を奪う順序であり、奪取順序（bleeding order）とい
う。(i)→(ii)のような順序はその逆の順序であるため、反奪取順序（counterbleeding order）
と呼ばれる。反奪取順序の場合、規則 x の適用をもたらした条件（音環境）がその後に適
用される規則 y により削除されるため、表層では規則 x が適用される条件が満たされてい

ないにも関わらず規則 x が適用されている。一見すると規則が過剰に適用されているため、これを過剰適用 (overapplication) という。過剰適用が見られる場合、「過去接辞-ti の異形態-di は m の直後に分布する」といった音環境による分布の説明ができない。このため、分布による説明では「非過去接辞が後接する語幹は num-, 過去接辞が後接する語幹は nud-である」のように、分布を語彙的な条件で説明する必要が生じる。

(3) 基底形 : /ijj-i-, /num-/, /-yui/, /-ta/

規則 : (i) $t \rightarrow d / C[+voice]-_$ (ii) $C[+labial] \rightarrow \phi / _C[+coronal]$

規則の適用順序 : (i) \rightarrow (ii)

(4)

	規則(i)	→	numdi	→	nudi
/num-/ + /-ti/					

(5)

	規則(ii)	→	nuti	→	*nuti
/num-/ + /-ti/					

次に、以下(6), (7)の異形態を例にとると、規則による分析では、以下(8)のような基底形、規則及び適用順序により、(9)のように説明される。(iii)は i に先行する t が口蓋化して ċ になる規則、(iv)は t に後続する ĩ が i になる規則である。規則の適用順序として、(ii)は(iv)に先んじて適用される。もし順序が逆の場合は(10)に示すように、(iv)の適用により t と i の連続が生じ、(iii)が適用されて t が ċ に変わる。(iv)→(iii)は、規則の適用環境を与える順序であり、供給順序 (feeding order) という。(iii)→(iv)はその逆の順序であるため、反供給順序 (counterfeeding order) と呼ばれる。反供給順序の場合、規則 x の適用後にその後に適用される別の規則 y により新たに規則 x を適用できる音列が生じるため、表層では規則 x の適用可能な音列が残ってしまう。一見すると規則の適用が不十分であるため、これを過少適用 (underapplication) という。過少適用が見られる場合、「語幹 ut- (打つ) の異形態 uċ-は i の直前に分布する」といったような音環境による分布の説明ができない。このため、上述の過剰適用の場合と同様、分布による説明では「命令接辞が後接する語幹は ut-, 不定接辞が後接する語幹は uċ-である」のように、分布を語彙的な条件で説明する必要が生じる。

(6) a. numi 「飲み (不定形)」 b. numĭ 「飲め」

(7) a. uċi 「打ち (不定形)」 b. uti 「打て」

(8) 基底形 : /num-/, /ut-/, /-i/, /-i/

規則 : (iii) $t \rightarrow \check{c} / _i$

(vi) $\check{i} \rightarrow i / t_$

規則の適用順序 : (iii) \rightarrow (vi)

(9) 規則(iii)
/ut-/ + /-i/ → uči

規則(iv)
/ut-/ + /-i/ → uti

(10) 規則(iv) 規則(iii)
/ut-/ + /-i/ → uti → *uči

ここまで見てきたように、規則を用いた場合、基底形の分節音の条件のみから異形態を説明できる場合であっても、過剰適用もしくは過少適用が見られる場合には、分布による説明では分節音の条件のみからは異形態の分布を説明できず、接辞の機能を条件に含める必要が生じる。また、規則による説明では、弁別素性を用いることにより異なる分節音の交替も統一的に説明できる (t^hub-「飛ぶ」の交替について以下(11)参照)。このように、説明の経済性の観点からは、分布による説明よりも規則による説明の方が優れている。

(11) 規則(i) 規則(ii)
/t^hub-/ + /-ti/ → t^hubdi → t^hudi

しかしながら、規則による説明は分布による説明に比べて音韻論の知識をより多く必要とし、当該方言の教育活動には不向きである。本プロジェクトは継承活動に利用可能な資料をアーカイブ化することを想定したものであるため、規則による説明はプロジェクトの趣旨とは合致しないと考えられる。このため、本稿では、経済性の点で劣るものの、より平易で教育活動にも適した分布による説明を採り、動詞に複数の語幹（異形態）を立て、後続する接辞（の意味機能）を条件として語幹の分布を説明する。ただし、分布の条件を音環境によっても語彙的条件によっても記述できる場合には、説明原理としては音環境の方を優先する方針とし、隣接する形式の機能による異形態の交替は可能な限り少なくする方針とする。なぜなら、語形の予測に関して、語幹及び接辞の音形が分かっていることは必要不可欠であり、さらに語彙的な条件を必要とする説明よりも、音形のみから予測できる説明の方がより経済的であると考えためである。例えば、以下(12), (13)の異形態に対して、分布による説明としては(14)と(15)が考えられる。(13)では動詞「見る」の語幹に関して、後続する接辞の機能に応じて二つの異形態が生じている。(14)では否定接辞に関して先行する語幹末の分節音に応じて二つの異形態が生じているものの、動詞「見る」の語幹については異形態の交替を認めずにすんでいる。本稿の立場では、語彙的条件による交替の少ない(15)のような分析の方が優れていると考える。

(12) a. ijiraa 「出ない」 b. ijiri 「出ろ」 (13) a. miyaa 「飲まない」 b. mii 「見ろ」

- (14) 動詞語幹形式：「出る」ijir-, 「見る」miy-/mi-
接辞形式：否定-aa, 命令-i
語幹「見る」異形態分布（後続接辞）：否定接辞の前 miy-, 命令接辞の前 mi-
- (15) 動詞語幹形式：「出る」idzir-, 「見る」mi-
接辞形式：否定-aa/-yaa, 命令-i
否定接辞異形態分布（先行語幹末音）：母音の後-yaa, 子音の後-aa

3 動詞・形容詞の活用

本節では動詞・形容詞の活用について記述する⁶。

形態論的振る舞いのうち、動詞による大きな相違として、非過去接辞の異形態がある。存在動詞 ar-「ある」/ur-「いる」に後接する非過去接辞の異形態は-i であるのに対し、その他の動詞に後続する非過去接辞の異形態は-yui/-ui である⁷（以下例参照）。非過去接辞の異形態-yui/-ui をとる動詞をタイプ I, -i をとる動詞をタイプ II と呼ぶことにする。

- (1) a. u-i (いる-非過去), a-i (ある-非過去)
b. u-yui (売る-非過去), num-yui (飲む-非過去), p^hus-ui (干す-非過去)

以下 3.1 では、まずタイプ I について、語幹末音とその交替のパターンにもとづいて動詞クラスに下位区分し、語例を示す。次に、3.2 では、動詞の内部構造について記述し、語例を示す。3.3 では、タイプ II の動詞及び形容詞の活用を扱う。

3.1 語幹クラスと語例

小野津方言の動詞は、本稿での分析方針に従えば、二つから四つの異形態を示すものがある⁸。よって A 語幹/B 語幹/C 語幹/D 語幹の四つの語幹を立て⁹、この四つの語幹の末尾音の交替パターンごとに、動詞クラスを設ける。ただし、語幹末が子音連続（または重子音）C_iC_j の場合、語幹末の C_j が単子音を語幹末に持つクラスと同じ交替を示す場合は、C_j の交替に応じて C_i が同化交替を起こしても、独立したクラスは設けない（次頁表の m/d クラスの「頼む」、「埋める」、k/ç クラスの「歩く」、「動く」を参照）。動詞クラスは動詞タイプの下位区分として位置づける。B 語幹及び C 語幹は A 語幹から予測可能であるため、動詞クラスの呼び名には、「A 語幹末音/D 語幹末音」を用いることとする。

次頁にタイプ I の動詞クラスの一覧と語幹例を示す。表に示すように、本稿では 25 のクラスを認める。A~D 語幹の異同のパターンとしては、ABC/D, A/BCD, AB/C/D, A/BC/D, A/B/C/D の五つのパターンが見られる。

⁶ 巻末に補足資料として用例を示す。

⁷ この相違に対し、非状態動詞の非過去形が通時的には「連用形+フリ（存在動詞）」に由来する形であるという歴史的説明が適用できる（服部 1959: 334-338 参照）。

⁸ ただし、k^hur/çç クラス「来る」は命令形と条件形で一部不規則な語形変化を示す（後述）。

⁹ A 語幹, C 語幹, D 語幹はいわゆる基本語幹, 連用語幹, 音便語幹に相当する。

表 3 タイプ I 動詞クラス一覧

語幹 クラス		語幹異形態				語幹例（語幹「意味」）
		A	B	C	D	
1	pp/tt	Xpp-			Xtt-	app-/att-「遊ぶ」（1例のみ）
2	b/d	Xb-			Xd-	t ^h ub-/t ^h ud-「飛ぶ」, narab-/narad-「並ぶ」
3	bb/tt	Xbb-			Xtt-	habb-/hatt-「被る」, nibb-/nitt-「眠る」
4	bb/č	Xbb-			Xčč-	kubb-/kučč-「括る」（1例のみ）
5	m/d	Xm-			Xd-	num-/nud-「飲む」, k ^h am-/k ^h ad-「食べる」, t ^h amm-/t ^h and-「頼む」, umm-/und-「埋める」
6	t/čč	Xt-		Xč-	Xčč-	ut-/uč-/učč-「打つ」, mat-/mač-/mačč-「待つ」
7	jj/tt	Xjj-			Xtt- (~Xčč)	hijj-/hitt-(~hičč-)「削る」, p ^h ajj-/p ^h att-(~p ^h ačč-)「外す, 脱ぐ」
8	s/č	Xs-			Xč-	noos-/nooč-「治す」 us-/uč-「押す」, p ^h us-/p ^h uč-「干す」,
9	k/č	Xk-			Xč	yak-/yač-「焼く」, kik-/kič-「聞く」, akk-/ačč-「歩く」, iŋk-/iŋč-「動く」
10	k/j	Xk-			Xj-	ik-/ij-「行く」（1例のみ）
11	ŋ/j	Xŋ-			Xj-	huŋ-/huj-「漕ぐ」, siŋ-/sij-「死ぬ」, ooŋ-/ooj-「扇ぐ」
12	ŋŋ/nt	Xŋŋ-			Xnt-	mīŋŋ-/mīnt-「回る」（1例のみ）
13	ŋŋ/nč	Xŋŋ-			Xnč-	niŋŋ-/niŋč-「握る」, t ^h uŋŋ-/t ^h uŋč-「跳ぶ」, t ^h aŋŋ-/t ^h aŋč-「沸騰する」
14	ar/a	Xar-	Xa-			arar-/ara-「洗う」, har-/ha-「借りる」, k ^h aar-/k ^h aa-「掛かる」
15	ur/u	Xur-	Xu-			ur-/u-「売る」, kuur-/kuu-「閉める」, t ^h uur-/t ^h uu-「通る」
16	or/o	Xor-	Xo-			hoor-/hoo-「買う」, noor-/noo-「治る」
17	or/oč	Xor-	Xo-	Xoč-		misoor-/misoo-/misooč-「召し上がる」, umoor-/umoo-/umooč-「行く／来る（尊敬語）」
18	ir/i	Xir-	Xi-			ijir-/iji-「出る」, hir-/hi-「蹴る」
19	ir/i	Xir-	Xi-			humir-/humī-「褒める」, wīir-/wīi-「起きる」
20	er/e	Xer-	Xe-			useer-/usee-「教える」, p ^h udeer-/p ^h udee-「育つ」
21	ēr/ē	Xēr-	Xē-			wēēr-/wēē-「分ける」, k ^h ēēr-/k ^h ēē-「掛ける」
22	i/ič	Xi-			Xič-	mi-/mič-「見る」, ni-/nič-「煮る」, ki-/kič-「着る」, i-/ič-「言う」
23	i/ičč	Xi-			Xičč-	i-/ičč-「入る」, si-/sičč-「知る」
24	sir/ss	sir-	si-	s-	(s)s-	sir-/si-/s)s-「する」（1例のみ）
25	k ^h ur/čč	k ^h ur-	k ^h u-	k ^h -	(č)č-	k ^h ur-/k ^h u-/k ^h č-「来る」（1例のみ）

一つの A 語幹末音に対して複数のクラスが認められるものには、歴史的要因が指摘できるものがある。bb/tt, bb/tte, ŋŋ/nt, ŋŋ/nte の各語幹クラスについて、歴史的には *kabur->habb-, *kubir->kubb-, *megur->miŋŋ-, *nigir->piŋŋ-のように語末が狭母音+rだったものが重子音化したと考えられるが、脱落した母音が*uの場合はD語幹末が非口蓋化音のtに、脱落した母音が*iの場合はD語幹末が口蓋化音のteになっている。k/jクラスについて、服部四郎(1955: 334)は、首里方言の動詞 ik-「行く」の過去形が「往ぬ」からの補充形に由来する可能性を示している。また、or/ote クラスに含まれる動詞は尊敬動詞であるが、首里方言の尊敬動詞について一部補充法が見られることが指摘されている(西岡 2002)。小野津方言においても同様の歴史的説明が可能である。

次頁の表に A 語幹と B 語幹の語例を、次々頁の表に C 語幹と D 語幹の語例を示す。

A 語幹には否定接辞-(y)aa, 命令接辞-i/-i, 意志勧誘接辞-(y)oo などが後続する。否定接辞-(y)aa および意志勧誘接辞-(y)oo について、子音に後続する場合にはそれぞれ y を伴わない-aa/-oo で、母音 i に後続する場合はそれぞれ接辞初頭に y が挿入された異形態-yaa/-yoo で現れる。命令接辞-i は両唇音/軟口蓋音に後続する場合は i で、歯茎音/歯茎硬口蓋音/母音に後続する場合は異形態-i で現れる。また、「来る」の命令形は k^huu という不規則な形式になる¹⁰。

B 語幹に後接する屈折接辞は禁止接辞-*nna*/-*una* のみが確認されている。子音の後には -*una* が、母音の後には異形態-*nna* が分布する。

C 語幹には、非過去接辞-(y)ui, 同時接辞-(y)aaruu, 不定接辞-i/-ii/-φ など¹¹が後続する。非過去接辞-(y)ui 及び同時接辞-(y)aaruu は、母音に後続する場合はそれぞれ y を保った-yui/-yaaruu で、子音に後続する場合はそれぞれ y が削除された-*ui* /-*aaruu* で現れる。不定接辞の-i は、単子音語幹の後では異形態-*ii* で現れ、二モーラ以上の長さで末尾に前舌母音/中舌母音を持つ語幹¹²の後ではゼロになり、それ以外の環境では-i として現れる。

D 語幹には、過去接辞-(t)a, 継起接辞-(t)i などが後続する。母音に後続する場合は接辞初頭の子音を保った-*ta*/-*ti* で、子音に後続する場合は接辞初頭の t が脱落した-*a*/-*i* で現れる。jj/tt クラスの語幹末音には tt と čč の両方が見られる。sir/ss クラスと k^hur/čč クラスの()の子音は、先行形式の末尾が母音の場合に現れる。

¹⁰ この他の不規則性として、条件形が k^huuba になる点、非過去接辞にさらに接辞が後接する場合、開音節であれば非過去接辞が長母音化する点(例 k^h-yuu-roo 来る-非過去-推量 I 「来るだろう」, cf. num- yu-roo 飲む-非過去-推量 I 「飲むだろう」)が挙げられる。

¹¹ この他、C 語幹に後接する接辞として目的接辞-(i)ŋpa があり、母音に後続する場合異形態-ŋpa で、子音に後続する場合-iŋpa で現れる(例 num-iŋpa 飲む-目的「飲み」, ara-ŋpa 洗う-目的「洗い」, mi-ŋpa 見る-目的「見」)。

¹² ir/i クラスの語幹でも、一モーラ語幹の場合音形を伴った接辞が現れる(例 hi-i 蹴る-不定)。ただし、ir/i クラスで語頭の分節音の脱落によって一モーラ化した語幹の場合-i と-φ の両方が見られる(例 *sute > ti-i ~ ti-φ 捨てる-不定, *cuke > ki-i ~ ki-φ 付ける-不定)。

表 4 A 語幹/B 語幹語例

語幹 クラス	機能	A 語 幹	否定	命令	意志勧誘	B 語 幹	禁止
	異形態		-(y)aa	-i/-i	-(y)oo		-una/-nna
	意味		～しない	～しろ	～しよう		～するな
pp/tt	遊ぶ	Xpp-	app-aa	app-i	app-oo	Xpp-	app-una
b/d	飛ぶ	Xb-	t ^h ub-aa	t ^h ub-i	t ^h ub-oo	Xb-	t ^h ub-una
bb/tt	被る	Xbb-	habb-aa [haḅba:]	habb-i [haḅb ^v i]	habb-oo [haḅbo:]	Xbb-	habb-una [haḅbuna]
bb/č	括る	Xbb-	kubb-aa [k ² uḅba:]	kubb-i [k ² uḅb ^v i]	kubb-oo [k ² uḅbo:]	Xbb-	kubb-una [k ² uḅbuna]
m/d	飲む	Xm-	num-aa	num-i	num-oo	Xm-	num-una
t/čč	打つ	Xt-	ut-aa	ut-i	ut-oo	Xt-	ut-una
jj/tt	削る	Xjj-	hiĵj-aa [çit ^ɾ dza:]	hiĵj-i [çit ^ɾ dzi]	hiĵj-oo [çit ^ɾ dzo:]	Xjj-	hiĵj-una [çit ^ɾ dzuna]
s/č	押す	Xs-	us-aa	us-i [uçi]	us-oo	Xs-	us-una
k/č	焼く	Xk-	yak-aa	yak-i	yak-oo	Xk-	yak-una
k/j	行く	Xk-	ik-aa	ik-i	ik-oo	Xk-	ik-una
ŋ/j	漕ぐ	Xŋ-	huŋ-aa	huŋ-i	huŋ-oo	Xŋ-	huŋ-una
ŋŋ/nt	回る	Xŋŋ-	mīŋŋ-aa	mīŋŋ-i	mīŋŋ-oo	Xŋŋ-	mīŋŋ-una
ŋŋ/nč	握る	Xŋŋ-	ŋiŋŋ-aa	ŋiŋŋ-i	ŋiŋŋ-oo	Xŋŋ-	ŋiŋŋ-una
ar/a	洗う	Xar-	arar-aa	arar-i	arar-oo	Xa-	ara-nna
ur/u	売る	Xur-	ur-aa	ur-i	ur-oo	Xu-	u-nna
or/oo	買う	Xor-	hoor-aa	hoor-i	hoor-oo	Xo-	hoo-nna
or/oč	召し上 がる	Xor-	misoor-aa	misoor-i	—	Xo-	misoo-nna
ir/i	出る	Xir-	iĵir-aa	iĵir-i	iĵir-oo	Xi-	iĵi-nna
ir/i	褒める	Xir-	humir-aa	humir-i	humir-oo	Xi-	humir-nna
er/e	教える	Xer-	useer-aa	useer-i	useer-oo	Xe-	useer-nna
er/č	分ける	Xer-	wēer-aa	wēer-i	wēer-oo	Xe-	wēer-nna
i/ič	見る	Xi-	mi-yaa	mi-i	mi-yoo	Xi-	mi-nna
i/ičč	入る	Xi-	i-yaa	i-i	i-yoo	Xi-	i-nna
sir/ss	する	sir-	sir-aa	sir-i	sir-oo	si-	si-nna
k ^h ur/čč	来る	k ^h ur-	k ^h ur-aa	k ^h uu	k ^h ur-oo	k ^h u-	k ^h u-nna

表 5 C 語幹/D 語幹語例

語幹 クラス	C 語 幹	非過去	同時	不定	D 語 幹	継起	過去
		-(y)ui	-(y)aanuu	-i/-ii/-φ		-(t)i	-a/-ta
		～する	～しながら	～し		～して	～した
pp/tt	Xpp-	app-yui	app-yaaruu	app-i	Xtt-	att-i	att-a
b/d	Xb-	t ^h ub-yui	t ^h ub-yaaruu	t ^h ub-i	Xd-	t ^h ud-i	t ^h ud-a
bb/tt	Xbb-	habb-yui [hap ^j ˦b ^j ui]	habb-yaaruu [hap ^j ˦b ^j a:ru:]	habb-i [hap ^j ˦b ^j i]	Xtt-	hatt-i	hatt-a
bb/č	Xbb-	kubb-yui [k ^ʔ up ^j ˦b ^j ui]	kubb-yaaruu [k ^ʔ up ^j ˦b ^j a:ru:]	kubb-i [k ^ʔ up ^j ˦b ^j i]	Xčč-	kučč-i [k ^ʔ uʦtɕi]	kučč-a [k ^ʔ uʦtɕa]
m/d	Xm-	num-yui	num-yaaruu	num-i	Xd-	nud-i	nud-a
t/čč	Xč-	uč-ui	uč-aaruu	uč-i	Xčč-	učč-i [uʦtɕi]	učč-a [uʦtɕa]
jj/tt	Xjj-	hijj-ui [çid ^j ˦dzui]	hijj-aaruu [çid ^j ˦dza:ru:]	hijj-i [çid ^j ˦dzi]	Xtt- Xčč-	hitt-i hičč-i [çitʦtɕi]	hitt-a hičč-a [çitʦtɕa]
s/č	Xs-	us-ui	us-aaruu	us-i [uɕi]	Xč-	uč-i	uč-a
k/č	Xk-	yak-yui	yak-yaaruu	yak-i	Xč	yač-i	yač-a
k/ʃ	Xk-	ik-yui	ik-yaaruu	ik-i	Xʃ-	iʃ-i	iʃ-a
ŋ/ʃ	Xŋ-	huŋ-yui	huŋ-yaaruu	huŋ-i	Xʃ-	huʃ-i	huʃ-a
ŋŋ/nt	Xŋŋ-	mīŋŋ-yui	mīŋŋ-yaaruu	mīŋŋ-i	Xnt-	mīnt-i	mīnt-a
ŋŋ/ɲč	Xŋŋ-	ɲiŋŋ-yui	ɲiŋŋ-yaaruu	ɲiŋŋ-i	Xɲč-	ɲiɲč-i	ɲiɲč-a
ar/a	Xa-	ara-yui	ara-yaaruu	ara-i	Xa-	ara-ti	ara-ta
ur/u	Xu-	u-yui	u-yaaruu	u-i	Xu-	u-ti	u-ta
or/o	Xo-	hoo-yui	hoo-yaaruu	hoo-i	Xo-	hoo-ti	hoo-ta
or/oč	Xo-	misoo-yui	misoo-yaaruu	misoo-i	Xoč-	misooč-i	misooč-a
ir/i	Xi-	iʃi-yui	iʃi-yaaruu	iʃi-φ	Xi-	iʃi-ti	iʃi-ta
īr/ī	Xī-	humī-yui	humī-yaaruu	humī-φ	Xi-	humī-ti	humī-ta
er/e	Xe-	usee-yui	usee-yaaruu	usee-φ	Xe-	usee-ti	usee-ta
ēr/ē	Xē-	wēē-yui	wēē-yaaruu	wēē-φ	Xē-	wēē-ti	wēē-ta
i/ič	Xi-	mi-yui	mi-yaaruu	mi-i	Xič-	mič-i	mič-a
i/ičč	Xi-	i-yui	i-yaaruu	i-i	Xičč-	ičč-i	ičč-a
sir/ss	s-	s-ui	s-aaruu	s-ii	(s)s-	(s)s-i	(s)s-a
k ^h ur/čč	k ^h -	k ^h -yui	k ^h -yaaruu	k ^h -ii	(č)č	(č)č-i	(t)č-a

3.2 形態的構造と語例

本節では動詞の構造について述べ、動詞「飲む」を例に活用形を示す。本稿では動詞の活用形のうち、主節及び単文の主動詞として機能しうるものを定動詞、名詞句に前置され、これを修飾する機能を持つものを連体動詞、動詞句（及び節）に先行し、これを副詞的に修飾する機能を持つ動詞を副動詞と呼ぶ。

まず、定動詞について、以下表に語形変化を示す。意志形の形態素境界での交替は否定形に準じる。直説法の動詞は、後続する文末助詞によって複数の形式が見られる。次頁の表に例を示す。また、強調形は、焦点助詞=du を含む文にに用いられる（例 *ari=ŋa=du nud-a-ru* 彼=主格=焦点 飲む-過去-強調）。

表 6 定動詞語形変化表

機能ラベル（日本語訳例）		接辞形式	語幹	語例「飲む」
命令（しろ）		-i/-i	A	num-i
禁止（するな）		-una/-nna	B	num-una
意志（しよう）		-(y)a	A	num-a
意志勧誘（しよう）		-(y)oo	A	num-oo
直説 (する)	非過去	-(y)ui	C	num-yui
		-(y)un	C	num-yun
	否定—非過去	-(y)aa-φ	A	num-aa-φ
		-(y)an-φ	A	num-an-φ
	過去	-(t)i	C	nud-i
		-(t)a	C	nud-a
		-(t)an	C	nud-an
	否定—過去	-(y)an-ti	A	num-an-ti
		-(y)an-ta	A	num-an-ta
-(y)an-tan		A	num-an-tan	
推量1 (するだろう)	非過去	-(y)u-roo	C	num-yu-roo
	過去	-(t)a-roo	D	nud-a-roo
	否定—過去	-(y)an-ta-ro	A	num-an-ta-roo
推量2 (するだろう)	過去	-(t)a-ra	D	nud-a-ra
	否定—過去	-(y)an-ta-ra	A	num-an-ta-ra
強調	非過去	-(y)u-ru	C	num-yu-ru
	否定—非過去	-(y)an-φ-u	A	num-an-φ-u
	過去	-(t)a-ru	D	nud-a-ru
	否定—過去	-(y)an-ta-ru	A	num-an-ta-ru

表 7 直説法動詞と文末助詞^{1 3}

分布	非過去	非過去否定	過去
単独	num-yui	num-aa	nud-i
断定助詞	num-yun=doo	num-an=doo	nud-an=doo
真偽疑問助詞	num-yun=na	num-an=na	nud-i=na
疑念助詞	num-yuk=kai	num-an=kai	nud-a=kai

定動詞の構造は、以下(2)のように一般化できる^{1 4}。定動詞はムード接辞／テンス接辞のいずれか一方のみが語末に置かれる構造を持つ場合と、テンス接辞に後続してさらにムード接辞が語末に置かれる構造を持つ場合がある。

- (2) 定動詞の構造：
- a. 語幹 — ムード接辞
 - b. 語幹 — 極性接辞 — テンス接辞
 - c. 語幹 — 極性接辞 — テンス接辞 — ムード接辞

次に、連体動詞は、テンスを取った定動詞に連体接辞-nを後接させて作られる^{1 5}。連体動詞の語形変化と構造は以下の通りである。

表 8 連体動詞語形変化表

機能ラベル		接辞形式	語幹	語例「飲む」
連体	非過去	-(y)u-n	C	num-yu-n
	否定—非過去	-(y)an-φ-φ	A	num-an-φ-φ
	過去	-(t)a-n	D	nud-a-n
	否定—過去	-(y)an-ta-n	A	num-an-ta-n

- (3) 連体動詞の構造：語幹 — 極性接辞 — テンス接辞 — 連体接辞

次頁に副動詞の語形変化と構造を示す。並列接辞及び状況接辞の形態音韻論的交替は過去接辞に、条件接辞の交替は命令接辞に、否定理由接辞の交替は否定接辞にそれぞれ準じる（目的接辞の交替は注 10 参照）。否定接辞と共起するかどうかは、副動詞接辞によって決まっており、条件接辞-(i)ba 及び並列接辞-(t)ai は否定接辞と共起する。

^{1 3} ここに挙げた=doo, =na/=na, =kai は、名詞述語においては名詞に後接しうるため、動詞接辞ではなく文末助詞として分析している。

^{1 4} 極性接辞のロットは否定接辞で占められて否定が標示されるか、空のままで肯定を表す。後者の場合、煩雑さを避けるためゼロ標示 (-φ-) は行わない。

^{1 5} 連体接辞は、話者及び動詞（／形容詞）によっては母音 u を伴って非過去-(y)u-nu（タイプ I では-φ-nu）、否定非過去 -(y)an-φ-u、過去-(t)a-nu の形で現れることがある。

表 9 副動詞語形変化表

機能ラベル（日本語訳例）		接辞形式	語幹	語例「飲む」
不定（し）		-i/-ii/-φ	C	num-i
目的（しに）		-(i)ɲna	C	num-iɲna
同時（しながら）		-(y)aanuu	A	num-yaaruu
継起（して）		-(t)i	D	nud-i
並列 （したり）	並列	-(t)ai	D	nud-ai
	否定—並列	-(y)an-tai	A	num-an-tai
条件 （すれば）	非過去	-iba/-iba	A	num-iba
	否定	-(y)an-ba	A	num-an-ba
状況 （したら）	過去	-(t)ariba	D	nud-ariba
	否定—過去	-(y)an-tariba	A	num-an-tariba
否定理由（しないから）		-(y)adana	A	num-adana

- (4) 副動詞の構造： a. 語幹 — 副動詞接辞
b. 語幹 — 極性接辞 — 副動詞接辞

3.3 タイプ II 及び形容詞の活用

本節では、タイプ II の動詞及び形容詞の活用について記述する。形容詞は語根に形容詞化接辞 *-sa* が後接した形式をとる。*t^haa-sa*「高い」のように *-sa* のみが後接した形式も平叙文の述語に用いる¹⁶が、さらに動詞と同じ接辞をとってタイプ II の動詞に準じた活用も示す。ただし、否定形は持たず、*-sa* 形と状態動詞の否定形 *nee*（動詞「ある」の否定形 *nee* と同形）によって分析的に標示する（例 *t^haa-sa nee*「高くない」）。

以下の二つの表に存在動詞「いる」、「ある」と形容詞「高い」を例にタイプ II の動詞と形容詞の語形変化を示す。タイプ I との相違点として、前述のように直接法で非過去形が *-(y)ui* ではなく *-i* となるほか、非過去接辞にムード接辞及び連体接辞が後接する場合に非過去がゼロになる。存在動詞「ある」の否定形には *nee* という補充形が用いられる。

¹⁶ *-sa* 形を用いた文の特徴として、主語が属格助詞 *=nu* でも標示されうる（例 *haʃi=nu ču-sa* 風=属格 強い-形容詞化, *haʃi=ɲa ču-sa* 風=属格 強い-形容詞化 cf. *haʃi=ɲa ču-sa-i* 風=主格 強い-形容詞化-非過去 **haʃi=nu ču-sa-i* 風=属格 強い-形容詞化-非過去）。

表 10 タイプ II 動詞／形容詞語形変化表 1

機能ラベル		接辞形式	語幹	語例		
				「いる」	「ある」	「高い」
命令		-i	A	ur-i	—	—
禁止		-nna	B	u-nna	—	—
意志		-a	A	ur-a	—	—
意志勧誘		-oo	A	ur-oo	—	—
直説	非過去	-i	C	u-i	a-i	t ^h aa-sa-i
		-n	C	u-n	a-n	t ^h aa-sa-n
	否定—非過去	-aa-φ	A	ur-aa-φ	nec	—
		-an-φ	A	ur-an-φ	nen	—
	過去	-ti	C	u-ti	a-ti	t ^h aa-sa-ti
		-ta	C	u-ta	a-ta	t ^h aa-sa-ta
		-ta	C	u-tan	a-tan	t ^h aa-sa-tan
	否定—過去	-an-ti	A	ur-an-ti	nen-ti	—
		-an-ta	A	ur-an-ta	nen-ta	—
		-an-tan	A	ur-an-tan	nen-tan	—
推量 1	非過去	-φ-roo	C	u-φ-roo	a-φ-roo	t ^h aa-sa-φ-roo
	過去	-ta-roo	D	u-ta-roo	a-ta-roo	t ^h aa-sa-ta-roo
	否定—過去	-an-ta-roo	A	u-ran-ta-roo	nen-ta-roo	—
推量 2	過去	-ta-ra	D	u-ta-ra	a-ta-ra	t ^h aa-sa-ta-roo
	否定—過去	-an-ta-ra	A	u-ran-ta-ra	nen-ta-ra	—
連体	非過去	-φ-n	C	u-φ-n	a-φ-n	t ^h aa-sa-φ-n
	否定—非過去	-an-φ-φ	A	ur-an-φ-φ	nen-φ-φ	—
	過去	-ta-n	D	u-ta-n	u-ta-n	t ^h aa-sa-ta-n
	否定—過去	-an-ta-n	A	ur-an-ta-n	nen-ta-n	—
不定		-i	C	u-i	a-i	—
継起		-ti	D	u-ti	a-ti	t ^h aasa-ti
並列	並列	-tai	D	u-tai	a-tai	t ^h aa-sa-tai
	否定—並列	-an-tai	A	ur-an-tai	nen-tai	—
条件	非過去	-iba	A	ur-iba	ar-iba	t ^h aa-sar-iba
	否定	-an-ba	A	ur-an-ba	nen-ba	—
状況	過去	-tariba	D	u-tariba	a-tariba	t ^h aa-sa-tariba
	否定—過去	-an-tariba	A	ur-an-tariba	nen-tariba	—
否定理由		-adana	A	ur-adana	needana	—

4 童話「うふかぶー（おおきなかぶ）」

本節では、小野津方言による童話「うふかぶー（おおきなかぶ）」を報告する。方言で子どもに語る昔話として自然なかたちにしたため、丁寧語は用いず、また伝聞助詞=či が用いられている。グロスの略号は巻末を参照されたい。

- (1) aji=ŋa k^habu-n+t^hanii mač-an=či
おじいさん=NOM カブ-LNK-種.CM 蒔く -PST=REP
おじいさんがかぶのたねをまきました。
- (2) amaa-sa-nu amaa-sa-nu k^habu=ŋi nar-i=yoo.
甘い-ADJ.NPST-ADN 甘い-ADJ.NPST-ADN カブ=DAT なる -IMP=SFP
「あまいあまいかぶになれ。」
- (3) ubii-sa-nu ubii-sa-nu k^habu=ŋi nar-i=yoo.
大きい-ADJ.NPST-ADN 大きい-ADJ.NPST-ADN カブ=DAT なる -IMP=SFP
おおきなおおきなかぶになれ。」
- (4) amaa-sa-nu ikiyui=nu yuta-sa-nu
甘い-ADJ.NPST-ADN 元気=GEN 良い-ADJ.NPST-ADN
あまいげんきのよい
- (5) ippai ubii-sa-nu k^habu=ŋa dikī-tan=či
とても 大きい-ADJ.NPST-ADN カブ=NOM できる -PST=REP
とてつもなくおおいかぶができました。
- (6) aji=ya k^habu=yoba haŋar-oo=čči ss-an=či
おじいさん=TOP カブ=ACC 抜く -INT=QUOT する -PST=REP
おじいさんはかぶをぬこうとしました。
- (7) yoišo k^horašo
INTJ INTJ
「うんとこしょどっこいしょ。」
- (8) jammun k^haboo haŋar-ar-aa
けれど カブ.TOP 抜く -POT-NEG.NPST
ところがかぶはぬけません。
- (9) aji=ya ammaa abī-ti čč-an=či
おじいさん=TOP おばあさん 呼ぶ-SEQ 来る -PST=REP
おじいさんはおばあさんをよんできました。

(10) amma=ŋa ajii=yoba p^hippa-ti
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、

(11) aji=ŋa k^habu=yoba p^hippa-ti
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ
 おじいさんがかぶをひっぱって。

(12) yoišo k^horašo
 INTJ INTJ
 「うんとこしょどっこいしょ。」

(13) asissimu k^haboo haŋar-ar-aa
 それでも カブ.TOP 抜く-POT-NEG.NPST
 それでもかぶはぬけません。

(14) amma=ya umaŋaa abi-ti čč-an=či
 おばあさん=TOP 孫 呼ぶ-SEQ 来る-PST=REP
 おばあさんはまごをよんできました。

(15) umaŋaa=ŋa ammaa=yoba p^hippa-ti
 孫=NOM おばあさん=ACC 引っ張る-SEQ
 まごがおばあさんをひっぱって、

(16) amma=ŋa ajii=yoba p^hippa-ti
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、

(17) aji=ŋa k^habu=yoba p^hippa-ti
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ
 おじいさんがかぶをひっぱって。

(18) yoišo k^horašo
 INTJ INTJ
 「うんとこしょどっこいしょ。」

(19) nakanaka k^haboo haŋar-ar-aa
 なかなか カブ.TOP 抜く-POT-NEG.NPST
 まだまだかぶはぬけません。

- (20) umaŋaa=ya iŋŋaa abi-ti čč-an=či
 孫=TOP イヌ 呼ぶ-SEQ 来る-PST=REP
 まごはいぬをよんできました。
- (21) iŋŋaa=ŋa umaŋaa=yoba p^hippa-ti
 イヌ=NOM 孫=ACC 引っ張る-SEQ
 いぬがまごをひっぱって、
- (22) umaŋaa=ŋa ammaa=yoba p^hippa-ti
 孫=NOM おばあさん=ACC 引っ張る-SEQ
 まごがおばあさんをひっぱって、
- (23) amma=ŋa ajii=yoba p^hippa-ti
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、
- (24) aji=ŋa k^habu=yoba p^hippa-ti
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ
 おじいさんがかぶをひっぱって。
- (25) yoišo k^horašo
 INTJ INTJ
 「うんとこしょどっこいしょ。」
- (26) nakanaka nakanaka haŋar-ar-aa
 なかなか なかなか 抜く-POT-NEG.NPST
 まだまだまだまだぬけません。
- (27) iŋŋaa=ya mayaa abi-ti čč-an=či
 イヌ=TOP ネコ 呼ぶ-SEQ 来る-PST=REP
 いぬはねこをよんできました。
- (28) mayaa=ŋa iŋŋaa=yoba p^hippa-ti
 ネコ=NOM イヌ=ACC 引っ張る-SEQ
 ねこがいぬをひっぱって、
- (29) iŋŋaa=ŋa umaŋaa=yoba p^hippa-ti
 イヌ=NOM 孫=ACC 引っ張る-SEQ
 いぬがまごをひっぱって、

- (30) umaŋaa=ŋa ammaa=yoba p^hippa-ti
 孫=NOM おばあさん=ACC 引っ張る-SEQ
 まごがおばあさんをひっぱって、
- (31) amma=ŋa aji=yoba p^hippa-ti
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、
- (32) aji=ŋa k^habu=yoba p^hippa-ti
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ
 おじいさんがかぶをひっぱって。
- (33) yoišo k^horašo
 INTJ INTJ
 「うんとこしょどっこいしょ。」
- (34) asissimu k^haboo haŋar-ar-aa
 それでも カブ.TOP 抜く-POT-NEG.NPST
 それでもかぶはぬけません。
- (35) mayaa=ya kaakii abī-ti čč-an=či
 ネコ=TOP ネズミ 呼ぶ-SEQ 来る-PST=REP
 ねこはねずみをよんできました。
- (36) kaakii=ŋa mayaa=yoba p^hippa-ti
 ネズミ=NOM ネコ=ACC 引っ張る-SEQ
 ねずみがねこをひっぱって、
- (37) mayaa=ŋa iŋŋaa=yoba p^hippati
 ネコ=NOM イヌ=ACC 引っ張る-SEQ
 ねこがいぬをひっぱって、
- (38) iŋŋaa=ŋa umaŋaa=yoba p^hippa-ti
 イヌ=NOM 孫=ACC 引っ張る-SEQ
 いぬがまごをひっぱって、
- (39) umaŋaa=ŋa ammaa=yoba p^hippa-ti
 孫=NOM おばあさん=ACC 引っ張る-SEQ
 まごがおばあさんをひっぱって、

(40) amma=ŋa ajii=yoba p^hippa-ti
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC 引っ張る-SEQ
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、

(41) aji=ŋa ` k^habu=yoba p^hippa-ti
 おじいさん=NOM カブ=ACC 引っ張る-SEQ
 おじいさんがかぶをひっぱって。

(42) yoišo k^horašo
 INTJ INTJ
 「うんとこしょどっこいしょ。」

(43) yattukattu k^haboo haŋar-att-an=či
 やっと カブ.TOP 抜く-POT-PST=REP
 やっとかぶはぬけました。

5 会話例

本節では、小野津方言による会話の例を報告する。一つ目は、早朝、友人の家に鋏を借りにいった場面の会話の例、二つ目は、夕方に鋏を返しに来た場面の会話の例、三つ目は、道で友人に久しぶりに出会った場面の会話の例である。前節同様、グロスの略号は巻末を参照されたい。

[朝の会話]

(1) α: hooi hooi
 おーい おーい
 おーい、おーい。

(2) β: akii han+bëë-sa t^haru=ka
 INTJ こんな+早い-ADJ 誰=Q
 あれ、こんな早くに誰だろう？

(3) α : wan ja=ŋa=yo
 1.SG COP.NPST=ADVRS1=SFP
 私だけど。

(4) β : nuŋassi=ya
 なぜ=Q
 どうしたの？

- (5) α: wanoo k^hora k^wēē=nu yii=ŋa uri-ti=yo=yaa
 1.SG.TOP INTJ 鋏=GEN 柄=NOM 折れる-SEQ=DSC=DSC
 私は、鋏の柄が折れてね、
- (6) α: k^hyuu p^hiččii har-ar-ak=ka=čči umu-ti k^h-ii ja=ŋa
 今日 一日 借りる-POT-NEG.NPST=Q=QUOT 思う-SEQ 来る-INF COP.NPST=ADVRS1
 今日一日借りられないかと思って来たんだけど。
- (7) β: ee hagēē wanoo k^hyuu=ya k^wēē=ya kar-an=karaji=yaa
 INTJ INTJ 1.SG.TOP 今日=TOP 鋏=TOP 使う-NEG.NPST=CSL1=DSC
 私は今日は鋏は使わないからね、
- (8) α: in
 RES
 うん。
- (9) β: mata wannaa k^wēē=ya ippai ka-i+yas-sa-n=karaji
 また 1.EXCL.PL 鋏=TOP とても使う-不定+易い-ADJ-NPST=CSL1
 また、うちの鋏はとても使いやすいから、
- (10) β: uda kar-iba
 どうぞ 使う-COND
 どうぞ使ったら。
- (11) α: assi=na
 そう=YNQ
 そうなの。
- (12) α: akī uri y-un=nee ippai ka-i+yas-sa-n=nessu-i=yaa
 INTJ FIL 言う-NPST=ように とても 使う-INF+易い-NPST=ようだ-NPST=SFP
 言う通りとても使いやすいそうだね。
- (13) α: assee k^hyuu p^hiččii ha-ti mata yundai=ŋi mučč-i k^h-yu-ssa
 じゃあ 今日 一日 借りる-SEQ また 夕方=DAT 持つ-SEQ 来る-NPST-CSL2
 じゃあ、今日一日借りてまた夕方に持ってくるから。
- (14) β: in k^hyaa=mu nen=doo.
 RESP どう=ADD ない.NPST=ASRT
 うん、構わないよ。

(15) α: aigatoo

ありがとう

ありがとう。

[夕方の会話]

(16) α: akiko+nee k^hyuu=ya k^wëë aigatoosama

アキコ+姉 今日=TOP 鋏 ありがとう

アキコ姉, 今日は鋏ありがとう。

(17) β: naa anoo ari=na

FIL FIL あれ=YNQ

あれなの?

(18) β: anoo wannaa-soo yuu kar-att-an=doonja

FIL 1.EXCL.PL-NMLZ.TOP よく使う -POT-PST=SFP

うちのはよく使えたでしょう?

(19) α: ippai ka-i+yas-sa-tan=doo=wa

とても 使う -INF+易い -ADJ-PST=ASRT=SFP

とても使いやすかったよ。

(20) β: hagii da=ya nuu=nu kiba-i ss-a-su=yo

INTJ 2.SG=TOP 何=GEN 頑張る -INF する -PST-NMLZ=WHQ

あんた, 何の仕事をしたの?

(21) α: t^haŋkan=yoba=yoo nihon wii-yun=čiči=yaa ana p^hu-i+p^hajimī-tariba

タンカン=ACC=DSC 二本 植える -NPST=QUOT=DSC 穴 掘る -INF+始める -CIRC

タンカンをね, 二本植えるってね, 穴を掘り始めたら,

(22) α: iššaku=bëë ss-ariba naa isi+mamī=yo

一尺=APPR1 する -CIRC FIL 石+だらけ=SFP

一尺ぐらいしたらもう石だらけなのよ。

(23) β: hakii

INTJ

あれまあ。

- (24) α: ʃammun k^wëë=ŋa ippai ka-i+yas-sa-tan=nati yuka guwai na-tan=doo
 だけど 鋤=NOM とても 使う-INF+易い-ADJ-PST=CSL3 良い 具合 なる-PST=ASRT
 だけど、鋤がとても使いやすかったから、良い具合になったよ。
- (25) β: ee assi ar-iba nadee a-ta-soo=wa
 INTJ そう COP-COND 良い COP-PST-SFS=SFP
 ならよかったね。
- (26) α: in aigatoo
 RESP ありがとう
 うん、ありがとう。
- (27) β: mata ari s-u-n dukee icu=dimu har-i=yoo
 また あれ する-NPST-ADN とき.TOP いつ=CONC 借りる-IMP=SFP
 またあれするときはいつでも借りてね。
- (28) α: in aigatoo=yaa
 RESP ありがとう=DSC
 うん、ありがとうね。
- (29) β: anoo k^hora da=ya huma=ʃi wattai
 FIL INTJ 2.SG=TOP ここ=LOC 1.DU.INCL
 あんた、ここで二人で、
- (30) β: saa=dimu nud-i ik-an=na=yoo
 茶=APPR2 飲む-SEQ 行く-NEG.NPST=YNQ=SFP
 お茶でも飲んで行かないかね？
- (31) α: assi s-ii+bu-sa-n=mun ɲaa
 そうする-INF+欲しい-ADJ-NPST=ADVRS2 FIL
 そうしたいけど、
- (32) α: wan=mu mata yii sir-an-ba ik-an=nati=yaa
 1.SG=ADD また 夕食 する-NEG-COND いける-NEG.NPST=CSL3=DSC
 私もまた夕飯を作らないといけないからね。
- (33) α: mata=yaa dooka cugi=yaa
 また=DSC どうか 次=SFP
 またね、どうか次ね。

(34) β: ee assee mata icu=ka yukkuri saa num-yun=nen si-roo
 INTJ じゃあ また いつ=INDEF ゆっくり 茶 飲む-NPST=ように する-HORT
 じゃあ、またいつかゆっくりお茶を飲む機会を持とうね。

(35) α: in aigatoo
 RESP ありがとう。
 うん、ありがとう。

[夕方の会話]

(36) β: hagīi ūjan+duu-saa nuuka=yo=wa
 INTJ 拝む+遠い-ADJ.TOP なぜ=SFP=SFP
 あらまあ、久しぶりだね。

(37) β: hagī ikkyaa-yu-n k^hutu=mu a-soo=wa
 INTJ 出会う-NPST-ADN こと=ADD ある.NPST-SFS=SFP
 出会うこともあるんだね。

(38) β: icu=mu=yo=yaa k^hyaasi ss-u-k=ka=čči
 いつ=ADD=DSC=DSC どう する-PROG-NPST=Q=QUOT
 いつも、どうしているかと、

(39) β: ippai ki=ni na-tu-tan=doo
 とても 気=DAT なる-PROG-PST=ASRT
 とても気になっていたよ。

(40) α: ittuki=yoo t^hookyoo i-ji čč-i=doo=yo
 しばらく=DSC 東京 行く-SEQ 来る-SEQ=ASRT=SFP
 しばらく東京に行ってきたんだよ。

(41) β: assi=nati=yaa
 そう=CSL3=SFP
 だからだね。

(42) β: hagēē waakya k^hora t^husi t^hur-iba
 INTJ 1.INCL.PL INTJ 年 取る-COND
 私たち、年取ったら

(43) β: ano ari yuu k^harada=ni an kii cukī-tu-ti
 FIL FIL 良く 体=DAT FIL 気 付ける-PROG-SEQ
 よく体に気をつけていて、

- (44) β: kibar-an-ba ik-aa=yaa
 頑張る-NEG-COND いける-NEG.NPST=SFP
 頑張らないといけないね、
- (45) β: amacukihumacuki t^husi t^hur-iba namaar-an=doo
 あちこち 年 取る-COND 難儀しない-NEG.NPST=ASRT
 (体の) あちこち、年取ると大変だよ。
- (46) α: assi ja=yaa
 そう COP.NPST=SFP
 そうだね。
- (47) α: nama yasee sikoo-i ss-u-n=na
 今 野菜 作る-INF する-PROG-NPST=YNQ
 今野菜作りしているの？
- (48) β: in naa ano ari
 RESP FIL FIL FIL
 うん、
- (49) β: huri=kusa ano hima+cubushi=ji ano yasee cuku-tu-n=doo
 それ=こそ FIL 暇+潰し=DAT FIL 野菜 作る-PROG-NPST=ASRT
 それこそ暇潰しに野菜を作っているよ。
- (50) α: mata=yaa wan=mu hora p^huyu+yasee siko-or-an-ba ik-an=si
 また=DSC 1.SG=ADD INTJ 冬+野菜 作る-NEG-COND いける-NEG.NPST=CSL4
 また、私も冬野菜を作らないといけないし、
- (51) α: mata nuuhii hatar-iba=yaa
 また 何でも 教える-COND=SFP
 また何でも教えてね。
- (52) β: in mata un dukee waakya=ji issu=ji ari sir-an=mun=wa
 RESP また その とき.TOP 1.INCL.PL=INST 一緒=DAT あれ する-NEG.NPST=SFP=SFP
 またそのときは私たちで一緒にしようね。
- (53) α: dooka dooka
 どうか どうか
 どうかどうか(お願いね)。

(54) β: assee mata=yaa
 じゃあ また=SFP
 じゃあまたね。

(55) α: in mata=yaa
 RESP また=SFP
 うん, またね。

補足資料

(1) num-ijna k^huu
 飲む-PURP 来る .IMP
 飲みに来い。

(2) sui num-iba noo-yui
 薬 飲む-COND 治る-NPST
 薬を飲めば治る。

(3) sui num-an-ba noor-aa
 薬 飲む-NEG-COND 治る-NEG.NPST
 薬を飲まなければ治らない。

(4) sui nud-ariba noo-ti
 薬 飲む-CIRC 治る-PST
 薬を飲んだら治った。

(5) sui num-an-tariba ya-di
 薬 飲む-NEG-CIRC 痛む-PST
 薬を飲まなかったら痛くなった。

(6) sui num-adana noor-aa
 薬 飲む-NEG.CSL 治る-NEG.NPST
 薬を飲まないから治らない。

(7) yaa=pi ur-iba oor-att-an=mun
 家=DAT いる-COND 会う-POT-PST=SFP
 家にいれば会えたのに。

(8) yaa=pi ur-an-ba oor-ar-aa
 家=DAT いる-NEG-COND 会う-POT-NEG.NPST
 家にいないと会えない。

(9) yaa=pi u-tariba t^hakasi=ŋa čč-i
 家=DAT いる-CIRC タカシ=NOM 来る-PST
 家にいたらタカシが来た。

(10) yaa=pi ur-an-tariba t^hakasi=tu oor-ar-an-ti
 家=DAT いる-NEG-CIRC タカシ=COM 会う-POT-NEG-PST
 家にいなかったからタカシと会えなかった。

(11) yaa=pi ur-adana oor-ar-aa
 家=DAT いる-NEG.CSL 会う-POT-NEG.NPST
 家にいないから会えない。

(12) t^haa-sar-iba hoor-aa
 高い-ADJ-COND 買う-NEG.NPST
 高ければ買わない。

(13) t^haa-sa-tariba ticu=mu urir-an-ti
 高い-ADJ-COND 一つ=ADD 売れる-NEG-PST
 高かったから一つも売れなかった。

グロス略号一覧

1	first person	一人称	IMP	imperative	命令
2	second person	二人称	INCL	inclusive	包括
ACC	accusative	対格	INDEF	indefinitizer	不定化
ADD	additive	添加	INF	infinitive	不定形
ADJ	adjectivizer	形容詞化	INST	instrumental	具格
ADN	adnominal	連体	INT	intentional	意志
ADVRS	adversative	逆接	INTJ	interjection	感嘆詞
APPR	approximative	曖昧	LNK	linker	連結辞
ASRT	assertive	断定	LOC	locative	所格
CIRC	circumstantial	状況	NEG	negative	否定
CM	compound marker	複合標識	NMLZ	nominalizer	名詞化接辞
COM	comitative	共格	NOM	nominative	主格
CONC	concessive	譲歩	NPST	non-past	非過去
COND	conditional	条件	PL	plural	複数
COP	copula	コピュラ	POT	potential	可能
CSL	causal	理由	PST	past	過去
DAT	dative	与格	PURP	purposive	目的
DSC	discourse marker	談話標識	Q	question	疑問
DU	dual	双数	QUOT	quotative	引用
EXCL	exclusive	除外	REP	reportative	伝聞
FIL	filler	フィラー	RES	resultative	結果
GEN	genitive	属格	RESP	response	応答表現
HORT	hortative	勧誘	SEQ	sequential	継起

SFP	sentence final	文末助詞	WHQ	wh question	疑問詞疑問
	particle		YNQ	yes-no question	真偽疑問
SFS	sentence final	文末接辞	-		接辞境界
	suffix		=		接辞境界
SG	singular	単数	+		複合境界
TOP	topic	主題			

引用文献

- 上村幸雄（1972）「琉球方言入門」『言語生活』251: 20-37.
- _____（1992）「琉球列島の言語（総説）」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典世界言語編下2』771-814. 東京：三省堂.
- 上野善道（1995）「喜界島方言の活用形と複合名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』23: 151-236.
- 大野眞男（2002）「奄美方言における中舌母音の歴史的重層性」『国語研究』41: 78-69.
- _____（2003）「北奄美周辺方言の音韻の特徴」『岩手大学教育学部研究年報』63: 51-70.
- 木部暢子（2011）「喜界島方言の音韻」木部暢子・窪菌晴夫・下地賀代子・ローレンス ウェイン・松森晶子・竹田晃子著『国立国語研究所共同研究報告 11-01 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 喜界島方言調査報告書』12-50. 東京：国立国語研究所.
- _____（2012）「奄美喜界島方言の母音の特徴について」『国語研プロジェクトレビュー』3(1): 3-14
- 中本正智（1976）『琉球方言の音韻』東京：法政大学出版局.
- 西岡敏（2002）「沖縄語首里方言の敬語動詞「メンシェーン」の過去形」第4回「沖縄研究国際シンポジウム実行委員会（編）『世界に拓く沖縄研究』280-289. 沖縄：第4回「沖縄研究国際シンポジウム」事務局.
- 服部四郎（1955）.「文法」. 市河三喜・服部四郎（編）, 『世界言語概説（下）』328-352. 東京：研究社.
- _____（1959）『日本語の系統』東京：岩波書店.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院.
- 松本幹男（2000）「沖永良部島方言と喜界島方言における中舌母音について」『語学研究』95: 169-173.

将来の「教材化」を目指した

言語資料のコンテンツについての考察

奄美大島瀬戸内町での事例を通して

将来の「教材化」を目指した言語資料のコンテンツについての考察 奄美大島瀬戸内町での事例を通して

前田達朗

はじめに

今回の文化庁の事業による調査の成果は、最終的にはアーカイブ化され、これら危機言語の研究者だけでなく一般の学習者に資するものとなることが期待されている。Web上でこれら資料にアクセスできることで新しい展開の可能性がひらけてくる。これまで琉球諸語の学習が、地域言語に直接関わる人々と地域社会、すなわち現場での「継承」が主に想定されてきたのであるが、当該地域から離れた場所からも情報を得られ、移住者やその家族、コミュニティでの活用も考えられる。

もちろんこれまでもネット上に様々なコンテンツが存在している。今回扱う奄美語についても、沖縄言語研究センターの「奄美方言音声データベース /<http://133.13.160.25/rlang/amm/index.html>」¹は大和村出身の長田須磨の長年の業績である北部方言のデータを中心に早くから公開されており研究者にも使われることが想定されたものである。クリックすれば音声が出るというシンプルな使いやすいインターフェイスである。五十音順、カテゴリー別の検索も可能でさらに語彙数が増えれば辞書としての機能も持つことができるであろう。

You Tubeなどの動画サイトはさらににぎやかである。その質や目的はともかくプロでなくともコンテンツを作ることができ、言語だけでなく文化・芸能の記録としても媒体として有効であり、固くまじめなものをすぐ作ろうとしてしまう「教育」に足りない部分も補ってくれる。魅力あるコンテンツとは何かを考える機会も与えてくれる²。

共有された書記体型を持たない少数言語研究には共通の課題である「記録」とさらには研究の枠からそれら成果を取り出し、地域社会だけでなく広く一般に還元する方法を考えた時、映像と音声は有効な手段だと考え、これまでいくつかの試みをしてきた。本稿ではその取り組みを振り返り、特に継承の場面で

¹ 2013年2月3日確認

² 奄美大島北部笠利町出身の人気ミュージシャン「カサリンチュ」「サーモン&ガーリック」のシマグチ動画が人気である。

のニーズに応えるコンテンツとは何かを探った事例から、アーカイブを作った後の活用法についての提言ができればと考えている。具体的には2012年度から奄美大島瀬戸内町で制作している「瀬戸内のシマグチ」の制作過程の振り返りと地域社会での反応を材料にする。

1 鹿児島県大島郡瀬戸内町の概要

瀬戸内町は大島南部の中心地である。人口約 8900³人で、1950年合併当時の1/3の水準にまでなっていて、奄美群島全体の中でも過疎化の進み方が激しい地域である。いわゆる「昭和の大合併」で一町三か村が合併した際小さな島が点在する景色が似ているという理由で「瀬戸内」という名前をつける。この合併についての町民の評価は厳しい。中心地である古仁屋以外の地区では急速に過疎化が進み、合併を悔いる声となる。かつてはそれぞれの地域の中心地であった集落では特に強い。この経験が2005年に行われた一島で一市を構成することを目指した合併協議から早々に瀬戸内町が抜けた原因であると言われている。「シマ」の人々は自分たちのコミュニティがより小さく弱くなっていく経験しか持ち得なかった。地域社会の弱体化が生活語である地域言語の衰退につながることはいうまでもない。

1-1 公民館と小中学校

古仁屋にある中央公民館と41の集落に「分館」があったが、2009年に分館制度が廃止された。集落の自主的な運営・管理に任せられ年間3万円の補助に留まり、事業だけでなく建物の維持管理などが相当に困難になっている。2015年に中央公民館が建て替えの予定で解体されたが、その後町長選挙で改革派が勝利、いわゆる「箱物」の計画が見直され、2017年2月現在建設は始まっていない。かつて公民館は「文化の中心」とされ、存在意義は住民の中で大きく、郵便局、学校とともに公民館があることで「一人前の集落」と考えられていた。公民館が担っていた社会教育活動の多くがこれら一連の動きの中で廃止・凍結され、それらの中にはもちろん「シマグチ」継承活動が含まれていた。各集落での子ども向けの「シマグチ教室」について言えば、かつてからプログラムの成否はそれを運営する集落の規模、住民のモチベーションの高さや、能力に大きく依存しており、「教えられる・教えたい人がいる」かどうかで集落ごと、学

³ 2016年10月推計。この10年でおおよそ2000人減

校区ごとの温度差があった。シマグチ教室が開かれていたのは最盛期で18の集落だった。

瀬戸内町は奄美の中でも「シマグチ」伝承活動が盛んだと言われた地域だった。「子ども島口大会」は1994年に第一回大会が開かれ、2006年に「子供島口芸能大会」と改称されて続いている。子どもだけを対象とした催しとしては奄美で唯一のものである。学校の代表が出場することになっているが、全ての学校が代表を送っているわけではない。シマグチを指導できる教員が学校にはいないために、教え手を地域の老人に頼らざるを得ないという事情がある。教え手がない集落でも同様のことが言える。小中学校の教員に大島郡出身者がいる場合はともかく学校での継続的な指導は望めず、シマに根強い「鹿児島への不信感」も影を落としている。「シマグチ大会の前になると教えてくださいと言ってくる。そんなのじゃだめだ、と言ってやるのだが学校は本当はどうでもいいよだ」(04年 某集落の老人)という大会の審査員までつとめる老人のいる集落では、学校の協力が得られず公民館での活動がない。子どもと教える気がある老人と理解のある教員が揃って初めて継続的な教室が開けるといふ微妙なバランスの上に成立しており、教員の転入出、老人の体調、子どもの構成などで年ごとに状況が変化してしまう。10年以上にわたって継承活動の現場を見てきたが、共通する問題がいくつか見られる。まずそれぞれの「シマ」ごとのことばに強いこだわりを持っていることである。これは継承活動の強いモチベーションでもあるが小さな地域主義に陥ることを同時に意味している。これは教材・教授法の問題にもつながる。どうしてもそれぞれのシマでの努力には限界があり、共通した教材が準備できれば教える側の負担も確実に減る。数多くの研究がなされているが、「教材」として使うことを考えられたものはこれまでのところはない。これら地域の実態と伝承活動に関わる人々の声が、教材の作成を着想した。2000年代の前半の集落での活動が盛んであった頃と現状では大きな差がある。集落での定期的な伝承活動はほぼ途絶してしまった。ここまで上げてきた問題点がそのまま明らかになったと考えられる。ネイティブ世代の減少を考えるとそれを記録することも喫緊の課題である。こうして2012年に「瀬戸内のシマグチ」の制作に取り掛かった。

2 「瀬戸内のシマグチ」

概要

2012年に助成金を得られ⁴制作に着手できた。プロダクトとしては計120分の映像を収めた2枚組のDVDとシマグチ部分を書き起こしたものと日本語の対訳のテキスト70ページであった。テキスト250部とDVDを1000組プレスし、瀬戸内町をはじめ関係各所に配布した。町立図書館でも貸し出されている。また関東と関西の出身者団体「同郷会」にも受け取ってもらった。

2-1 編集委員会の構成

本節では本格的にコンテンツ制作にとりかかるまでの経緯を述べ、個別の事例および教材全体の構成の理解の助けとなることを目指す。制作にあたって編集委員会を組織した。その目的は、まず制作の主体をあくまでも地元瀬戸内町に置くことであった。これまでの伝承活動の研究において理解できたことなのだが、その主体が行政などにはなく、集落の人々の個人的な努力に依っていることの反映であり、またオマージュでもある。我々研究者は外部からその一部として関わっているという姿勢を、形式的にも示す必要があった。そして、瀬戸内の人々に自分たちがこの教材作成においても主体であることを自覚してもらい、忘れないための手立てでもあった。これらの目的は概ね達成できたと思う。

瀬戸内町在住で伝承活動及び社会教育関係者の6名と、共同研究者を含めた8名が、「瀬戸内のシマグチ」編集委員会を結成した。誰が「長」であるかを決めなかったのも編集委員会を設定したのと同じ理由である。

2-2 集落の設定

誰を編集委員会メンバーとするか、というのを考えることは、どこの集落を題材とするのかをあわせ考えることであった。既述の通り瀬戸内町は1956年に古仁屋町（東方村）、西方村、鎮西村、実久村が合併してできた行政区分である。しかし、旧来の区分けは人々にいまでも意識されている。ひとつにはかつてはそれぞれに村落共同体の集合体があり、それぞれの「中央」があったものが、古仁屋に行政・経済の中心が移ることで、それぞれの集落が衰退したと考えられているのも一因である。取り上げる集落を決めた理由は、簡単にまとめると以下のようなものである。篠川はいまでも比較的大きな集落であるが、際だった

⁴ 博報財団「第7回児童教育実践に関する研究助成」

特徴はないが産業農林水産すべてがあり、古くからの集落共同体の雰囲気も残っている。誤解はないと思うが、シマの「サンプル」としては最適であると判断した。古仁屋は、港町として産業の中心として人口を集めた。ほかの集落と違って都市化した地域といえる。町の成り立ちの経緯でも触れたが、ほかの集落とは大きく違う特徴である。加計呂麻島の諸鈍は、「諸鈍シバヤ」⁵でも知られるが、シマグチが生活の中に存在し、歴史・文化的なコンテンツが豊富である。同じ加計呂麻だが旧村としては別の村である俵は、集落としても古く、集落民の手による民俗資料室があり、これを活かしたいと考えた。与路島は、人口が激減している。与路のことを記録するとすれば急いだ方がいいと考えた。もちろんこれらの集落を決定するに当たっては、もう一つの重要なファクター、協力者が得られるかどうかがあった。

これらを総合的に判断し、上記編集委員会メンバーに協力を依頼した。

2-3 篠川での習作作成と編集会議

編集委員会への参加を個別に依頼しそれぞれ快諾を得たが、企画を説明しながら、特に集落の編集委員には具体的なイメージが必要なことがわかった。そのために、全体の編集会議を持つ前に、篠川集落でパイロット版を撮影することにした。

「瀬戸内のシマグチ」の集落ごとのコンテンツは、大きく三つの部分に分かれている。スクリプトを書いて演じてもらう「会話」とそこから取り出した重要事項を確認する部分、集落の紹介、そしてその集落に独特のものを取り上げる部分である。取り急ぎこれら三つのパートを篠川で撮影し、ラフ編集をして、編集会議に臨んだ。撮影できたのは、「教材」部分と「集落紹介」であったが、イメージを結んでももらう効果はあったといえる。2012年5月に瀬戸内町立図書館で第一回の編集会議を開催した。目的はもういちど全体的な構想を説明し、仮編集版を見た。そこで出た意見と議論は、まとめると以下のようなものである。

・「うまい人」に出てもらいたい

これは、シマグチの言語状況につながる話でもあるが、シマグチを話すことは、特別な場面と結びつく。本来のコミュニケーションの手段としてではなくイベントなどで披露するものであることがある。編集委員の一部にも、記録し

⁵ 1976年国指定重要無形文化財 http://www.setouchi-lib.jp/assets_j5.html

保存すべきは、「名人」のシマグチであるという意識があるようで、うちの集落ではお年寄りの名人をそろえようというコメントがあった。「上手ではない」個人を積極的に取り上げることが必要であることを確信した。

・敬語の扱いについて考えたい

避けては通れない課題である。結論をいうと最後まで「揺れ」があった。複雑な待遇表現の体系を本来持っていたシマグチであるが、それらは封建的な身分制度にも関連しており、現在では母語話者にも説明ができない部分がある。敬意が過ぎない表現を使うことを求めるにとどめたが、全体を通じて共通の見解を編集委員全体で持ち得たとは言いにくい。従って本教材の中での「敬意の高さ」は、各個人でも厳密に言うとは揃っていない。

・集落「シマ」の紹介は、文化財などよりも、いまの生活について積極的にとりあげる

名所や旧跡、歴史的なものの紹介で最初の篠川の集落紹介は構成されていた。外からやってくる人相手に説明をしたり、町の方から求められて集落史のようなものをまとめ、書いたり話をしたりした経験によるものである。しかし、これらのうちに個人の業績を顕彰するものなどはあえて扱わない方がいいという意見が出された。なによりも昔語りばかりになってしまっただけでは退屈なコンテンツとなる可能性があった。現在も実際に見れるものにも積極的に触れてもらう必要もあると考えた。そのほか解決すべき技術的な課題も見つかった。「習作」としてしまうと申し訳ないが、この過程を経たことで大きな進展があった。またテキスト化する際のかな表記については、編集委員それぞれの表記法をできるだけ尊重することを申し合わせた。無理な統一はしないことにした。

3 構成について

本章ではこれらの経緯を経て最終的に確定した「瀬戸内のシマグチ」の全体的な構成について概括する。

3-1 集落編

前述の通り、5つの集落を題材に制作したものは、大きく三つのパートにわけた。ここでは5集落に共通の制作の過程をまとめる。

3-1-1 「教材」

会話を中心としたいわば「教材仕立て」のパートである。たとえば語学教材であれば、文法事項を設定し、それを盛り込むことが最も重要になる。さらに習熟度を考え、簡単のところから複雑なものへと積み上げて行く。たとえば日本語だと名詞文から動詞文、単文から複文へと進んでいく。多くの語学教材が最初は「つまらない」のは仕方のないところもある。当初はこの手順を踏むことを考えたが、単発に終わる可能性もある中でこうした手順が優先させるべきものかということを検討した。そのため文法事項ではなく、その集落を舞台にして不自然ではなく、かつ使う可能性が高い表現をまず考えた。序数、移動、指示詞、親族呼称、基本動詞、疑問詞、地名を盛り込むことを考えた。かつ子供が興味を持てるようなコンテンツにするべく、話として完結し、ストーリーがあることを目指した。スクリプトを日本語で作成、集落の編集委員に翻訳を依頼し原稿を作成、それをもとに検討を重ねた。台本を演じてもらう形になるわけである。本編ともいえる会話に引き続いて、重要事項をとり出した部分の構成は、前田が決めた。

3-1-2 「集落紹介」

今回の研究計画のもう一つの重要な柱が、シマグチの記録である。「教材」が演じてもらう部分だとすれば、ここはできるだけ自然な談話を取り入れたいと考えた。この部分については、最初から編集委員を主体としたそれぞれの集落の方に依頼した。これは既述のように、地元の人々に主体性を持ってもらうということと、スケジュール的な関係で、我々が不在の間にも製作がすすむ部分が必要であった。篠川の仮編集のところでも述べたが、過去の話だけで構成されることは避けたかったが、それでもそれぞれの集落のプライドにつながる歴史をないがしろにするわけにはいかない。「集落の歴史、現在の産業」について話をしてくださいという大きな枠だけを設定し、できるだけ編集委員が準備したものを尊重した。この部分の最大の難関は書きおこしであった。「教材」では最初から文字化を前提として、シマグチ訳も予め用意できたのだが、それぞれ自然になればなるほど、自身の話したことも含めて、文字へとあるいは日本語への翻訳が困難であった。「母語話者」ゆえの行き詰まりであったが、製作を進める中で介入できるようになってきた。

この部分はもちろん、単なる記録ではなく、シマグチ教材として、読み物としてあるいは郷土のことを知る手がかりとして十分に役立つものになったと考える。

3-1-3 集落ごとのコンテンツ

このパートは、一般化しにくいところである。共通しているのは、とりあげるべき題材を含めて誰が主導するということなく話し合っただけで決めたということである。詳細はそれぞれの集落の事例で触れる。

3-2 芸能編

芸能編を着想したのは、奄美では、伝統文化が子供たちに近い距離にあり興味をひくコンテンツであること、そして特に若いアーティストの姿はさらにその距離を近づけるであろうと考えたからであった。また諸鈍集落だけでなく瀬戸内町が誇る伝統芸能「諸鈍シバヤ」を扱わないわけにはいかなかった。この編については、ここで詳細を述べておく。島唄については、瀬戸内町出身のアーティストに出演を依頼した。諸鈍シバヤについては、2012年10月のものを撮影、編集している。いずれのアーティストも主旨に賛同し無償での演奏だった。また曲の演奏と合わせて、子ども向けのメッセージも依頼、その模様も収録した。実は瀬戸内出身で在住のポップ・シンガーとしても全国的に有名な女性歌手の出演も探してみたが、所属事務所を通さなければ一切の露出ができない契約らしく断念した。テキストにはアーティストの解説のみを付したが、伝統芸能を知る教材として使用に十分耐えるものになる。またそれぞれのアーティストのメッセージは、自由に話してもらったのだが、島唄やシマグチが、故郷を離れた奄美出身者にとってどのような意義があるかを偶然にも三組とも語ってくれた。

3-3 「島口ラジオ体操」

「島口ラジオ体操」の詳細については本編に詳しいので重複は避けるが、7月にCDが発売されてから瞬く間に奄美群島中で話題になり、地域・学校の行事で使われ、子どもたちもよく知るものとなった。制作にあたったNPO「環境教育協議会」も「瀬戸内のシマグチ」の制作意図を説明すると、使用を快諾してくれた。「瀬戸内バージョン」があったのは幸いであった。

このパートは当初は「古仁屋編」の一部として考えたが、協議して全体のエンディングとして使用した。「オリジナリティ」という意味で議論になったが、たとえば島唄も、かつては誰かの創作なわけである。今後もこの島口ラジオ体操が人々に親しまれるであろうことと、同じ時期にシマグチの復興を目指したプロジェクトがあったことに偶然以上のものを感じて、こういう使い方をした。

4 集落編制作での問題点

ここでは未解決の課題も含めて、制作していく中で起こった問題を挙げ、今後同様の研究を行う際の参考にするべく報告する。

4-1 表記の問題

全集落に共通したが、本編をテキスト化することを決めてから制作・テキスト編纂の最後までついてまわった問題である。既述の通り、集落の編集委員の表記法を尊重する、とコンセンサスをとったが、同一の個人の中での揺れ、あるいは編集委員の間での正しい・間違っている、の議論は続いた。もちろん正書法のない、あるいはかな表記がなじまないというという想定はしていたが、文字化の経験のない編集委員もいた。第一回編集会議では地元編集委員のうちの一人に「表記の統一」を依頼していたが、今後の地元編集委員同士の関係と作業の効率を考えて、我々が責任を持つという方針に途中から変えた。今回のテキストを通じて、完全には「統一」がとれているとは思えない。あるいは学習者に混乱や負担がおこるかもしれない。この点については実際に使用してもらってからのフィードバックもあった。また IPA を用いるかどうかは今回は議論しなかったが、今後の課題である。

4-2 翻訳の問題

編集委員やその周辺の協力者は、伝承活動に関わった経験はあるが、それまでの経験は様々である。もちろんシマグチを教えるプロは存在しないのだが、教員経験者も含め教育歴や職歴など様々で、それぞれの集落での取り組み方も様々であった。実はこうしたそれぞれの経験の違いが最も現れたのが、日本語共通語とシマグチの間での翻訳であった。おそらくは外国語の学習経験によると思うが、どうしても母語である話し言葉のシマグチと、それを書き言葉とするということが結びつかないという現象がおこったのである。話し言葉と書き言葉の距離を経験することが少なくなった現在、今後考えなければならない課題の一つである。

4-3 「できる」ということ

まず強調したいのは、第一回編集会議についての部分で触れたように、母語としてシマグチを獲得した世代が少なくなった今、「学習言語」としてシマグチを身につけた人々が存在することについての地元での理解が行き渡っていない、ということである。篠川と諸鈍の集落紹介をしてくれたのは、それぞれ地元での生活経験の短い人であった。年代も話者の中では比較的若い。それでも編集委員の依頼で協力してくれた人々であるが、明らかに様々な違い、たとえばアクセントが日本語寄り、音声的な変異、などが見られる。しかし、これも現在のシマグチの状況を現す記録であるとともに、若い世代にとっては、学習によってこのレベルまでくることができるといえるというモデルである。また、30代の出演者については、その場で「口移し」で覚えてもらうというような事例もあった。彼らの生活言語は日本語を基層とした現行の方言である。しかし、独特のアクセントやイントネーションなどは身につけており、その場で覚えると言うことが可能であったということは、シマグチの習得は可能性があるということでもある。古仁屋編に出てもらった秦珠奈(たいじゅな)さんは、中学二年生(当時)であったが、祖父母に主に育てられたためシマグチの相当の運用能力がある。「年寄りのつかうもの」というイメージがかなり強いシマグチに、こういった若い話者がいることを同年代の子供たちが知ることを効果は計り知れない。

一方「シマグチの名人」として紹介された人が、シマグチでついに話せなかったという事例があった。古仁屋編での集落紹介は、それぞれの出身集落の話をしてもらうと言うテーマだったが、ほかの参加者の前で「教養が邪魔をして方言で話せない」と言ってしまった。これを機に「話せないのに話せるふりをして、シマグチ大会の審査員までしていた人」という評価になってしまった。この人を非難するのは簡単なのだが、問題は別のところにある可能性がある。つまり、改まった場で日本語共通語以外で話をする経験や能力が誰にでもあるわけではないのである。前節の「翻訳」にも通じる問題である。年齢や生活歴から考えるとまったくシマグチの運用能力がないとも考えにくいからである。複雑な背景を持った言語を扱うにあたっては、こういったデリケートな問題が起こりうることを改めて記しておきたい。

5 集落編の概略と解説

ここでは本編のメインの部分である集落編の、それぞれの項目について、収録順に要約と解説をくわえる。以下数字は本編にならう。

まえがき

この映像教材のねらいを、子供向けと大人向けにあげた。編集委員会全体の意図するところである。

しのかわ（しのほ）へん／篠川篇

1-1 みてう うていたぼれ／みつつ売ってください

食料品店での買い物の場面。ここでのねらいは序数詞、指示詞である。名詞文と疑問詞をふくめた文章を盛り込んだ。「よろず屋」的な商店での買い物という、日常的な場面を設定した。すべてのプログラムの中で最初の撮影・制作であったため、音声の問題、長さ・量のバランスなど、解決すべき問題があった。地元商店の協力により撮影できた。

出演；計省造（編集委員）計隆徳

1-2 ものと場所を指すことば／かずをかぞえよう

1-1でのポイントを取り出したものである。アニメーションを入れるなどのアイデアはその場で話し合いながら積み上げていった。

出演；勇和江、計省造

1-3 しのかわ（しのほ）ぬしょうかい／篠川の紹介

一般的な紹介、ということになったと思うが、ほかの集落においてもここでの形式が踏襲された。その意味で有用な習作となった。金井直利氏は年上の方に指導を受けながら話をしてくれた。シマグチ学習者の一例である。

1-4 八月踊り

すべての集落に独特の八月踊りがあるが、人口減や高齢化で行事が維持できない集落が出てきている。篠川は毎年盛んに行っているため、集落の人々の自負もある。しかし、今回収録した映像は最近のものではなく、十年前のものである。この十年前を最後に特に若年層の人口・参加者が減り、最後に大規模に踊った映像が残っていたからである。画質・音質ともに現在の水準からすると劣るものであったが、地域主導ということで、何を見せたいかを優先することにした。

ひゅうへん／俵篇

2-1 くっりや めうだりょうおるかい？／これはなんですか？

ここでのねらいは名詞文のうちでも疑問詞、さらに「使う」「する」などの動詞と疑問詞とのくみあわせである。それと同時に俵集落の貴重な財産である民俗資料から近現代のシマの暮らしを伝えることを目指した。俵集落では編集委員でもある袴一男氏が語りもひとりで全部つとめてくれた。かつては老人会を中心に伝承活動のモデルとして紹介されたこともあるが、メンバーが減り、袴氏の判断でこの形態をとった。我々の想定とは違う形になったが、今後も特に小さな集落ではありうることである。

2-2 瀬戸内のシマの名前

袴氏の得意分野でもある民俗史のうち、漢字の地名が本来であると誤解されていることの多い地名をとりあげた。歴史的な変遷や異説もあるところだが、ひとまず「平凡社 地名辞典」と袴氏の知識との突き合わせ、町健次郎氏との議論の中で現存の集落の旧地名を網羅した。

2-3 ひゅうめしょうかい／俵の紹介

ここでも袴氏の、特に自然信仰やノロ信仰についての知識が発揮された。民俗資料として貴重な語りだと思う。このように話すべきことを持ち、それを自身でプロデュースできるような能力のある個人がいる場合は、こちらの設定をこえてもその人のやりやすいようにするべきである。「記録」のためにはそれが最善であろう。

2-4 ひゅうこじまめむんがたり／俵小島の物語

かつては小中学校で地域のこども相手によく使われていた伝承活動のコンテンツに、昔話がある。いまでは小学校教員の協力も得られず語られる機会もなくなっていくつかの話のうち、この話をかたってもらった。全編シマグチだけで語ったことは袴氏にとっても初めてあり、貴重なものとなった。

しょどん（しゅどん）へん／諸鈍篇

3-1 うらや うじで うっかな あんまじゃもんや／

あんたがおじさんでかあちゃんはばあちゃんだもんね

ここでのテーマは親族呼称である。語彙として必ず必要なものであるだけでなく家族を通じて地域社会への興味・関心のきっかけになる可能性もある。「とうしのゆえ」（歳の祝い）という今も続く親族・地域社会をまきこんだ祝い事には、あらゆる親族が招かれるので、題材としても身近なものである。ただ、年代や集落によって差が激しい語彙群であり、ほかのバリエーションについてどう扱うかという課題は残した。

出演；林京子（編集委員）、徳本明人

3-2 家族と親せき

家系図のアニメーションを作成し、音声とともに可視化することで印象に残るように考えた。しかし本編の中に現れるものと食い違いがあったため、音声処理などに時間がかかった。

声；徳本明人

3-3 しょどん（しゅどん）ぬしょうかい／諸鈍の紹介

古くからの加計呂麻の中心地で、産業や歴史的な文物も豊富な諸鈍であるが、ほかの集落とのバランスをとることに苦労した。当たり前のように「諸鈍シバヤ」についての語りが準備されたが、シバヤは芸能編で紹介することにし、シマの暮らしの中で祭りに向けて準備する人々の様子を取り入れた。またかつての封建的な身分制度の上位にあったことを誇るような語りは、映画のロケ地であった話と差し替えた。人々のプライドを傷つけず、かつほかの集落の人々が見ても誤解のないコンテンツをつくることに心を砕いた。語りを担当した上田敏也氏も、諸鈍生まれではあるが、シマグチは学習言語である。

3-4 すいたつくり／砂糖作り

いまでも続く産業として、精糖を題材とした。かつては数が多かった製糖工場も少なくなる中、加計呂麻では付加価値をつけて高級品として生き残りをはかっている。工程を説明するナレーションは動きやそのアスペクトを示す語彙が豊富で、初級よりも上の学習者にはいい教材になり得る。声；上田敏也

ゆるへん／与路篇

4-1 だーはちいきゅちな？／どこまで行くの？

与路は離島としての「不利さ」が際立っている。ほかの集落以上に厳しい自然も相まって人口流出が止まらない。その中で人々の生活を描くにあたって海と船をテーマにした。瀬戸内町の子どもでも行ったことがない子どもが多い場所でもある。そして学習者にとって早い段階から重要なものだと考えられる、移動をめぐる様々な表現はこのテーマと非常になじみがいいと考えた。距離もあり、天候の影響をいちばん受けた集落であったが瀬戸内の中でも特に独特だと言われる保島豊氏の与路方言を記録できたことも成果である。古仁屋出身の平田誠氏が、若い旅人役として、流ちょうではないが一生懸命にシマグチを話そうとする姿勢も、本研究の目的のひとつの具体化である。

出演；保島豊、平田誠

4-2 移動をあらわす文

起点、経由、目的地を現す表現と、少しではあるがアスペクトに触れることをめざした。

また本文中にはないが、時間の起点と終点を現す表現が、場所のそれとはシマグチでは異なるため、特にとりあげた。

声；徳永允（編集委員）イラスト 岩元剛

4-3 ゆるぬしょうかい／与路の紹介

与路での撮影がかなった貴重な機会を活かしたと考える。集落のコンテンツとして数年に一度行われるサンゴの石垣の積み替えを計画していたが、台風で与路港が破壊されるなどの損害があり島に行くことが困難になり、復旧作業などに集落の人々が追われ、かなわなかった。そのため与路編はほかの集落に比べて短くなっている。また当初は保島豊氏によるナレーションを計画していたが、古仁屋に録音にきてもらうことに困難があった。従って自身与路出身である徳永允氏に担当してもらった。

くにゃへん／古仁屋篇

5-1 かりゆんことうが でけりょうおんにゃ？／借りることができますか？

古仁屋では場面重視のコンテンツを考えた。図書館というなじみのある場所、

島尾敏雄や元ちとせという瀬戸内に縁の深い人物を登場させるなどの工夫をした。また現役の中学生を登場させることで、子どもたちとシマグチの距離を近づけることを考えた。図書館職員役の義永氏も、シマグチのできない世代であるが、事前に練習をして臨んでくれた。

出演；秦珠奈、義永正輝

5-2 動きをあらわすことば

文法的なパラダイムを示した。シマグチの動詞にももちろん活用があることを理解してもらえれば成功である。文法事項の教え方が難しい、子どもたちの集中力がもたないと言われていた中でのひとつの提案である。

出演；秦珠奈

5-3 シマジマぬくとうば／いろいろなシマのことば

このパートは、古仁屋の集落紹介にあたる。既述のように、古仁屋はほかの集落との決定的な違いがある。近代以降都市化が進み、古仁屋以外の出身者が人口の大半を占めている。そのことが古仁屋の特色であることをわかりやすくするために、今回取り上げなかった集落の出身者で古仁屋在住の人々に集まってもらった。元町長で伝承活動の象徴的存在でもある義永秀親氏を迎え、長時間の談話が記録できた。

出演；義永秀親、中島良、川上ムツ子、昭島良江

6 テキストの編纂

DVD をメインにした映像教材としたため、テキストは副次的なものと位置づけたが、制作についてはかなりの労力と時間をかけた。「テキストがある」ことは、その存在自体が瀬戸内の人々の意識に訴えかけることは大きいと思う。あくまでも「瀬戸内の子ども向け」であることを目指したため、瀬戸内町や奄美語についての基本的な情報は記載しなかったため、瀬戸内町の外に配布するぶんについては、簡単な解説を挿入した。

7 瀬戸内での反応

2013年の3月の完成直後にはちょっとしたお祭り騒ぎになり⁶、地元メディア

⁶ <http://higyajiman.amamin.jp/e325348.html>

にも取り上げられた⁷。瀬戸内町の行政、町長や教育長からも今後の「活用」について考えたいとのコメントもあった。編集委員会の人々も含めある種の達成感があった。その後瀬戸内町役場を通じ41集落と小中学校、古仁屋高校などに配布された。出演者などにも配布され、町内にはある程度行き渡ったはずであった。

6月になって状況を知るべくまずはコンテンツを収録した5集落の関係者から話を聞いた。共通していたのは自分の集落が含まれたコンテンツ以外はほとんど見なかったということであった。集落の名前をタイトルにしたものとは別に「芸能編」としてシマウタなどを収録したパートがあるのだが、そこを少し見たという回答があった。高齢者のみならずその合併を経験していない世代にも「旧村」が強く意識されている。「地域主義」的なものは根強い。そのためそれぞれの旧村から一つずつ題材とする集落を選ぶ方針は、編集委員会の中で賛意を得た。逆にこのときに他の地域や集落には興味が無いということに考えが至らなかった。それぞれのパートに集落の名前を冠したことで、自分に関わりがある・ない、の判断が働いてしまったのだ。その後この5集落以外の場所で「瀬戸内のシマグチ」の認知について聞き取りをするのだが、自集落の近くあるいは親族がいるなどのなんらかのきっかけがないと見る動機にならないことがわかった。興味をもって全てを通して見たというコメントをくれたのは、「Iターン」と呼ばれる移住者の人だった。

さらに深刻だったのは、これら5集落には編集委員が必ず一人はいたにも関わらず「子どもに見せる機会を作った」という回答が皆無であったことである。編集委員は子ども向けに伝承活動に関わってきた人々に参加してもらっており、もちろんこれら映像コンテンツの目的は何度も説明し理解してもらっていたはずであるが、見せた相手はもっぱら高齢者だった。そしていま一つの大きな誤算は「DVDプレイヤーが普及していない」ことであった。これまでの現地での研究調査の中で、もちろん個人宅にあげてもらうことは何度もあった。PCもAV機器も見かけたように思ったがたとえばD集落ではポータブルのDVDプレイヤーを買うことから始めたという。

8 学校での反応

2016年9月に二度にわたって瀬戸内町内の14ある小中学校の内12校に訪問、校長に聞き取りを行った。

⁷ <http://tundie.blog.jp/archives/7858611.html>

- ・「瀬戸内のシマグチ」の認知
- ・内容を見たか
- ・評価
- ・担当教員個人のシマグチと伝承活動への興味
- ・地域の活動との連携・コミットメント
- ・「子ども島口大会」への取り組み
- ・シマグチ継承の意義
- ・その他（教員の構成、児童生徒の構成など）

「瀬戸内のシマグチ」は学校での使用も視野に入れて作成した。これは編集委員会のメンバーだけでなく、奄美そして琉球語圏全域に言えることであるが、学校教育の中で「方言」が奪われたという記憶が強いことがその理由としてあげられる。今でこそ学校で禁止されることはなくなったが、かつて学校は方言撲滅の一つの象徴であった。⁸さらに地域社会の中での学校の「権力性」も付け加える必要があるだろう。学校を持つ集落はそれを自分たちの集落が持たない集落に対して優位であると考えて来た。実際人口が多い、すなわち産業があり豊かな集落であることのわかりやすいしるしであった。さらに近年の少子化で休校・廃校が相次ぎ、学校のそういった象徴性はより強くなっているともいえる。郵便局とともに「中央とつながる」感覚は、都市部に住む人間には理解しにくいものだと思う。そういった通常期待されている以上の役割を与えられている学校でシマグチが教えられることは、わかりやすいシマグチの「復権」なのである。

学校ごとの対応の「ばらつき」は、教員個々人の「興味」によるということであろう。質問項目のうちの「教員の構成」で最も重要な質問は、教員（職員も含む）のうちどれくらいが奄美（大島郡）出身者であるかということであった。

鹿児島県の小中学校の教員は1970年代半ばに導入された「三地区制」と呼ばれる勤務地のローテーションの制度がある。これは離島部に赴任を希望する教員が少なかったこと、1945年まで、米軍占領期に教員になった地元出身者が多かった奄美で、その年代の人々の退職が始まり教員の数が不足したからだとされている。傾向としては、教員になりたての若い時期にその「義務」を果たし多くは三年程度で島を離れるか、教頭や校長の管理職になってから赴任するか

⁸ 前田達朗 2010

のどちらかの場合が多い。

大島郡出身者の教員の場合、奄美勤務を希望する者は認められることが多いとされている。また臨時採用の教員や、事務職やいわゆる用務員は現地採用のために構成員全体で見ると奄美出身者の教職員が一定割合で学校現場にいることになる。奄美出身者であれば必ずシマグチに理解があるというような断定はできないが、鹿児島出身の教員に時折みられるある種の偏見は少なくともない。

とはいえ3年から5年で教員の構成は全く変わることが宿命づけられており、その都度学校と集落の関係はかわり、シマグチへの取り組みも安定しているとはいえない。集落の人々もその点はよく理解しており、奄美出身の校長教頭の赴任は歓迎される。かつての歴史的な経緯から、鹿児島出身の教員については評価が厳しい時があるのも事実で、うまくいかないときには「あの先生は鹿児島だから」で片付けられてしまう。学校と集落の関係はその教員、特に管理職の離任まではぎくしゃくしてしまう事例を筆者もいくつか見ている。

またもう一つの理由として小中学校の、特に正課の時間の余裕のなさであろう。シマウタやシマグチの活動はどうしても課外になり、生徒をどのようにつなぎ止めるかという別の問題が出てくる。そしてここでもやはりメディアをどのように見せるのかという問題が出てくる。どの学校にも再生装置とモニターはあるのだが、子どもを集めて時間を作るという方が問題となってくるようだ。

9 「瀬戸内のシマグチ」の与えた課題と『瀬戸内のシマグチ2』

地域社会、行政関係者、学校関係者などへのフォローアップ調査のうち、集落と学校の話に少しずつ立ち入ったが、次への課題としての問題点が見えてきた。以下特に続編を立案する際に考慮に入れたものを中心に列挙していく。

a メディアの形態

既述の DVD という配布の形が予想外な障害だったということ以上に深刻だったのは、「瀬戸内のシマグチ」が映像媒体ではなく「本」だと理解されていたことである。これはその体裁によるところが大きいであろう。確かにそれは本に見えて、メインであるはずの DVD は巻末の付録だと思えない。説明文をつけ、テキストはあくまでも映像を補うものであることを強調したが、「おもしろく読みました」のような感想があった。

また数冊を寄贈した町立図書館でも、本館と移動図書館それぞれで何度か貸

し出しされているが、DVD は未開封のままである。「開けてはいけないもの」と思われるようである。またコピーすることを前提とした製本も、ページを破ることに抵抗があると複数の感想を得た。これらの問題を解決することが課題となった。

b コンテンツの問題、特に長さについて

「瀬戸内のシマグチ」は大きく6つのチャプターにわかれ、さらに全部で30を越えるコンテンツタイトルがある。最初の取り組みということで欲張ってしまったことは否めない。地元からの編集委員や集落の人々の希望をできるだけ取り入れようとした結果でもあるため、その点では目的は果たせたが、編集で簡単にカットするというわけにはいかなかった。使いやすさという点では「記録」と「教材」が混在する中でわかりにくいものになったとも言えよう。特に5分を越えるような長いプログラムは見る側の集中力を欠くことも理解できた。なにを優先するか、見せたいものはなにかをはっきりさせること、色々盛り込むことで散漫になることを避けることが次の展開につながると考えた。

c 「規範」との対決

巻末の学校調査にも一部反映されているが、「正しいシマグチ」という意識が人々の中に確実に存在する。正しさは古さであり、年長者が話すシマグチはより正しいとされる。これはなにも瀬戸内や奄美に特有の意識ではなく、世界中の継承が危ぶまれる危機言語話者コミュニティに見られるものである⁹。これを「古典主義」と言い換えれば、あらゆる言語に共通しているとも言えよう。しかしそういった規範主義は言語の継承の妨げにはなっても助けにはならないことは明らかである。そのために若い話者や運用能力が発展途上の話者を積極的に起用したが、こちらの意図がうまく伝わっていない場合がいくつかあった。またここに前述の「地域主義」が顔を出すことがある。「シマグチ」や沖縄の「しまくとぅば」は言語の「固有名詞」もしくは「総称」ではないと言える。本来シマとよばれるそれぞれの集落共同体に「特有」だと考えられていることばの一般名詞であり、「瀬戸内のシマグチ」という名付けそのものがある種の矛盾を

⁹ 世界中どこでも「いちばん上手な人は誰?」「うちのばあちゃん!」というようなことが繰り返されていると国際学会などでも話題となる。そしてその「ばあちゃん」に同じことを聞くと「うちのばあちゃん」というはずである、と。”Who is the best speaker?” “My granny is”とでも訳せるのか。

抱えることは既に述べたが、シマごとの違いは現実ではあるが場面によっては誇張され、もはやその違いがわかる人、使い分けができる人がいないような状況でもこの言説だけが生き残るのは「ばあちゃん最強説」同様にシマそのものの存続が危うい現状では拘泥することに意味は無いといえよう。この点についても繰り返し訴える必要があるだろう。

d 学校からの「切り離し」

1-3 で述べたことの繰り返しになるが、人々の意識の中にあるシマグチの衰退への学校教育における「補償」の要求と学校現場の現状はあまりにもかけ離れている。沖縄県域との大きな違いは、奄美が教育を含む行政を鹿児島に支配されていることである。奄美群島だけで独自のことをすることは難しい。もちろんその範囲でできるだけのことを行っている学校や教員個人もたくさんいるのだが、限界はある。さらに生活言語である「シマグチ」は本来集落共同体のコミュニティ言語であり、その中で育まれ伝えられてきたものである。この「原点」に回帰するべく、学校以外での教育、たとえば公民館活動などの社会教育に「返す」手段となり得る方法を提案することが求められると考えた。これはもちろんコミュニティの人々の意識を変えることも含んでいる。

e 編集に関わるスタッフについて

「瀬戸内のシマグチ」では我々と地元の伝承活動に関わっている/関わっていた人々で編集委員会を組織し編集にあたった。伝承活動の主体は地元の人々であるべきだという考えからである。もちろんこの考えは今も変わってはいないが、これまで述べてきたようなシマグチを取り巻く環境に変化を起こすためには、従来の「送り手はネイティブ世代」という構図を変えることも方法の一つだと考えた。またよそ者である筆者ら研究グループは彼ら・彼女らに依存していたともいえる。そのため今回は研究グループと、若手の「唄者」（詳細は後述）、撮影・編集担当者だけで製作することを試みた。もちろん前回の編集委員と周辺にはきちんと説明をしたうえで少人数での作り込みを目指した。

10 研究と制作計画について

1 で述べてきたような背景から「瀬戸内のシマグチ2」の研究計画は次のようなものとなった。

主に公民館活動など社会教育の場面での教材の活用をめざす。また運営側に特別な知識や過度の負担がかからないようなプログラムの設計を実際に活動をしながら行う。その目的は

- ①伝統芸能や地域活動、風物などを題材とした教材と日常の活動を通じて、子どもに伝統的なコミュニティは現在も有効で、その地域社会に育まれているという感覚を獲得すること。
- ②これまで「方言」だと貶まれてきた歴史社会的背景に気づき、自分に関わりのある言語と文化について正しい理解をすること。それらを通じて「古くさい年寄りの使うもの」という言語意識から解放することで言語継承への意識が高まること。
- ③学校現場では郷土教育の教材として活用できる。また奄美以外の出身の教員にとっても奄美の理解に有用なものとなり得ること。

③についてはこれまでの議論と矛盾するかのように見えるが、活動の主体としての集落共同体とする際に学校が完全にその外にあるとも言いがたい。重要なのはむしろ人々の意識の問題で、学校を複数ある装置の一つと考えれば利用価値のあるものであることは間違いない。

またこれまで「高齢者」と「こども」の関係にのみ限定されてきたシマグチの伝承活動を集落共同体全体が主体であるとする事、言語そのものを教えるというところから、言語を媒介とした文化に興味を持つようなコンテンツを目指すこともあわせ骨子とした。そして教材の作成にとどまらずそれをどのように使っていくかの提案までを目指すこととした。

10-1 コンテンツ作成①～シマウタを素材に

危機言語を扱う国際学会 Foundation for Endangered Languages は2016年の大会で20回目を迎えるが¹⁰、2015年のルイジアナ、チューレーン大学での大会のテーマは” The Music of Endangered Languages”であった。つまり危機言語の維持に音楽がいかに貢献できるのかというもので、二日間にわたって世界中の28の事例研究が報告されている¹¹。もちろん音楽といいながら、そのほとん

¹⁰ 2014年の大会は Uchinaa つまり沖縄で開催され、筆者も基調講演を行ったが、琉球(諸)語の研究は世界的な注目が集まっていると言える。言語学的なバラエティと歴史・社会的背景の複雑さなどがその理由であろう。

¹¹ <http://www.ogmios.org/conferences/2015/program.php>

どの事例が歌についてのものである。言えることはつまり世界中の危機言語コミュニティで歌が言葉を伝えているが、逆にいうと歌が有効な手段になり得るような伝承の危機が共通しているということでもある。ここでの議論の中心は言語の”preservation”であったとも言える。つまりこれまでの言語伝承は、言語維持”maintenance”を目指してきた。コミュニケーションの手段としての日常の使用に耐えるだけの言語であることを、あるいはそこまで復活させることを目指してきた。しかしながらそれが困難になる言語が多い中で音楽や韻文などの芸能や文学作品の中に「保存」しておくことも議論され始めたと言える。これはもちろん「妥協」だとも考えられるし、「戦術」あるいは事態が好転した際の「備え」とも考えられる。

現在の奄美の日常の中でもっともシマグチが使われる場面が「シマウタ」である。沖永良部と与論島のそれはいわゆる琉球音階で、徳之島以北では和音階でという違いはあるが、ほかの琉球語圏同様シマウタは生活に根付いている。この「根付いている」という感覚は説明しにくいだが、興味のある・なしはともあれシマウタを聞いたことがない人は子どもも含めていないであろう。シマウタを題材とすることは「瀬戸内のシマグチ」についての聞き取りの中でも複数挙げられた。そこで瀬戸内町を拠点に活動をし、長い間子ども向けに指導もしている永井しずの氏、同じく瀬戸内町在住で高校生の頃から一線で演奏活動をしている米田みのり氏、瀬戸内町出身で現在は関西を拠点に演奏活動をしている里朋樹氏に出演を依頼、快諾を得てシマウタを中心としたコンテンツを作成することになった。そしてこれらを「シマウタとうシマグチ」とタイトルすることにした。

特に永井氏の参加は、普段シマウタに絡めてシマグチを教えている経験からのアドバイスをもらうことができた。「シマウタとうシマグチ」の構成に大いに助けになった。

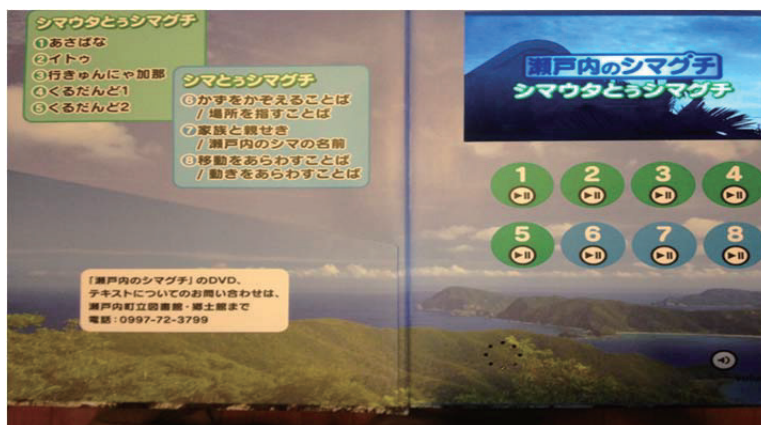
10-2 コンテンツ作成②～再編集とテキスト

1-4, b で述べたように「瀬戸内のシマグチ」では多くのタイトルを盛り込んだが故にそれぞれの狙いがぼやけてしまったきらいがある。そのなかでも特に独立したコンテンツとして教材として抜き出すことができ、時間も短く編集できるものを再編集することにした。序数詞と指示詞を扱った「数をかぞえることば・場所を指すことば」、親族呼称と漢字表記導入以前のオリジナルの地名を扱った「家族と親せき・瀬戸内のシマの名前」、移動に関する起点・終点、動詞のテンスとアスペクト、動詞の活用を扱った「移動をあらわすことば、動きをあらわすことば」の3

タイトルを「シマとうシマグチ」として再編集することにした。またこれらのタイトルの選定の基準として、字幕スーパーだけで見られるかどうかということも検討した。「瀬戸内のシマグチ」では書き起こしのテキストをつけ、それ故に「本」だと捉えられたことは既に述べたが、大きな方針の転換としてテキストをつけないという決定をした。そのため「シマウタとうシマグチ」も全部字幕で処理をすることになり、その上で唄者たちと構成を考えることになった。

11 メディアとデバイスの問題の解決策

DVD でコンテンツを配布することを巡る問題は制作に入っても解決しないままであった。前回同様 DVD にすることを考えていたところに、新しい形のデバイス、電子ブックの情報を得た。商品名は Book de Movie¹²というそれは、本来は販促などのプレゼン用のツールとして開発されたものである。素人が一言で表現するとすれば、ネットにつながらないタブレット端末である。DVD の代替案として最初に考えたのは web へのアップであったが、瀬戸内町ではまだネット環境が整備されていない。wi-fi もきわめて限られた場所にしかなく、スマホやモバイル PC なども、子どもや若者が都市部ほど持っていると考えない理由がない。開発者のはなしでは、ネット環境のないところで動画を見ることに特化したために、現在の形になりしかも比較的安価に製品化できたとのことであった。コンテンツの配布と同時にそれを見るデバイスも配れるという意味では我々が求めている形であった。これで子どもたちにも、もちろん大人でもすぐにコンテンツを見ることができるようになった。さらにもう一つの課題の解決策ともなった。すなわち「集まって見る」という縛りから解放され、一人でも少人数でもコンテンツを見ることができるようになったのである。新しいデバイスの提案で子どもたちの興味をひくことも期待される。



¹² <http://www.tarohs.net/bookdemovie/index.html> に詳しい。

12 「瀬戸内のシマグチ」の経験から

今後時間をかけていろいろな層の人々に意見をもらい、ネイティブ世代ではない人にもシマグチの導入の「送り手」となり得る可能性を模索したい。またここで制作したコンテンツ群は、web 上での公開も想定して作られている。アーカイブする、あるいは教材として公開することについても十分対応できるはずである。どのようなコンテンツがもとめられているかだけでなく、こちらがどのような提案をすれば学習者や伝承活動に関わる人々の活動に寄与できるかは常に考えるべきで、それは言語学的な研究の興味や目的と必ずしも合致するとはいえない。研究者のためのアーカイブやサイトではないことを目的とするのであれば、この二つの試みでためしたような現場の人々の計画段階からの参加が望ましいとも考える。

13 コンテンツの一例

以下にあげるのは、「瀬戸内のシマグチ」の中での古仁屋編 5-3 から、談話の書き起こしと日本語訳、音声記号である。実際の映像とともにこのテキストが参照できるようなインターフェイスの工夫でいろいろな用途に対応できると考える。

さらに単語単位ではないため、用法や文イントネーションなどもわかりやすい。

瀬戸内ぬシマや 56 ぬ村々はら合併し なとうりよばん。
 [seto:tinuʃimaja] [gozurokunu: muramurahara gappe:ʃi]
 [nattor^jomban]

瀬戸内のシマは、 56 の村々が合併して 成り立っている。

ちきやぎよろや 人口だろ わろ一ひなてい 古仁屋ぬシマなんていや
 [tɕik^jaguroja] [ziŋko:darɔ] [waro:ɕina:ti] [kuŋpanuʃimananti]
 最近は、 人口が かなりすくなくなつて、古仁屋の街だけは、

もともと 8,000 人べへりだろうちいうすが なまや
 [mutumutu hassennimbeheridaro:tɕi:usuga] [namaja]

もともと 8,000 人くらいいただろうと言われていたますが 今では

あんまり古仁屋ぬシマ 変わんばむ 各田舎田舎や
 [ammari kuɲanʃima] [kawarambam] [kakwina:kaina:kaja]
 あまり古仁屋の町では 変わっていないが 各集落では

にゃー とうまりひなてい 学校もねんぐとうしないような状態なてい
 [ɲa:] [tumari ɕina:ti] [gakkom neɲɲurɯʃinainjo:na zo:tainati]
 かなり 人口が減少して、 学校がなくなってきている状態になって、

こりゃ つまらんくとうりやすかちゆて 心配しゅんとろ。
 [korʲa] [tumarən kʰuturʲasukatɕute] [ʃimpai ʃuntoro]
 これは 困ったことだと、 心配しているところです。

また くん古仁屋や 各シマジマぬちゅんきやぬ かんうってうもち
 [mata] [kun kuɲaja] [kʰakuʃim�imanuɕuɲkʲanun] [kanʲutteumotɕi]
 また、 この古仁屋は、 各集落（シマジマ）の人達が こちらへ移ってきて、

古仁屋ぬ町や形つくらっておる うらうむうんちょう。
 [kuɲanumatɕa kataɕitukurateurʲa:] [uramuntɕo]
 古仁屋の町はできている、 そのように思います。

きゅうや 各シマジマはら かんうってうもちゃん代表し
 [kʲuɲja] [kʰakuʃim�imara] [kanʲutteumotɕan daiɕo:ʃi]
 今日は、 シマジマから、 こちらへ移ってきた方々を代表して、

にんじよばあまていもろうてい 各シマジマぬむんがたり
 [ninjyoba atumatimora:ti] [kʰakuʃim�imanun muɲgatarɪ]
 何人かの方に集まってもらって、 シマジマの物語、

各シマジマぬくとうばぬ流れ くとうばぬちげえ
 [kʰakuʃim�imanun kʰutubanunagare] [kʰutubanw ɕige:]
 シマジマのことばのうつりかわり ことばの違い、

うがしゅん まあ 収録しゅんちことうだりょうおんから
 [ugaʃuɴ] [ma:] [ʃu:rokuʃuntɕu:kutudarʲoŋkaran]
 そういったものを まあ 収録するということですから、

なまはらわんが なんにやりやなんにやりや よーりこらよーりこら
 [namahara] [waŋya] [naŋpananpana] [jo:riɡʷanajo:riɡʷana]
 今から、わたしが 少し少し、 ゆっくりゆっくり

たずねむんしんしりや 各シマジマぬくとうばば
 [tatnemun ʃi:ʃirʲa] [kʰakuʃimazimanun kutubawa]
 質問をしたりしながら、 各シマジマのコトバを

ふっくでいもればしややち うもていうりよむん
 [ɸukkudemoregʷaʃa:ɕi] [umutturʲo:mun]
 記録してもらいたいと 思っています。

うん やっぱ シマジマぬ水ぬ流れぬ 変わりゆんぐとうし くとうばだか
 [ʔun] [jappa][ʃimazimanu mitnagarenu kʰawarʲuŋŋutʷʃi][kʰutubadakʰa]
 うん やっぱり シマジマの 水の流れが 変わるように、ことばも

全部変わゆんからん うるや 自然だりょうばん はげえー
 [zembukʰawarʲuŋkanan] [urʲa] [ʃigendarʲo:ba] [haye]
 みんな変わるから、 それが 自然だろう。 うわー

あまのちゅうのくとうばぬうむしろさ
 [amanuɕunʷ kʰutubanʷʔumuʃirisa]
 あのひとの言葉は面白い、

くうまぬちゅうぬくとうばやわしやとういっち
 [kʰumanuɕunʷkʰutubaja wa:ɕatwiʲitɕi]
 このひとの言葉は悪い、

ちゅぬしまぬくとうばば へんなことある 不遜しやり
 [tɕunɯfimanɯ k^hutubawa] [hennakuta:ɾɯ] [ɸɯsɔŋʃa:]
 人のシマのことばは 変だよねと 不遜なことを言うとか、

うがししゅんくとうやあらんど。

[ɯgaʃiʃunnarando]

そのようなことをするのではありません。

そもそも「自然談話」という考え方自体が言語学者のためにあるような不遜なことばだと考える。研究者がその場に居ることが既に「不自然」であると考えないこともそうだ。研究の材料として誰かのことばを切り取る必要はあるのだが、そのためにことばは存在しているのではないということをいつも忘れてくれないと考える。

14 結語

少数言語・危機言語の継承の方法は世界中で模索されている。決定的な方法や理論が見つかっていないというのが現状である。だからこそ色々な方法を試し、失敗も含めて積み上げていくことが必要だと考える。今回の試みも完成度を問うにはまだ少し早い。様々な方法を地域に提案し続けることでまた新たなアイデアも生まれるであろう。それが外部の研究者からでなく、地域社会、「シマ」から出てくることが理想なのであるが。

ひたすら記録を積み上げるというアーカイブの役割とともに地域社会に還元できる成果をと考えたときに、この試みで得た知見は役に立つと考えている。

前田達朗 2006 「奄美大島瀬戸内町における『シマグチ』伝承活動-ひとびとの言語意識のてがかり」

『多言語社会研究会年報 4号』PP5-29 三元社

前田達朗 2010 「『経験』としての移民とそのことば」 「ことばと社会」12号 特集 移民と言語②PP129-153 三元社

前田達朗 2013 「奄美方言の小学生向け映像教材の開発とその活用法についての研究」『2012年度第7回児童教育実践についての研究助成事業 研究成果報告集』博報財団 明治書院

前田達朗 2016 「社会教育コンテンツとしての奄美語継承活動とその方法の研究」『2015年度第10回児童教育実践についての研究助成事業 研究成果報告集』
博報財団

沖縄県うるま市平安座方言の動詞と形容詞の活用

沖縄県うるま市平安座方言の動詞と形容詞の活用

當山 奈那

1 動詞

沖縄県うるま市平安座方言（以下、平安座方言）の動詞がもつ形態論的なカテゴリーには、現代日本語の動詞と同じように、テンス、ムード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、やりもらいがある。形態論的なカテゴリーは、それを構成する形態論的な形をパラディグマティックな体系に統一する一般化された意味・特徴である。個々の形態論的なカテゴリーには、派生（文法的な接尾辞）によってあらわされるもの、補助的な単語（補助動詞、コピュラなど）とのくみあわせによってあらわされるもの、語尾のとりかえによってあらわされるものがある。

個々の形態論的な形式は、語幹、語尾、助辞などの形づくりの要素の分化している。語幹は「原則として、それぞれの活用形に共通な要素であって、それらが特定の動詞の（活用以外の）特定のカテゴリーに属することを表現するやくわりをもっている要素」であり、語尾は「同一の（活用以外の）カテゴリーに属する個々の活用形を特徴づけるやくわりをもった要素のうち、基本的なもの」である。語尾は文法的な意味に応じて変化する部分で、残りの変化しない部分が語幹である。語幹と語尾の境界には、「-」を挿入する。

おのおのの動詞がどのように語幹を形成し、どのような語尾をともなって活用形を作るということは、個々の動詞の形づくりにとって重要である。語幹と語尾の形成は、動詞の活用のタイプに分類する上でも重要になる。また、個々の活用形の形づくりをみることによって、個々の活用形の成り立ちをしるうえでも重要である。

【表】動詞「kamun（食べる）」の語形変化

ムード		テンス	非過去形	過去形／第二過去形
		直説法	非強調形	kam-un（食べる）
	強調形	kam-iru（食べるのだ）	ka-daru（食べたのだ）／ kam-utaru	
質問法	肯否質問	kam-un（食べるか）	ka-dan（食べたか）／kam-utan	
	疑問詞質問	kam-uga（食べるか）	ka-daga（食べたか）／kam-utaga	
	疑い	kam-ugaja:（食べるかな）	ka-dagaja:（食べたかな） ／kam-utagaja:	
命令法		kam-a:（食べろ）		
勧誘法		kam-a（食べよう）		
連体形		kam-unu（食べる）	ka-danu（食べた）／kam-utanu	
連用	中止形	ka-di（食べて）、kam-a:ni（食べて）		
	同時形	kam-i:gina:（食べながら）		

形			
条件形	原因形	kam-ugutu (食べるから)	ka-dagutu (食べたから) / kam-utagutu
	契機形	kam-i:ne: (食べると)	
	前提形	kam-ura: (食べるなら)	
	譲歩形	ka-diN (食べても)	
	逆接形	kam-uhiga (食べるが)	ka-dahiga (食べたが) / kam-utahiga
	目的形	kam-i:ga (食べるに)	

動詞は、文のなかの機能にしたがって、終止形、連体形、連用形、条件形などの体系をもっている。

終止形は、いいおわりの述語になって文の陳述のセンターとしてはたらくことから、テンス、ムードを表示する形式として文法的な形を発達させている。連体形は、連体的な従属節の述語になって名詞をかざる形である。連体形も非過去形と過去形の対立があり、終止形と同様に過去に2系列（第一過去形と第二過去形）があるが、連体形のあらかず時間は、いいおわりの述語があらかず時間を基準にする相対的なテンスである。

連用形は、ふたつの出来事をならべ、その時間的な関係を表現するならばあわせ文やふたまた述語文のつきそい文（従属文）の述語になる。第一中止形は、形式上、現代日本語の第一中止形に対応し、単語づくりや形づくりの要素になる。単独では述語にならない。第二中止形は、現代日本語の第二中止形に対応し、第一中止形に接辞「テ」が接続している。第三中止形は第一中止形にアリ（有り）が接続していて、平安座方言では先行後続の時間的な関係をあらかずあわせ文の述語でしか使用されないが、伊平屋方言や宮古島方言、石垣島方言では、単語づくり、形づくりの要素にもなる。

条件形は、条件づけを表現するあわせ文の従属文の述語になる。

完成相の直説法の終止形、質問法の非過去形は、第一中止形に存在動詞 un (居る) が補助動詞としてくみあわさり、音声的に融合したものである。un (居る) が融合した活用形と、命令形や勧誘形など un の融合しない活用形が同居していることは、平安座方言を含む沖縄語の動詞の形づくりの大きな特徴である。動詞の活用形には、連体形の非過去 kam-unu、第二過去形 kam-utanu、条件形 kam-ura:、kam-ugutu、kam-utagutu などの un 融合型の活用形と、ka-di、kam-a:ni、kam-i:gina:、ka-diN などのような un 非融合型の活用形とが同居している。これは、動作や変化の進行をあらわしていた un 融合型の動詞とひとまとまりの動作をあらわしていた un 非融合型の動詞が統合し、融合型の活用形が非融合型の活用形を追い出した結果であろう。

2 平安座方言の動詞の形づくりの要素

平安座方言を含む多くの琉球語の動詞には、形態論的カテゴリーとして、テンス、ムード、みとめかた、ていねいさ、アスペクト、ヴォイス、もくろみ、やりもらい、それらを

構成する文法的な対立のしかた、文法的な形を構成する語幹（あるいは語根）は、現代日本語の動詞と共有のものを有し、音韻的にも対応している。語尾や助辞も、現代日本語と対応し、よく似た構造をもつものが少なくない。一方で、琉球語に固有の語尾や助辞、接尾辞もあって、琉球語独自の形態論的な体系を有している。

o>u、e>iの狭母音化、それに伴う子音の変化、前後する音声の同化による子音の変化などの音韻変化があり、その音韻変化は動詞の語幹、および語尾の音声形式にも及んでいて、平安座方言の動詞の形づくりを複雑なものにしている。

平安座方言の動詞の語幹には、基本語幹、音便語幹、連用語幹の三つの変種（ヴァリエーション）が存在する。この変種の名称は、上村幸雄（1963）による。上村は、この三つの語幹のほかに「融合語幹」「短縮形語幹」も設定しているが、平安座方言ではこれらは設定する必要はないと思われる。

語幹（基本語幹、音便語幹、連用語幹）と語尾の作り方から、平安座方言の動詞は規則変化動詞と特殊変化動詞に分けることができる、規則変化動詞は、さらに、強変化動詞と混合変化動詞に分けられる。強変化動詞は、基本語幹と連用語幹の末尾に子音があらわれ、音便語幹をもつ動詞である。音便語幹には、促音便語幹、撥音便語幹、そして、語幹末子音が脱落した脱落音便語幹の三つの変種がある。

混合変化動詞は、基本語幹末に子音があらわれ、連用語幹末と音便語幹末に母音があらわれる、子音語幹と母音語幹の混合した動詞である。

基本語幹は、命令形、勧誘形、同時形、条件形にあらわれる。連用語幹は、直説法と質問法の非過去形、連体形の非過去形の活用形にあらわれる語幹で、歴史的には、語基に人の存在をあらわすun（居る）が文法化して融合した語形にあらわれるものである。音便語幹は、直説法と質問法の過去形、中止形、譲歩形にあらわれる。

2. 1 基本語幹

基本語幹を構成要素にもつ活用形は、その動詞本来の形を保存している場合があって、当該動詞のなりたちを知る上で重要である。連用語幹も音便語幹も基本語幹から派生していて、基本語幹からそのなりたちを説明することができるという点でも基本的である。また、基本語幹は、使役動詞などの文法的な派生形式をつくる語基になるという点でも当該動詞の基本的な形式である。

平安座方言		日本語
強変化		強変化
I m	num-an（飲まない） / num-a:（飲め）	N1m nom-e
I b	tub-an（飛ばない） / tub-a:（飛ば）	N1b tob-e
I t	muQt-an（持たない） / muQt-a:（持て）	N1t mot-e
I t2	taQk-an（立たない） / taQkw-a:（立て）	N1t tat-e
I n2	sin-an（死なない） /	N1n sin-e
I k	kak-an（書かない） / kakw-a:（書け）	N1k kak-e
I d	nd-an（見ない） / nd-a:（見ろ）	N2 mi-ro
I g	kug-an（漕がない） /	N1g kog-e

I g	wi:g-aN (泳がない) /	N1g	ojog-e
I h	nZah-aN (出さない) /nZahw-a: (出せ)	N1s	das-e
I h	kuruh-aN (殺さない) /kuruhw-a: (殺せ)	N1s	koros-e
I r1	?ur-aN (売らない) /?ur-a: (売れ)	N1r	
I r1	tur-aN (取らない) /tur-a: (取れ)		
I r2	?are:r-aN (洗わない) /?are:r-a: (洗え)	N1w	ara-e
I r3	ko:r-aN (買わない) /		ka-e
I r3	wi:r-aN (酔わない) /		jo-e
混合変化		弱変化	
II e1	ku:r-aN (閉めない)	N2e	sime-ro
	nind-aN (寝ない)		ne-ro
	?akir-aN (開けない)		ake-ro
	sitir-aN (捨てない)		sute-ro
II e2	?ukir-aN (起きない)	N2i	oki-ro
	?urir-aN (降りない)		ori-ro
	?utir-aN (落ちない)		oci-ro
II i	cir-aN (着ない)		ki-ro
特殊変化		特殊変化	
III 1	h-aN (しない)		si-ro
III 2	ku:N (こない)		koi

強変化動詞の場合、語幹末の子音は平安座方言と日本語とでよく対応している。I m、I b、I t、I k、I g などである。

日本語の強変化動詞の語幹末が母音になる動詞 (N1w) に対応する平安座方言の強変化動詞 (I r2、I r3) の語幹末に r があらわれる。同様に、現代日本語の弱変化動詞に対応する平安座方言の動詞の基本語幹末も r になる。平安座方言で語幹末子音が r であらわれる現象を、かりまた (2010) にならい、「r 語幹化」とよぶ。

古代日本語の f 語幹動詞 (基本語幹末子音が f の動詞で、現代日本語の N1w の動詞) に対応する平安座方言の動詞 (I r2、I r3) は、基本語幹末にも r があらわれ、r 語幹化する。

2. 2 連用語幹

強変化動詞の第一中止形は、基本語幹に語尾-i のついたものだが、語幹末の子音が語尾 i の逆行同化によって音韻変化し、第一中止形の語幹が基本語幹と異なる形になった。この語幹の変種が連用語幹である。終止形の直説法、質問法の非過去形、第二過去形、および連体形の非過去形、第二過去形などは、第一中止形をもとにして派生した活用形だが、語幹 (あるいは語基) と語尾や接辞、補助的な単語などとのむすびつき方のつよさの度合いによって語幹と語尾が融合し、相互に影響して変化した結果、語幹に変種を生じさせたものがある。また、特定の活用にかぎってこれらの変化をこうむらなかつたものがある。

基本語幹	連用語幹	
強変化	第一中止形	直説法非過去
I m num-aN (飲まない)	num-i (飲み)	num-uN (飲む)
I b tub-aN (飛ばない)	tub-i (飛び)	tub-uN (飛ぶ)
I t muQt-aN (持たない)	muQc-i (持ち)	muQc-uN (持つて)
I n2 sin-aN (死なない)	sin-i (死に)	sin-uN (死ぬ)
I k ?aQk-aN (歩かない)	?aQc-i (歩き)	?aQc-uN (歩く)
I d nd-aN (見ない)	nd-i (見)	nd-uN (見る)
I g kug-aN (漕がない)	kuz-i (漕ぎ)	kuz-uN (漕ぐ)
I h kuruh-aN (殺さない)	kuruh-i (殺し)	kuruh-uN (殺す)
I r1 ?ur-aN (売らない)	?u-i (売り)	?u-iN (売る)
I r2 ?are:r-aN (洗わない)	?are:-i (洗い)	?are:-N (洗う)
I r3 ko:r-aN (買わない)	ko:-i (買い)	ko:-iN (買う)
混合変化		
II e1 ?akir-aN (開けない)	?aki: (開け)	?aki:-N (開ける)
sitir-aN (捨てない)	siti: (捨て)	siti:-N (捨てる)
II e2 ?ukir-aN (起きない)	?uki: (起き)	?uki:-N (起きる)
?urir-aN (降りない)	?uri: (降り)	?uri:-N (降りる)
II i cir-aN (着ない)	ci: (着)	ci:-N (着る)
特殊変化動詞		
III 1 h-aN (しない)	hi: (し)	hu-N (する)
III 2 ku:N (こない)	ʧi: (来)	ʧu(:)N (来る)

基本語幹末の子音が m、b、d、h、n になる動詞は基本語幹と連用語幹が同音である。基本語幹末が k、g、t になる動詞の連用語幹は、語尾 i による逆行同化によって破擦音化し、基本語幹とは異なる形になっている。基本語幹末の子音が r になる動詞 (I r1) の連用語幹は、語幹末が母音になっていて、基本語幹とことなる形になっている。これは、語尾 i の影響をうけた口蓋音化によって語幹末の子音 r が脱落したために生じたものである。

I r1 ur-i > ?uri > ?u-i (売り)

平安座方言の混合変化動詞の第一中止形語幹末には、長母音があらわれ、r 語幹化している基本語幹とは異なっている。この変種も連用語幹である。古代日本語では混合変化動詞の基本語幹 (連用語幹も) は、語幹末が i になる動詞と e になる動詞の 2 タイプがあるが、平安座方言のばあい、いずれも e になるタイプにさかのぼる。

2. 3 音便語幹

第二中止形は、第一中止形に助辞 te がついてできているが、強変化動詞のばあい、第一中止形の語尾-i を含む音節と、助辞 te が相互に影響を与えて変化した結果、語幹と語尾の再編が行われた。あらたに発生した語幹を音便語幹とよぶ。音便語幹の語幹が母音でおわるタイプと促音でおわるタイプがあるが、これは、第一中止形の基本語幹の末尾子音のち

がいに応じてあらわれる。

① 母音語幹

I m 動詞と I b 動詞の第二中止形の語尾は di である。

nu-di (飲んで)、ka-di (食べて)、ju-di (読んで)、ku-di (汲んで)、tu-di (飛んで)、
ʔasi-di (遊んで)、ju-di (呼んで)、ʔira-di (選んで)

r 語幹動詞は、第二中止形の語尾が ti である。

ʔu-ti (売って)、tu-ti (取って)、hu-ti (降って)、kwi-ti (くれて)、ko:ti (買って)、
wi:-ti (酔って)、ara-(t)ti (洗って)

I k 動詞と I h 動詞の第二中止形の語尾は ci である。n 語幹動詞のうち「ʔanni-ci (言うて)」のみがこのタイプに含まれる。

ʔanni-ci (言うて)、ʔaQ-ci (歩いて)、ka-ci (書いて)、n-ci (見て)、nza-ci (出して)、
kuru-ci (殺して)、ʔutu-ci (落として)、ci-ci (着て)

I g 動詞の第二中止形の語尾は zi である。また、「sinun (死ぬ)」の第二中止形も語尾は zi である。

si-zi (死んで)、ku-zi (漕いで)、wi:-zi (泳いで)

② 促音語幹

促音便語幹になる動詞は、I t 動詞と「切る」である。第二中止形の語幹末が促音になる。語尾は ci である。

muQ-ci (持って)、maQ-ci (待って)、taQ-ci (立って)、ciQ-ci (切って)

③ 音便なし

現代日本語の弱変化動詞に対応する平安座方言の混合変化動詞の第二中止形も語幹尾が母音でおわるが、現代日本語のばあいと同様に音便現象がおきていないと考える。

ku:-ti (閉めて)、ʔaki-ti (開けて)、siti-ti (捨てて)、ʔuki-ti (起きて)、ʔuri-ti (降りて)、
ʔuti-ti (落ちて)、i:-ti (もらって)

2. 4 強変化動詞

強変化動詞は、下位タイプの分化がはげしく、どの動詞がどんな活用形をつくるのか、規則を見つけるのが難しい。活用形を導き出す規則は基本語幹末子音によって決まってくるが、動詞語幹の音環境によって容易にやぶられる。

(1) m 語幹動詞

m 語幹動詞には、numUN (飲む)、kamUN (食べる)、jumUN (読む)、kumUN (汲む) などがある。基本語幹と連用語幹の末尾子音は -m になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は d である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
num-AN (飲まない)	num-UN (飲む)	nu-di (飲んで)
kam-AN (食べない)	kam-UN (食べる)	ka-di (食べて)
jum-AN (読まない)	jum-UN (読む)	ju-di (読んで)
kum-AN (汲まない)	kum-UN (汲む)	ku-di (汲んで)

(2) b 語幹動詞

b 語幹動詞には、tubUN (飛ぶ)、ʔasibUN (遊ぶ)、jubUN (呼ぶ)、ʔirabUN (選ぶ) などがある。基本語幹と連用語幹の末尾子音は -b になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は d である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
tub-aN (飛ばない)	tub-uN (飛ぶ)	tu-di (飛んで)
ʔasib-aN (遊ばない)	ʔasib-uN (遊ぶ)	ʔasi-di (遊んで)
jub-aN (呼ばない)	jub-uN (呼ぶ)	ju-di (呼んで)
ʔirab-aN (選ばない)	ʔirab-uN (選ぶ)	ʔira-di (選んで)

(3) g 語幹動詞

g 語幹動詞には、kuzUN (漕ぐ)、wi:zUN (泳ぐ) などがある。基本語幹の末尾が -g、連用語幹の末尾子音は -z になり、音便語幹は母音になる。音便語幹の語尾頭子音は z である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
kug-aN (漕がない)	kuz-uN (漕ぐ)	ku-zi (漕いで)
wi:g-aN (泳がない)	wi:z-uN (泳ぐ)	wi:-zi (泳いで)

(4) k 語幹動詞

k 語幹動詞には、kacUN (書く)、ʔaQcUN (歩く)、hataracUN (働く) などがある。基本語幹末が -k、連用語幹末が -c、音便語幹末が母音で、語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
kak-aN (書かない)	kac-uN (書く)	ka-ci (書いて)
ʔaQk-aN (歩かない)	ʔaQc-uN (歩く)	ʔaQ-ci (歩いて)

また、ふつう、命令形は基本語幹に語尾 -a: をとりかえることによって作るが、このタイプの動詞は語幹が唇音化する。h 語幹動詞の命令形も同様のふるまいをする (kakw-a: (書け)、ʔaQkw-a: (歩け))。

ʔicUN (行く) は、基本語幹末子音が -k であり、連用語幹が -c である点で、k 語幹動詞とみなせるが、音便語幹末の子音は異なる。また、語尾頭子音も z である。第二中止形の語尾が -zi になるのは、「sinUN (死ぬ)」の n 語幹動詞と共通している。ʔicUN (行く) の活用形のタイプは、k 語幹動詞に、n 語幹動詞の活用語幹のタイプが補充法の手続きによって混ざったと考えられる。

基本語幹	／連用語幹	／音便語幹
ʔik-aN (行かない)、ikwa: (行け)	／ʔic-uN (行く)	／n-zi (行って)、n-zaN (行った)

(5) t 語幹動詞

t 語幹動詞には、muQcUN (持つ)、maQcUN (待つ) がある。基本語幹末が -t、連用語幹末が -Qc、音便語幹末が -Q で、語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
muQt-aN (持たない)	muQc-uN (持つ)	muQ-ci (持って)
maQt-aN (待たない)	maQc-uN (待つ)	maQ-ci (待って)

なお、一例、「taQc-uN (立つ)」のみ、基本語幹末が -k であらわれた。命令形も k 語幹動

詞のように、taQkw-a: (立て) になる。連用語幹と音便語幹、それぞれの語尾は他の t 語幹動詞と共通する。

taQk-an (立たない) taQc-un (立つ) taQ-ci (立って)

(6) d 語幹動詞

d 語幹動詞は ndun (見る) の 1 例のみ確認した。基本語幹と連用語幹が同じ-d であらわれ、語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
nd-an (見ない)	nd-un (見る)	n-ci (見て)

(7) n 語幹動詞

n 語幹動詞は、これまで、sinun (死ぬ) と ?annun (言う) の二つの動詞が確認されている。しかし、両者はタイプが異なる。sinun (死ぬ) は、b 語幹動詞と m 語幹動詞と同じように、基本語幹と連用語幹が同じである。音便語幹が母音でおわり、語尾が z で始まるのは、g 語幹動詞と共通している。

もうひとつの ?annun (言う) も、基本語幹と連用語幹が同じである。しかし、音便語幹の語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
sin-an (死なない)	sin-un (死ぬ)	si-zi (死んで)
?ann-an (言わない)	?ann-un (言う)	?anni-ci (言って)

(8) h 語幹動詞

h 語幹動詞は、基本語幹、連用語幹が同じ形であらわれ、語幹末子音が -h である。音便語幹は母音でおわり、語尾頭子音が c である。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
nzah-an (出さない)	nzah-un (出す)	nza-ci (出して)
kuruh-an (殺さない)	kuruh-un (殺す)	kuru-ci (殺して)
?utuh-an (落とさない)	?utuh-un (落とす)	?utu-ci (落として)

また、ふつう、命令形は基本語幹に語尾-a:をとりかえることによって作るが、このタイプの動詞は語幹が唇音化する (nzahw-a: (出せ)、kuruhw-a: (殺せ)、?utuhw-a: (落とせ))。

(9) r 語幹動詞

r 語幹動詞には、4つのタイプが存在する。ひとつは、古代日本語との比較から、「取る」「売る」などの r 語幹動詞に対応するタイプである。ふたつめは、w 語幹動詞に属するもの。ここで、「洗う」のみは、連用語幹が異なるので別に分類している。基本語幹末子音は r で、連用語幹末は母音になっている。

よっつめは「ci:-N (切る)」のように、音便語幹末に促音があらわれるタイプである。

基本語幹	連用語幹	音便語幹
I r1 ?ur-an (売らない)	?u-in (売る)	?u-ti (売って)
I r1 tur-an (取らない)	tu-in (取る)	tu-ti (取って)
I r1 hur-an (降らない)	hu-in (降る)	hu-ti (降って)
I r1 kwir-an (くれない)	kwi:-N (くれる)	kwi-ti (くれて)
I r2 ?are:r-an (洗わない)	are:-N (洗う)	ara-(t)ti (洗って)

I r3	ko:r-aN (買わない)	ko:-iN (買う)	ko:ti (買って)
I r3	wi:r-aN (酔わない)	wi:-N (酔う)	wi:-ti (酔って)
I r4	cir-aN (切らない)	ci:-N (切る)	ciQ-ci (切って)

2. 5 混合変化動詞

混合変化動詞は、連用語幹も音便語幹も同じ形で末尾に母音が変わる。基本語幹末に子音が変わる。母音語幹と子音語幹の混合したタイプである。平安座方言の場合、基本語幹が強変化動詞化することによって混合変化動詞に移行したものが分類される。

	基本語幹	連用語幹	音便語幹
II e1	ku:r-aN (閉めない)	ku:-iN (閉める)	ku:-ti (閉めて)
	?akir-aN (開けない)	?aki:-N (開ける)	?aki-ti (開けて)
	sitir-aN (捨えない)	siti:-N (捨てる)	siti-ti (捨てて)
	i:r-aN (もらわない)	i:-N (もらう)	i:-ti (もらって)
II e2	?ukir-aN (起きない)	?uki:-N (起きる)	?uki-ti (起きて)
	?urir-aN (降りない)	?uri:-N (降りる)	?uri-ti (降りて)
	?utir-aN (落ちない)	?uti:-N (落ちる)	?uti-ti (落ちて)
II i	cir-aN (着ない)	ci:-N (着る)	ci-ci (着て)

2. 6 特殊変化動詞

基本語幹	連用語幹	音便語幹
h-aN (しない)	hu-N (する)	hi-ci (して)
ku:N (こない)	ʃu(:)N (来る)	ʃi: (来て)

【資料】動詞活用一覧

基本語幹	連用語幹	音便語幹
強変化		
I m num-aN (飲まない)	num-uN (飲む)	nu-di (飲んで)
I m kam-aN (食べない)	kam-uN (食べる)	ka-di (食べて)
I m jum-aN (読まない)	jum-uN (読む)	ju-di (読んで)
I m kum-aN (汲まない)	kum-uN (汲む)	ku-di (汲んで)
I b tub-aN (飛ばない)	tub-uN (飛ぶ)	tu-di (飛んで)
I b ?asib-aN (遊ばない)	?asib-uN (遊ぶ)	?asi-di (遊んで)
I b jub-aN (呼ばない)	jub-uN (呼ぶ)	ju-di (呼んで)
I b ?irab-aN (選ばない)	?irab-uN (選ぶ)	?ira-di (選んで)
I t muQt-aN (持たない)	muQc-uN (持つ)	muQ-ci (持って)
I t maQt-aN (待たない)	maQc-uN (待つ)	maQ-ci (待って)
I t2 taQk-aN (立たない)	taQc-uN (立つ)	taQ-ci (立って)
I n2 sin-aN (死なない)	sin-uN (死ぬ)	si-zi (死んで)
I n ?ann-aN (言わない)	?ann-uN	?anni-ʃi (言って)

I k2	ʔik-aN (行かない)	ʔic-uN (行く)	N-zi (行って)
I k	ʔaQk-aN (歩かない)	ʔaQc-uN (歩く)	ʔaQ-ci (歩いて)
I k	kak-aN (書かない)	kac-uN (書く)	ka-ci (書いて)
I d	nd-aN (見ない)	nd-uN (見る)	N-ci (見て)
I g	kug-aN (漕がない)	kuz-uN (漕ぐ)	ku-zi (漕いで)
I g	wi:g-aN (泳がない)	wi:z-uN (泳ぐ)	wi:-zi (泳いで)
I h	nzah-aN (出さない)	nzah-uN (出す)	nza-ci (出して)
I h	kuruh-aN (殺さない)	kuruh-uN (殺す)	kuru-ci (殺して)
I h	ʔutuh-aN (落とさない)	ʔutuh-uN (落とす)	ʔutu-ci (落として)
I r1	ʔur-aN (売らない)	ʔu-iN (売る)	ʔu-ti (売って)
I r1	tur-aN (取らない)	tu-iN (取る)	tu-ti (取って)
I r1	hur-aN (降らない)	hu-iN (降る)	hu-ti (降って)
I r1	kwir-aN (くれない)	kwi:-N (くれる)	kwi-ti (くれて)
I r2	ʔare:r-aN (洗わない)	are:-N (洗う)	ara-(t)ti (洗って)
I r3	ko:r-aN (買わない)	ko:-iN (買う)	ko:ti (買って)
I r3	wi:r-aN (酔わない)	wi:-N (酔う)	wi:-ti (酔って)
I r4	cir-aN (切らない)	ci:-N (切る)	ciQ-ci (切って)
I r5		a-N (ある)	a-ti (あって)
I r6	ur-aN (いない)	u(:)-N (いる)	u-ti (いて)

混合変化

II e1	ku:r-aN (閉めない)	ku:-iN (閉める)	ku:-ti (閉めて)
	ʔakir-aN (開けない)	ʔaki:-N (開ける)	ʔaki-ti (開けて)
	sitir-aN (捨てない)	siti:-N (捨てる)	siti-ti (捨てて)
	i:r-aN (もらわない)	i:-N (もらう)	i:-ti (もらって)
II e2	ʔukir-aN (起きない)	ʔuki:-N (起きる)	ʔuki-ti (起きて)
	ʔurir-aN (降りない)	ʔuri:-N (降りる)	ʔuri-ti (降りて)
	ʔutir-aN (落ちない)	ʔuti:-N (落ちる)	ʔuti-ti (落ちて)
II i	cir-aN (着ない)	ci:-N (着る)	ci-ci (着て)

特殊変化

h-aN (しない)	hu-N (する)	hi-ci (して)
ku:N (こない)	ʔu(:)N (来る)	ʔi: (来て)

3 形容詞

琉球諸語の形容詞は、日本語の形容詞と同じく、連体修飾語、述語としてはたらく品詞である。終止形、連体形、連用形、条件形などの文中での機能を表しわける形式を有する。形容詞は、述語として機能することからテンスのカテゴリーを有する。しかし、アスペクト、ヴォイスなどの文法的カテゴリーを有しない。これらの特徴は、琉球諸語の形容詞が時間的限定性のないものの特性をあらわしながら、形容詞の連用形にももの存在をあらわす動詞を組み合わせて作られることによる。

琉球諸方言の形容詞は、形づくりの違いによって、大きく二つのタイプに分けることができる。一つは、日本語の第一形容詞（イ形容詞）に相応し、日本語の第一形容詞と語根を共通にするものである。これを琉球諸語でも第一形容詞とよぶことができる。もう一つが日本語の第二形容詞（ナ形容詞）に相当するもので、琉球諸語でも連体形の語尾が **na** で現れる。第二形容詞を述語にするときは、モノの存在をあらわす動詞から派生した繫詞をくみあわせる。繫詞を使用して述語を形成することは名詞と同じである。第一形容詞は琉球諸語でそれぞれに発達しているが、第二形容詞は語彙の数も少なく、発達していない。

3.1 第一形容詞

平安座方言の形容詞は、語幹に接辞 **sa** を後接させたサ連用形に「有る」に対応する存在動詞が組み合わさった形式を有する。那覇方言の ?atfisaN （暑い）、 takasaN （高い）、 kurusaN （黒い）などは、サ連用形に存在動詞 **aN**（ある）が文法化して組み合わさったさり、さらに融合しているが、平安座方言のサ連用形は、**s>h** の変化がおきていて、 takahaN （高い）、 ?amahaN （甘い）のようになっている。ただし、一部に ?umussaN （おもしろい）、 wassaN （悪い）など **s** を残す語がある。

語構成的には「語幹+サ+アン（有る）」から成り、存在動詞 **aN**（ある）と似た語形変化をする。

下に、第一形容詞「 takahan （高い）」のパラダイムをあげる。（形容詞のカテゴリカルな意味としては、特性形容詞、属性形容詞に分類できる）

【表】第一形容詞 takahan （高い）の活用

テンス ムード		非過去形	過去形
		直説法	
直説法	非強調形	takaha-N （高い）	takaha-taN （高かった）
	強調形	takaha-nu （高いのだ）	takaha-tanu （高かったのだ）
質問法	肯否質問	takaha-nu （高いか）	takaha-tanu （高かったか）
	疑問詞質問	takaha-ga （高いか）	takaha-taga （高かったか）
	疑い	takaha-gaja （高いかな）	takaha-tagaja （高かったかな）
連体形		takaha-nu （高い）	takaha-tanu （高かった）
条件形	原因形	takaha-gutu （高いので） takaha-nu	takaha-tagutu （高かったので）
	条件形	takaha-ra （高いなら）	
	うらめ条件	takaha-tin （高くても）	
	逆接形	takaha-higa （高いけど）	takaha-tahiga （高かったけど）

形容詞は、動詞と同じように直説法、質問法のムード形式をもつが、命令法、勧誘法はもたない。直説法の強調形と、質問法の肯否質問形、連体形の非過去形と過去形が同じ形式であられる。（条件形の一部の形式も）

01. ?itsati ?umuhanu. (会えて うれしい!)
02. taro:ga mutso:nu kuruman kuruhanu? (太郎が 持っている 車も 黒いの?)
03. magihanu suika (大きい スイカ)
04. ku:hanu nnudʒigwa: (小さい 島ダコ)

文の中での機能にしたがって、終止形、連体形、条件形をもつ。また、テンスによって過去形と非過去形が対立しているが、過去形はひとつしかない。動詞には、話し手による直接確認を明示する第二過去形と直接確認について明示しない第一過去形が存在し、対立しているのとは異なる。

否定形式には、takako: ne:N (高くない) のように、「takaku (高く)」にとりたて助辞「ja (は)」が融合した形式に、ne:N (ない) が組み合わさったものがある。また、?itsunako: ne:N (忙しくない) のように、否定形式の語幹末に「シ」があらわれず、標準語のク活用型とシク活用型の違いが失われている形容詞もある。

〈感情〉 ?uturuhan~?uturusAN (恐ろしい)、?umussaN (楽しい、うれしい)、?iso:han (うれしい)、ʃimuguruhan (心苦しい)、kanahan (いとしい)

〈生理的状态〉 ja:han (ひもじい)、hi:sAN (さむい)

〈知覚関係〉 karahan (塩辛い、辛い)、ʃi:sAN (すっぱい)、?amahan (甘い)、ma:han (おいしい)、ndzhan (苦い)

※対象に対する特徴づけと、対象によって引き起こされた話し手の一時的な感覚の両方をあらわす形容詞。

〈色と形〉 kurudi/kuruhan (黒い)、o:di/o:han (青い)、?akadi/?akahan (赤い)

〈大小関係〉 hikuhan (低い)、ku:han (小さい)

〈人の性格など〉 ?umussaN (おもしろい)

※人の特徴づけをあらわすグループ。名詞であらわれることが多い。

〈評価〉 jassAN (安い)、hirumahan (不思議だ)、jagamahan (うるさい)、ʃikarahan (つまらない)、midʒirahan (珍しい)、

〈その他〉 ?itsunahan (いそがしい)

また、色形容詞は基本的に第一形容詞の形をとるが、直説法非過去形に動詞の第二中止形と同じ活用形が用いられることがある。kurudi/kuruhan (黒い)、o:di/o:han (青い)、?akadi/?akahan (赤い) がこれまでにみられた。これは Im 型動詞と共通している。ただし、*kurumun のように Im 動詞の完成相非過去形の形式は使わないとのことである。逆に、属性形容詞や特性形容詞に分類できる他の形容詞は、色形容詞のような動詞型の活用形はもたない。

【表】色形容詞 ?akasan (赤い) の活用

テンズ ムード		非過去形	過去形
		直説法 非強調形	?akahan/?akadi (赤い)

	強調形	?akahanu (赤いのだ)	?akahatanu (赤かったのだ)
質問法	肯否質問	?akahanu (赤いか)	?akahatanu (赤かったか)
	疑問詞質問	?akahaga (赤いか)	?akahataga (赤かったか)
	疑い	?akahagaja: (赤いかな)	?akahatagaja: (赤かったかな)
連体形		?akahanu (赤い)	?akahatanu (赤かった)
条件形	原因形	?akahahutu, ?akahanu (赤いから)	?akahatagutu (赤かったので)
	条件形	?akahara: (赤いなら)	
	うらめ条件	?akahatin (赤くても)	
	逆接形	?akahahiga (赤いけど)	?akahatahiga (赤かったけど)

上の表にみられるように、動詞活用型の色形容詞は、連体形はもたない¹。中止形（や条件形の一部）は可能である。

05. uri to:bi:ra: kurudi, magahanu. (この ゴキブリ、黒くて 大きいな。)

06. tinto:ga ?akadi, kadʒi ɸufʃʊn. (空が 赤いと、台風が くる)

主体が〈類〉であり、主体の特性をあらわす形容詞述語文の場合、述語の形式は kurudi でも kuruhan でもよい。

07. garasa:ja kurudi/ kuruhan. (カラスは 黒い。)

色形容詞で一時的な状態をあらわす場合、安慶名方言では「クルー ソーン (黒くしている)」「アカー ソーン (赤くしている)」のように形容詞の語幹にソーン (している) をくみあわせて述語にすえる²が、平安座ではこの形式は用いないとのことである。かわりに、kurudo:N のような動詞の継続相の形式や、kurudiru u:N のような第二中止形に焦点化助辞=ru を後接させ、存在動詞 uN (いる) をくみあわせた形式をとる。

08. satsunu sudinu kurudo:N. (シャツの 袖が 黒くなっている。)

09. wano:ja:i! ?ja: kutse: kurudiru u:Nhi:. (うわあ! あんたの 口は 黒くなっているよ)

色形容詞以外の第一形容詞の場合、一時的な状態はサ連用形に、「スル」の継続相の形式をくみあわせて表現する。下の例は、話し手が目撃している第三者の一時的な状態をとらえている例である。11 の例のように「-gisan (～しそう)」の形式を述語に用いることもできる。

10. taro:ja go:kakuhiʃi ?umusa ho:tahi:N. (太郎は 合格して うれしそうだったよ。)

11. taro:ja go:kakuhiʃi ?umusagisan. (太郎は 合格して うれしそう。)

¹ kurudiru u:nu のように、焦点化助辞=ru を後接させ、存在動詞 uN (いる) の連体形をくみあわせた形が連体的に名詞を飾ることは可能なようであるが、あまり用例を確認できていない。

² かりまた (2007)

3.2 第二形容詞

第二形容詞は、連体形を標準語の第二形容詞の語尾と同じ「na」にするが、それ以外の活用形は、名詞述語文を作るときと同じようにハダカの形（語幹）にコピュラ「jan」をくみあわせてつくる。

【表】第二形容詞 *gandzu: jan*（元気だ）の活用

テンス ムード		非過去形	過去形
直説法	非強調形	<i>gandzu: jan</i> （元気だ） / <i>gandzu: han</i>	<i>gandzu: jatan</i> （元気だった） / <i>gandzu: hatan</i>
	強調形	<i>gandzu: jaru</i> （元気なのだ）	<i>gandzu: jataru</i> （元気だったのだ）
質問法	肯否質問	<i>gandzu: jan</i> （元気か）	<i>gandzu: jatan</i> （元気だったか）
	疑問詞質問	<i>gandzu: jaga</i> （元気か）	<i>gandzu: jataga</i> （元気だったか）
	疑い	<i>gandzu: jagaja</i> （元気かな）	<i>gandzu: jatagaja</i> （元気だったかな）
連体形		<i>gandzu: na</i> （元気な） / <i>gandzu: hanu</i>	<i>gandzu: jatanu</i> （元気だった） / <i>gandzu: hatanu</i>
条件形	原因形	<i>gandzu: jagutu</i> （元気なので）	<i>gandzu: jatagutu</i> （元気だったので）
	条件形	<i>gandzu: jara</i> 、 <i>gandzu: jare</i> （元気なら）	
	うらめ条件	<i>gandzu: jatin</i> （元気でも）	
	逆接形	<i>gandzu: jahiga</i> （元気だけど）	<i>gandzu: jatahiga</i> （元気だったけど）

ただし、直説法の非過去形 *gandzu: han*、過去形 *gandzu: hatan*、連体形の非過去形と過去形では、第一形容詞と同じ形式をあわせて持っている。意味の違いは確認できなかった。

12. *taru: ja gandzu: hando: ja:*.（太郎は 元気だよ。）

13. *nika: he: hendzanu kkwagwa: ta: buru gandzu: jatando: /gandzu: hatando:*.

昔は 平安座の 子供たちは みんな 元気だったよ。

他の活用形もすべて第一形容詞の形式にできるのか、他の第二形容詞も第一形容詞の形式にできるのか、確認できていない。

なお、本報告のデータは、全て平安座出身／在住の話者3名、T・I（S3生、女性）、M・T（S4生、女性）、M・M（S10生、女性）への面接調査によるものである。

参考文献

- ・ 上村幸雄 (1963) 「首里方言の文法」『沖縄語辞典』国立国語研究所編
- ・ かりまたしげひさ (2010) 「琉球語安慶名方言の動詞の形づくり」『琉球の方言』34号
- ・ かりまたしげひさ (2002) 「琉球語宮古諸方言の形容詞についてのおぼえがき—城辺町保良方言の形容詞の活用を中心に—」宮岡伯人編『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』科学研究費成果報告書
- ・ かりまたしげひさ (2007) 「沖縄県うるま市安慶名方言の形容詞」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房
- ・ 八亀裕美 (2007) 「形容詞研究の現在」工藤真由美編『日本語形容詞の文法—標準語研究を超えて』ひつじ書房
- ・ 鈴木重幸 (1983a) 「形態論的なカテゴリーについて」『教育国語』72号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録
- ・ 鈴木重幸 (1983b) 「動詞の形態論的な形の内部構造について」『横浜国大 国語研究』創刊号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録
- ・ 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- ・ 仲宗根政善 (1983) 『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
- ・ 国立国語研究所 (1963) 『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

資料

「自治会に来なかった理由」

- A : ei, ʔja:mo: nu:nfi ʃinu: dʒiʃikainkai ku:ntaga?
 ねえ！ あんたは どうして 昨日、 自治会に 来なかったの？
- B : bjo:in̄kairu ndʒaru. hokanu tsun̄kai ʔanniʃe:taruħi:.
 病院に 行ったんだよ。他の 人に 言って あったし。
- A : jan? ʔandataru? ma:nu wassataga?
 ええ？ そうだったの？ どこが 悪かったの？
- B : te:kikenʃin̄ jataħi:.
 定期検診 だったの。
- A : te:kikenʃinja kajo:biru janhani?
 定期検診は 火曜日でしょう？
- B : kajo:be: ju:dʒinu ʔatti, ʔiʃi:wantando:.
 火曜日は 用事が あって、行けなかったんだよ。
- A : ʃinu:kara ʔutanu renʃu:ga hadʒimatanda:.
 昨日から 歌の 練習が 始まったよ。
- B : na: saŋgwaʃa: jagutu, he:hanja:.
 もう サングワチャー (行事名) なんて、はやいね。
- A : so:kutu he:haħija:.
 本当に はやいねえ。
- B : so:gwaʃinu ʃandu ʔumura:, na: saŋgwaʃiruħi:.
 正月が 来たと 思ったら、もう サングワチャーだね。

- A : so:gwaŋɪN mmiŋiŋi ʔitsunahataçi:.
正月も とても 忙しかったね。
- B : me:niŋi me:niŋi ʔitsunahaçi:.
毎日 毎日 忙しいね。
- A : handara: naraŋgutu me:niŋi mando:tando:.
やらないと いけないことが 毎日 たくさんだったよ。

「カゴを借りたい」

- A : heisari:.
こんにちは。
- B : ʔo:i, nu:jaga.
はいはい。 なにかな。
- A : hatakiŋkai ba:kinu ko:kitijo:. ʔja: ba:ki karaɸa:.
畑で カゴが 壊れてね。 あんたの カゴを 貸して。
- B : ʔo: ʃimundo:. ʃa: nudi:kwa:.
うん、いいよ。 お茶 飲んでおきなさい。
- A : tsu:ja ʃa: numunu hima: ne:çiN.
今日は お茶を 飲む 暇が ないよ。
hatakiŋkai handara: naranu ʃigutu aŋgutu.
畑で やらないと いけない 仕事があるから。
- B : na: ʔiritan. uri miso:ra:.
もう 入れた。 ほら、召し上がりなさい。
- A : na: ʔikandara: naraŋçi:. nudi ʔikai:.
もう いかないと 行けないのにね。 飲んで いろいろか。
- B : da: ʔamɸa tsutsawan nudi ʔikada:.
さあ、もう 一杯、 飲んで いきなさいよ。

「先輩と後輩の会話」

- A : na: wano: ke:jabiraçi:.
もう 私は 帰りましょうね。
- B : ke:ru ɸuru:?
帰るのかい？
- A : ʔu:.
はい。
- B : ʔitta:ga ʃi:ne:, wano: wakaku naigutu na:hiN ku:jo:.
お前たちが 来ると、 私は 若く なるから もっと 来るんだよ。
- A : namanu gutuhi mmaganʃa: mu:ruhi kanahahiŋi sudatiti
今の ようにして 孫たちを みんなで かわいがって 育てて
ʔiʃfabiraja:.
いきましようね。

B : ʔja:mUN ʔja: kkwa sudatiti mo:kiriʔo:ja:.
 お前も お前の子を 育てて 儲けなさいよ。
 A : ʔiʔiN mo:ki jabi:gutu.
 いつも 儲けて いますので。

magihanu de:kuni
 おおきな 大根

ʔusume:ga de:kuninu sani maʔutan.

おじいさんが 大根の タネを まいた。

'hikattu ʔamahanu de:kuniŋkai narijo: mimiʔi magihanu de:kuniŋkai narijo:.'

「とても 甘い 大根に なれよ。とても 大きな 大根に なれよ。」

'wano:jai !'

「ほお」

ʔamahanu magihanu de:kuniga nato:tan.

甘い 甘い 大根が できていた。

ʔusume:ja de:kuni nuʔo:ndo:.

おじいさんは 大根を ぬいているよ。

'to:hai ! ʔuriʔa:uri ! ʔuriʔa:uri !'

「せーの、うんとこしょ！どっこいしょ！」

'ʔuriʔa:uri ! ʔuriʔa:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

ʔanʔinʔon, de:kune: nugirantaʔi:.

けれども、 大根は ぬけなかったよ。

ʔusume:ja pa:pa: judi ʔan.

おじいさんは おばあさんを 呼んで きた。

pa:pa:ga ʔusume: hippati

おばあさんが おじいさんを ひっぱって

'ʔuriʔa:uri ! ʔuriʔa:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

ʔanʔinʔon, de:kune: nugirantaʔi:.

けれども、 大根は ぬけなかったよ。

pa:pa:ja mmaga judi ʔan.

おばあさんは 孫を 呼んで きた。

nmagaga pa:pa: hippati pa:pa:ga ʔusume: hippati

孫が おばあさんを ひっぱって おばあさんが おじいさんを ひっぱって

ʔusume:ga de:kuni hippati

おじいさんが 大根を ひっぱって

'ʔuriʔa:uri ! ʔuriʔa:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

ʔançiʔin, de:kune: nugirantaçi:.

けれども、大根はぬけなかったよ。

mmaga: ʔinnu judi ʔan.

孫は犬を呼んできた。

ʔinnuga mmaga hippati mmagaga pa:pa: hippati

犬が孫をひっぱって孫がおばあさんをひっぱって

pa:pa:ga ʔusume: hippati ʔusume:ga de:kuni hippati

おばあさんがおじいさんをひっぱっておじいさんが大根をひっぱって

'ʔuriça:uri ! ʔuriça:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

na:da, de:kune: nugirantaçi:.

まだまだ、大根はぬけなかったよ。

ʔinno: maja: judi ʔan.

犬は猫を呼んできた。

maja:ga ʔinnu hippati ʔinnuga mmaga hippati

猫が犬をひっぱって犬が孫をひっぱって

mmagaga pa:pa: hippati pa:pa:ga ʔusume: hippati

孫がおばあさんをひっぱっておばあさんがおじいさんをひっぱって

ʔusume:ga de:kuni hippati

おじいさんが大根をひっぱって

'ʔuriça:uri ! ʔuriça:uri !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！」

ŋñaça:, de:kune: nugirantaçi:.

あーあ、大根はぬけなかったよ。

maja:ja ʔenʔu judi ʔan.

猫はねずみを呼んできた。

ʔenʔuga maja: hippati maja:ga ʔinnu hippati

ねずみが猫をひっぱって猫が犬をひっぱって

ʔinnuga mmaga hippati mmagaga pa:pa: hippati

犬が孫をひっぱって孫がおばあさんをひっぱって

pa:pa:ga ʔusume: hippati

おばあさんがおじいさんをひっぱって

ʔusume:ga de:kuni hippati

おじいさんが大根をひっぱって

'ʔuriça:uri ! ʔuriça:uri ! ʔariça: na: ʔike:n.'

「うんとこしょ！どっこいしょ！よし、もう一回。」

'ʔuriça:uri ! ʔuriça:uri ! ʔitaiça: !'

「うんとこしょ！どっこいしょ！やった！」

wano:ja:i, de:kuniga nugitaçi:.

わーい、大根がぬけたよ。

沖縄県奥武島方言

沖縄県奥武方言

－動詞・形容詞の活用を中心に－

中本 謙

0. はじめに

南城市奥武島は、沖縄本島南部、志堅原の沖合 150 メートルに位置する周囲 1.7 キロメートルの小さな島である。1936 年に架橋されてからは、車両の出入りも可能となり、陸続きに近い状態となっている。人口は、20 年ほど前は 1,000 人くらいであったが、ここ 2、3 年は 850 人前後である。

奥武方言は、離島であるということもあり、沖縄本島中南部方言の中でもやや独自性の強さがみられる。奥武方言の継承状況や主な言語的特徴については、中本謙 (2014) 等で報告してある。

前年度は、奥武方言の音韻、音声を拍表とともに示しうえで、格助詞、とりたての助詞について具体例とともに示した。

1. 動詞活用

1. 1 活用の分類

奥武方言の動詞の語幹を末尾に注目し分類すると次の 5 類〈表 1〉に分けられる。

〈表 1〉

	基本語幹 1	基本語幹 2	連用語幹	派生語幹	接続語幹
1 類	C	C	C	CV	C
2 類	CVC	CVC	CV	CVV	CVC
3 類	'uur	'uur(n)	'uu'	'uu	'uut
4 類	?ar	?ar	?a'	?a	?at
5 類	ku	ku	ci	cuu	c
6 類	h	s	si	su	s

1. 2 動詞活用体系

〈表 1〉のそれぞれに基づいて、代表例をもって語幹と語尾とに分けて表示すると〈表 2〉のようになる。音韻レベルで示し、φ 記号は、語尾がゼロを意味する。

1. 3 活用表

〈表 2〉を具体的に音声レベルで示すと〈表 3〉のようになる。

〈表2〉

分類	動詞	基本語幹1	志向形	未然形	基本語幹2	命令形1	命令形2	命令形3	条件形	禁止形	連用語幹	連用形1	派生語幹	終止形	連用形2	連体形	du 結び形	ga 結び形	準体形	接続語幹	接続形
1(a)	書く	kak	a	a	kak	i	ee	u	ee	u	kac	i	kacu	'N	'i	nu	ru	ra	φ	kac	i
1(b)	取る	tur	a	a	tur(n) ¹	i	ee	u	ee	φ	tu'	i	tu'i	'N	'i	nu	ru	ra	φ	tut	i
2	言う	?ir	a	a	?ir(n)	i	ee	u	ee	φ	?i	i	?ii	'N	'i	nu	ru	ra	φ	?ic	i
3	居る	'uur	a	a	'uur(n)	i	ee	u	ee	φ	'uu'	i	'uu	'N	'i	nu	ru	ra	φ	'uut	i
4	ある	?ar		a	?ar				ee		?a'	i	?a	'N	'i	nu	ru	ra		?at	i
5	来る	ku	ra	ra	ku	ri	ree	φ	ree	n	ci	i	cuu	'N	'i	nu	ru	ra	φ	c	i
6	する	h	a	a	s	i	ee	u	ee	φ	si	i	su	'N	'i	nu	ru	ra	φ	s	i
主な接尾形式			na (ね)	'N (ない)		'jo (よ)		wa (は)		na (な)		busa'N (たい)				体言			mi (ね)		kara (から)

¹ 禁止形においては r が発音化し n となることを表す。2類、3類も同様である。

〈表 3〉

1 類 a

動詞	志向形	未然形	命令形 1	命令形 2	命令形 3
書く	kaka	kakaN	kaki	kake:	kakuwa
働く	hataraka	hatarakaN	hataraki	hatarake:	hatarakuwa
行く	?ika	?ikaN	?iki	?ike:	?ikuwa
漕ぐ	kuga	kuaN	kugi	kuge	kuguwa
殺す	kuruha	kuruhaN	kurusi	kurusee	kurusuwa
立つ	taka	takaN	taki	takee	takuwa
見る	n:da	n:daN	n:di	n:de:	n:duwa
眠る	ninda	nindaN	nindi	ninde:	ninduwa
括る	kunda	kundaN	kundi	kunde:	kunduwa
死ぬ	ʃina	ʃinaN	ʃini	ʃine:	ʃinuwa
飛ぶ	tuba	tubaN	tubi	tube:	tubuwa
読む	juma	jumaN	jumi	jume:	jumuwa
包む	tʃitʃima	tʃitʃimaN	tʃitʃimi	tʃitʃime:	tʃitʃimuwa
食う	kama	kamaN	kami	kame:	kamuwa
動詞	条件形	禁止形	連用形 1	終止形	連用形 2
書く	kake:	kakuna	katʃi	katsuN	katʃui
働く	hatarake:	hatarakuna	hataratʃi	hataratsuN	hataratʃui
行く	?ike:	?ikuna	?itʃi	?itsuN	?itʃui
漕ぐ	kuge:	kuguna	kudzʃi	kuguN	kudzʃui
殺す	kuruse:	kurusuna	kurufʃi	kurusuN	kurusui
立つ	take:	takuna	tatʃi	tatsuN	tatʃui
見る	n:de:	n:duna	n:di	n:dzuN	mi:
眠る	ninde:	ninduna	nindi	nindzuN	nindzui
括る	kunde:	kunduna	kundi	kundzuN	kundzui
死ぬ	ʃine:	ʃinuna	ʃini	ʃinuN	ʃinui
飛ぶ	tube:	tubuna	tubi	tubuN	tubui

読む	jume:	jumuna	jumi	jumuN	jumui
包む	tʃitʃime:	tʃitʃimuna	tʃitʃimi	tʃitʃimuN	tʃitʃimui
食う	kame:	kamuna	kami	kamuN	kamui
動詞	連体形	du 結び形	ga 結び形	準体形	接続形
書く	katʃunu	katʃuru	katʃura	katʃu	katʃi
働く	hataratʃunu	hataratʃuru	hataratʃura	hataratʃu	hataratʃi
行く	?itʃunu	?itʃuru	?itʃura	?itʃu	?itʃi
漕ぐ	katʃunu	kudzuru	kudzura	kudzu	kudzi
殺す	hatarakunu	kurusuru	kurusura	kurusu	kurutʃi
立つ	tatʃunu	tatʃuru	tatʃura	tatʃu	tattʃi
見る	n:dʒunu	n:dʒuru	n:dʒura	n:dʒu	n:tʃi
眠る	nindʒunu	nindʒuru	nindʒura	nindʒu	ninti
括る	kundʒunu	kundʒuru	kundʒura	kundʒu	kunti
死ぬ	ʃinunu	ʃinuru	ʃinura	ʃinu	ʃidzi
飛ぶ	tubunu	tuburu	tubura	tubu	tudi
読む	jumunu	jumuru	jumura	jumu	judi
包む	tʃitʃimunu	tʃitʃimuru	tʃitʃimura	tʃitʃimu	tʃitʃidi
食う	kamunu	kamuru	kamura	kamu	kadi

1 類 b

動詞	志向形	未然形	命令形 1	命令形 2	命令形 3
取る	tura	turaN	turi	ture:	turuwa
刈る	kara	karaN	kari	kare:	karuwa
買う	ko:ra	ko:raN	ko:ri	ko:re:	ko:ruwa
思う	?umura	?uma:N	?umuri	?umure:	?umuruwa
笑う	wara:	wara:N	warari	warare:	wararuwa
洗う	?ara:	?ara:N	?arari	?arare:	?araruwa
動詞	条件形	禁止形	連用形 1	終止形	連用形 2
取る	ture:	tunna	tui	tuiN	tui

刈る	kare:	kanna	kai	kaiN	kai
買う	ko:re:	ko:nna	ko:i	ko:iN	ko:i
思う	?umure:	?umunna	?umui	?umuiN	?umui
笑う	warare:	waranna	warai	waraiN	warai
洗う	?arare:	?aranna	?arai	?araiN	?arai
動詞	連体形	du 結び形	ga 結び形	準体形	接続形
取る	tuinu	tuiru	taira	tui	tuti
刈る	kainu	kairu	kaira	kai	kati
買う	ko:inu	ko:iru	ko:ira	ko:i	ko:ti
思う	?umuinu	?umuiru	?umaira	?umui	?umuti
笑う	warainu	warairu	waraira	warai	warati
洗う	?arainu	?arairu	?araira	?arai	?arati

2 類

動詞	志向形	未然形	命令形 1	命令形 2	命令形 3
言う	?ira	?ira	?iri	?ire:	?iruwa
切る	tʃira	tʃira	tʃiri	tʃire:	tʃiruwa
着る	tʃira	tʃira	tʃiri	tʃire:	tʃiruwa
煮る	ni:ra	ni:ra	ni:ri	ni:re:	ni:ruwa
坐る	ji:ra	ji:ra	ji:ri	ji:re:	ji:ruwa
蹴る	kira	kira	kiri	kire:	kiruwa
起きる	?ukira	?ukira	?ukiri	?ukire:	?ukiruwa
落ちる	?utira	?utira	?utiri	?utire:	?utiruwa
受ける	?ukira	?ukira	?ukiri	?ukire:	?ukiruwa
上げる	?agira	?agira	?agiri	?agire:	?agiruwa
動詞	条件形	禁止形	連用形 1	終止形	連用形 2
言う	?ire:	?inna	?i:	?i:N	?i:
切る	tʃire:	tʃinna	tʃi:	tʃi:N	tʃi:
着る	tʃire:	tʃinna	tʃi:	tʃi:N	tʃi:

煮る	ni:re:	ninna	ni:	ni:N	ni:
坐る	ji:re:	ji:nna	ji:	ji:N	ji:
蹴る	kire:	kinna	ki:	ki:N	ki:
起きる	?ukire:	?ukinna	?uki:	?uki:N	?uki:
落ちる	?utire:	?utinna	?uti:	?uti:N	?uti:
受ける	?ukire:	?ukinna	?uki:	?uki:N	?uki:
上げる	?agire:	?aginna	?agi:	?agi:N	?agi:
動詞	連体形	du 結び形	ga 結び形	準体形	接続形
言う	?i:nu	?i:ru	?i:ra	?i:	?itʃi
切る	tʃi:nu	tʃi:ru	tʃi:ra	tʃi:	tʃittʃi
着る	tʃi:nu	tʃi:ru	tʃi:ra	tʃi:	tʃitʃi
煮る	ni:nu	ni:ru	ni:ra	ni:	ni:tʃi
坐る	ji:nu	ji:ru	ji:ra	ji:	ji:tʃi
蹴る	ki:nu	ki:ru	ki:ra	ki:	kittʃi
起きる	?uki:nu	?uki:ru	?uki:ra	?uki:	?ukiti
落ちる	?uti:nu	?uti:ru	?uti:ra	?uti:	?utʃiti
受ける	?uki:nu	?uki:ru	?uki:ra	?uki:	?ukiti
上げる	?agi:nu	?agi:ru	?agi:ra	?agi:	?agiti

3類・4類・5類・6類

動詞	志向形	未然形	命令形 1	命令形 2	命令形 3
居る	wu:ra	wu:raN	wu:ri	wu:re:	wu:ruwa
ある		?araN			
来る ²	kura	kuraN	kuri	kure:	kuwa
する	ha	haN	ʃi:	se:	suwa
動詞	条件形	禁止形	連用形 1	終止形	連用形 2
居る	wu:re:	wu:nna	wu:i	wu:N	wu:i

² 「来る」の活用において、[ts]と[tʃ]があらわれるが、音声的にゆるる傾向にある。

ある	ʔare:		ʔai	ʔaN	ʔai
来る	kure:	tʃu:nna	tʃi:	tsu:N	tʃu:i
する	sure:	sunə	ʃi:	suN	sui
動詞	連体形	du 結び形	ga 結び形	準体形	接続形
居る	wu:nu	wu:ru	wu:ra	wu:	wu:ti
ある	ʔanu	ʔaru	ʔara	ʔa	ʔati
来る	tʃu:nu	tʃu:ru	tʃu:ra	tʃu:	tʃi
する	sunu	suru	sura	su	ʃi

1. 4 活用体系の特徴

(1) 活用体系は5つに分けられ、1類、2類は規則活用、3類、4類、5類、6類は不規則活用に分類される。

(2) すべて四段的活用である。

(3) 1類bの禁止形は、turuna→tunna（取る）のように ru の撥音化がみられる。4類の「居る」も同様に wu:runa→wu:nna によるものである。

1. 5 活用の用法

以下、奥武方言の活用の用法について示す。

(1) 志向形

志向形は次のように用いられる。

①そのままの形で用いられる

madʒo:n dʒi: kaka（一緒に字を書こう）

madʒo:n ʃigutu ha（一緒に仕事しよう）。

②na（よ）を後続させる。

madʒo:n ʔirana（一緒に言おうよ）

madʒo:n turana（一緒に取ろうよ）

③ja:（ね）を後続させる。

kumaŋkai madʒo:n wu:rja:（ここに一緒に居ようね）。

(2) 未然形

未然形は次のように用いられる。

N (ない)、suN (す)、riN (れる) 等を後続させる。

wanne: ji:ja kakaN (私は絵は書かない)

tʃukutuban ʔiranha (一言も言わない)。

kumane: wu:raN (ここには居ない)。

tʃu: ja kurande: (今日は来ないよ)

wanne: hando: (私はしないよ)

「笑う」「洗う」「思う」の語幹はそれぞれ warar、ʔarar、ʔumur であるが、次のようになる。

wara:N (笑わない) ʔara:N (洗わない) ʔuma:N (思わない)

(3) 命令形 1

命令形 1 は次のように用いられる。jo (よ) を後続させる。

he:ku kakijo: (早く書けよ)。

kannadʒi ʔirijo: (必ず言えよ)。

kumaŋkai wu:rijo: (ここに居ろよ)。

ʔatʃaŋ kurijo: (明日も来いよ)。

ʔatʃaŋ ʃijo: (明日もしろよ)。

(4) 命令形 2

命令形 2 は次のように用いられる。

dʒi: kake: (字を書け)

ʔja:ga ʔire: (君が言え)

Kumaŋkai wu:re: (ここに居ろ)。

ʔatʃaŋ kure: (明日も来い)。

ʔatʃa: se: (明日はしろ)

(5) 命令形 3

命令形 3 は次のようである。話者の内省では、命令形 3 が最も強い言い方で、続いて命令形 2、命令形 1 の順番となる。

ʔja:ga kakuwa (君が書け)

ʔja:ga ʔiruwa (君が言え)

kumaŋkai wu:ruwa (ここに居ろ)

ʔatʃaŋ kuwa (明日も来い)。

ʔatʃa suwa (明日しろ)。

(6) 条件形

条件形では、次のように用いられる。

- ?ja:ga kake: maʃijate:nte (君が書けば良かったのに)
 ?ja:ga ?i:re: maʃijate:nte (君が言えば良かったのに)
 kumaŋkai wu:re: maʃijate:nte (ここに居れば良かったのに)
 ?ja:ŋ kure: maʃijate:nte (君も来れば良かったのに)
 ?ja:ga sure: maʃijate:nte (君がすれば良かったのに)

(7) 禁止形

禁止形は次のようになる。na (な) を後続させ、禁止の意を表す。

- ?umaŋkai dʒi: kakuna (ここに字を書くな)
 janakuto: ?inna (嫌なことは言うな)
 ?umaŋkai wu:nna (ここに居るな)
 tʃu:ja kunna (今日は来るな)
 tʃu:ja suna (今日はするな)

(8) 連用形 1

連用形 1 は次のような用法が認められる。

busaN (たい)、jassaN (やすい)、guruhaN (にくい)、bike:N (ばかり) などを後続させる。

- wannim madʒo:n ji: katʃibusaN (私も一緒に絵を書きたい)
 wannin ?i:busaN (私も言いたい)
 madʒo:n wu:ibusaN (一緒に居たい)
 kumaŋkai tʃi:busaN (ここに来たい)
 wannin ʃi:busaN (私もしたい)
 ?ure: jumi jassaN (これは読みやすい)
 ?ure: tʃi:guruhaN (これは切りにくい)
 ?are: ?araibike:n so:N (あれは洗いばかりしている)

また、連用形に abi:N (です、ます/侍る) が融合して、聞き手に対する敬意をあらわす。

katʃi+abi:N→katʃabi:N (書きます)

(9) 終止形

終止形では次のような用例が認められる。

- dʒi: katsuN (字を書く)
 ?iju tuinde: (魚を取るよ)
 madʒo:n wu:N (一緒に居る)
 nama tʃu:N (今来る)

ʔatʃa suN (明日する)

(10) 連用形2

連用形2は次のように用いられる。

ʔanu warabe: ji:ŋ katʃui dʒi:ŋ katsuN (あの子どもは、絵も書くし字も書く)

ʔanu warabe: ʔitʃan tuii ʔijun tuinde: (あの子どもは鳥賊もとるし魚取るよ)

ʔunu hanaʃe:ja ʔariŋkai ʔi:i kuriŋkai ʔi:nde: (この話は、あれにも言うし、これにもこれに言うよ)

warabe: ʔumanin wu:i ʔamanin wuN (子どもはここにも居るしあそこにも居る)

warabe: ʔumaŋkain tsu:i ʔamaŋkain ʔitsuN (子どもはここにも来るしあそこにも行くよ)

ʔare: ʃigutun sui ʔagatʃin sui ji:tʃʉde:] (あれは仕事もするし働きもするし良い人よ)

(11) 連体形

連体形は、次のように用いられる。

katʃunu tʃʉ (書く人)

ʔi:nu kutuba: nu:n ne:N (言う言葉がなにもない)

wa:ga wu:nu tukuro: ne:N (私が居るところはない)

ʔamakara tʃu:nu tʃʉ: ta: jaga (あそこから来る人は誰か)

ʃigutu sunu tʃʉ: ʔaraN (仕事する人ではない)

(12) du 結び形

du 結び形は次のように用いられる。du のかかる形式は -ru で結ぶ。

dʒi:du katʃuru (字ぞ書く)

ji:kutudu ʔi:ru janakuto: ʔinna (良いことぞ言うのだ嫌なことは言うな)

tʃi:tʃidu tuiru tʃatʃe: turanha (一つぞ取るのだ二つは取らないよ)

ʔamaŋkaija wu:ran ʔamaŋkaidu wu:ru (あそこには居ないここにぞ居るのだ)

ʔatʃadu ke:ti tʃu:ru (明日ぞ帰ってくるのだ)。

ʔunu ʃigoto: ja:gadu suru (この仕事は君がぞするのだ)。

(13) ga 結び形

ga (か) の結びに用いられる。

ʔure: ta:gaga katʃura wakaraN (これは誰が書くか分からない)

ʔanu tʃʉ: kutʃinu wassanu nu:ndiga ʔi:ra wakaraN (あの人は口が悪いので何を言うかわからない)

watta: ja:ŋkai ta:gaga wu:ra wakaraN (私たちの家に誰が居るのか分からない)

ta:gaga tʃu:ra wakaraN (誰が来るのか分からない)

ʔanu warabe: nu:ga sura ʔamaŋkai ʔnzo:taN (あの子供は何をするのかあそこに行っていた)

(14) 準体形

準体形は、以下のようになる。

wannim madzo:ŋ katʃumi (私も一緒に書こうか)

wanga ʔi:mi (私が言うか)

ʔunu ʔitʃa: ʔamiʃi tuimi (この鳥賊は網で取るのか)

ʔja:ga ʔumaŋkai wu:mi (君がここに居るか)

ʔja:n ʔatʃa tʃu:mi (君も明日来るか)

ʔatʃa sumi (明日するか)

以上の他に派生語幹をもとにして、以下の形式も形成される。

katʃutaN (書いていた。*過去における動作の進行を表す)

katʃute:N (書いていただろう。*過去における動作の確実な進行を推量する)

(15) 接続形

接続形は以下のようになる。kara を後続させる。

katʃikara ʔitsuha (書いてから行くさ)。

ʔitʃikara tʃimujamunte (言ってから後悔するよ)

kumaŋkai wu:tikara hanaʃi sumi (ここに居てから話しするか)

ja:ŋkai tʃikkara hanafe: sumi (家に来てから話しはするか)

benkjo: ʃikkara ʔaʃibiga ikuwa (勉強してから遊びに行け)

接続形に wuN (居る) ʔaN (ある) が複合して次のような派生形式をつくる。

katʃo:N (書いている。継続)

katʃaN (書いた。過去)

katʃe:N (書いてある。確証過去 *過去に確かにある動作が行われたことを表す)

2. 形容詞活用

2. 1 活用の分類

形容詞を語幹の末尾に着目し分類すると次の2類〈表1〉に分けられる。

〈表1〉

		基本語幹	派生語幹	接続語幹
1	a	CV	CVCV	CVCVC
	b	CVV	CVVCV	CVVCVC
	c	(Q) CV	QCV	QCVC
2		CV	CV	CVC

2. 2 形容詞活用体系

奥武方言の形容詞の活用は1類がク活用に、2類がシク活用にほぼ対応する。〈表1〉の2類について、代表例をもって語幹と語尾に分けて示すと〈表2〉のようになる。音韻レベルで示し、φ記号はゼロを意味する。

2. 3 活用表

〈表1〉の分類に基づいて、奥武方言の形容詞活用を具体的に音声レベルで示すと〈表3〉のようになる。

〈表2〉

分類	形容詞	基本語幹	連用形1	派生語幹	未然形	条件形	連用形2	終止形	連体形	理由形	du 結び形	ga 結び形	準体形	接続語幹	接続形
1 a	高い	taka	ku	takaha	raa	ree	'i	'N	nu	nu	ru	ra	φ	kakhat	i
1 b	美味しい	maa	ku	maaha	raa	ree	'i	'N	nu	nu	ru	ra	φ	maahat	i
1 c	軽い	gaQsa	ku	gaQsa	raa	ree	'i	'N	nu	nu	ru	ra	φ	gaQsat	i
2	恐ろしい	?utrusi	ku	?uturuha	raa	ree	'i	'N	nu	nu	ru	ra	φ	?uturuhat	i
主な接尾形式			na'i'N (なる)						体言				mi (か)		'N (も)

〈表3〉

1類 a

形容詞	連用形 1	未然形	条件形	連用形 2	終止形
高い	takaku	takahara:	takahare:	takahai	takahaN
低い	çikuku	çikuhara:	çikuhare:	çikuhai	çikuhaN
涼しい	ʃidaku	ʃidahara:	ʃidahare:	ʃidahai	ʃidahaN
大きい	magiku	magihara:	magihare:	magihai	magihaN
重い	?mbuku	?mbuhara:	?mbuhare:	?mbuhai	?mbuhaN
苦しい	kuʃiku	kuʃihara:	kuʃihare:	kuʃihai	kuʃihaN
かわいそう	tʃimuguraku	tʃimugurahara:	tʃimugurahare:	tʃimugurahai	tʃimugurahaN
きれい	tsuraku	tsurahara:	tsurahare:	tsurahai	tsurahaN
形容詞	連体形	理由形	du 結び形	ga 結び形	準体形
高い	takahanu	takahanu	takaharu	takahara	takaha
低い	çikuhanu	çikuhanu	çikuharu	çikuhara	çikuha
涼しい	ʃidahanu	ʃidahanu	ʃidaharu	ʃidahara	ʃidaha
大きい	magihanu	magihanu	magiharu	magihara	magiha
重い	?mbuhanu	?mbuhanu	?mbuharu	?mbuhara	?mbuha
苦しい	kuʃihanu	kuʃihanu	kuʃiharu	kuʃihara	kuʃiha
かわいそう	tʃimugurahanu	tʃimugurahanu	tʃimuguraharu	tʃimugurahara	tʃimuguraha
きれい	tsurahanu	tsurahanu	tsuraharu	tsurahara	tsuraha
形容詞	接続形				
高い	takahati				
低い	çikuhati				
涼しい	ʃidahati				
大きい	magihati				
重い	?mbuhati				
苦しい	kuʃihati				
かわいそう	tʃimugurahati				
きれい	tsurahati				

1 類 b

形容詞	連用形 1	未然形	条件形	連用形 2	終止形
痒い	ji:go:ku	ji:go:hara:	ji:go:hare:	ji:go:hai	ji:go:haN
美味しい	ma:ku	ma:hara:	ma:hare:	ma:hai	ma:haN
遠い	tu:ku	tu:hara:	tu:hare:	tu:hai	tu:haN
形容詞	連体形	理由形	du 結び形	ga 結び形	準体形
痒い	ji:go:hanu	ji:go:hanu	ji:go:haru	ji:go:hara	ji:go:ha
美味しい	ma:hanu	ma:hanu	ma:haru	ma:hara	ma:ha
遠い	tu:hanu	tu:hanu	tu:hare	tu:hara	tu:ha
形容詞	接続形				
痒い	ji:go:hati				
美味しい	ma:hati				
遠い	tu:hati				

1 類 c

形容詞	連用形 1	未然形	条件形	連用形 2	終止形
軽い	gassaku	gassara:	gassara:	gassai	gassaN
悪い	waruku	wassara:	wassara:	wassai	wassaN
形容詞	連体形	理由形	du 結び形	ga 結び形	準体形
軽い	gassanu	gassanu	gassaru	gassara	gassa
悪い	wassanu	wassanu	wassaru	wassara	wassa
形容詞	接続形				
軽い	gassati				
悪い	wassati				

2 類

形容詞	連用形 1	未然形	条件形	連用形 2	終止形
恐ろしい	?uturu?jiku	?uturuha	?uturuhare:	?uturuhai	?uturuhaN

忙しい	?itʃunaʃiku	?itʃunaha	?itʃunahare:	?itʃunahai	?itʃunahaN
珍しい	midʒiraʃiku	midʒiraha	midʒirahare:	midʒirahai	midʒirahaN
難しい	mutʃikaʃiku	mutʃikaha	mutʃikahare:	mutʃikahai	mutʃikahaN
恥ずかしい	hadʒikaʃiku	hadʒikaha	hadʒikahare:	hadʒikahai	hadʒikahaN
形容詞	連体形	理由形	du 結び形	ga 結び形	準体形
恐ろしい	?uturuhanu	?uturuhanu	?uturuharu	?uturuhara	?uturuha
忙しい	?itʃunahanu	?itʃunahanu	?itʃunaharu	?itʃunahara	?itʃunaha
珍しい	midʒirahanu	midʒirahanu	midʒiraharu	midʒirahara	midʒiraha
難しい	mutʃikahanu	mutʃikahanu	mutʃikaharu	mutʃikahara	mutʃikaha
恥ずかしい	hadʒikahanu	hadʒikahanu	hadʒikaharu	hadʒikahara	hadʒikaha
形容詞	接続形				
恐ろしい	?uturuhati				
忙しい	?itʃunahati				
珍しい	midʒirahati				
難しい	mutʃikahati				
恥ずかしい	hadʒikahati				

奥武方言の形容詞は、サアリ活用（基本語幹＋サ＋有り）に属する。は、1類 a、1類 b、2類の語幹末尾は、/s/→/h/の変化により h 音となっている。1類 c は、Q（促音）があるため /s/ 音が保持されていると考えられる。

2. 4 活用形の用法

各活用形の主な用例を示す。

(1) 連用形 1

de:ja takaku nato:nja: (値段は高くなっているね)

dandan ?uturuʃiku naiN (次第に恐ろしくなる)

(2) 未然形

takahara: ko:raN (高いなら買わない)

ʔuturuhara: ʔikuna (恐ろしいなら行くな)

(3) 条件形

takahare: ko:raN (高いなら買わない)

ʔuturuhare: ʔikuna (恐ろしいなら行くな)

(4) 連用形2

ʔanu ʔijo: takahaigisa:N (あの魚は高いらしい)

ʔamanu ja:ja ʔuturuhaigihā:nde: (あの家は恐ろしいらしいよ)

(5) 終止形

①助詞が後接しない。

ʔunu ʔijo: takahaN (この魚は高い)

②助詞が後接する。

ʔuma: ʔuturuhande: (ここは恐ろしいよ)

(6) 連体形

takahanu ʔiju (高い魚)。

ʔanu jikiga: ʔuturuhanu jikiga (あの男は恐ろしい男)

(7) 理由形

takahanu ko:raN (高いので買わない)

wanne: ʔuturuhanu ʔikando: (私は恐ろしいので行かないよ)

(8) du 結び形

du のかかる形式は -ru で結ぶ。

ʔarijaka: urigadu takaharu (あれよりこれが高い)

tʃinu:jaka: tʃu:gadu ʔatsaharu (昨日より今日が暑い)

namanu ju:ja mazimunjaka: tʃ²unudu ʔuturuharu(今の世は魔物より人が恐ろしい)

(9) ga 結び形

ga のかかる形式は -ra で結ぶ。

dʒurigaqa takahara kurabiti n:dʒugaja: (どれが高いのか比べてみるかな)

nu:nuga ?uturuhara ?anu k²wa: natʃo:nde: (何が恐ろしいのかあの子は泣いているよ)

(10) 準体形

準体形は次のように用いられる。

?unu ?ijun takahami (この魚も高いか)

?anu tʃ²o: ?uturuhami (あの人は恐ろしいか)

(11) 接続形

takahatiŋ ko:iN (高くても買う)

wanne: ?uturahatin ?itsundo: (私は恐ろしくても行くよ)

3. 奥武方言版「おおきなかぶ」

おおきな かぶ
マギハヌ カブ

おじいさんが、かぶの たねを まきました。
ウスメーガ カブヌ サニ マチャビタン。³

「あまい あまい かぶに なれ。 おおきな おおきな かぶに なれ。」
「イッペー アマハヌ カブンカイ ナリヨー. イッペー アマハヌ カブンカイ ナリ
ヨー。」

あまい げんきの よい、とてつもなく おおきい かぶが できました。
アマハヌ カブヌ イッペー マギクナイビタン.

おじいさんは、かぶを ぬこうと しました。「うんとこしょ。どっこいしょ。」
ウスメーヤ カブ ヌジュンチ ソーイビータン. 「イヤサッサー, ヒヤミカチ。」

ところが、かぶは ぬけません。
アンシガ, カブー ヌギヤビランハ.

おじいさんは、おばあさんを よんで きました。
ウスメーヤ ハーメー ユディチャービタン.

おばあさんが おじいさんを ひっぱって、おじいさんが かぶを ひっぱって—。
ハーメーガ ウスメー ヒッパティ, ウスメーガ カブ ヒッパティ—.

「うんとこしょ。どっこいしょ。」
「イヤサッサー, ヒヤミカチ。」

それでも、かぶは ぬけません。
アンシン, カブー ヌギヤビランハ.

³ [ʔusume:] (おじいさん) のように語頭母音の前では声門閉鎖音[ʔ]が入るが、ここでは、省略して表記する。また半母音、撥音の前にあらわれる[ʔ]は、ツウエンチュ[ʔwentʃu] ツンマガ[ʔmmaga]のような「ツ」であらわす。

おばあさんは、まごを よんで きました。

ウスメーヤ ンマガ ユディチャービタン.

まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが おじいさんを ひっぱって、おじいさんが かぶを ひっぱって—。

ツンマガガ ハーメー ヒッパティ, ハーメーガ ウスメー ヒッパティ, ウスメーガ カブ ヒッパティ—。

「うんとこしよ。どっこいしよ。」

「イヤサッサー, ヒヤミカチ。」

まだまだ、かぶは ぬけません。

ナマジョーイ カブー ヌギヤビランハ.

まごは、いぬを よんで きました。

ツンマガー イン ユディチャービタン.

いぬが まごを ひっぱって、まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが おじいさんを ひっぱって、おじいさんが かぶを ひっぱって—。

インヌ ツンマガ ヒッパティ, ツンマガガ ハーメー ヒッパティ, ハーメーガ ウスメー ヒッパティ, ウスメーガ カブ ヒッパティ—。

「うんとこしよ。どっこいしよ。」

「イヤサッサー, ヒヤミカチ。」

まだまだ、まだまだ、ぬけません。

ナマンジョーイ ヌギヤビランハ.

いぬは、ねこを よんで きました。

イノー マヤー ユディチャービタン.

ねこが いぬを ひっぱって、いぬが まごを ひっぱって、まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが おじいさんを ひっぱって、おじいさんが かぶを ひっぱって—。

マヤーヌ イン ヒッパティ, インヌ ツンマガ ヒッパティ, ツンマガガ ハーメー ヒッパティ, ハーメーガ ウスメー ヒッパティ, ウスメーガ カブ ヒッパティ—。

「うんとこしよ。どっこいしよ。」

「イヤサッサー、ヒヤミカチ。」

それでも、かぶは ぬけません。

アンシン、カブー ヌギヤビランハ。

ねこは、ねずみを よんで きました。

マヤーヤ ツウエンチュ ユディチャービタン。

ねずみが ねこを ひっぱって、ねこが いぬを ひっぱって、いぬが まごを ひっぱって、まごが おばあさんを ひっぱって、おばあさんが おじいさんを ひっぱって、おじいさんが かぶを ひっぱって――。

ツウエンチュヌ マヤー ヒツパティ、マヤーヌ イン ヒツパティ、インヌ ンマガヒツパティ、ツンマガガ ハーメー ヒツパティ、ハーメーガ ウスメー ヒツパティ、ウスメーガ カブ ヒツパティ……。

「うんとこしよ。どっこいしよ。」

「イヤサッサー、ヒヤミカチ。」

やっと、かぶは ぬけました。

チャンガナ、カボー ヌギヤビタン。

参考文献

宇誌編集員会 (2011) 『奥武島誌』 奥武区自治会

内間直仁 (1984) 『琉球方言文法の方法』 笠間書院

平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』 明治書院

中本 謙 (2014) 「沖縄県奥武方言」『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 (八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書』 琉球大学国際沖縄研究所

中本 謙 (2015) 「沖縄県南城市奥武方言」『文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究 (八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書』 国立国語研究所

中本 謙 (2016) 「沖縄県奥武方言」『文化庁委託事業報告書 平成 27 年度危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究』 琉球大学国際沖縄研究所

中本正智 (1958) 「奥武方言の動詞の活用」『琉球方言』 創刊号

沖縄県久高島方言

沖縄県久高島方言

新永悠人

1. 構成

本報告では、2節で音素と音節構造を説明した後に、3節で動詞形態論、4節で形容詞形態論、5節で「おおきなかぶ」の方言訳、6節で方言会話の例文を示す。3節以降のデータを提供して下さった話者情報を以下の表にまとめた。調査は2016年の11月に行った。

表 1. 各節の話者情報

節番号	氏名 (敬称略)	性別	誕生年	島外での生活期間・場所
3節、4節	内間美代	女性	1929年	19~20歳ごろ・沖縄本島
5節、6節	内間豊	男性	1948年	16~50歳ごろ・那覇など

2. 音素と音節構造

久高島方言の母音音素は表1に示した5種類である。/e/と/o/を持つ語彙は少なく、そのほとんどが長母音として現れる。

表 2. 母音目録

	Front	Central	Back
High	i		u
Mid	e		o
Low		a	

子音音素は表2に示した13種類と、原音素の/N/である。カギ括弧内は異音を示す(波線は自由交替、コンマで区切られたものは条件異音を示す)。

表 3. 子音目録

	両唇	歯茎・硬口蓋	軟口蓋・声門
阻害 有声	b	d [d~ɾ]	g
無声 無気	p [p~pʰ]	t [t~tʰ]	k [k~kʰ]
有気	p ^h [p ^h ~ϕ]	t ^h [t ^h ~s]	h [h, ç, ϕ]
鼻音	m	n	
接近	w	j	

以下に、子音に関する注意点を4つ述べる。

まず1点目として、任意の子音音素 (/C/) と /j/ の音素連続は基本的に /C/ の口蓋化 (例: *mjaa* [m^hia:] 「猫」) として実現するが、歯茎阻害音 (/d/, /t/, /tʰ/) の場合だけ以下のようなになる。波線 ([~]) は自由交替を示す。

(1) 「歯茎阻害音 + /j/」の音声的实现

- /dj/ [d̄z~d̄z] (語頭)、[z~z] (語中)
- /tj/ [t̄e]
- /tʰj/ [e~s]

/dj/ と /tʰj/ は多くの場合、歯茎硬口蓋摩擦音 ([d̄z], [e]) として実現する。但し、/i/ 以外の母音の前では、時に歯茎音 ([z], [s]) として実現する場合もある (例: /gad^hjaa/ [gaza:~gaza:] 「蚊」、/tʰja/ [ɕa~sa] 「下」)。現時点では印象に過ぎないが、女性の方が歯茎硬口蓋摩擦音を用いる傾向があるようだ。ただし、揺れの見られない単語もある (例: /d̄jaa/ [d̄za:] 「部屋」、/Ntʰjaa/ [nsa:] 「たち (複数標識)」、/tʰjaama/ [sa:ma] (INST))。 (1) に示した異音を /Cj/ として分析する理由は、/d/, /t/, /tʰ/ で終わる動詞語根 (例: /kuNd-/ 「結ぶ」、/ut-/ 「打つ」、/pʰutʰ-/ 「干す」) に /j/ で始まる動詞接辞 (例: 丁寧接辞の -jabi) が後接する場合に、上記の音として実現するためである (例: /kuNd^h-jabi-i-N/ [kuzabi:N] 「結びます」、/ut^h-jabi-i-N/ [utɕabi:N] 「打ちます」、/pʰutʰ^h-jabi-i-N/ [pʰuɕabi:N~pʰuɕabi:N] 「干します」; -i は非過去接辞、-N は終止接辞)。

なお、歯茎阻害音では /Ci/ と /Cji/ に発音上の違いがあるが (例: /ti/ [ti] vs. /tji/ [t̄ei])、それ以外の子音においては /Ci/ と /Cji/ に発音上の違いはない (例: /ki/ [ki] = /kji/ [ki]; 厳密には直前の子音は口蓋化 [j] しているが、本稿では [Ci] は [Ci] として記述する)。そこで、(分割不可能な) 形態素の中の [Ci] は、音節構造が単純な方の /Ci/ として解釈する (例: /kii/ [ki:] 「木」)。

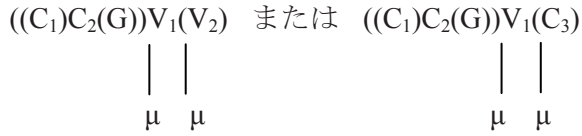
2点目として、無声阻害音には無気と有気の対立がある。両唇音と歯茎音では、異音が破裂または破擦音として実現する場合は、無気音に比べて有気音の VOT が顕著に長い。また、摩擦音の異音を持つのは有気音のみである。静的パラトグラフィーの結果、1名の話者 (1947 年生まれ、男性) において、/t/ と /tʰ/ の対立が能動的調音器官における舌端 (blade) と舌尖 (tip) の対立であったため (受動的調音器官はともに歯茎)、本稿では /tʰ/ の異音を [t̄s] として示した。

3点目として、語中の無声無気阻害音 (の一部) は喉頭化する場合がある (例: /amatʰatakutu/ [amatʰat̄akutu] 「甘かったから」)。

4点目として、語中の無声有気阻害音は摩擦音として実現することが多い (例: /meepʰukama/ [me:ɸukama] 「前外間 (屋号)」、/kutʰa/ [kuɕa] 「草」)。

音節構造とモーラ (μ) は下記の通りである。C₁ と G はともに C₂ を必ず伴う。中本 (1985) のデータより、最終モーラのみが H(igh pitch) を担うことから、本稿ではモー

ラという単位を採用する (V₂およびC₃には1モーラの長さがあるとみなす)。



【注記】

C₁ : 原音素/N/のみが入る

C₂ : あらゆる子音が入る

G : /w/または/j/のみが入る

V₁ : あらゆる母音が入る

V₂ : V₁と同母音か、/i/のみが入る

C₃ : 非語末では/N/、/p/、/t/、/tʰ/、/k/のいずれか。語末では/N/のみ (ただし、例外的に/am/ [am] 「お母さん」【古】だけは語末が/m/ [m]で終わる)。

以下では、原音素 /N/ に対しては、便宜上 ‘n’ を用いて表記する (表記に関して、2016年度の報告書との違いはこの点のみである)。

3. 動詞形態論

本節では久高方言の動詞形態論をまとめる。3.1節で動詞語幹の一覧表と例文、3.2節で動詞語幹に後接する接辞の一覧表と例文を示す。

3.1. 動詞語幹

動詞語幹は規則動詞語幹と不規則動詞語幹に分かれる。前者には(形態)音韻規則が規則的に適用できるが、後者にはできない(久高島方言の動詞の形態音韻規則については、新永2016を参照)。規則動詞語幹末に現れる音素の全種類は以下の15種類である。語幹末が/i/の場合のみ、語幹が2モーラ以上のものと、1モーラのものとのを区別した。

(1) 規則動詞語幹末に現れる音素の全種類

語幹末の音素	例	
i (語幹が2モーラ以上)	uki	「起きる」
i (語幹が1モーラ)	ki	「切る」
u	tʰu	「取る」
e	hee	「変える」
o	hoo	「買う」
a	wada [wara]	「笑う」
m	jum	「読む」

b	nadab [narab]	「並ぶ」
t	ut	「打つ」
t ^h	p ^h ut ^h	「干す」
d	hand	「被る」
k	hak	「書く」
ik	tjik	「聞く」
g	t ^h ug	「研ぐ」
ig	uig	「泳ぐ」

次に、現時点で見つかっている不規則動詞語幹は以下の 13 種類である。

(2) 不規則動詞語幹

gi	「座る」
t ^h	「する」
ik/n	「行く」
hu/t ^h	「来る」
gu	「いる」
a	「ある」
a/ja/da	「～である」
t ^h jimi	「させる」
ime/imo	「いらっしゃる」
ntjagi	「召し上がる」
ke/ka	「食べる」
kund	「結ぶ」
hi	「死ぬ」

上記の語幹に以下の 6 種類の接辞を付けた形を表にして示す（他の動詞接辞については、次の 3. 2 節で扱う）。表のデータは語末接辞が揃うように一部改変してある（改変箇所は脚注にて示した）。

(3) 上記の語幹に付ける動詞接辞

機能	形式	当該接辞を選んだ理由
非過去	i/ju	非過去接辞の異形態 i/ju のどちらを選択するかが分かる。
過去	ta	t 始まりの接辞が付くときの形が分かる。
否定	dan	語根の基底形が分かる。
命令	diba	接辞頭の母音が i のとき、その前に d が出る形を調べる。

連用+願望 ji+butʰjan 接辞頭の母音が i のとき、その前に d が出ない形を調べる。
 丁寧 jabi j が後接した形が分かる。

まず、最初に動詞屈折表を示し、その後に非過去形を用いた例文を列挙する。使用することができない語形にはアスタリスク (*) をつけた。

表 4. 動詞語幹に6種類の接辞を付けたもの

動詞語幹	i/ju (非過去) ¹	ta (過去)	dan (否定)	diba (命令)	ji+but ^h jan (連用+願望)	jabi (丁寧)
uki 「起きる」	ukiin [uki:n]	ukitan [ukitan]	ukidan [ukiran]	ukidiba [ukiriba]	ukibut ^h jan [ukibusan]	ukijabiin [ukijabi:n]
ki 「切る」	kiin [ki:n]	kitjan [kitean]	kijan [kijan]	kiiba [ki:ba]	kiibut ^h jan [ki:busan]	kijabiin [kijabi:n]
t ^h u 「取る」	t ^h uin [t ^h uin]	t ^h utan [t ^h utan]	t ^h udan [t ^h uran]	t ^h udiba [t ^h uriba]	t ^h uibut ^h jan [t ^h uibusan]	t ^h ujabiin/t ^h uibiin [t ^h ujabi:n/t ^h uibi:n]
hee 「変える」	heein [he:in]	heetan [he:tan]	heedan [he:ran]	heediba [he:riba]	heebut ^h jan [he:ibusan]	heejabiin [he:jabi:n]
hoo 「買う」	hooiin [ho:in]	hootan [ho:tan]	hoodan [ho:ran]	hoodiba [ho:riba]	hooibut ^h jan [ho:ibusan]	hoojabiin [ho:jabi:n]
wada 「笑う」	wadeen [ware:n]	wadatan [waratan]	wadaan [wara:n]	wadeeba [ware:ba]	wadeebut ^h jan [ware:busan]	wadajabiin [warajabi:n]
jum 「読む」	jumin [jumin]	judan [juran]	juman [juman]	jumiba [jumiba]	jumibut ^h jan [jumibusan]	jumjabiin [jumjabi:n]
nadab 「並ぶ」	nadabin [narabin]	nadadan [nararan]	nadaban [naraban]	nadabiba [narabiba]	nadabibut ^h jan [narabibusan]	nadabjabiin [narabjabi:n]
ut 「打つ」	utjun [uteun]	utjan [uttean]	utan [utan]	utiba [utiba]	utjibut ^h jan [uteibusan]	utjabiin [uteabi:n]

¹ 非過去形は断定接辞の n で終わる形式に統一した。実際の録音では、非過去接辞+t^haa のものも現れる((4)に示した例文がそれに当たる)。

動詞語幹	i/ju (非過去)	ta (過去)	dan (否定)	diba (命令)	ji+but ^h jan (連用+願望)	jabi (丁寧)
p ^h ut ^h 「干す」	p ^h ut ^h jun [p ^h usun]	p ^h u ^h jan [p ^h utean]	p ^h ut ^h an [p ^h ut ^h an]	p ^h ut ^h iba [p ^h ut ^h iba]	p ^h ut ^h ji ^h but ^h jan [p ^h ucibusan]	p ^h ut ^h jabiin [p ^h usabi:n]
hand 「被る」	handjun [hanzun]	hantan [hantan]	handan [hanan]	handiba [hanriba]	handji ^h but ^h jan ² [hanzibusan]	handjabiin [hanzabi:n]
hak 「書く」	hakin [hakin]	hakjan [hatean]	hakan [hakan]	hakiba [hakiba]	hakibut ^h jan [hakibusan]	hakjabiin [hakabi:n]
tjik 「聞く」	tjikin [teikin]	tjijan [teitean]	tjikan [teikan]	tjikiba [teikiba]	tjikibut ^h jan [teikibusan]	tjikjabiin [teikabi:n]
t ^h ug 「研ぐ」	t ^h ugin [t ^h ugin]	t ^h udjan [t ^h uzan]	t ^h ugan [t ^h ugan]	t ^h ugiba [t ^h ugiba]	t ^h ugibut ^h jan [t ^h ugibusan]	t ^h ugjabiin [t ^h ugabi:n]
uig 「泳ぐ」	uigin [uigin]	uidjan [uizan]	uigan [uigan]	uigiba [uigiba]	uigibut ^h jan [uigibusan]	uigjabiin [uigabi:n]
gi 「座る」	giin [gi:n]	gijan [gitean]	gijan [gijan]	giiba [gi:ba]	giibut ^h jan [gi:busan]	gijabiin [gijabi:n]
t ^h 「する」	t ^h jun [sun]	tjan [tean]	t ^h an [t ^h an]	t ^h iba [t ^h iba]	t ^h ji ^h but ^h jan [ei:busan]	t ^h jabiin [sabi:n]
ik/n 「行く」	ikin [ikin]	ndjan [nzan]	ikan [ikan]	ikiba [ikiba]	ikibut ^h jan [ikibusan]	ikjabiin [ikabi:n]
hu/t ^h 「来る」	t ^h juun [su:n]	tjan [tean]	huun [φu:n]	huuba [φu:ba]	t ^h ji ^h but ^h jan [ei:busan]	t ^h jabiin [sabi:n]

² 録音データでは、handji^hbut^hja t^haa [hanzibusat^ha:] 「被りたいねえ」と言っている。

動詞語幹	i/ju (非過去)	ta (過去)	dan (否定)	diba (命令)	ji+but ^h jan (連用+願望)	jabi (丁寧)
gu 「いる」	gun [gun]	gutan [gutan]	gudan [guran]	gudiba [guriba]	gubut ^h jan [gubusan]	guibim/gujabiin [guibi:n/gujabi:n]
a 「ある」	an [an]	atan [atan]	naan [na:n]	N/A ³	N/A	aibim/*ajabiin [aibi:n/*ajabi:n]
a/ja/da 「～である」	N/A	jatan [jatan]	adan [aran]	N/A	N/A	jaibim [jaibi:n]
t ^h jimi 「させる」	t ^h jimiin [eimi:n]	t ^h jimitan [eimitan]	t ^h jimidan [eimidan]	t ^h jimidiba [eimidiba]	t ^h jimibut ^h jan [eimibusan]	t ^h jimijabiin [eimijabi:n]
ime/imo 「いらっしやる」	imeen [ime:n]	imoo ^h jan [imo:tean]	imoodan [imo:ran]	imoodiba [imo:riba]	imeebut ^h jan ⁴ [ime:busan]	*imoojabiin/*imeejabiin [*imo:jabi:n/*ime:jabi:n]
ntjagi 「召し上がる」	ntjagin [nteagin]	ntjagitan [nteagitan]	ntjagidan [nteagidan]	ntjagidiba [nteagidiba]	ntjagibut ^h jan ⁵ [nteagibusan]	*ntjagijabiin [*nteagijabi:n]
ka/ke 「食べる」	keen [ke:n]	katan [katan]	kaan [ka:n]	keeba [ke:ba]	keebut ^h jan [ke:busan]	*kajabiin/*kejabiin [*kajabi:m/*kejabi:n]
kund 「結ぶ」	kundjun [kunuzun]	kuntjan [kuntean]	kundan [kunan]	kundiba [kunriba]	kundjibut ^h jan [kunuzibusan]	kundjabiin [kunuzabi:n]
hi 「死ぬ」	hiin [çi:n]	hidjan [çizan]	hijan [çijan]	hiiba [çi:ba]	hiibut ^h jan [çi:busan]	hijabiin [çijabi:n]

³ N/A は適切な例文を考えることができなかつた（ゆえに調査できなかつた）ことを示す。

⁴ 録音データでは、imeebut^hjaija [ime:busaija] 「いらっしやりたいですか？」と述べている。

⁵ 録音データでは、ntjagibut^hjaija [nteagibusaija] 「召し上がりたいですか？」と述べている。

(4) 「動词语幹＋非過去接辞」を用いた例文

waa ga djii hakin	「私が字を書く」
jutakaa ga ukii t ^h aa	「豊が起きるよ」
ama kai jukiga nu gu t ^h aa	「あそこに男の人がいるよ」
nma kai it ^h ji ga a t ^h aa	「そこに石があるよ」
nma ndji it ^h ji ga a t ^h aa	「そこに石があるよ」
jutakaa duu ga ikin tji atadu	「豊は自分が行くつもりだった」
waa nmaga nu t ^h juu t ^h aa	「私の孫が来るよ」
jaa nmaga n t ^h juui ja?	「お前の孫も来るか？」
jutakaa nmaga nu juda kii t ^h aa	「豊の孫が枝を切るよ」
jukiga nu p ^h uku hooiin	「男の人の服を買う。」
it ^h ji n ui kai giin	「石の上に座る。」
jutakaa ga duu n p ^h uku hutji akki t ^h aa	「豊が自分の服を干しているよ」
jukiga n ^h jaa nee du t ^h jimiin doo jaa	「男の人たちにさせるよ」
wadabi nu wan hijatja t ^h aa	「子供が私をたたいた（直訳：死なせた）ね」
t ^h jint ^h jii da p ^h anath ^h ji tjikin	「先生から話を聞く。」
nma da ama madi uigi t ^h aa	「ここからあそこまで泳ぐ。」
it ^h ji jutakaa ni/*t ^h ji nagiin	「石を豊へ投げる。」
it ^h ji umi tji nagiin	「石を海へ投げる。」
jutakaa jooka waa ga du uput ^h aa keen doo jaa	「豊よりも私の方がたくさん食べる。」
t ^h ina jooka it ^h ji ga du nbut ^h an doo jaa	「砂よりも石の方が大きい。」
it ^h ji t ^h jaama djii hakin	「石で字を書く」
t ^h ut ^h ji nakai hatana t ^h ugin	「砥石で包丁を研ぐ」
jutakaa tu mandjooi nadabin	「豊と一緒に並ぶ。」
t ^h ii n pit ^h ja n kundjun	「手も足も縛る」
wanaa tjaa antji t ^h ju t ^h aa	「私はいつもそうするよ」
anu tjoo t ^h jint ^h jii dadu	「あの人は先生だ」
t ^h jint ^h jii ja tjaa nma kai imeen doo jaa	「先生はいつもそこにいらっしゃるよ」
waa ga heein	「私が（電灯を）変える」
wadabi n ^h jaa bikeei tjuu t ^h aa	「子供たちばかり来ているよ」
unu juda n kiin tji da ni?	「その枝も切るつもりか？」
jutakaa ga naibat ^h jaa t ^h ui t ^h aa	「豊がバナナを取る。」
waa ga t ^h joogin t ^h jiija juu wadeen doo jaa	「私が冗談を言うと、よく笑うよ」
waa ga jumin doo jaa	「私が読むよ」
t ^h jint ^h jii ja juu naibat ^h jaa ntjagin doo jaa	「先生はよくバナナを召し上がるよ。」
antji t ^h jiijaa, hiin doo jaa	「そうしたら、死ぬよ」

3. 2. 動詞語幹に後接する接辞

動詞語幹に後接する接辞を以下に示す。機能のラベルに付けた数字は小さいものの方が使用されやすいことを意味する。丸カッコ内は補足説明である。

表 5. 動詞語幹に後接する接辞

形式	機能のラベル	形式	機能のラベル	形式	機能のラベル
-i/-ju	現在	-thi	準体	-dat ^h	使役 1
-i/-ju	直接経験	-thiga	逆説	-diba	条件 1
-jaa	人間名詞化	-n	断定	-diba	命令
-jaama	連鎖 2	-da	志向	-ta	過去
-jabi	丁寧	-dai	意思伝達	-thituminku	同時
-ji	連鎖 3	-dat ^h adi	可能	-ti	連鎖 1 (節連鎖 ; 補助動詞構文)
-jibuthja	願望	-dan	否定	-tuu	持続 (進行 ; 結果残存)
-jiga	目的	-dana	否定連鎖		
-jigatjinaa	同時	-danki(ba)	禁止		
-kutu	理由	-dat ^h jimi	使役 2		

以下に、動詞語根 hee-「変える」を用いた例を示す。

(5) 動詞語根 hee-「変える」と表 5 の動詞語幹に後接する接辞を用いた例文

heeda	変えよう
waa ga heedai	私に変えるね
heedan	変えない
heedat ^h jun	変えさせる
heedat ^h jimiin	変えさせる
waa ga heedat ^h adiin doo	私に変えられるよ
uda heedankiba/heedanki	それは変えるな
mothji heediba kjaa nai ga?	もし変えたら、どうなる？
jaa heediba	お前、(電球を) 変えろ
waa ga heeiga iki t ^h aa	私に変えに行くよ
heeigatjinaa mun juda t ^h aa	変えながら話をした
heeibut ^h jan mjaa	変えたいね
heejabiin doo	変えますよ
heein	変える
heei ^h i bikeei mutji huuba	変えるのだけ持って来い
waa ga heei t ^h aa	私に変えるさ

waa ga heekutu matjtjukiba jaa	私が変わるから、待ってろよ
nama heetuu t ^h aa	今変えているよ
heetuun doo jaa	(電球はもう) 変えてあるよ
naa heeta t ^h aa	もう変えたよ
nama heeithiga thimii ja?	今変えるけれど、良いかい?
mukat ^h jaa waa ga du heeitan doo jaa	昔はよく私が変わったもんだよ
adi n heeti, udi n heeti, deedji jatan doo jaa	あれも変えて、これも変えて、大変だったよ
waa ga atu da heeti utjuki t ^h aa	私が後で変えておくよ
adi n heejaama, udi n heejaama, deedji jatan doo jaa	あれも変えて、これも変えて、大変だったよ
adi n heei, udi n heei, deedji jatan doo jaa.	あれも変えて、これも変えて、大変だったよ
heeithituminku tikata t ^h aa	変えると同時に点いたよ
anu tju heejaa doo jaa	あの人は変える人だよ
adi n heedana, udi n heedana, nuu tjuuta ga?	あれも変えず、これも変えず、何をしていたのか?

4. 形容詞形態論

本節では久高方言の形容詞形態論をまとめる。

まず、任意に選択した 7 種類の形容詞語幹+形容詞化接辞 (-t^ha) に以下の接辞（但し、否定の場合を除く）を付けたものを表にして示す。否定の場合は形容詞化接辞の後に主題助詞（このときの異形態は a）が後接する。

(6) 形容詞語幹に付ける接辞

機能	形式	当該接辞を選んだ理由
断定	n	形容詞化接辞の形を知るため。
過去	ta	t 始まりの接辞が付くときの形が分かる。
否定	a naan	否定表現が分析的 (analytic) であることを調べる。
条件 1	diba	接辞頭の母音が i のとき、その前に d が出る形を調べる。
条件 2	jijaa	接辞頭の母音が i のとき、その前に d が出ない形を調べる。
丁寧	ibi	丁寧接辞の形が動詞と違うことが分かる。

表 6. 形容詞語幹 + 形容詞化接辞 (-tʰa) に接辞 (但し否定は除く) を付けたもの

形容詞語幹	非過去 (-n)	過去 (-tan)	否定 (a naan)	条件 (-diba)	条件 (-ijaa)	丁寧 (-ibi)
ama 「甘い」	amatʰan	amatʰatan	amatʰaa naan	amatʰadiba	amatʰajjaa	amatʰaibiin
	[amatʰan]	[amatʰatan]	[amatʰa: na:N]	[amatʰariba]	[amatʰajja:]	[amatʰaibi:N]
magi 「大きい」	magitʰan	magitʰatan	magitʰaa naan	magitʰadiba	magitʰajjaa	magitʰaibiin
	[magitʰan]	[magitʰatan]	[magitʰa: na:N]	[magitʰariba]	[magitʰajja:]	[magitʰaibi:N]
tʰuu 「遠い」	tʰuutʰan	tʰuutʰatan	tʰuutʰaa naan	tʰuutʰadiba	tʰuutʰajjaa	tʰuutʰaibiin
	[tʰu:tʰan]	[tʰu:tʰatan]	[tʰu:tʰa: na:N]	[tʰu:tʰariba]	[tʰu:tʰajja:]	[tʰu:tʰaibi:N]
goo 「かゆい」	gootʰan	gootʰatan	gootʰaa naan	gootʰadiba	gootʰajjaa	gootʰaibiin
	[go:tʰan]	[go:tʰatan]	[go:tʰa: na:N]	[go:tʰariba]	[go:tʰajja:]	[go:tʰaibi:N]
watʰ 「悪い」	watʰtʰan	watʰtʰatan	watʰtʰaa naan	watʰtʰadiba	watʰtʰajjaa	watʰtʰaibiin
	[watʰtʰan]	[watʰtʰatan]	[watʰtʰa: na:N]	[watʰtʰariba]	[watʰtʰajja:]	[watʰtʰaibi:N]
min 「遅い」	mintʰan	mintʰatan	mintʰaa naan	mintʰadiba	mintʰajjaa	mintʰaibiin
	[mintʰan]	[mintʰatan]	[mintʰa: na:N]	[mintʰariba]	[mintʰajja:]	[mintʰaibi:N]
matʰtʰj 「まし」	matʰtʰjadu	matʰtʰjaatan	matʰtʰjaa naan	matʰtʰjadiba	matʰtʰajjaa	matʰtʰjaibiin
	[massaru]	[massa:tan]	[massa: na:N]	[massariba]	[massajja:]	[massaibi:N]

表 7. 形容詞語幹+形容詞化接辞 (-t^ha) に後接する接辞 (但し、否定は分析的)

形式	機能のラベル	形式	機能のラベル	形式	機能のラベル
a naan	否定	n	断定	tan	過去
ibiin	丁寧	nu	連鎖	t ^h i	準体
ijaa	条件 2	diba	条件 1	t ^h iga	逆説
kutu	理由	du	du 係結形	nu/n	連体

以下に、形容詞語根 ama- 「甘い」 を用いた例を示す。

(7) 形容詞語根 ama- 「甘い」 と表 7 の形式を用いた例文

amat ^h adiba djootoo munu jaa	甘ければ、良いのにな。
amat ^h aijaa djootoo munu jaa	甘ければ、良いのにな。
amat ^h aibiin	甘いです。
amat ^h aa naan	甘くない。
amat ^h an	甘い。
adi jooka udi ga du amat ^h adu	あれよりもこれが一番甘い。
uda amat ^h akutu nmat ^h an doo jaa	これは甘いから、おいしいよ。
amat ^h at ^h i t ^h udiba	甘いのを取れ。
uda amat ^h anu/*amat ^h aajaama magit ^h an doo jaa	これは甘くて、大きいよ。
amat ^h atan	甘かった。
uda amat ^h at ^h iga gumat ^h an doo jaa	これは甘いけど、小さいよ。
amat ^h anu deekun	甘い大根

5. 「おおきなかぶ」方言版

本節では「おおきなかぶ」の久高方言訳をまとめる。

1. "magit^hanu deekun"

「大きい 大根」(表題)

2. up^huth^hjuu ga deekun uijabitan.

おじいさんが 大根 植えました。

3. amat^hanu amat^hanu deekun tji nadi.

甘い 甘い 大根に なれ。

4. magit^hanu magit^hanu deekun tji nadi.

大きい 大きい 大根に なれ。

5. amat^hanu gii deedji na magit^hanu deekun ga dikijabitan.

甘い 良い ととても 大きい 大根が できました。

6. up^hut^hjuu ja deekun nugin tji thjabitat^higa, hijat^haa hijat^haa thjut^higa, deekunoo nugijabidan.

おじいさんは 大根 抜こうと しましたが、よいしょ よいしょ するけれど、大根は 抜けません。

7. up^hut^hjuu ja p^haap^haa judi thjaabitan.

おじいさんは おばあさんを 呼んで 来ました。

8. p^haap^haa ga up^hut^hjuu pippati,

おばあさんが おじいさんを 引っ張って、

9. up^hut^hjuu ga deekun pippati,

おじいさんが 大根 引っ張って、

10. hijat^haa hijat^haa thjabit^higa, deekunoo nugijabidan.

よいしょ よいしょ しますが、大根は 抜けません。

11. p^haap^haa ja nmaga judi thjaabitan.

おばあさんは 孫を 呼んで 来ました。

12. nmaga ga p^haap^haa pippati,

孫が おばあさんを 引っ張って、

13. p^haap^haa ga up^hut^hjuu pippati,

おばあさんが おじいさんを 引っ張って、

14. up^hut^hjuu ga deekun pippati,

おじいさんが 大根を 引っ張って、

15. hijat^haa hijat^haa.

よいしょ よいしょ。

16. jat^higa, nama nama deekunooo nugijabidan.

だけど、まだ まだ 大根は 抜けません。

17. nma ndji nmagaa in judi thjaabitan.

そこで 孫は 犬を 呼んで 来ました。

18. in ga nmaga pippati,

犬が 孫を 引っ張って、

19. nmaga ga p^haap^haa pippati,

孫が おばあさんを 引っ張って、

20. p^haap^haa ga up^hut^hjuu pippati,

おばあさんが おじいさんを 引っ張って、

21. an tji n, an tji n, nama nugijabidan.

ああしても、こうしても、まだ 抜けません。

22. inoo mjaa judi t^hjaabitan.
 犬は 猫を 呼んで 来ました。
23. mjaa ga in pippati,
 猫が 犬を 引っ張って、
24. in ga nmaga pippati,
 犬が 孫を 引っ張って、
25. nmaga ga p^haap^haa pippati,
 孫が おばあさんを 引っ張って、
26. p^haap^haa ga up^hut^hjuu pippati,
 おばあさんが おじいさんを 引っ張って、
27. an tji n, deekunoo nugijabidan.
 そうしても、大根は 抜けません。
28. mjaa ja eentju judi t^hjaabitan.
 猫は ネズミを 呼んで 来ました。
29. eentju ga mjaa pippati,
 ネズミが 猫を 引っ張って、
30. mjaa ga in pippati,
 猫が 犬を 引っ張って、
31. in ga nmaga pippati,
 犬が 孫を 引っ張って、
32. nmaga ga p^haap^haa pippati,
 孫が おばあさんを 引っ張って、
33. p^haap^haa ga up^hut^hjuu pippati,
 おばあさんが おじいさんを 引っ張って、
34. hijat^haa hijat^haa.
 よいしょ よいしょ。
35. joojaku deekunoo nugijabitan.
 ようやく 大根は 抜けました。

6. 方言会話の例文

本節では久高方言の会話の例文をまとめる。6. 1節では、道で会った時の挨拶、6. 2節では、買い物のときの会話、6. 3節では、物を借りる時の会話を示す。

6. 1. 道で出会った時の挨拶

1. gii waatiki naibitan mjaa.
 良い 海の状態に なりましたね。

2. mm. gii waatiki nata t^haa.

うん。良い 海の状態に なったね。

3. maa tji jant^hjee ga?

どこへ ですか？

4. t^hukudin madi jadu. jaa maa tji ga?

徳仁まで だよ。君は どこへ？

5. mma madi jaibiidu.

そこまで です。

6. an ja nee.

そう か。

6. 2. 買い物ときの会話

1. t^hjaabida.

ごめんください。

2. imoodi.

いらっしやい。

3. nuu aibii ja?

何か ある？

4. nuu ga mat^ht^hja ga tjee?

何が 良いの？

5. t^hjidaga t^hoomin nu aibii ja?

白髪ソーメンが ありますか？

6. ama kai akutu, t^hudiba.

あそこに あるから、取りなさい。

7. tjappi t^hjabii ga?

いくら しますか？

8. tjutabai nihjakuen dadu.

一束 二百円 だ。

9. hai, nihjakuen.

はい、二百円。

10. nip^hee jaa.

ありがとうね。

6. 3. 物を借りるときの会話

1. t^hjaabida.

ごめんください。

2. imoodi. nuu tʰjiga tja ga?

いらっしやい。何しに 来たか?

3. mm. tiibuku haiga du tʰjaabitadu.

うん。釣竿 借りに 来ました。

4. ai ja nee. ama kai atʰaa. muttji ikiba.

そう か。あそこに あるよ。持って 行きなさい。

5. ai jaibii nee. nipʰeejaibiidu. hatukkjabida i.

そう ですか。ありがとうございます。借りて置きましょうね

参照文献

新永悠人 (2016) 「久高島方言の簡易文法書」、狩俣繁久 (編) 『琉球諸語 記述文法Ⅱ』、
西原町：琉球諸語記述研究会、pp. 86-104

沖縄県津堅方言の報告

— 動詞形態論と言語資料としての翻訳テキスト —

沖縄県津堅方言の報告 — 動詞形態論と言語資料としての翻訳テキスト —

又吉 里美

1 津堅島の概要

津堅島は、周囲約 8 km、面積約 1.8k m²の島で、北緯 26 度 15 分、東経 127 度 56 分にあり、沖縄本島中南部東海岸に面した与勝半島の南東約 5 kmに位置する。かつては、勝連町に属していたが、現在は平成 17 年 4 月 1 日に、具志川市、石川市、勝連町、与那城町の 2 市 2 町が合併してできた「うるま市」の行政区の一つである。

琉球方言を北琉球方言と南琉球方言とに大きく分けて考えると、北琉球方言には、奄美諸島および沖縄本島及びその周辺の島々の方言が含まれ、南琉球方言には、宮古諸島および八重山諸島の方言が含まれる。したがって、津堅方言は北琉球方言としてまず位置づけられる。さらに、北琉球方言は、奄美德之島諸方言、沖永良部与論沖縄北部諸方言、沖縄中南部諸方言に分けられる。沖縄本島に関して見てみると、太平洋側では金武町屋嘉、東シナ海側では恩納村恩納以北が沖永良部与論沖縄北部諸方言に区分され、それより南は沖縄中南部諸方言に区分される。地理的に見れば、先に述べたように、津堅島は太平洋側の勝連半島の南東に位置し、すなわち、金武町屋嘉以南に位置する。地理的位置から判断すれば、津堅方言は、沖縄中南部諸方言に属すると考えられる。しかし、これまでの諸研究により、p 音の残存状況、格助詞の方向格、与格の体系などから、津堅方言は沖永良部与論沖縄北部諸方言の特徴を有していることが明らかにされており、言語的な位置づけとしては沖永良部与論沖縄北部諸方言に属すると結論づけられている。動詞の形態においても、少なからず、沖縄本島北部方言の特徴を持っていることを指摘できる。たとえば、津堅方言において、条件形 *jumiba* (読めば)、継続形 *juruN* (読んでいる) という形態があり、今帰仁方言や、津堅方言と同じく沖縄本島中南部にありながら沖縄本島北部方言の特徴を持つ久高方言^{*1}に近い形態を持つ。しかし、今帰仁方言や久高方言に見られる終止形の形態、*mumiN* (飲む) *'jubiN* (呼ぶ) のような形態は確認できていない。終止形は首里方言と同じ *-uN* の形態をとり、*numuN* (飲む)、*jubuN* (呼ぶ) となる。すなわち、津堅方言の動詞活用においては、沖縄中南部方言の特徴と沖縄北部方言の特徴とを併せ持っていると考えられる。さて、本稿では、津堅方言の動詞について、動詞の形態について、活用のタイプ、直説法非過去形・過去形・意志・勧誘・命令、推量形、連体形、連用形、条件形に分けて整理して示す。また、言語資料として動詞活用の調査に使用した例文の翻訳および「おおきなかぶ」の翻訳テキストをグロス付きで提示する。

2 津堅方言の動詞の活用タイプ

活用のタイプは大きく規則変化と不規則変化に分けられ、さらに規則変化は強変化動詞と混合変化動詞に分けられる。強変化動詞は語幹末が子音終わりの動詞で、基本語幹、連

用語幹、音便語幹を持ち、連用語幹を含む動詞基本形は *-uN* である。音便語幹には促音便語幹はなく、脱落音便に統一される。強変化動詞はタイプ A と B に分けられる。タイプ A では、基本語幹と連用語幹は同形である。なお、語幹末の音韻が同じでも、音便語幹を含む形態には複数の形態が表れるが、規則性を持つものと例外的なものとの混じる。たとえば、語幹末に *m* 音を有するものとして、「飲む (*num-*)」「見る (*m-*)」が挙げられる。それぞれ、音便語幹を含む形態は *nu-ri*、*N-ci* である。このうち、*m* 音末尾は *-ri* 語尾になるのが規則的に見られる (*kam-u-N/ka-ri* 〈食べる／食べて〉、*jum-u-N/ju-ri* 〈読む／読んで〉など)。語幹末 *k* 音でも音便語幹のバリエーションが確認できる。強変化タイプ B は、基本語幹、連用語幹、音便語幹の3つにおいて異なる形態である。

一方、混合変化動詞は、基本語幹は強変化動詞と同じ子音終わりの語幹であるが（すべて *r* 語幹末である）、連用語幹は母音終わりの語幹である。音便語幹は脱落音便と音便なしのパターンがある。混合変化動詞は基本形の語構成で2形態に分類されよう。タイプ A は *-N* 語尾、タイプ B は *-i-N* 語尾である。

		基本語幹 (勧誘形)	連用語幹 (基本形)	音便語幹 (第2中止形)
規則変化動詞				
強変化動詞タイプ A	飛ぶ	tub-a	tub-u-N	tu-ri
	飲む	num-a	num-u-N	nu-ri
	食べる	kam-a	kam-u-N	ka-ri
	落とす	utuh-a	utuh-u-N	utu-ci
	見る	m-a	m-u-N	N-ci
	くびる	kuNk-a	kuNk-u-N	kuN-ci
	漕ぐ	kug-a	kug-u-N	ku-zi
	行く	ik-a	ik-u-N	N-zi ^{*2}
	書く	kak-a	kak-u-N	ka-si
強変化動詞タイプ B	かぶる	kaNr-a	kaNz-u-N	kaN-ti
	洗う	arah-a (ara-a)	ara-u-N	ara-ti
	持つ	mut-a	mus-u-N (muts-u-N)	mu-si (mu-ci)
混合変化動詞タイプ A	切る	kir-a	ki-N	ki-ti
	蹴る	kir-a	ki-N	ki-ti
	やる	kir-a	ki-N	ki-ti

	酔う	jir-a	ji-N	ji-ti
	起きる	ukir-a	uki-N	uki-ti
	落ちる	utir-a	uti-N	uti-ti
	降りる	urir-a	uri-N	uri-ti
	捨てる	sitir-a	siti-N	siti-ti
		(itir-a)	(iti-N)	(iti-ti)
	閉める	simir-a	simi-N	simi-ti
混合変化動詞タイプB	買う	koor-a	koo-i-N	koo-ti
	掘る	pur-a	pu-i-N	pu-ti
	売る	ur-a	u-i-N	u-ti
不規則変化	来る	kuu	suN	kisi
	する	haa	huN	hii

3 動詞の形態

3.1 文末終止形－直説法非過去形・過去形・意志・勧誘・命令－

直説法非過去形にはいわゆる終止形の形態と、*ru* 結びによる連体形 (ADN) の形態とが見いだされる。ただし、*ru* 結びによる連体形は必須ではなく、*ru* が文中にあっても、連体形にはならないこともある。

過去形には第一過去と第二過去とが見いだされる。第二過去がいわゆるウチナーヤマトグチの「～しよった」に対応して、直接に体験・知覚したことや目撃性の意味を付加させるのに対して、第一過去は過去一般に対して用いられ、目撃性は中立的である。第一過去形の語構成、第二過去形の語構成は以下のとおりである。すなわち、第一過去形は過去接辞-*ta* で構成され (強変化動詞では基本語幹の末尾音によって子音-*t* 部分が変化する)、第二過去形は強変化動詞で-*uta*、混合変化動詞で-*ita* の接続によって構成される。

第一過去形	強変化動詞	: 音便語幹- <i>Xa-N</i> (音便語幹-PST1-IND)
		(X は基本語幹の末尾音によって異なる)
	混合変化動詞	: 音便語幹- <i>ta-N</i> (音便語幹-PST1-IND)
第二過去形	強変化動詞	: 基本語幹- <i>uta-N</i> (基本語幹-PST2-IND)
	混合変化動詞	: 基本語幹- <i>ita-N</i> (基本語幹-PST2-IND)

さらに、意志・勧誘の形態は、「基本語幹-*a*」で構成され、命令形は「基本語幹-*i*」で構成される。命令形では=*be* をつけた形もよく使用され、=*be* が付属しない形よりはやや柔らかい感じをもたらす。以下、表1～表4において、具体的にその形態を示す。また、それぞれの形態について、例文とともに示す。

表1 強変化動詞「*tubuN*（飛ぶ）」の文末終止形

	非過去	第1過去	第2過去
断定	<i>tub-u-N</i> 飛ぶ-NPST-IND	<i>tu-ra-N</i> 飛ぶ-PST1-IND	<i>tub-uta-N</i> 飛ぶ-PST2-IND
否定	<i>tub-aN</i> 飛ぶ-NEG	<i>tub-aN-ta-N</i> 飛ぶ-NEG-PST1-IND	
意志・勧誘	<i>tub-a</i> 飛ぶ-INT		
命令	<i>tub-i</i> 飛ぶ-IMP		

表2 混合変化動詞「*ukiN*（起きる）」の文末終止形

	非過去	第1過去	第2過去
断定	<i>uki-N</i> 起きる-IND	<i>uki-ta-N</i> 起きる-PST1-IND	<i>uki-ita-N</i> 起きる-PST2-IND
否定	<i>ukir-aN</i> 起きる-NEG	<i>ukir-aN-ta-N</i> 起きる-NEG-PST1-IND	
意志・勧誘	<i>ukir-a</i> 起きる-INT		
命令	<i>ukir-i</i> 起きる-IMP		

表3 不規則変化動詞「*suN*（来る）」の文末終止形

	非過去	第1過去	第2過去
断定	<i>su-N</i> 来る.NPST-IND	<i>ki-sa-N</i> 来る-PST1-IND	<i>kis-uta-N</i> 来る-PST2-IND
否定	<i>kuN</i> 来る.NEG	<i>kuN-ta-N</i> 来る.NEG-PST1-IND	
意志・勧誘	<i>kuu</i> 来る-INT		
命令	<i>kuu</i> 来る-IMP		

表4 不規則変化動詞「*huN*（する）」の文末終止形

	非過去	第1過去	第2過去
断定	<i>hu-N</i> する-IND	<i>sa-N</i> する.PST1-IND	<i>s-uta-N</i> する-PST2-IND
否定	<i>h-aN</i> する-NEG	<i>haN-ta-N</i> する.-PST1-IND	
意志・勧誘	<i>haa</i> する-INT		
命令	<i>hii</i> する-IMP		

非過去形

- (1) *wattaa=φ niinii-taa=ga=ru kam-u-N.*
 私たち=GEN 兄さん-PL=NOM=FOC 食べる-NPST-IND
 私たちの兄さんたち（自分の息子を指す）が食べる。
- (2) *sima=nu kutu ari=ga=ru buru waka-i-ru.*
 島=GEN こと あれ=NOM=FOC 全部 分かる-NPST-ADN
 島のこと、あれ {note:自分の親を指す} が全部分かる。

第一過去形

- (3) *waN=ja kinuu uma=kara tu-ra-N.*
 私=TOP 昨日 ここ=ABL 飛ぶ-PST1-IND
 私は昨日、ここから飛んだ。

第二過去形

- (4) *kinuu tui-gwaa=ga tub-uta-N.*
 昨日 小鳥-DIM=NOM 飛ぶ-PST2-IND
 昨日、小鳥が飛びよった。
- (5) *kkee jagati iibi=φ ki-ita-N.*
 DSC やがて 指=ACC 切る-PST2-IND
 あら、やがて指を切りよった（=指を切るところだった）。

意志・勧誘

- (6) *maNna ik-a=ja.*
 一緒に 行く-INT=SFP
 一緒に行こう。

命令形

- (7) *miici=Nka wakir-i.*
 みつつ=DAT 分ける-IMP
 三つに分ける。
- (8) *miici=Nka wakir-i=be.*
 みつつ=DAT 分ける-IMP=SFP
 三つに分けるよ。

3.2 推量形

推量形は-N (IND) を *-ru=hazi* (-ADN=INFR) または *-ra=hazi* (-ADN=INFR) に変えることによって作られる。*-ru=hazi*、*-ra=hazi* の形態のいずれを使用するかは地域によって異なる傾向があるように思われる。

- (北) 伊江島方言 : *jupurup'azi* 「読むと思う」〈蓋然性の強い推量〉
 (p'は喉頭化無気音)
- (中南) 首里方言 : *kanuru hazi* 「食べるだろう」
- (北) 今帰仁方言 : *numira-p'azi* 「飲むだろう」
 (p'は非喉頭化破裂音。p' 喉頭化破裂音との対立あり)
- (中南) 奥武方言 : *saʃura hadʒi* 「咲くだろう」

沖縄本島北部、中南部のいずれでも *-ru=hazi*、*-ra=hazi* は使用されるようである。*-ru=hazi*、*-ra=hazi* の両形がかつては意味の違いがあるものとして使い分けられていたのか、地域差による違いなのかについては諸方言の実態とあわせて検討する必要があるかもしれない。

さて、津堅方言では、*-ru=hazi*、*-ra=hazi* のいずれも使用され、形態の違いが文の意味に影響するということはないように見える。実際に、「切るだろう」が、*kiiruhazi*、*kiirahazi* のように両形態で提示されることも少なくない。

表5 強変化動詞「*jumuN* (読む)」の文末終止形－断定・推量－

	非過去	第1過去	第2過去
断定	<i>jum-u-N</i> 読む-NPST-IND	<i>ju-ra-N</i> 読む-PST1-IND	<i>jum-uta-N</i> 読む-PST2-IND
断定否定	<i>jum-aN</i> 読む-NEG	<i>jum-aN-ta-N</i> 読む-NEG-PST1-IND	
推量	<i>jum-u-ru=hazi</i> 読む-NPST-ADN=INFR (<i>jum-u-rahazi</i>)	<i>ju-ra-ru=hazi</i> 読む-PST-ADN=INFR (<i>ju-ra-rahazi</i>)	<i>jum-uta-ru=hazi</i> 読む-PST2-ADN=INFR (<i>jum-uta-rahazi</i>)
推量否定	<i>jum-aN=hazi</i> 読む-NEG=INFR	<i>jum-aN-ta-ru=hazi</i> 読む-NEG-PST1-ADN=INFR (<i>jum-aN-ta-ra=hazi</i>)	

(9) *deNki=ja kee-tu-ru=hazi=ro.*
電気=TOP 消える-PROG-ADN=INFR=SFP
電気は消えているだろうよ。

(10) *ami=ϕ pu-ta-ru=hazi.*
窓=NOM 降る-PST1-ADN=INFR
雨が降っただろう。

(11) *miimaN-tu-ra=hazi=ro.*
見守る-PROG-ADN=INFR=SFP
見守っているだろうよ。

3. 3 連体形

強変化動詞の連体形は語尾の *-N* (IND) を *-ru* (ADN) に変化させることでその形を作る。*tub-u-N* (飛ぶ-NPST-IND) は、*tub-u-ru* (飛ぶ-NPST-ADN) となる。混合変化動詞 *ki-N* (切る-IND) は、*[ki:ru]* と長音化したものとなる*³。また、否定形については、直説法の否定形と同形のものがそのまま体言へつながっていく。

表6 強変化動詞「*tubuN*（飛ぶ）」の連体形

	非過去	第1過去	第2過去
断定	<i>tub-u-ru</i> 飛ぶ-NPST-ADN	<i>tu-ra-ru</i> 飛ぶ-PST1-ADN	<i>tub-uta-ru</i> 飛ぶ-PST2-ADN
否定	<i>tub-aN</i> 飛ぶ-NEG	<i>tub-aN-ta-ru</i> 飛ぶ-NEG-PST1-ADN	

表7 混合変化動詞「*kiN*（切る）」の連体形

	非過去	第1過去	第2過去
断定	<i>ki-i-ru</i> 切る-NPST-ADN	<i>ki-ta-ru</i> 切る-PST-ADN	<i>ki-ita-ru</i> 切る-PST2-ADN
否定	<i>kir-aN</i> 切る-NEG	<i>kir-aN-ta-ru</i> 切る-NEG-PST1-ADN	

(12) *zippuN=gurai ziteNsja=kara ik-u-ru uma=Nka*
 10分=くらい 自転車=ABL 行く-NPST-ADN ここ=LOC

pama=nu aN=cui=gate.
 浜=NOM ある=QUOT=SFP

10分くらい自転車で行くそこに浜があるというがね。

(13) *uree seekjoo=kara koo-ta-ru muN=ro.*
 これ.TOP 生協=ABL 買う-PST1-ADN もの=SFP

これは、生協から買った物よ。

(14) *ari=ga sir-aN cuu=ce ur-aN.*
 彼女=NOM 知る-NEG.ADN 人=QUOT.TOP いる-NEG

彼女が知らない人というのはいない。

3. 4 連用形

連用形には以下の5つの形態があるが、第2中止形は継起や列挙などの複数の用法をもち、先行形、同時形、並列形は特定の用法に特化している。第1中止形は単独で用いられることはあまり見られず、多くは *jumipazimiN*（読み始める）、*juminoohuN*（読み直す）などの複合語の要素や *jumijumihuN*（読みに読む、読み合う）のように動作の反復を表す表現で表れる。第2中止形はいわゆるテ形に相当するもので、並列や継起の用法として用いられる。また、ある行為をそそのかすときの *judiNree*「読んでみる」などの構成要素として用いられる。先行形は、第2中止形に *-kara* を接続させた形で、継起用法に特化している。同時形は第1中止形に *-igisana* を接続させた形で、付帯状況を表す。

表8 強変化動詞「*jumuN*（読む）」の連用形

第1中止形	<i>(jumi)</i>
第2中止形	<i>ju-ri</i>
先行形	<i>ju-rikara</i>
同時形	<i>jum-igisana</i>
並列形	<i>jum-ui</i>

第1中止形

- (15) *nama hoN=φ jumipazimi-tu-ta-N.*
 今 本=ACC 読み始める-PROG-PST1-IND
 今、本を読み始めていた。

第2中止形

- (16) *sima=uti umari-ti sima=Nka=ru u-N=ro.*
 島=LOC3 生まれる-SEQ2 島=LOC1=FOC いる-IND=SFP
 島で生まれて、島に居るよ。（継起用法）
- (17) *ik-ini=jo suku-ti reetoo-si mu-si ik-u-N=cuN.*
 行く-GER=SFP 作る-SEQ2 冷凍-する.SEQ2 持つ-SEQ2 行く-NPST-IND=QUOT
 行くときに作って、冷凍して、持っていくって。（継起用法）
- (18) *waN=ja ?juu=φ koo-ti rusi=ja sisi=φ koo-ta-N.*
 私=TOP 魚=ACC 買う-SEQ2 友達=TOP 肉=ACC 買う-PST1-IND
 私は魚を買って、友達は肉を買った。（列挙用法）

先行形

- (19) *saa=φ nu-rikara=ru sigutu=φ pazimi-ru.*
 お茶=ACC 飲む-SEQ3=FOC 仕事=ACC 始める-ADN
 お茶を飲んでから仕事を始める。
- (20) *uri juu=φ na-tikara=ru Xsjee sikeehat-tu-N=ro.*
 この 世=DAT なる-SEQ3=FOC X姓.TOP つけられる-PROG-IND=SFP
 戦後なってからX姓はつけられているよ。

同時形

- (21) *wanuN kam-igisana uma=Nzi nihjakueN=si*
 私.ADD 食べる-SIM ここ=LOC2 二百円=INST
mata uiruruNka i-NzjaN=ro.
 また（分析保留）言う-PROG2=SFP
 私もまた（自分でも米を）食べながら、ここで二百円でまた売っているなど言っているよ。

(22) *hoN=φ jum-igisana terebi=ja mu-una.*
 本=ACC 読む-SIM テレビ=TOP 見る-PROH
 本を読みながらテレビは見るな。

並列形

(23) *aree honuN jum-ui maNga=N jum-u-N*
 彼.TOP 本.ADD 読む-REC 漫画=ADD 読む-NPST-IND
 彼は本も読むし漫画も読む。

3. 5 条件形・譲歩形・目的形

津堅方言では条件形1と条件形2^{*4}の2つ形態がある。条件形1は、当該形態を含む従属節において、現実には存在していない事態、いわゆる仮定的条件が示されるが、主節における事態は未実現であったり（仮説条件文）、実現していたりする（疑似条件文）。そのほか、従属節の仮定条件に対して、主節で評価的態度を表すこともある。条件形2は、因果関係にもとづく関係性を表現する。ただし、因果関係か仮定的条件かが曖昧な場合、条件形1でも条件形2でも表現しうる。たとえば、「薬を飲めば（飲んだら）治るよ」は因果関係とも仮定的条件ともとれる。その場合、*kusui numine*(条件2)/*numiba*(条件1) *nooiNro*、の両形態がとれる^{*5}。

譲歩形は、従属節における譲歩形で表された行為や事態に対して、主節では期待される結果とならないことが表される。

目的形は-*ga* を接続させた形で、移動の目的を表す。「移動」の目的なので、後に続く動詞としては、*ikuN*（行く）、*suN*（来る）、*ukuiN*（送る）などの移動動詞が接続する。

表9 強変化動詞「*jumuN*（読む）」の条件形・譲歩形・目的形

条件形1	<i>jum-iba</i>
条件形2	<i>jum-ine</i>
譲歩形	<i>ju-riN</i>
目的形	<i>jum-iga</i>

条件1（*jum-iba*形）

(24) *?jaa=ga jaa=Nka uur-iba wanu suu-wa=ja.*
 あなた=NOM 家=DAT いる-COND1 私.TOP 来る-SFP=SFP
 あなたが家にいるなら、私は来るよ。（仮説条件文）

(25) *asa ku-uba niNziN=nu a-N=tee=ci*
 明日 来る-COND1 ニンジン=NOM ある-IND=SFP=QUOT

i-i=ja huu-ta-N=ro.
 言う-NPST=TOP する-PST1-IND=SFP

明日来たら、ニンジンがあるよと言いつたよ。（疑似条件文）

- (26) *koohii mucu ku-uba simutamuja aNca.*
koohii=φ mu-ci ku-uba simu-ta-munu=ja aNca.
 コーヒー=ACC 持つ-SEQ2 来る-COND1 すむ-PST1-SFP=SFP それなら
 コーヒーを持ってきたらよかったのにね、それなら。(評価的態度)

条件2 (*jum-ine* 形)

- (27) *iN uri=ru jam-ine mata pisa=Nka nas-i=muN=cu.*
 うん これ=FOC 痛む-COND2 また 膝=LOC1 なする-NPST=SFP=QUOT
 うん、これ(薬を)、痛んだら、膝になすりつける(塗る)って。

- (28) *kusui=φ num-ine noo-i=ja.*
 薬=ACC 飲む-COND2 治る-NPST=SFP
 薬を飲めば治るよ。

譲歩形 (*ju-riN* 形)

- (29) *tumee-tiN tumer-ar-aN.*
 探す-CONC 探す-PASS-NEG
 探しても探せない。

目的形

- (31) *?akkenaa mikeejukee na uma=φ paka-iga su-i=ja.*
 DSC 三回四回 DSC ここ=ALL はかる-PURP 来る-NPST=SFP
 あら、三回四回もここ計りに来るよ。

4 言語資料—翻訳テキスト—

4.1 動詞調査票より

- (1) 規則変化動詞 強変化動詞タイプA—飛ぶ・飲む・落とす・くびる・漕ぐ—

1. *hootu=N taka=N tub-u-N*
 鳩=ADD 鷹=ADD 飛ぶ-NPST-IND
 鳩も鷹も飛ぶ。
2. *suu=ja waasiki=φ wassa-nu hikookee tub-aN*
 今日=TOP 天気=NOM 悪い-CSL 飛行機.TOP 飛ぶ-NEG
 今日は天気が悪いから飛行機は飛ばない。

3. *kkwadi=ga tu-ra-N*
 小鳥=NOM 飛ぶ-PST1-IND
 小鳥が飛んだ。
4. *ujadi=ga tu-ri kkwadi=N tu-ra-N*
 親鳥=NOM 飛ぶ-SEQ2 小鳥=ADD 飛ぶ-PST1-IND
 親鳥が飛んで、小鳥が飛んだ。
5. *nuru=ϕ kaak-ine mizi=ϕ num-u-N*
 のど=NOM 乾く-COND2 水=ACC 飲む-NPST-IND
 喉が乾いたら水を飲む。
6. *waa=ga utu=ja sakee num-aN*
 私=NOM 夫=TOP 酒.TOP 飲む-NEG
 私の夫は酒を飲まない。
7. *saa=ja namasaki nu-ra-N*
 お茶=TOP さっき 飲む-PST1-IND
 お茶はさっき飲んだ。
8. *kusui=ϕ nu-ri heeku niN-zi*
 薬=ACC 飲む-SEQ2 早く 眠る-IMP
 薬を飲んで、早く寝ろ。
9. *saaru=ga kii=nu mi=ϕ utuh-u-N*
 猿=NOM 木=GEN 実=ACC 落とす-NPST-IND
 猿が木の実を落とす。
10. *kunu saaru=ja kii=nu mi=ja utuh-aN*
 この 猿=TOP 木=GEN 実=TOP 落とす-NEG
 この猿は木の実を落とさない。
11. *kinuu kaa=Nka isi=ϕ utu-tsa-N (utu-ca-N)*
 昨日 井戸=LOC1 石=ACC 落とす-PST1-IND (落とす-PST1-IND)
 昨日井戸に石を落とした。
12. *boosi=ϕ utu-ci tui-ga Nza-N*
 帽子=ACC 落とす-SEQ2 取る-PURP 行く.PST1-IND
 帽子を落として、取りに行った。

13. *ki=Nka nubu-ti nai-gwaa utu-ci ki-ri*
 木=LOC1 登る-SEQ2 木の実-DIM 落とす-SEQ2 くれる-IMP
 木に登って実を落としてくれ。
14. *tui=ga piNgir-aN=gutu=ni pisa=φ kuNk-u-N*
 鶏=NOM 逃げる-NEG=よう=DAT 足=ACC くびる-SFP-IND
 鶏が逃げないように（両）足をくびる。
15. *pisa=N pani=N kuNk-aN*
 足=ADD 羽=ADD くびる-NEG
 足も羽もくびらない。
16. *suutaa=ga tui=φ kuN-ca-N*
 お父さん=NOM 鶏=ACC くびる-PST1-IND
 父が鶏をくびった。
17. *tui=φ kuN-ci kagu=Nka iri-ri*
 鳥=ACC くびる=SEQ2 籠=LOC1 入れる-IMP
 鶏をくびって、籠に入れてね。
18. *?jaa=ga tui=φ kuN-ci ki-ri*
 お前=NOM 鶏=ACC くびる-SEQ2 くれる-IMP
 おまえが鶏をくびってくれ。
19. *Nna=si puni=φ kug-u-N*
 みんな=INST 船=ACC 漕ぐ-NPST-IND
 みんなで舟を漕ぐ。
20. *taa=N puni=φ kug-aN*
 誰=ADD 船=ACC 漕ぐ-NEG
 誰も舟を漕がない。
21. *Nkasjee juu puni=φ ku-za-N*
 昔.TOP よく 船=ACC 漕ぐ-PST1-IND
 昔はよく舟を漕いだ。
22. *puni=φ kuz-i urikara juku-ri=be*
 船=ACC 漕ぐ-SEQ2 それから 休む-IMP=SFP
 舟を漕いで、そのあと休め。

(2) 規則変化動詞 強変化動詞タイプB -持つ・洗う-

23. *uttu=ja tuuci nii=ja ruucui=si=ru mus-u-N*
 弟=TOP いつも 荷物=TOP 自分一人=INST=FOC 持つ-NPST-IND
 弟はいつも荷物を一人で持つ。
24. *paapaa=ja nii=ja mut-aN*
 おばあさん=TOP 荷物=TOP 持つ-NEG
 祖母は荷物を持たない。
25. *mme=ga musuru=φ mut-tsa-N*
 おじいさん=NOM むしろ=ACC 持つ-PST1-IND
 祖父がむしろを持った。
26. *suutaa=ga saki=φ mu-cci aNmaa=ja*
 お父さん=NOM 酒=ACC 持つ-SEQ2 お母さん=TOP
 . *kamimuN=φ mu-ccaN*
 食べ物=ACC 持つ-PST1-IND
 父が酒持って、母が食べ物を持つ。
27. *meenasi karazi=φ ara-u-N*
 毎日 髪=ACC 洗う-NPST-IND
 毎日髪を洗う。
28. *mmee=ja meenasje karazi=φ ara-aN*
 おじさん=TOP 毎日.TOP 髪=ACC 洗う-NEG
 祖父は毎日は髪を洗わない。
29. *kinuu karazi=φ ara-ta-N*
 昨日 髪=ACC 洗う-PST1-IND
 昨日、髪を洗った。
30. *tii=φ ara-ti muN=φ kam-i*
 手=ACC 洗う-SEQ2 物=ACC 食べる-IMP
 手を洗って、ご飯を食べろ。
31. *sira=N ara-ti kuu*
 顔=ADD 洗う-SEQ2 来る-IMP
 顔も洗ってこい。

32. *heeku saki=ϕ mu-ci kuu*
 早く 酒=ACC 持つ-SEQ2 来る.IMP
 早く酒を持ってこい。

(3) 規則変化動詞 混合変化動詞タイプAー切る・降りる・捨てるー

33. *nagaa-nu kii=nu juda=ϕ ki-N*
 長い-ADN 木=GEN 枝=ACC 切る-IND
 長い木の枝を切る。

34. *juru=ja simee kir-aN*
 夜=TOP 爪.TOP 切る-NEG
 夜には爪を切らない。

35. *waa=ga gazimaru=ϕ ki-ta-N*
 私=NOM ガジマル=ACC 切る-PST1-IND
 私がガジマルは切った。

36. *unu nagaa-nu karazi=ja ki-ti suugi=si ik-i=jo*
 その 長い-ADN 髪=TOP 切る-SEQ2 お祝い=ALL 行く-IMP
 その長い髪は切って、お祝いに行けよ。

37. *unu himu=ϕ miici=si ki-ti ki-ri*
 その 紐=ACC 道=ALL 切る-SEQ2 くれる-IMP
 この紐を三つに切ってくれないか。

38. *Nna uma=Nzi uri-N*
 みんな ここ=LOC2 降りる-IND
 みんなここで降りる。

39. *waN=ja uma=Nzje: urir-aN*
 私=TOP ここ=LOC2.TOP 降りる-NEG
 私はここでは降りない。

40. *uma=Nzi basu=ϕ uri-ta-N*
 ここ=LOC2 バス=ACC 降りる-PST1-IND
 ここでバスを降りた。

41. *basu=ϕ uri-ti deNwa=ϕ kaki-ri*
 バス=ACC 降りる-SEQ2 電話=ACC かける-IMP
 バスを降りて、電話かけろ。
42. *uttu=ga basu=kara uri-ti kisa-N*
 妹=NOM バス=ABL 降りる-SEQ2 来る.PST1-IND
 妹がバスから降りてきた。
43. *suutaa =ga meenasi gumi=ϕ siti-i-N (iti-i-N)*
 お父さん=NOM 毎日 ゴミ=ACC 捨てる-NPST-IND (捨てる-NPST-IND)
 父が毎日ゴミを捨てる。
44. *paapaa=ja puru-ginu=N sitir-aN (itir-aN)*
 おばあさん=TOP 古い-着物=ADD 捨てる-NEG (捨てる-NEG)
 祖母は古い着物も捨てない。
45. *puru-duugu=ja uttii siti-ta-N (iti-ta-N)*
 古い-道具=TOP おととい 捨てる-PST1-IND (捨てる-PST1-IND)
 古い道具はおととい捨てた。
46. *puru-muN=ja siti-ti (iti-ti) mii-muN koo-ri*
 古い-物=TOP 捨てる=SEQ2 (捨てる-SEQ2) 新しい-物 買う-IMP
 古いものは捨てて、新しいものを買え。
47. *gumi=ϕ uma=Nka siti-ti (iti-ti) ki-ri*
 ゴミ=ACC ここ=LOC1 捨てる-SEQ2 (捨てる-SEQ2) くれる-IMP
 ゴミをそこに捨ててくれ。

(4) 規則変化動詞 混合変化動詞タイプB－掘る・売る－

48. *meenasi mmu=ϕ pu-i-N*
 毎日 芋=ACC 掘る-PST-IND
 毎日芋を掘る。
49. *aNmaa =ja suu=ja mmu=ϕ pur-aN*
 お母さん=TOP 今日=TOP 芋=ACC 掘る-NEG
 母親は今日は芋を掘らない。

50. *Nkasi kaa=ϕ pu-ta-N*
昔 井戸=ACC 掘る-PST1-IND
昔井戸を掘った。
51. *ana=ϕ pu-ti juku-ri*
穴=ACC 掘る-SEQ2 休む-IMP
穴を掘って、休め。
52. *ama=nu zii=ϕ pu-ti kuu*
あそこ=NOM 地面=ACC 掘る-SEQ2 来る-IMP
あそこの地面を掘ってこい。
53. *meenasi jasai=ϕ u-i-N*
毎日 野菜=ACC 売る-NPST-IND
毎日野菜を売る。
54. *are=ja ruu=nu ?waa=ja ur-aN*
彼=TOP 自分=NOM 豚=TOP 売る-NEG
彼は自分の豚を売らない。
55. *kuzu piizaa=ϕ u-ta-N*
去年 山羊=TOP 売る-PST1-IND
去年山羊を売った。
56. *piizaa=ϕ u-ti ?waa=ϕ koo-ta-N*
山羊=ACC 売る-SEQ2 豚=ACC 買う-PST1-IND
山羊を売って、豚を買った。
57. *unu ?waa=ϕ u-ti tura-i*
その 豚=ACC 売る-SEQ2 取らせる-IMP
その豚を売ってください。

(5) 不規則変化動詞—来る—

58. *suu=ja suutaa =ga jaa=si suN*
今日=TOP お父さん=NOM 家=ALL 来る-IND
今日は父が家に来る。

59. *aNmaa=ja kuN*
 お母さん=TOP 来る.NEG
 今日は母は来ない。
60. *kinuu suutaa =ga jaa=si kisa-N*
 昨日 お父さん=NOM 家=ALL 来る.PST1-IND
 昨日父が家に来た。
61. *uma=si kisi jaa=si muru-ta-N*
 ここ=ALL 来る.SEQ2 家=ALL 戻る-PST1-IND
 こっちへ来て、家に戻った。
62. *uma=si heeku kuu*
 ここ=ALL 早く 来る.IMP
 こっちへ早く来い。
63. *uma=si kisi mi-i*
 ここ=ALL 来る.SEQ2 みる-IMP
 こっちへ来てみろ。

4. 2 「おおきなかぶ」の翻訳テキスト

mmee=ga kabu=nu sani=ϕ ma-sa-N.
 おじいさん=NOM かぶ=GEN 種=ACC まく-PST1-IND
 おじいさんがかぶの種をまいた

ama-a-ru kabu=ni nar-i
 甘い-ADJ-ADN かぶ=DAT なる-IMP
 あまいかぶになれ。

magii kabu=ni nar-i
 大きい かぶ=DAT なる-IMP
 大きなかぶになれ。

ama-a-nu maaha=nu jii kabu ja-ru
 甘い-ADJ-ADN おいしい-ADN よい かぶ COP-ADN
 あまい、おいしい、よいかぶだ。

zikoo magii kabu=ga diki-ta-N
 ととも 大きい かぶ=NOM できる-PST1-IND
 とともおおきいかぶができた。

mmee=ja kabu=φ nuk-a=Nci hu-uta-N
 おじいさん=TOP かぶ=ACC 抜く-INT=QUOT する-PST2-IND
 おじいさんははかぶをぬこうとした。

“*haijaagwa haijaagwa*”
 DSC DSC
 「うんとこしょ、どっこいしょ。」

jaiga kabu=ja nu-ki-hij-aN
 しかし かぶ=TOP 抜く-SEQ1-POT-NEG
 しかし、かぶは抜けない。

mmee=ja paapaa=φ ju-ri kisa-N
 おじいさん=TOP おばあさん=ACC 呼ぶ-SEQ2 来る.PST-IND
 おじいさんはおばあさんと呼んできた。

paapaa=ga mmee=φ kasimi-ti mata
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC つかむ-SEQ2 また
mmee=ga kabu=φ kasimi-ti “haijaagwa haijaagwa”
 おじいさん=NOM かぶ=ACC つかむ-SEQ2 DSC DSC
jaiga kabu=ja nu-ki-hij-aN
 しかし かぶ=TOP 抜く-SEQ1-POT-NEG
 おばあさんがおじいさんをひっぱって、また、おじいさんがかぶをひっぱって「うんとこしょ、どっこいしょ。」しかし、かぶは抜けない。

paapaa=ja mmaga=φ ju-ri kisa-N
 おばあさん=TOP 孫=ACC 呼ぶ-SEQ2 来る.PST-IND
 おばあさんは孫と呼んできた。

mmaga=ga paapaa=φ kasimi-ti mata
 孫=NOM おばあさん=ACC つかむ-SEQ2 また
paapaa=ga mmee=φ kasimi-ti mata
 おばあさん=NOM おじいさん=ACC つかむ-SEQ2 また
mmee=ga kabu=φ kasimi-ti “haijaagwa haijaagwa”
 おじいさん=NOM かぶ=ACC つかむ-SEQ2 DSC DSC

<i>namaN</i>	<i>kabu=ja</i>	<i>nu-ki-hiij-aN</i>
まだ	かぶ=TOP	抜く-SEQ1-POT-NEG

孫がおばあさんを引っぱって、おばあさんがおじいさんを引っぱって、おじいさんがかぶを引っぱって、「うんとこしょ、どっこいしょ。」まだかぶは抜けない。

<i>mmaga=ja</i>	<i>iN=φ</i>	<i>ju-ri</i>	<i>kisa-N</i>
孫=TOP	犬=ACC	呼ぶ-SEQ2	来る.PST-IND

孫は犬を呼んできた。

<i>iN=ga</i>	<i>mmaga=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	<i>mata</i>
犬=NOM	孫=ACC	つかむ-SEQ2	また
<i>mmaga=ga</i>	<i>paapaa=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	<i>mata</i>
孫=NOM	おばあさん=ACC	つかむ-SEQ2	また
<i>paapaa=ga</i>	<i>mmee=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	<i>mata</i>
おばあさん=NOM	おじいさん=ACC	つかむ-SEQ2	また
<i>mmee=ga</i>	<i>kabu=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	“ <i>haijaagwa haijaagwa</i> ”
おじいさん=NOM	かぶ=ACC	つかむ-SEQ2	DSC DSC
<i>namanama</i>	<i>kabu=ja</i>	<i>nu-ki-hiij-aN</i>	
まだまだ	かぶ=TOP	抜く-SEQ1-POT-NEG	

犬が孫を引っぱって、孫がおばあさんを引っぱって、おばあさんがおじいさんを引っぱって、おじいさんがかぶを引っぱって、「うんとこしょ、どっこいしょ。」まだまだかぶは抜けない。

<i>iN=ja</i>	<i>majaa=φ</i>	<i>ju-ri</i>	<i>kisa-N</i>
犬=TOP	猫=ACC	呼ぶ-SEQ2	来る.PST-IND

犬は猫を呼んできた。

<i>majaa=ga</i>	<i>iN=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	<i>mata</i>
猫=NOM	犬=ACC	つかむ-SEQ2	また
<i>iN=ga</i>	<i>mmaga=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	<i>mata</i>
犬=NOM	孫=ACC	つかむ-SEQ2	また
<i>mmaga=ga</i>	<i>paapaa=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	<i>mata</i>
孫=NOM	おばあさん=ACC	つかむ-SEQ2	また
<i>paapaa=ga</i>	<i>mmee=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	<i>mata</i>
おばあさん=NOM	おじいさん=ACC	つかむ-SEQ2	また
<i>mmee=ga</i>	<i>kabu=φ</i>	<i>kasimi-ti</i>	“ <i>haijaagwa haijaagwa</i> ”
おじいさん=NOM	かぶ=ACC	つかむ-SEQ2	DSC DSC
<i>jaiga</i>	<i>kabu=ja</i>	<i>nu-ki-hiij-aN</i>	
しかし	かぶ=TOP	抜く-SEQ1-POT-NEG	

猫が犬を引っぱって、犬が孫を引っぱって、孫がおばあさんを引っぱって、おばあさんがおじいさんを引っぱって、おじいさんがかぶを引っぱって、「うんとこしょ、どっこいしょ。」しかし、かぶは抜けない。

majaa=ja *eNcu=φ* *ju-ri* *kisa-N*
 猫=TOP ネズミ=ACC 呼ぶ-SEQ2 来る.PST1-IND
 猫はネズミを呼んできた。

<i>eNcu=ga</i> ネズミ=NOM	<i>majaa=φ</i> 猫=ACC	<i>kasimi-ti</i> つかむ-SEQ2	<i>mata</i> また
<i>majaa=ga</i> 猫=NOM	<i>iN=φ</i> 犬=ACC	<i>kasimi-ti</i> つかむ-SEQ2	<i>mata</i> また
<i>iN=ga</i> 犬=NOM	<i>mmaga=φ</i> 孫=ACC	<i>kasimi-ti</i> つかむ-SEQ2	<i>mata</i> また
<i>mmaga=ga</i> 孫=NOM	<i>paapaa=φ</i> おばあさん=ACC	<i>kasimi-ti</i> つかむ-SEQ2	<i>mata</i> また
<i>paapaa=ga</i> おばあさん=NOM	<i>mmee=φ</i> おじいさん=ACC	<i>kasimi-ti</i> つかむ-SEQ2	<i>mata</i> また
<i>mmee=ga</i> おじいさん=NOM	<i>kabu=φ</i> かぶ=ACC	<i>kasimi-ti</i> つかむ-SEQ2	“ <i>haijaagwa</i> <i>haijaagwa</i> ” DSC DSC
<i>kkee</i> DSC	<i>nama=ru</i> 今=FOC	<i>kabu=ja</i> かぶ=TOP	<i>nu-zja-N</i> 抜く-PST1-IND

ネズミが猫を引っぱって、猫が犬を引っぱって、犬が孫を引っぱって、孫がおばあさんを引っぱって、おばあさんがおじいさんを引っぱって、おじいさんがかぶを引っぱって、「うんとこしょ、どっこいしょ。」あらあら、ようやくかぶは抜けた。

*1 外間守善（1985）では、次のように今帰仁方言、久高方言、首里方言の形態が示されている。

今帰仁方言：条件形 *jumiba* 継続形 *judun* / 久高方言：条件形 *jumiba* 継続形 *juru:n*
 首里方言：条件形 *jume:* 継続形 *judo:n*

その他、否定形、意志形、命令形、連用形、接続形、過去形が示されているが、3つの方言において、これらは音声上のヴァリエントの関係にあり、形態としては同一のものと見なすことができる。

*2 勧誘形、基本形は「行く」に対応する形式で、第2中止形 *N-zi* は「往ぬ」形式の「往にて」に対応するので、第2中止形の形式のみ不規則になっている。

*3 *ukiN*（起きる）は *ukiru* で、長音化しない。音節数によって区別があると考えられるが、長音化するものとししないものとの区別は未調査である。

*4 中南部方言である首里方言や大山方言の場合、条件形に *-aa/-wa* 形式 (*jumaa* 首里/*jumawa* 大山)、*-ne(e)* 形式 (*jumine(e)*)、*-ee* 形式 (*jumee*) の3形式が見られる。しかし、津堅方言では、*-ba* 形 (*jumiba*) と *-ne* 形 (*jumine*) の2形式である。

*5 条件形の使用実態や意味機能の差についてはより詳細に記述する必要があるが、今後の調査課題である。

グロス一覧

ABL	ablative	奪格	LOC1	locative	場所格 Nka 形
ACC	accusative	対格	LOC2	locative	場所格 Nzi 形
ADD	additive	添加	LOC3	locative	場所格 uti 形
ADJ	adjectivizer	形容詞化	NEG	negative	否定
ADN	adnominal	連体/名詞化	NOM	nominative	主格
ALL	allative	向格	NPST	non past	非過去
COND	conditional	条件	PASS	passive	受身
COP	copula	コピュラ	PL	plural	複数
CSL	causal	理由	PROG	progressive	進行
DAT	dative	与格	PST	past	過去
DIM	diminutive	指小辞	PURP	purposive	目的
DSC	discourse marker	談話標識	Q	question particle/ marker	疑問
FOC	focus	焦点	QUOT	quotative	引用
GEN	genitive	属格	REC	recitation	列举
IMP	imperative	命令	SEQ1	sequential converb	中止形 1
IND	indicative	終止形	SEQ2	sequential converb	中止形 2 = テ形
INFR	inferential	推量	SEQ3	sequential converb	先行形
INST	instrumental	具格	SFP	sentence-final particle	終助詞
INT	intentional	意志	TOP	topic	主題

八重山語・宮良言葉：
めーらむに

記述文法と学習資料に向けた形容詞の記述

八重山語・宮良言葉：記述文法と学習資料に向けた形容詞の記述

クリストファー デイビス
Christopher Davis

1 概要

本報告書では、八重山語・宮良言葉の記述と継承に向けた資料として協力者に訳してもらった「大きなかぶ」の書き起こしを紹介し、その一部で使われる形容詞表現に焦点を当て、宮良言葉における形容詞の特徴を記述する。

宮良言葉の「形容詞語幹」として分析するものは、主に以下の三つの方法で使われることがある：

1. 形容詞語根が名詞の直前につけることによって、複合名詞を作る方法
2. 形容詞語根に接尾辞 *-ha* が付き、ハ形容詞として活用する方法
3. 形容詞語根が重複して、重複形に *-i* が付き、重複形容詞として活用する方法

これらの方法による形を、それぞれ「複合形容詞・ハ形容詞・重複形容詞」と呼び、形容詞語幹「グマ」*guma*（小さい）を例に示す：

複合形	ハ形	重複形
グマフツィ	グマハーン	グマーグマイ
<i>guma+fucī</i>	<i>guma-haa-n</i>	<i>gumaa-guma-i</i>
小さい+口	小さい-ADJ-PRS. IND	小さい-RED-ADJ
口の小さな人	小さい	小さい

複合形容詞とは、形容詞語幹が名詞に直接に付き、一種の「複合語」をなす形で現れるものである。ここでは、形容詞語幹「グマ」*guma* が、「フツィ」*fucī*（口）という名詞に直接に付くことによって「グマフツィ」*guma+fucī* という複合形ができる。複合形容詞の一つの特徴として、「非構成的」であることを指摘する。要するに、形容詞語幹と名詞語幹による複合語は、その要素からだけでは予測できない意味をなすことがある。例えば、上の「グマフツィ」*guma+fucī* は、「小さな口」という意味ではなく、「小さな口を持っている人」という意味になるようである。

形容詞語幹に接尾辞「ハ」*-ha*（または「ハー」*-haa*）をつけることによって、ハ形容詞が派生される。ここでは、ハ形容詞に接尾辞「ン」*-n* をつけることによって、典型的に「（現在）終止形」と呼ばれる形になっている。この形は、辞書などでは原型として扱われるこ

とが多い。修飾語として使われるときは、接尾辞「ン」-n の代わりに「ル」-ru をつけなければならない。例えば、「小さい人」は「グマハール プイトウ」guma-haa-ru pitu となる。複合形と比べると、ハ形容詞が名詞に修飾するときの句の意味は構成的である。例えば、「グマハール フツィ」guma-haa-ru fuci はそのまま「小さい口」という意味になる。

最後に、重複形は、形容詞語幹を繰り返して、その後ろに接尾辞「イ」-i をつけることによって派生される形をとる。重複される語幹の一回目のものは、最後の母音が伸ばされて、長母音として発音される。例えば、上の「グマ」の重複形「グマーグマイ」gumaa-guma-i を作るには、「グマ」guma を繰り返し、一回目のものを「グマー」gumaa と伸ばし、二回目のものに「イ」-i をつけて派生される。また、ハ形容詞と同じく、重複形容詞を修飾語として使われる場合は「イ」-i の後ろに接尾辞「ル」-ru が付く。

形容詞の語幹の中に、どの形でも現れるものと、一部の形だけで現れるものがある。ハ形容詞では、母音調和が起こるため、語幹に付く「ハ」は、語幹の最後の母音によって「へ」や「ホ」として現れる。以下で記述する「くいんくいいる」kin-ki-i-ru (黄色い) 以外は、これまでの調査ではどの形容詞の語幹もハ形容詞として使われることがあるが、重複形容詞として使えるものは限られているようである。そして、重複形容詞として使われる場合、予測しにくい音韻変化も観察される。以下で、これらの形の特徴を簡単に述べる。

2 「大きな大根」における形容詞表現

以上で紹介したハ形容詞と重複形容詞の詳しい記述に入る前に、本調査で録音した「大きな大根¹」の一部の書き起こしにおける形容詞表現を紹介する。形容詞表現は、下線が引かれた太文字で表記した。

かっだがな一ぬ	<u>まぎ</u> だいくに
kaddaganaa=nu	<u>magi</u> +daikuni
これほど=GEN	大きい+大根
とても	大きな大根

ある	どうすい	あっちえーんどう	だいくにば	いぼーれーる。
ar-u	tusi	accyee=ndu	daikuni=ba	ib-oor-ee-ru.
ある-PRS	年	おじいさん=NOM. FOC	大根=OBJ. FOC	植える-HON-PRF-PRS
ある	とき	おじいさんが	大根を	お植えになった。

¹ カブは、もともと島にないということで、原文の「大きなかぶ」はここで「大きな大根」と直された。

<u>あまはーる</u>	でーずいぬ	しゆく	<u>あまはーる</u>	だいくに	なり
<u>ama-haa-ru</u>	deezī=nu	syuku	<u>ama-haa-ru</u>	daikuni	nar-i
甘い-ADJ-PRS	大変=GEN	程	甘い-ADJ-PRS	大根	なる-MED
甘い	とても		甘い	大根に	なって

<u>まいへーる</u>	<u>まいへーる</u>	だいくに	なり
<u>mai-hee-ru</u>	<u>mai-hee-ru</u>	daikuni	nar-i
大きい-ADJ-PRS	大きい-ADJ-PRS	大根	なる-MED
大きな	大きな	大根に	なって

<u>あまはーる</u>	<u>ばがーばがいる</u>	かっだがなーぬ	<u>まいへーる</u>
<u>ama-haa-ru</u>	<u>bagaa-baga-i-ru</u>	kaddaganaa=nu	<u>mai-hee-ru</u>
甘い-ADJ-PRS	若い-RED-ADJ-PRS	これほど=GEN	大きい-ADJ-PRS
甘くて	みずみずしくて	とっても	大きな

だいくにんどう	でいき	ちよー。
daikuni=ndu	diki	cyoo.
大根=NOM. FOC	できる.PST	HS
大根が	できた	という。

「大きな大根」の最初の一部に、次のような形容詞表現が使われている。まず、「大きい」の意味を表すに、複合形容詞として「マギ」magiが使われ、「ダイクニ」daikuni（大根）に付くことで「マギダイクニ」magi+daikuni（大きな大根）の複合語をなしている。この語幹は、そのままハ形容詞としては使われない。ハ形容詞における「マギ」に相当する語幹は「マイ」maiとなり、ここでは（現在）連体形のmai-hee-ruとして使われている。「マイ」はiで終わっているため、母音調和が起るため接尾辞は「ハ」haではなく「へ」heとして現れる。

「大きな大根」の意味を表すものとして「ウフダイクニ」ufu+daikuniという複合語も話の続きで使われる（以上の一部では使われていない）。この複合語で使われている「ウフ」ufuは、複合形容詞であるが、ハ形容詞や重複形容詞の語幹として使われないようである。ハ形容詞の「ウフホーン」ufu-hoo-nは、同音の語幹ufuからできているが、意味は全く違う「多い」を表し、無関係の語幹である。これらの語幹は、他の琉球諸語でも広く観察される。

「バガバガイル」bagaa-baga-i-ruという重複形容詞も上の書き起こしで観察される。この形容詞の語幹は「バガ」bagaであり、日本語の「若」に相当するが、ここでは「みずみずしい」に近い意味で使われている。同じ語幹が複合形容詞（例：「バガムヌ」baga+munu 若者）やハ形容詞（「バガハーン」baga-haa-n）としても使われる。

以下では、ハ形容詞と重複形容詞の他の活用形や特徴をまとめ、最後に語幹の最後の音による音声的・形態的な特徴をより詳しく説明する。

3 ハ形容詞の特徴

形容詞語根に「ハ」ha または「ハー」haa を付けて、活用型形容詞「ハ形容詞」が作られる。例えば、形容詞語根 guma に ha(a) を付けて、guma-ha(a) という形を作ることができる。これに直説法接尾辞（伝統的な概念では「終止形」をなす接尾辞）「ン」-n を付けて、「グマハーン」guma-haa-n（または guma-ha-n）となり、ハ形容詞の原型（いわゆる現在終止形）をなす。

接尾辞「ハ」に伴う母音を以下で長母音として表記するが、実際の発音では長母音・短母音の違いが著者にとって判断しにくい場合があり、おそらくまだ明確でない音韻上の法則や傾向により長母音と短母音の対比が曖昧になる（または、長母音が短母音化する）現象があると思われる。以下では、この曖昧さを無視し、すべてのハ形容詞におけるハ接尾辞を長母音で表記する。

一つの大きな音韻的な特徴として記述しなければならない点は「ハ」接尾辞における母音調和である。「ハ」が付く語根が i または e で終わる場合は「ヘ」he として現れ、語根が u または o で終わる場合は「ホ」ho として現れる。また、中舌母音 i で終わる語幹の場合、「ハ」ではなく「サ」sa が付くことも観察される。

a 語幹	i/e 語幹	u/o 語幹	i 語幹
グマハーン guma-haa-n	カイヘーン kai-hee-n	アウホーン au-hoo-n	スィーサーン sīi-saa-n
小さい	美しい	青い	すっぱい
インシカハーン insika-haa-n	マイヘーン mai-hee-n	ウフホーン ufu-hoo-n	
短い	大きい	多い	

i 語幹における h から s への変化は、調和母音とは別の音韻的現象である。八重山語の他の地域の言葉や琉球諸語を広く考えると、歴史的にはおそらく「サ」の形が古いと思われる。この古い形が i 語幹だけで残っているという見方ができる。また、別の考え方として、中舌母音の音声特徴である s や z に近い摩擦音を伴う特徴から、h から s への音韻変化を共時的な音韻ルールとして考えることもできる。

これまで紹介したハ形容詞の活用形は、接尾辞-haa に「ン」-n または-ru をつけることによって、それぞれが伝統的に「終止形」と「連体形」の活用形をなす。「ン」-n 接尾辞で終わるものを「終止形」として扱う問題点はこれまでの研究で指摘されてきた（例えば、伊豆山 2002）。上のどちらの形も解釈上では「現在」もしくは「非過去」の意味を表すため、「ン」-n と「-ru」を現在・非過去の時制を表す機能を持っているとも考えられる。この 2 つの「現在形」以外に、以下のような活用形も存在する（ここ「ンマハーン」mma-haa-n（美味しい）を例として使っている）：

過去形	否定（現在）形	強調（現在）形
ンマハーダ	ンマハネーヌ	ンマハダル
mma-haa-da	mma-ha-neenu	mma-ha-dar-u
美味しい-ADJ-PST	美味しい-ADJ-NEG-PRS	美味しい-ADJ-FOC-PRS
美味しかった	美味しくない	美味しい

ハ形容詞の否定形を表す接尾辞「ネーヌ」-neenu は、存在動詞「アル」aru の否定形と同じ形である。強いて言えば、この形を「否定現在形」と呼んだ方が正しく、「過去否定形」は存在動詞のと同じく「ネーナーダ」-neenaa-da で表す（例えば、「美味しくなかった」は「ンマハネーナーダ」mma-ha-neenaa-da）。

ここで「強調形」と名付けた活用形は、おそらく焦点助詞「ドゥ」=du が使われるmma-ha=du ar-u から省略されたものであろう。否定形からも強調形からもわかるように、ハ形容詞の活用形は、歴史的には存在動詞「アル」と関係があると思われる。その分析を直接に維持する現象として、以下の様な形も確認できる：

- (1) ヤハ アローラヌ？
ya-ha ar-oor-an-u?
ひもじい-ADJ ある-HON-NEG-PRS
ひもじく ありませんか

ここでは形容詞語幹に「ハ」をつけた形に、「アル」が軽動詞的な働きをして、これに尊敬語を表す接尾辞 -oor- と否定接尾辞 -an と現在接尾辞 -u が付く。このような分析的な表現は基本的にゆっくりで発音されるときだけに現れるようであり、普通で話すときは以下のような形が使われるようである：

- (2) ヤハーローラヌ？
ya-haar-oor-an-u?
ひもじい-ADJ-HON-NEG-PRS
ひもじくありませんか？

ハ形容詞は以上の理由から、少なくとも歴史的には「ハ+アル」から派生されたものと考えられる。

形容詞語幹に「ハ」または「ハー」を付けた形は、そのまま副詞的な表現として使われることがある。例えば、以下の例では「インシカハー」insika-haa（短く）が軽動詞「ナル」と組み合わせて副詞的に使われている：

- (3) インシカハー ナリドゥル。
insika-haa nar-i-du-ru.
短い-ADJ なる-PROG-FOC-PRS
短く なっている

4 重複形容詞の特徴

ハ形容詞とくらべて、重複形容詞はまだ不明な点が多いため、これからの調査が必要である。ハ形容詞とは違って、重複形容詞は一部の形容詞語幹でしか作れないようである。重複形の有無を予測できる法則があるかは不明である。

形容詞語幹から重複形容詞を作る場合、以上で説明したように一回目の語幹の最後の母音が伸びて長母音として発音される。この他に、二回目の語幹の最初の音節が落ちるものもある。例えば、「短い」の意味を表す形容詞語幹は「インスイカ」insika であり、ハ形では「インスイカハーン」insika-haa-n となるが、重複形では「インスイカースイカイ」insikaa-sika-i となり、最初の「イン」が二回目の語幹から落ちる。こういった音節脱落の法則の解明も、今後の調査が必要である。

最後の問題として、重複形とハ形との間の意味的な違いの問題がある。現時点ではその違いの詳細はまだ不明であるが、すくなくとも言えることは、重複形が「程度が高い」ことを表さないことである。例えば、「ンガ」nga（苦い）から作られる重複形「ンガンガイ」ngaa-nga-i は、「とても苦い」のような意味を表さないようである。ハ形容詞との意味的な違いについては、今後の調査で明確にする必要がる。

最後に、重複形の強調形を簡単に紹介する。ハ形容詞の強調形は上で述べたように語幹に hadaru をつけることによって作られる。これに対して、重複形の強調形を表す接尾辞は duru となる。例えば、「インスイカ」insika（短い）の重複強調形は、「インスイカースイカイドゥル」insikaa-sika-i-duru である。これ以外にも、ハ形容詞と興味深い対照的な活用形をなすことはあるが、今後の研究の課題とする。

5 代表的な形容詞の比較表

上で記述したハ形容詞と重複形容詞の代表的なものを以下でまとめる。語幹の最後の音素による音声特徴をわかりやすくするため、語幹別にまとめた。また、参考のために「石垣方言辞典」に記述されている形も載せた。未確認の形は空にし、話者が存在しないと報告したものは×を付けた。

a 語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
短い insika	インスイカハーン insika-haa-n	インスイカースイカイ insikaa-sika-i	インツィカサーン incika-saa-n
はやい paya	パヤハーン paya-haa-n	パヤーパヤイ payaa-paya-i	パイシャーン pai-syaa-n
憎たらしい nifa	ニファハーン nifa-haa-n	ニファーニファイ nifaa-nifa-i	ニファサーン nifa-saa-n
苦い nga	ンガハーン nga-haa-n	ンガンガイ ngaa-nga-i	ンガサーン nga-saa-n

甘い ama	アマホーン ama-haa-n	アマーマイ amaa-(a)ma-i	アマサーン ama-saa-n
美味しい mma	ンマホーン mma-haa-n	ンマーマイ mmaa-ma-i	ンマサーン mma-saa-n
しょっぱい sakura	サクラホーン sakura-haa-n	サクラーサクライ sakuraa-sakura-i	サクラサーン sakura-saa-n
狭い iba	イバホーン iba-haa-n	イバーイバイ ibaa-iba-i	イバサーン iba-saa-n
小さい guma	グマホーン guma-haa-n	グマーグマイ gumaa-guma-i	グマサーン guma-saa-n
甘い azīma	アズイマホーン azīma-haa-n		アズイマサーン azīma-saa-n
近い cīka	ツィカホーン cīka-haa-n	×	ツィカサーン cīka-saa-n

u/o 語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
軽い kar(u o)	カルホーン kar(u o)-hoo-n	カローカロイ karoo-karo-i	カラサーン kara-saa-n
柔らかい fukuru	フクルホーン fukuru-hoo-n	フクローフクロイ fukuroo-fukuro-i	フクルサーン fukuru-saa-n
広い pīsu	ピソホーン pīsu-hoo-n	ピソープイスイ pīsoo-pīsu-i	ピスサーン pīsu-saa-n
強い cyoo	チョーホーン cyoo-hoo-n		ツァサーン cuu-saa-n
遠い too	トホーン too-hoo-n		トゥァサーン tuu-saa-n
低い maaru	マールホーン ma(a)ru-hoo-n		マラサーン mara-saa-n
低い hiku	ヒクホーン hiku-hoo-n		ヒクサーン hiku-saa-n
古い furu	フルホーン furu-hoo-n	×	フルサーン furu-saa-n
遅い fuku	フクホーン fuku-hoo-n	×	フクサーン fuku-saa-n

i/e 語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
涼しい pirigi	ピリギヘーン pirigi-hee-n	ピリゲーピリゲー pirigee-pirige-e	ピラギシャーン piragi-syaa-n
美しい kai	カイヘーン kai-hee-n		カイシャーン kai-syaa-n
多い takari	タカリヘーン takari-hee-n	×	??

i 語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
熱い aci	アツァーン ac-caa-n	アツィーツイイ aciī-ciī-i	アツァーン ac-caa-n
酸っぱい sii	スィーサン sii-saa-n	×	スィーサン sii-saa-n

子音語幹	ハ形	重複形	石垣方言辞典
遅い nif	ニッフアーン nif-faa-n	×	ニフサーン / ニッサーン nifu-saa-n / nis-saa-n
重い if	イッフアーン if-faa-n	×	イッサーン is-saa-n
黄色い kīn	??	くいんくいい kīn-kī-i	クインサーン kīn-saa-n

参考文献

- 石垣實佳 (2013) 『メーラムニ用語便覧』 南山舎
 宮良婦人会 (2012) 『宝ぬ島言葉』 宮良婦人会
 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』 沖縄タイムス社
 伊豆山敦子 (2002) 「琉球・八重山(石垣宮良)方言の文法」『消滅に瀕した方言語法 の緊急調査 研究(1)』 「環太平洋の言語」 成果報告書 A4-004

本論文におけるデータは宮良の方々の協力によるものである。宮良のことばを教えて下さる方々に感謝の意を表す。本論文を完成させるにあたって、多大な協力を頂いた新垣重雄氏に深く感謝申し上げます。データや分析に誤りがあった場合は、著者の責任であるものとする。

沖縄県黒島方言の動詞・形容詞・談話

沖縄県黒島方言の動詞・形容詞・談話

荻野千砂子（福岡教育大学）

原田走一郎（国立国語研究所）

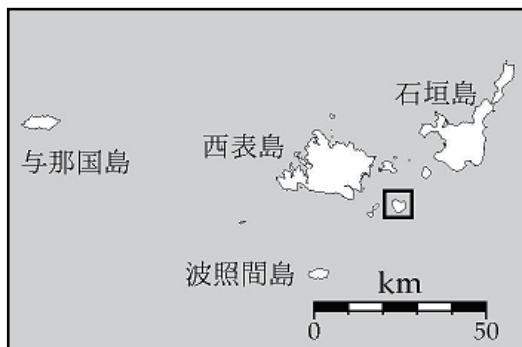
0. 沖縄県八重山郡竹富町黒島

竹富町は石垣島から見て南西方向にある大小 16 の島からなる。黒島は東経約 124 度、北緯約 24 度の位置にあり、石垣島から南南西に約 17 km 離れている。石垣島から高速船に乗ると約 30 分で黒島港に着く。黒島の面積¹は 10.02 km²、島の形はハート型をしており、地形としては平坦な島である。

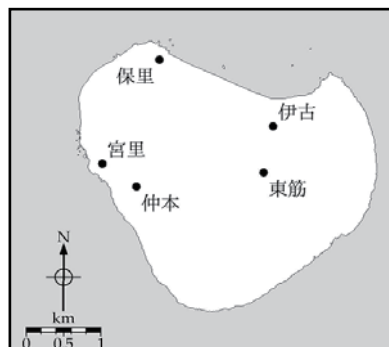
黒島の人口は 216 人で²、島内には、宮里（みやざと）、仲本（なかもと）、保里（ほり）、東筋（あがりすじ）、伊古（いこ）の 5 つの集落がある。この中で現在宮里集落には外部からの移住者のみが住んでいる。従って黒島方言が使用されているのは、東筋・仲本・保里の 3 集落となる。集落の規模では東筋集落が最も大きい。そのため、東筋集落が黒島方言の代表とされることが多いが、仲本集落・宮里集落・保里集落とで異なる場合があり、注意が必要である。かりまたしげひさ(2010)では、東筋集落と仲本集落で母音の長さが違うことや、子音が異なることが指摘されている（例：[s]〈東筋〉対 [ts]〈仲本〉など）³。また、伊古は糸満からの漁業従事者が居住していた集落であり、黒島方言とは異なると認識されている。

今回の調査では、東筋集落の男性 1 人、女性 2 人、保里集落の男性 1 人、女性 1 人、仲本集落の男性 1 人に御協力を頂いた。黒島では畜産業が盛んであり、70 歳 80 歳の方でも仕事に従事している。また、漁業や観光業に携わる方々もいて、それぞれの仕事の合間に時間を作って調査に協力して下さった。話者の方々の多大な御協力に感謝を申し上げる。

地図 1 八重山諸島の黒島の位置



地図 2 黒島の集落の位置



1 国土地理院 HP より。

2 竹富町役場 HP 竹富町地区別人口動態表（平成 29 年 1 月末）より。

3 かりまたしげひさ (2010) 「八重山黒島東筋方言と黒島仲本方言」『琉球八重山方言の言語地理学的な研究』平成 19. 20. 21 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書

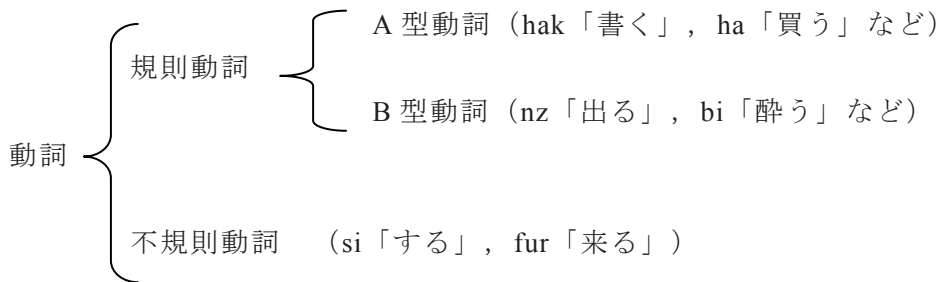
(地図 1, 2 は Thomas Pellard 氏の作成による)

1. 動詞活用

本節では黒島東筋方言の動詞の活用タイプについて述べる。

東筋方言の動詞の活用タイプは、以下のように分類される。

(1) 黒島東筋方言の動詞活用タイプ



動詞活用タイプはまず大きく不規則動詞と規則動詞に分けられる。不規則動詞には2つの動詞, si 「する」と fur 「来る」が含まれる。規則動詞は2つのタイプ, A 型と B 型に分けられる。おおまかに A 型は日本語共通語の子音語幹動詞に, B 型は母音語幹動詞に対応するが, あくまで傾向である。また黒島東筋方言の語根を基準に考えた見た場合, 語根末音での区別は意味をなさない。

A 型動詞は, 非過去-u, 過去-(u)ta, 勧誘-a, 否定-an, いわゆる連用-i, 中止-iti などの接尾辞をとる。以下の例では, 飛ぶ, 漕ぐ, 行く, 降る, 蹴る, 切る, 掘る, 持つ, 買う, もらう, 飲む, 食べる, 遊ぶ, 洗う, かぶる, 寝る, 着る, 見る, 言う, 死ぬ, ある, が該当する。

B 型動詞は, 非過去-iru, 過去-ita, 勧誘-u, 否定-un, いわゆる連用-i, 中止-iti などの接尾辞をとる。以下の例では, 降りる, 落ちる, 捨てる, くれる, 酔う, 閉じる, 起きる, 座る, が該当する。

なお, 落とす, 売る, などは使役接尾辞が後接するかたちになっており, 特殊な活用を示す。過去は-itaでありB型と共通するが, 否定は-anでありA型と共通する。また, 動詞の活用に関しては, 本稿末に原田・荻野 (2015) を参考文献として挙げているのでそちらも参照してほしい。

以下, 動詞の活用の例を挙げる。表記は簡易的な音声表記とした。注意すべき表記として「c」をあげる。「c」は無声歯茎破擦音[ts]を原則として表すが, 「ci」の場合は口蓋化し, [tci]で実現する。=は接語境界を表す。また, (2)~(95)は荻野が担当し採取した用例であり, (96)~(182)は原田が担当して採取した用例である。黒島方言における助詞「は」の分析等形態素に関して両者の見解が異なるため, (96)~(182)では簡易音素表記を一行目に書き, 二行目に形態素に分析した形を書くこととした。黒島方言は形態音韻規則が多いため, ここではカバーしきれない。この点については原田 (2016) を参照のこと。

- (2) garasaa=jun patu=n taka=n muuru tubi paru=waja.
カラスも鳩も鷹も飛んでいったよ。
- (3) ubu tun=nu tubi beer.
大きい鳥が飛んでいた。
- (4) kjuu=ja waasiki=nu wassa=tti hikooki=nu tubanu=waja.
今日は天気が悪いから、飛行機が飛ばないよ。
- (5) manuma tun=nu tubi patta=waja.
今、鳥が飛んだよ。
- (6) tubi uri miri.
飛び降りてみろ。
- (7) keera=si huni=ju kuu=dura.
みんなで船を漕ぐよ。
- (8) taaru=n huni koonun=dura.
誰も船を漕がないよ。
- (9) manuma keera=si huni=ba kui buu=dura.
いま、みんなで船を漕いでいるよ。
- (10) uva=n huni=ju kui=ti atu=hora jakui.
おまえも船を漕いで、後から休め。
- (11) ubuza mainici tuman=ha paru=dura.
おじいさんは毎日海へ行くよ。
- (12) waasike=nu jabiriba tuman=ha paranun=dura.
天気が悪いから海へ行かないよ。
- (13) kinoo=ja tuman=ha pareetan=dura.
昨日は海へ行ったよ。
- (14) bana tuman=ha gii=tti onda=du siiru./ ui=tti kee=doo.
私は海へ行って、泳いだ。/泳いできた。

- (15) uva tuman=ha=ja tanka gi=tti kuu.
おまえは海へ一人で行ってこい。
- (16) kjuu=ja dusinkii=nu jaa=ha fuu=dura.
今日は友達が家に来るよ。
- (17) ubuza kjuu=ja jaa=ha kuunun=dura.
おじいさんは今日は家に来ないよ。
- (18) kinu dusinki=nu jaa=ha keetan=dura.
昨日、友達が家に来たよ。
- (19) ituku=ja manuma jaa=ha ken=dura.
いとは、今、家に来ているよ。
- (20) kii bun=dura.
(何日もよく) 来ているよ。
- (21) uma=ha kuu.
こっちへ来い。
- (22) uva ittuki uma=ha kii miri.
おまえ、ちょっとこっちに来てみろ。
- (23) munuma sugu ami=nu vuu=waja.
もうすぐ雨が降るよ。
- (24) kutusee ami=nu vaanu=wara.
今年は、雨が降らないね。
- (25) kinoo=ja ami=nu vetta=waja.
昨日は、雨が降ったよ。
- (26) manuma ami=nu vii buu=dura.
今、雨が降っているよ。
- (27) uma=na uriru=waja.
ここで降りるよ。

- (28) bana uma=n=na urunun dura.
私, ここでは降りないよ。
- (29) bana uma=n=du basu=hora uri=dura.
私はここでバスから降りたよ。
- (30) basu=ba uri=ti denwa hakiriba.
バスを降りて, 電話をかけなさい。
- (31) usitu=nu basu=hara uri keehen=dura.
弟がバスから降りてきたよ。
- (32) uma=na uru.
ここで降りよう。
- (33) san=nu kii=hara uti=waja.
猿も木から落ちる。
- (34) san=nu kii=ba ookasi buru=nu utunu=waja.
木を揺らしても, 猿は落ちないよ。
- (35) niisan=nu kii=hara uti=waja.
お兄さんが木から落ちた。
- (36) niisan=nu kii=hara uti=te manuma bjooin=na=du buu=waja.
兄さんが木から落ちて, 今, 病院にいるよ。
- (37) kunu san=na kii=nu mi=ja utahanu=waja.
この猿は木の実を落とさないよ。
- (38) kinu haa=ha isi=ba utasee=waja.
昨日, 井戸に石を落とした。
- (39) boosi=ba utasi=ti turi=n geetta=waja.
帽子を落として, 取りに行ったよ。
- (40) uva kii=nu ui=ha noori=ti naru utahai.
あなたが木の上のにのぼって, 実を落とさないよ。

- (41) usi=n mma=n pan=si pusu=ju kiru=waja.
牛も馬も人を蹴るよ。
- (42) unu mma utunasa=tti pusu=ju kiranu=waja.
この馬はおとなしくて，人を蹴らないよ。
- (43) hanu mma kinoo pusu=ba kiree dura.
あの馬は，昨日，人を蹴ったよ。
- (44) pusu=ba kiri=ti sugu paressu=waja.
人を蹴って，すぐ逃げたよ。
- (45) unu booru=ju uma=ha kiri parahai.
そのボールをこっちに蹴ってくれ。
- (46) usitu=nu mainici fukuzi=ju sitiru=waja.
弟が毎日ごみを捨てるよ。
- (47) bana vuu kin=jun atarasa=tti situnun=dura.
私は古い着物がもったいなくて捨てないよ。
- (48) manuma sititta=waja.
今捨てたよ。
- (49) vuu munu=ja siti=ti ara munu=ba haiba.
古い物を捨てて，新しいものを買いなさい。
- (50) manuma=hara kisun=dura.
今から切るよ。
- (51) uma=nu kii=ja kisanun=dura.
こっちの木は切らないよ。
- (52) nukin=si manuma kisen=dura.
のこぎりで今切ったよ。
- (53) kii=ju kisi unu juda=ju marakiba.
木を切って，枝を全部たばねなさい。

- (54) see=nu unu kii=ba maka maka kisi buru=waja.
お兄さんが、この木を短く切っているよ。
- (55) iza tun=nu pan=ba fubiri usukee=waja.
お父さんが鳥の足をしばっておいたよ。
- (56) manuma fubiritta.
今、縛ったよ。
- (57) uva tun=ju fubiri viiri.
あなたが、鶏を縛ってくれ。
- (58) kjuu=ja un=na puranun=dura.
今日は、芋は掘らないよ。
- (59) uri=si=du un=na putta=tti=ju.
それで芋は掘ったってよ。
- (60) uva un=ba puri=ti ittuki jakuiba.
あなた、芋を掘って、少し休みなさい。
- (61) uma=nu un=ba puri kuba.
あそこの芋を掘ってこい。
- (62) ami=nu pin=na dango nzahanun=dura.
雨の日には、荷物を出さないよ。
- (63) dusinkii=nu dangu minaha=ha nzasee=dura.
友達が荷物を庭に出したよ。
- (64) nii dangu=ju minaha=ha nzasi=ti=hera hairiba.
荷物を庭に出してから帰れよ。
- (65) guffa=tara mazun nzaha.
重かったら、一緒に出そう。
- (66) paaku nii dangu=ba nzasi kuu.
早く荷物を出してこい。

- (67) usitu tanka=si icinnu nimucu=ju(nii=ju) mutun=dura.
弟はいつも一人で荷物を持つよ。
- (68) paa=ja icinnu nii=ja mutanun=dura.
おばあさんは、いつも荷物を持たないよ。
- (69) usitu=n musu=ba mute=waja.
弟も筵を持った。
- (70) taro=n=du saki=ba muti=te hanako=ja okazu=ba mutee.
太郎は酒を持って、花子はおかずを持った。
- (71) paaku saki=ba muti kuu.
早く酒を持ってこい。
- (72) mazun mutaa.
一緒に持とう。
- (73) un=naa haanu=nu=du mai=ja hau=dura.
いもは買わないが、米は買うよ。
- (74) taaru=n un=na haanun=dura.
誰もいもは買わないよ。
- (75) bana kinoo izu=ba hajaata=waja.
私は昨日魚を買ったよ。
- (76) ava=ba hai kuu.
油を買ってこい。
- (77) mainici jasai=ju haasu=waja.
毎日野菜を売るよ。
- (78) unu psou duu=nu waa=ja haahanun=dura.
あの人は自分の豚を売らないよ。
- (79) haasitta=waja.
売ったよ。

- (80) pisida=ba haasi=tti usi=ba hajaa=dura.
山羊を売って、牛を買ったよ。
- (81) unu usi=ju ban=ha haasi taboori.
この牛を私に売ってください。
- (82) bana icinnu=n usitu=ho koosi=ba vii buu=dura.
私はいつも弟にお菓子をやるよ。
- (83) unu ffa=ha=ja vuunun.
この子にはやらないよ。
- (84) usito=ho=ja joohuku=ba vii=ti midumunu=nu usito=ho=ja giipa=ju vitta=waja.
弟に洋服をやって、妹にかんざしをやったよ。
- (85) bana joohuku=ba vii buu=dura.
私は弟に洋服をやるよ。
- (86) vii miriba.
あげてみたら。
- (87) gumaa gumaa=nu han=na taaru=n iiranun=dura.
小さなカニは誰ももらわないよ。
- (88) tunan=nu pso=hara daikuni=ba iire=dura.
隣の人から大根をもらったよ。
- (89) baso baso=ja tunan=nu pso=hara izu=ba iiri buu=dura.
時々隣の人から魚をもらうよ。
- (90) ubu izu=ba iiri=ti keera=si bakita=dura.
大きな魚をもらって、みんなで分けた。
- (91) baa butoo saki=ja mumanun.
私の夫は酒を飲まない。
- (92) saa=ja kisa numeeta=waja.
お茶はさっき飲んだよ。

- (93) taroo saki=ba numi buru=waja.
太郎は酒を飲んでいるよ。
- (94) fusin=ba paaku numi=titi nivi.
薬を早く飲んで寝ろ。
- (95) unu fusin=na amahariba paaku numi miri.
この薬は甘いから早く飲んでみろ。
- (96) junainu iiba vaiti kee.
junai=nu ii=ba vvaiti kee.
夜ご飯は食べてきた。
- (97) pisidaa zaajudu voo.
pisida=a zza=ju=du vvoo.
ヤギは草を食べる。
- (98) pisida habiju vaanun.
pisida habi=ju vvaanun.
ヤギは草を食べない。
- (99) majanudu izuba vootta.
maja=nu=du izu=ba vvootta.
猫が魚を食べた。
- (100) muuru vai naanun.
muuru vvai naanun.
全部食べてしまった。
- (101) pukana asabu.
puka=na asabu.
外で遊ぶ。
- (102) vaaffa nakka asabanun.
vvaffa narka asabanun.
暗くなると遊ばない。
- (103) pukanadu asabuta.
puka=na=du asabuta.
外で遊んだ。

- (104) asabidu bur.
asabi=du bur.
遊んでいる。
- (105) gakkona asabidu haitta
gakko=na asabi=du haitta.
学校で遊んで帰った。
- (106) pukana asabidu kuu.
puka=na asabi=du kuu.
外で遊んで来い。
- (107) unu sakee sugu biitari sii.
unu saki=a sugu biitari sii.
この酒はすぐ酔っばらう。
- (108) unu sakee sugoo bjuunundo.
unu saki=a sugu=a bjuunun=do.
この酒はすぐには酔わないよ。
- (109) uraari numiti biita.
uraari numiti biita.
たくさん飲んで酔った。
- (110) unu pusoo biidu buruwaja.
unu pusu=a bii=du buru=waja.
この人は酔っているよ。
- (111) biitaridu kinoonu kutu bassi naanunwaja.
biitari=du kinoo=nu kutu bassi naanun=waja.
酔っばらって昨日のことを忘れてしまった。
- (112) uraari numitidu bii naansa
uraari numiti=du bii naan=sa.
たくさん飲んで酔ってしまった。
- (113) mainici amazanu kiiju araun.
mainici amaza=nu kii=ju araun.
毎日髪の毛を洗う。

- (114) ubuzaa mainicjee kiiju araanun.
 ubuza=a mainici=a kii=ju araanun.
 おじいさんは毎日は毛を洗わない。
- (115) tiipanju arauta.
 tiipan=ju arauta.
 手足を洗った。
- (116) abunudu tirba arai buu
 abu=nu=du tir=ba arai bur.
 お母さんがザルを洗っている。
- (117) tiipanba araiti iija vaiba.
 tiipan=ba araiti ii=a vvai=ba.
 手足を洗って、ご飯を食べろ。
- (118) siran araiti kuu.
 sira=n araiti kuu.
 顔も洗ってこい。
- (119) marumahara habun.
 maruma=hara habun.
 今からかぶる。
- (120) tarn kubagasaju habanunwaja.
 tar=n kubagasa=ju habanun=waja.
 誰もクバ笠をかぶらないよ。
- (121) baharu sjee keeja kubagasaju habuttan.
 baharu sjee kee=a kubagasa=ju habuttan.
 若い頃はクバ笠をかぶった。
- (122) kubagasabadu habi buu.
 kubagasa=ba=du habi bur.
 クバ笠をかぶっている。
- (123) kubagasaba habidu sababa fumetta.
 kubagasa=ba habi=du saba=ba fumetta.
 クバ笠をかぶって、ゾウリを履いた。

- (124) uvan kubagasaba habi miriba
 uva=n kubagasa=ba habi miri=ba.
 お前もクバ笠をかぶってみろ。
- (125) jaduju fuu.
 jadu=ju fuu.
 戸を閉める。
- (126) kjuuja accariba jadoo foonun.
 kjuu=a accariba jadu=a foonun.
 今日は暑いから戸は閉めない。
- (127) juube izanudu jaduju fuuta.
 juube iza=nu=du jadu=ju fuuta.
 昨夜、お父さんが戸を閉めた。
- (128) jaduba fuiti paaku waatta.
 jadu=ba fuiti paaku waatta.
 戸を閉めて、早く行かれた。
- (129) uva jaduba fuiti kuu.
 uva jadu=ba fuiti kuu.
 お前が戸を閉めてこい。
- (130) usitoo tankasi nivun.
 usitu=a tanka=si nivun.
 弟は一人で寝る。
- (131) tankasija nivanun.
 tanka=si=a nivanun.
 一人では寝ない。
- (132) futansidu nivuta.
 futar=si=du nivuta.
 二人で寝た。
- (133) nivi bundo
 nivi bur=do.
 寝ているよ。

- (134) kuzina niviti hacizina fukin.
 kuzi=na niviti hacizi=na fukin.
 九時に寝て八時に起きた。
- (135) kjuuja tankasi nivi miriba.
 kjuu=a tanka=si nivi miri=ba.
 今日一人で寝てみる。
- (136) mainici rokuzina fukirun.
 mainici rokuzi=na fukirun.
 毎日六時に起きる。
- (137) mada fukunun.
 mada fukunun.
 まだ起きない。
- (138) rokuzi=na fukita.
 rokuzi=na fukita.
 六時に起きた。
- (139) paaku fuki patakehe patta.
 paaku fuki pataki=ha patta.
 早く起きて畑に行った。
- (140) uvan paaku fuki kuu.
 uva=n paaku fuki kuu.
 お前も早く起きてこい。
- (141) seefukuju kisun.
 seefuku=ju kisun.
 制服を着る。
- (142) unu kinna vusitarireriba tarn kisanun.
 unu kin=a vusitarireriba tar=n kisanun.
 この着物は古くなっているから誰も着ない。
- (143) uree kinoo kisuttawaja.
 uri=a kinoo kisutta=waja.
 これは昨日着たよ。

- (144) banaa akanu kinba kisi
 banaa aka=nu kin=ba kisi
 usitoo aunu kinba kisjee.
 usitu=a au=nu kin=ba kisee.
 私は赤い服を着て、妹は青の服を着た。
- (145) hai uriju kisi miriba.
 hai uri=ju kisi miri=ba.
 ほら、これを着てみろ。
- (146) subanaja sinsinudu birudo.
 suba=na=a sinsi=nu=du biru=do.
 そばには先生が座るよ。
- (147) zasikinaja tarn biranun.
 zasiki=na=a tar=n biranun.
 座敷には誰も座らない。
- (148) sinsidu bitta.
 sinsi=du bitta.
 先生が座った。
- (149) sinsjee biriti jarabee tati beetta.
 sinsi=a biriti jarabi=a tati beetta.
 先生は座って、子供は立っていた。
- (150) biri miriba.
 biri miri=ba.
 座ってみろ。
- (151) mainici terebidu miruwaja.
 mainici terebi=du miru=waja.
 毎日テレビを見るよ。
- (152) jakjuuja miranun.
 jakjuu=a miranun.
 野球は見ない。

- (153) terebijudu mitta.
 terebi=ju=du mitta.
 テレビを見た。
- (154) eigaba miridu haireta.
 eiga=ba miri=du haireta.
 映画を見て帰った。
- (155) hazinu fukiba funiba miriti kuba
 hazi=nu fukiba funi=ba miriti ku=ba.
 風が吹くから船を見てこい。
- (156) hanu pusoo mainici junu kutuba izu.
 hanu pusu=a mainici junu kutu=du izu.
 あの人は毎日同じことを言う。
- (157) darassa izanun.
 darassa izanun.
 嘘は言わない。
- (158) dusinkinudu darassaju izutta.
 dusinki=nu=du darassa=ju izutta.
 友達が嘘を言った。
- (159) hanu pusoo pukorasaba izitidu waatta.
 hanu pusu=a pukorasa=ba iziti=du waatta.
 あの人はありがとうと言って帰った。
- (160) izaha junainu iija narehendoti iziti kuu.
 iza=ha junai=nu ii=a narehen=do=ti iziti kuu.
 お父さんに夜ご飯ができたよと言ってこい。
- (161) semee sugu sinundo.
 semi=a sugu sinun=do.
 セミはすぐ死ぬよ。
- (162) jamatta sugutija sinanundo.
 jamatta sugu=ti=a sinanun=do.
 ゴキブリはすぐには死なないよ。

- (163) sitakutara sinuta.
sitakutara sinuta.
叩いたら死んだ。
- (164) jamattanudu sini beerunu.
jamatta=nu=du sini beeru=nu.
ゴキブリは死んで、(ネズミも死んでいた。)
- (165) autan sini naanun.
auta=n sini naanun.
カエルも死んでしまった。
- (166) mainudu uraari ar.
mai=nu=du uraari ar.
米がたくさんある。
- (167) mukasjee umana haanudu atta.
mukasi=a uma=na haa=nu=du atta.
昔はここに井戸があった。
- (168) aarmanaja gakkonu ari
aarma=na=a gakko=nu ari
nisumanaja koominkannudu ar.
nisuma=na=a koominkan=nu=du ar.
東に学校があつて、北に公民館がある。
- (169) fusinnu aridu tasikirarita.
fusir=nu ari=du tasikirarita.
薬があつて助けられた。。
- (170) maasunudu naan.
maasu=nu=du naan.
塩がない。
- (171) sitan naantan.
sita=n naantan.
砂糖もなかった。

- (172) poccanu naanatturi kisu kutu narantan.
 pocca=nu naanatturi kisu kutu narantan.
 包丁がなくて切ることができなかった。
- (173) duunu jaanaja innudu bur.
 duu=nu jaa=na=a in=nu=du bur.
 我が家には犬がいる。
- (174) tunarnu jaanaja inna buranun.
 tunar=nu jaa=na=a in=a buranun.
 隣の家には犬はいない。
- (175) mukasjee majan butta.
 mukasi=a maja=n butta.
 昔は猫もいた。
- (176) unu pusoo usitunu buriti
 unu pusu=a usitu=nu buriti
 banaa sizanudu bur.
 banaa siza=nu=du bur.
 この人には弟がいて、私は兄がいる。
- (177) marumahara siirundo
 maruma=hara siirun=do.
 今からするよ。
- (178) kjuuja nuun suunu.
 kjuu=a nuu=n suunun.
 今日は何もしない。
- (179) kinoo sigutuju uraari sitta.
 kinoo sigutu=ju uraari sitta.
 昨日仕事をたくさんした。
- (180) sigutuba si asabin patta.
 sigutuba si asabi=n patta.
 仕事をして、遊びに行った。

- (181) jakoonsukun sigutuju siiri.
 jakoonsukun sigutu=ju siiri.
 休まないで仕事をしろ。
- (182) gakkona gii binkjoo sii kuu.
 gakko=na gii binkjoo sii kuu.
 学校に行って、勉強してこい。

2. 形容詞活用

原田走一郎(2014, 2016)では、黒島の形容詞の活用として二種類あることを指摘する⁴。一つは「普通形容詞」で、もう一つは「比較形容詞」の活用である。さらに、それぞれは、語根にそのまま屈折接尾辞を付して活用するか、形容詞化接尾辞-*ha*-を付して形容詞語幹になって活用するかで異なるという。そのため、*guffa*「重い」のほうをグループ A、*guma*「小さい」のほうをグループ B としている。

(183) 語根 *guffa*「重い」からの普通形容詞と比較形容詞の派生

- | | |
|-----------------|--------------------|
| a. 普通形容詞 | b. 比較形容詞 |
| <i>guffa-ta</i> | <i>guffa-ku-ta</i> |
| 重い-PST | 重い-CMPR-PST |
| 重かった | 重かった |

(184) 語根 *guma*「小さい」からの普通形容詞と比較形容詞の派生

- | | |
|-------------------|-------------------|
| a. 普通形容詞 | b. 比較形容詞 |
| <i>guma-ha-ta</i> | <i>guma-ku-ta</i> |
| 小さい-ADJVZ-PST | 小さい-CMPR-PST |
| 小さかった | 小さかった |

今回は東筋集落での普通形容詞の活用を収録した。まず、グループ A の形容詞をあげる。用例は原田が採取した。動詞の場合と同様に、一行目に簡易音素表記を書き、二行目に形態素に分析した形を書くこととした。

- (185) 非過去
- | | | |
|------------|--------------|---------------|
| <i>unu</i> | <i>isjee</i> | <i>guffa.</i> |
| <i>unu</i> | <i>isi=a</i> | <i>guffa.</i> |
- この石は重い。

⁴ 原田走一郎 (2014) 「南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ : 接辞 *Ku* が続く形式に注目して」『阪大日本語研究』26号 p.71-p.85
 (2016) 『南琉球八重山黒島方言の文法』未公開博士論文 (大阪大学)
<http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/55692>

- (184) 過去
 gumaha sjee keeja aidacinu guffata.
 gumaha sjee kee=a aidaci=nu guffata.
 小さい頃は杵が重かった。
- (185) 非過去連体
 guffaru isjee baa muti parundo.
 guffaru isi=a baa muti parun=do.
 重い石は僕が持って行くよ。
- (186) 過去連体
 guffataru aidacinudu maruma harahara nareesa.
 guffataru aidaci=nu=du maruma harahara naree=sa.
 重かった杵が今は軽い。
- (187) 連用修飾
 guffa nari naansa.
 guffa nari naan=sa.
 (赤ん坊を抱き上げて)重くなったね。
- (188) 否定
 guffa naanunwaja.
 guffa naanun=waja.
 重くないね。
- (189) 否定過去
 kuzu baakee guffa naantanura.
 kuzu baaki=a guffa naanta=nu=ra.
 去年までは重くなかったのにね。
- (190) 仮定
 guffakka hasaija naranun.
 guffakka hasai=a naranun.
 重かったらおんぶできない。
- (191) 理由
 guffariba hasaija narnaun.
 guffariba hasai=a naranun.
 重いからおんぶはできない。

- (192) 並列
 unu vaa guffaturi uboho.
 unu vva=a guffaturi uboho.
 この子は重くて、大きい。

- (193) 比較
 umanu vaanudu guffakudu ar.
 uma=nu vva=nu=du guffaku=du ar.
 こっちの子のほうが重い。

次にグループ B の普通形容詞の活用の例をあげる。

- (194) 非過去
 kunu izoo maahan.
 kunu izu=a maahan.
 この魚はおいしい。

- (195) 過去
 hatosi izoo maahattan.
 hatosi izu=a maahattan.
 ハトシはおいしかった。

- (196) 非過去連体
 maaharu izutankadu vaipisa.
 maaharu izu=tanka=du vvaipisa.
 おいしい魚だけを食いたい。

- (197) 過去連体
 maahattaru izu.
 maahattaru izu.
 おいしかった魚。

- (198) 連用修飾
 unu misoo maaha nareewaja.
 unu misu=a maaha naree=waja.
 この味噌はおいしくなったね。

- (199) 否定
 unu izoo maaha naanun.
 unu izu=a maaha naanun.
 この魚はおいしくない。
- (200) 否定過去
 maaha naantan.
 maaha naantan.
 おいしくなかった。
- (201) 仮定
 maaharka vaipisa.
 maaharka vvaipisa.
 おいしかったら食べたい。
- (202) 理由
 unu mucjee maahariba uraari haa.
 unu mucu=a maahariba uraari haa.
 この餅はおいしいからたくさん買おう。
- (203) 並列
 unu mucjee maahatturi jassando.
 unu mucu=a maahatturi jassan=do.
 この餅はおいしくて、安い。
- (204) 比較
 kumanu mucinudu maakusa.
 kuma=nu mucu=nu=du maaku=sa.
 こっちのもちのほうがおいしい。

一方、荻野が保里集落で形容詞活用の調査をしたところ、東筋集落とは異なる活用の形態が見られた。例えば、連体形では、接辞の-ruが出てこない。-ruをつけても意味は取れるが、通常はつけないと判断される。

- (205) piija-ku-tta huju=du atta.
 寒い冬だった。
- (206) niffa-ha=junti isi=ba jari parasita=waja.
 憎いから石を投げて（猫を）追いやったよ。

(205)は東筋集落では/piijakutaru/となるが、保里集落では/piijakutta(a)/となる。また、(206)の「にくい」は、東筋集落ではグループ A に入るようだが、保里集落ではグループ B の活用をする。そこで、原田(2014)でグループ A とされている形容詞のいくつかを調査すると、以下の表のようになった。なお、形態は話者が共通語を黒島方言に翻訳したままを載せることとする。結果として音声等何らかの相違点が見られる場合に表の右端に○印をつけ、どのような点が異なるのかを簡単に書いた。こうしてみると、音声や形容詞のグループ分けや意味用法の相違等、黒島内での集落間での違いを意識して調査する必要があるのではないかと考える。

表 東筋集落と保里集落の形容詞の相違

	東筋(原田による)	保里(今回調査)	相違点
重い	guffa	guffanu	
にくい	miffa	niffahanu/miffahanu	○グループ B
きたない	janija	janija	
寒い	piija	piija	
うれしい	sanija	sanijan.	
軽い	harra	haran	○促音
ひもじい	jaasa	jaasanu	
うるさい	hasamasa	hasamasanu	
うるさい	jagamasa		
難しい	musukasa	musukasanu/ mucukasan	○子音 s 音声
遠い	tuusa	tuusan	
さみしい	hamaarasa	sabissan	○意味 hamarasanu は「悲しい/悩む」
かわいい	hanasa	atarasan/ hanasan	○語彙
固い	koosa	koosan	
薄い	pissa	pisa du ar	○促音
悪い	wassa	barasan	○語彙

3. 「大きなカブ」

本節では黒島方言の「大きなカブ」を掲載する。今回は東筋方言、保里方言、仲本方言の三つが収録できたので、それぞれ 3.1 から 3.3.まで掲載する。その後、3.4.にてこれらの「大きなカブ」に見られた違いを指摘する。

3. 1. 東筋方言の「大きなカブ」

danikuni=nu panasi=ju si ssusaru=di=ju.

だいこんの話を申し上げますよ。

ubuzaa=ja daikuni=nu tani=ba=du maki watta=tu.

おじいさんがだいこんの種をまきなさった。

amahaaru amahaaru daikuni=he nari=jo.

甘い甘いだいこんになれよ。

uboobina uboobina daikuni=he nari=jo.

大きな大きなだいこんになれよ。

amahaaru ganzuu aa munu=nu uboobina daikuni=nu dekiru tabooreta=tu.

甘いりっぱな 大きなだいこんができました。

ubuzaa=ja daikuni=ju tanka=si nuun=ti sita=nu=du nooruntan.

おじいさんはだいこんを一人で抜こうと したけど 抜けなかった。

ubuzaa=ja paa=ba saari waari

おじいさんはおばあさんを連れていらして

paa baa aizu siika sikara nzahai=jo=tti izi izi watta=tu.

「おばあさん。私が合図したら力をだしなさいよ。」と言って 言いなさったと。

paa=ja ubuza=ju hasamiriba=du ubuzaa=ja daikuni=ba hasami

おばあさんがおじいさんをつかんで おじいさんがだいこんをつかみ

untokosjo dokkoisjo=tti izi sikara=ba nzasi

うんとこしょ、どっこいしょ、と言い 力を出して

daikuni=ju nuutta=nu=du noorunta=tu.

だいこんを抜いたけど抜けなかった。

paa=ja maa=ba saari waareta=tu.

おばあさんは孫を連れていらっしやった。

maa=ja paa=bu hasamiriba=du paa=ja ubuza=ju hasami

孫はおばあさんをつかみ おばあさんはおじいさんをつかみ

ubuzaa=ja daikuni=ba hasami

おじいさんはだいこんをつかんで

baa aizu siika sikara nzahai=jo=tti izi ubuza izi watta=tu.

「私が合図したら 力をだしなさいよ。」って言い、おじいさんはおっしやったと。

untokosjo dokkoisjo=tti micaan=si pikuta=nu=du

うんとこしょ、どっこいしょ、と、三人で引いたけど

pikimaki sitta=tu.

引けなかったと。

maa=ja in=ba saari futa=tu.

孫は犬を連れてきたと。

in=na maa=ju hasamiriba=du

犬が孫をつかんで

maa=ja paa=ju hasamiriba=du

まごがおばあさんをつかんで

paa=ja ubuza=ba hasami

おばあさんがおじいさんをつかみ

ubuzaa=ja daikuni=ba hasami

おじいさんはだいこんをつかんで

ubuzaa=du baa aizu sika

おじいさんは「自分が合図したら

mazun sikara nzahai=jo=tti izi watta=tu.

一緒に力をだしなさい。」とおっしやったと。

untokosjo dokkoisjo=tti izi

うんとこしょ、どっこいしょ、と言い

pikuta=nu=du pikarunta=tu.

引いたけど、引けなかったと。

maa=ja in=ba saari futa=tu.

孫は犬を連れてきたと。

maa=ja paa=ba hasamiriba=du

孫がおばあさんをつかんで

ubuzaa=ja daikuni=ba hasami

おじいさんはだいこんをつかみ

in=na majaa=ba saari futa=tu.

犬は猫を連れてきたと。

majaa=ja in=ju hasamiriba=du

猫は犬をつかみ

maa=ja paa=ba hasami

孫はおばあさんをつかみ

ubuzaa=ja daikuni=ba hasami

おじいさんはだいこんをつかみ

too baa aizu siiriba

「さあ、自分が合図をしたら

untokosjo dokkoisjo=tti izi

うんとこしょ、どっこいしょと言い

majaa=ja ujanču=ba saari futa=tu.

猫はネズミを連れてきたと。

majaa=ja in=ba hasamiriba=du

猫は犬をつかみ

maa=ja paa=ju hasami

孫はおばあさんをつかみ

ubuzaa=ja daikuni=ba hasami watta=tu

おじいさんがだいこんをつかみなさったと。

too baa aizu siiriba

「さあ、私が合図をしたら、

mazun sikara nzasi=turi ganbari taboori=ti izi watta=tu.

一緒に力を出しながらがんばってください」とおっしゃったと。

untokosjo dokkoisjo=ti izi pikuta=nu=du pikimakijan.

うんとこしょ、どっこいしょ、と言い、引いたけど引けなかった。

ujanču aar=ba saari futa=tu.

ネズミは蟻を連れてきたと。

ujanču=ja maja hasamiriba=du

ネズミは猫をつかんで

in=na paa=ju hasamiriba=du

犬はおばあさんをつかんで

ubuzaa=ja

baa aizu siika mazun sikara nzasi taboori=ti izi watta=tu.

おじいさんは

「私が合図したら、一緒に力を出してください。」とおっしゃったと。

in=na maa=ju hasamiriba=du

犬が孫をつかんで、

paa=ja ubuza=ba hasami

おばあさんがおじいさんをつかみ

jutaar=si sitta=nu=du pikimaki waareta=tu.

四人でしたけど、引けなかったと。

in=na maa=ju hasamiriba=du

犬は孫をつかみ

paa=ja ubuza=ba hasami

おばあさんはおじいさんをつかみ

sikara mazun nzahai=jo=tti izi wat=tara

力を一緒にだしなさいよ。」とおっしゃったら

pikuta=nu=du pikimakijan.

引いたけど、引けなかった。

ujanču=ja majaa=ju hasamiriba=du

ネズミは猫をつかみ

in=na maa=ju hasamiriba=du

犬は孫をつかみ

paa=ja ubuza=ba hasami

おばあさんがおじいさんをつかみ

untokosjo dokkoisjo=tti izi sikara=ba awasi piku kee=du pikari watta=tu.
うんとこしょ, どっこいしょ, と言ひ 力を合わせて引くと, 引けましたとき。

3. 2. 保里方言の「大きなカブ」

ubo?bi=nu daikuni.

「大きなだいこん」

ubuza daikuni=nu tani=ju maki watta=tu.
おじいさんはだいこんの種を まきなさった。

amahaaru amahaaru daikuni=he nari.
甘い甘い だいこんになれ。

ubo?bi=nu ubo?bi=nu daikuni=he nari.
大きな 大きな だいこんになれ。

amahaaru ganzuu aru ii daikuni=he nari taboori.
甘いりっぱなだいこんになってください。

daikunee miiri wattan.
だいこんが 実りました。

ubuza daikuni=ju pikun=ti sii wattan.
おじいさんはだいこんを 引こうとしなさった。

jooisjo jooisjo=tti izi pikutta=nu
よいしょ, よいしょと言って引いたけど

unu daikunee pikaruntan.
そのだいこんは 引けなかった。

ubuza paa=ba jubii kii paa=ja ubuza=ba hippari
おじいさんはおばあさんと呼んできて おばあさんはおじいさんをひっぱり

ubuza daikuni=ju hippari
おじいさんはだいこんをひっぱり

jooisjo jooisjo=ti pikuta=nu ai sin daikunee
よいしょ, よいしょって引いたけど そうしてもだいこんは

nooruntan. paa=ja maa=ba jubii kii
抜けなかった。 おばあさんは 孫を呼んできて

maa=ja paa=ba hippari paa=ja ubuza=ba hippari=turi
孫はおばあさんを引っぱり おばあさんはおじいさんを引っぱりながら

jooisjo jooisjo=tti izi hippata=nu
よいしょ, よいしょって言って引っぱったけど

maa ai sin unu daikunee pikaruntan.
まだどうしても そのだいこんは 引けなかった。

maa=ja in=ba jubii kii in=na maa=ba hippari maa=ja paa=ba hippari=turi
孫は犬を呼んできて 犬が孫を引っぱり 孫は おばあさんを引っぱりながら

paa=ja ubuza=ba hippari=ti
おばあさんは おじいさんを引っぱりながら

ubuza daikuni=ju hippatta=nu ai sin nooruntan.
 おじいさんはだいこんを引っぱったけど そうしても抜けなかった。
 maja=ba jubi kii majaa in=ju hippari in=na maa=ju hippari
 猫を呼んできて 猫は 犬を引っぱり 犬は孫を引っぱり
 maa=ja paa=ba hippari ubuza paa=ja ubuza=ba hippari
 孫はおばあさんを引っぱり おじいさん おばあさんはおじいさんを引っぱり
 ubuza daikuni=ju hippata=nu
 おじいさんはだいこんを引っぱったけど
 untokosjo dokkoisjo=tti izi hippata=nu
 うんとこしょ、どっこいしょと言って 引っぱたけど
 ai sin daikunee noorun…pikaruntan.
 そうしても だいこんは引けなかった。
 ujancu=ba jubi kii=turi ujancoo maja=ba hippari majaa in=ba hippari
 ネズミを呼んできて ネズミは 猫を引っぱり 猫は犬を引っぱり
 in=na maa=ba hippari maa=ja paa=ba hippari
 犬は孫を引っぱり 孫はおばあさんを引っぱり
 ubuza paa=ja paa=ja ubuza=ba hippari=ti
 おじいさん おばあさんは おばあさんはおじいさんを引っぱり
 ubuza daikuni=ju hippata=nu hippari=turi
 おじいさんは だいこんを引っぱったけど 引っぱりながら
 jooisjo jooisjo=tti izi hippari ujancoo an=ba jubi kii
 よいしょ、よいしょって言って 引っぱり ネズミは 蟻を呼んできて
 an=na ujancu=ba hippari ujancoo maja=ba hippari=ti
 蟻は ネズミを引っぱり ネズミは 猫を引っぱって
 in=ju hippari hippari=ti in=na maa=ba hippari=ti
 犬を引っぱって 引っぱって 犬は孫を引っぱって
 maa=ja paa=ba hippari=ti paa=ja ubuza=ba hippari
 孫はおばあさんを引っぱって おばあさんはおじいさんを引っぱり
 ubuza daikuni=ju hippari
 おじいさんは だいこんを引っぱり
 jooisjo jooisjo=tti hippari=ti
 よいしょ、よいしょって引っぱって
 joojaku unu daikunee pikarita=ju.
 ようやくそのだいこんは引かれましたよ。

3. 3. 仲本方言の「大きなカブ」

ubu+daikuni=nu panasi
 大きな大根の話

kjuu=nu waasiki=nu haijarura
今日の天気がきれいですね
ubuza kjuu=ja pataki=na gii
おじいさんは今日は畑へ行き、
daikuni=nu tani makuta
大根の種を蒔いた。
pataki=ba haisiti kuba
畑を耕してこい
tida=nu tiriti ami=nu=du fuu
太陽が照って、雨が降る
uri=si misan
「これでいい」
pataki=ba haisjeeriba
「畑を耕したから
daikuni=nu juu dikiru=pazi
大根がよくできるはずだ」
kundu=nu daikuni=ja pudubi=pazi
「今度の大根は大きくなるはずだ」
pisun=si=n pikarunun
一人でも引かれない。
uri=ja futan=si=man=du pikari=pazi
これは二人で引かれるはず
ubuza=ja paa=ba jurabi kii
おじいさんはおばあさんと呼んできて
futan=si=man pikun=ti siiru=nu=du pikarunun
二人で引こうとしても引かれない
paa=nu=du maa=ba jurabi kii mican=si=man
おばあさんは孫を呼んできて三人で
ijaasa ijaasa=ti piku=nu=du pikarunun
いやーさ いやーさ と引くけど引かれない。
pirumasi munu
珍しいこと
kundu=ja maa=nu=du in=ba saari kii
今度は、孫が犬を連れてきて
wan wan ijaasa
わんわん いやーさ
ubuza=tu paa=tu maa=tu in=si=n pikarunun
おじいさんとおばあさんと孫と犬でも引かれない。

in=nu=du maja=ba saari kii
 犬は猫を連れてきて
 mjao mjao ijaasa ijaasa
 みやおみやお いやーさ いやーさ
 atu imeemi ariba
 あと少しだから
 maa pisusai sikara=ba nzasi mikka pikariru pazi
 もう一度力を出してみると引かれるはず
 maja=nu=du ujancju=ju saari kii
 猫はネズミを連れてきて
 cju cju cjuu
 ちゅちゅちゅー
 ujancju=nu=du maja=ju pikisikiruwara
 ネズミが猫を引っ張るよね
 maja=nu=du in=ju pikisikiruwara
 猫は犬を引っ張るよね
 in=nu=du maa=ju pikisikiruwara
 犬は孫を引っ張るよね
 maa=nu=du paa=ju pikisikiruwara
 孫はおばあさんを引っ張るよね
 paa=nu=du ubuza=ju pikisikiruwara
 おばあさんはおじいさんを引っ張るよね
 ijaasa ijaasa
 いやーさ いやーさ
 keera=si=man pinikkairu kee=na sikara=ba nzasi
 みんなではね返るくらいに力を出して
 pikiti=na=du pikaritando
 引くと引かれたよ
 narehendo
 できたよ
 uri=si=man junai=ja
 それで晩ご飯は
 ubu+daikuni=nu suu ba neesi
 大きな大根の汁を煮て
 keera=si=man nki maahattando
 みんなで食べて、おいしかったよ
 ubu+daikuni=nu panasi=ja uwari=dora
 大きな大根の話は終わりだよ

3. 4. 各方言による「大きなカブ」に見られる違い

本節では、各方言の「大きなカブ」に見られた違いについて述べる。しかしその前に確認のため述べておくと、これらはすべてどの集落においても通じる。相互理解が不可能なほどの違いがあるわけではない。

まず、声門閉鎖音を伴う形容詞語根重複形があげられる。これは保里方言の「大きなカブ」にのみあらわれた。この声門閉鎖音を伴う形容詞語根重複形は、zoʔsso「白々」や voʔffo「黒々」などにも観察される。この声門閉鎖音が含まれたかたちは他の方言では今回の「大きなカブ」では観察されなかった。東筋方言においてはこの変異は普段の会話では聞かれない。ただ、この言い方に違和感があるかということそうではないようである。

2点目として挙げられるのは、「呼ぶ」という動詞の違いである。保里方言では jubu であるのに対し、仲本方言では jurabu である。東筋方言の今回の資料にはこの語が出てきていないが、jurabu である。このように小さな島内でも語根レベルで違いがあることがわかる。

3点目として挙げられるのは、「ネズミ」の語形である。東筋方言と保里方言が ujancu であるのに対し、仲本方言は ujancju である。このような差があることは実は島内ではよく知られている。ただ、ujancu と ujancju という語形がある、ということは知られているが、どこの集落がどの語形を使っているか、という細かい点までは知られていない。仲本の方言と保里の方言は似ている、と言われているが、このような差が出たことは興味深い。

4. 挨拶などの表現

今回は、保里集落での談話を収録した。A が男性、B が女性である。昔、どのような挨拶の会話がなされていたかを、保里集落内を中心にして再現してもらった。

1 道で会ったときの挨拶

B: (道であったときに) maa=ha=du pariba=ja?

(道であったときに) どこへいくのか?

A: kjuu=ja umi=hee=doo.

今日は海へいくよ。

(「tairjoo=ba sii waariba=kaa.と一言いなさい」と指示。)

(「大漁をしてくださいね。」)

B: nigai sukuba=ka=mee tairjoo=ba sii waariba.

願わくば、大漁をしてください。

A: nn.

うん。

B: tairjoo=ba sii waaka mata atu=hara furu=wa.

大漁したときには後から行くよ。

izu hajaa=taana furu=wa.

魚を買いに行くよ。

A: nigai sikiri=jo.

願っておけよ。

2 夕方の挨拶

A: tida=n irigata nari naanu=wa.

太陽が沈む頃になったね。

B: tida=n irigata nari naaniba mee

太陽も沈む頃になったから

jui suu=ba=du nariba mee bana {para./ pari=du sii=doo} .

夕飯をしないとイケないから、私は帰るよ。

3 買い物に行ったあとの話

B: macija geeta=nu nuu=nu unu maaha munu=nu attara

お店にいったけど、何かあの、美味しいものがあったから

banu=n haiken=doo.

私も買ってきたよ。

A: namasee naantanu?

さしみはなかったの？

B: namasee naanta=saa.

さしみはなかったよ。

A: misaadaa=ka mee.

いいよ。

4 結婚が決まったときの挨拶

A: zinan=nu ii psu=ba atari=turi unu furu zjuunigaci songaci mai=nin=na

次男がいい人にあたって あの くる12月、正月前に

siki=n aguba=ti umui bee=waja.

式挙げようと思っているよ。

B: ii kutu=ti=du umi bee=doo. banta=n annai=ja sii taboori=joo=ra.

おめでたいことって思いますよ。 私たちに案内をしてくださいね。

A: uree mee siirun=te umui=du buu. unu tuki=ja mata keera=siman

それは、しようと思っているよ。 そのときは、またみなさんで

jurukubi=turi mata teenai=ba si taboori=tturi ii joi simasimi taboori=joo.

喜んで、また お手伝いをして お祝いをすませてください。

B: bante=nu sakusi=nin=nun mada joi=ja suuna beeriba ajahari taboorasi waari=joo=raa.

我が家の長男もまだ結婚をしていないので あやからせてください。

5 魚を捕って帰ってきたときの話

A: kjuu=ja tairjoo=doo.

今日は大漁だよ。

B: hjaa. miri miran sikaa tairjoo=ja=waja. maaha waa=turi=raa.

まあ。見たことがない大漁だね。 おいしそうだね。

izu=naa azakee=turi=ra.

魚はつぶぞろいで使い用のあるものだね。

A: izu=nu jooran=kee paaku {sabaka/bazaa}naaka naranun. abattiri=joo.
魚が悪くなる（弱る）から早くこしらえないといけない。 急ぎなさい。

B: koori mee turiki koori mizi=hee irirun?
氷を取ってきて、氷を水へ入れる？

A: koori mizi=naa=jun hari=ba iriri. koori muti kuu.
氷水にも あれ（氷）をいれて。 氷を持ってこい。

mata paaku bazai reizooko=ho=n iru naaka naran=doo.
また、早くさばいて 冷蔵庫にも入れないといけないよ。

mata aasun=ha=n haasin=na pariba=du nariba. abattiri=joo.
また東筋に売りに行ないといけない。 急げよ。

B: kjuu=ja taa taa mun=nu ariba=ja?
今日は誰々のものがあるのか？（誰の注文があるのか？）

A: mi kibun juu kibun hara=n cjuumun=nu ari=du buu munu=nu
三、四軒からも、注文があるので
abattu naaka joorun=kee abattu naaka naranun=doo.
急がないと弱るから急がないといけないよ。

B: kjuu=jun acca=n ari=wara.
今日も明日もあるよ。

paaku paaku=ti umuttan=tin=ka uree izu=nu uraha=nu
早く早くと思っても これ 魚が多くて

bazai moohorunu=waja.
さばけないよ。

A: bazau sindai reizooko=ju iri usiki=tti atu=hara
処理したら冷蔵庫にいらしておいて、あとから
muti paraba misariba manuma
持っていけないといけないから 今は
toriaezu mee paaku izu bazau kutu.
とりあえず早く 魚をこしらえなさい。

【参考文献】

原田走一郎・荻野千砂子（2015）「黒島方言の文法スケッチーアクセント・動詞・形容詞の小考察」『琉球諸語 記述文法 I』消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究

予備調査報告

鹿児島県奄美大島佐仁方言

鹿児島県奄美大島佐仁方言

白田 理人

1 はじめに

奄美大島佐仁方言（以降佐仁方言）は、奄美大島の北端の佐仁（さに）集落（鹿児島県大島郡奄美市、旧笠利町）で話される（以下地図参照）。奄美市役所発行の資料によれば、2016年12月現在の佐仁集落の人口は289人である。

佐仁方言を流暢に話すのは主に65～70歳以上である。地域における方言継承に関わる活動として、現在、小学校の朝の朗読・給食時・学習発表会におけるあいさつが方言で行われており、また小学生及びPTAによる伝統的な八月踊り¹の継承活動が行われている。

佐仁方言の先行研究として、語彙集（狩俣2003）、アクセント付き名詞・用言資料集（上野1996・1997）、敬語形式の報告（重野2014）がある。

佐仁方言は近隣の方言との違いが大きく、「言語の島」と言われている。主な特徴として、先行研究によれば、両唇破裂音の保持（例 p^ha「葉」）、語頭で広母音、半広母音に遡る母音の前での k の摩擦音化（例 hata「肩」、xī「毛」、hufi「腰」）、母音間の m の弱化／脱落及び鼻母音化（例 jaã「山」）がある（狩俣2003、上野1996・1997参照）。

今年度の予備調査²では、m の脱落に関する音韻面の断片的な調査と、動詞の活用の調査を行った。

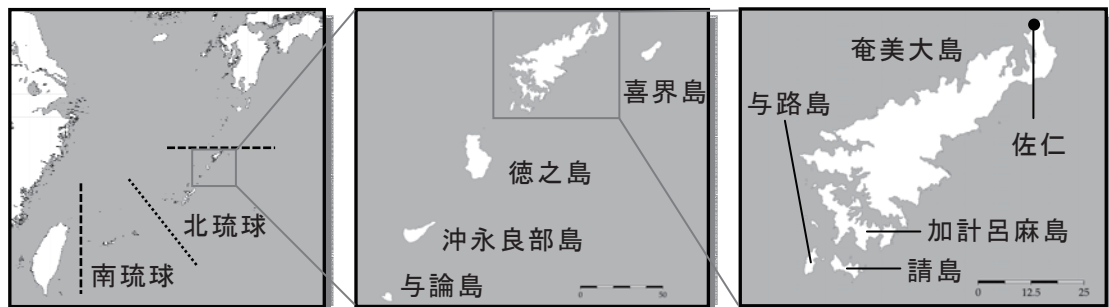


図 1 琉球列島／奄美群島／奄美大島／佐仁集落の位置³

2 音韻面—m脱落について

狩俣（2003）は、ĩ, ã, õ, ẽ の4つの鼻母音を音素として立てているが、調査した中で鼻母音を持つのは80代、90代の数人であったと報告している。今回の予備調査で、昭和13年

¹ 方言で歌いながら輪になって踊るもので、伝統的に、豊年祭などで踊られる。

² 2017年2月に行った、佐仁集落出身・在住の前田安田重照氏（昭和13年生）、安田絹枝氏（昭和18年生）、前田和郎氏（昭和15年生）への聞き取り調査である。

³ 国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図を編集した。

～18年の話者を調査したところ、やはり鼻母音は見られなかった。同じ母音に挟まれた m が脱落した語形は、単独形の場合は長母音として、短母音の語形と区別されていた。なお、一モーラ名詞語幹に二モーラ以上の助詞が後接する場合、名詞語幹が長母音化するが、その場合はアクセントでの区別が見られた（例 [ja:nanti「家に」、ja[:nanti「山に」）。また、異なる母音の間で m が脱落した場合、母音の融合が見られるものがあった。以下の表に語例を示す。話者によって異なる語形が見られたものは（ ）に示している。また、長短および母音の最小対となる語例について併記している。

表 1 m 脱落語彙調査結果

母音	意味	語形	母音	意味	語形	母音	意味	語形
a:	浜	p ^h a:	o	腿	mo:	u:	爪	tsu:
		cf. p ^h a「葉」		雲	k ^ʔ o:		詰めた	tsu:ta
	山	ja:		肝	k ^ʔ jo:		夢	j ^ʔ u:
		cf. ja「家」		島	ʃo:			cf. j ^ʔ u「魚」
au	雨	au	暇	pjo:	締めた	ʃu:ta		
	豆	mau	米	φuī (/φu:)	嫁	ju:		
	亀	hau		cf. φu:「今日」		cf. ju「湯」		
	瓶	hau	読め	juī (/ju:)	褒めた	φu:ta		
	やめた	jauta	飲め	nuī (/nu:)	染めた	su:ta		
	覚めた	sauta	履け	k ^ʔ uī (/k ^ʔ u:)	褒めた	φu:ta		

2 動詞活用について

動詞の活用の予備調査結果に関して、特筆すべき二つの点を述べる。

一点目は、m 脱落と活用クラスの関係である。語幹末が *m に遡る動詞には、w 語幹と同じ活用を示すもの (ajuN「編む」、過去形のみで w 語幹と異なるもの (ugajuN「拝む」、過去形・否定形で w 語幹と異なるもの (kajuN「食べる」) の三つのパターンが見られた。

二点目は k の喉頭化と語形変化の関係についてである。*ki に遡る音節は形態素中では基本的に k^ʔi で現れるのに対し、k 語幹動詞の不定形 (日本語の連用形と歴史的に対応) の形態素境界では、ki で現れていた (例 iki「行き」、uki「置き」cf. ik^ʔi「息」、uk^ʔi「沖」)。k 語幹動詞のその他の活用形では非喉頭化の k が現れるため、パラダイムの水平化の結果 k が非喉頭化した (もしくは k の喉頭化が避けられた) ことが考えられる。

次頁の表に動詞活用の調査結果を示す。不定形は「～もしない (X=daka siraN、X=n siraN、X=pi siraN)」の形で採取した。便宜的に活用のパターンを語末音ごとにラベリングし、語末音が同じでパターンが異なる場合は番号で区別している。「履く」と「閉める」、「起きる」と「植える」、「探す」と「通る」のペアは、それぞれ前者にピッチの上昇、後者に下降が見られ、アクセントが区別される。また、「替える」と「植える」の非過去形がその他の活用形と異なり短母音で現れているが、これらはピッチの下降が見られ、アクセントと (閉音節での) 母音長が相関している可能性がある。

表 2 動詞活用調査結果

	意味	否定	意志勧誘	命令	非過去	不定	過去
b	遊ぶ	asibaN	asibo	asibi	asibuN	asibi	asida
	飛ぶ	tubaN	tubo	tubi	tubuN	tubi	tuda
	頼む	taNbaN	taNbo	taNbi	taNbuN	taNbi	taNda
w1	洗う	arawaN	arao	arau	arajuN	arai	arata
	思う	o:waN	—	o:u	o:juN	o:i	o:ta
w2	会う	awaN	ao	au	ajuN	ai	auta
	編む	awaN	ao	au	ajuN	ai	auta
	買う	hawaN	hao	hau	hajuN	hai	hauta
w3	拝む	ugawaN	ugao	ugau	ugajuN	ugai	ugada
	歪む	jugawaN	—	—	jugajuN	jugai	jugada
a	食べる	kaN	kao	kau	kajuN	kai	kada
	痛む	jaN	—	—	jajuN	jai	jada
uw1	追う	uwaN	uo	ui	ujuN	ui	uta
	閉める	k ² uwaN	k ² uo	k ² ui	k ² ujuN	k ² ui	k ² uta
uw2	飲む	nuwaN	nuo	nuī	nujuN	nui	nuda
	履く	k ² uwaN	k ² uo	k ² ui	k ² ujuN	k ² ui	k ² uda
	喜ぶ	juruk ² uwaN	juruk ² uo	juruk ² ui	juruk ² ujuN	juruk ² ui	juruk ² uda
t	持つ	mutaN	muto	muti	mutfuN	mutfi	muttfa
	待つ	mataN	mato	mati	matfuN	matfi	mattfa
s	干す	pūsaN	pūso	pūsī	pūsfuN	pūfi	pūfa
	隠す	hakūsaN	hakūso	hakūsī	hakūsfuN	hakūfi	hakūfa
	回す	ma:saN	ma:so	ma:sī	ma:sfuN	ma:fi	ma:fa
k1	焼く	jakaN	jako	jakī	jakjuN	jaki	jafa
	置く	ukaN	uko	ukī	ukjuN	uki	ufa
	掃く	pokaN	poko	pokī	pokjuN	poki	po:fa
	招く	maNkaN	maNko	maNkī	maNkjuN	maNki	maNfa
k2	拭く	pūkaN	pūko	pūkī	pūkjuN	pūki	pūtfa
	突く	sīkaN	sīko	sīkī	sīkjuN	sīki	sītfa
	歩く	akkaN	akko	akkī	akkjuN	akki	attfa
	解く	pūkaN	pūko	pūkkī	pūkkjuN	pūkki	pūtfa
ik1	聞く	kīkjaN	kīkjo	kīki	kīkjuN	kīki	kītfa
	弾く	pīkjaN	pīkjo	pīki	pīkjuN	pīki	pītfa
ik2	行く	ikjaN	ikjo	iki	ikjuN	iki	idza
g1	漕ぐ	φugaN	φugo	φugī	φugjuN	φugi	φudza
	泳ぐ	o:gaN	o:go	o:gī	o:gjuN	o:gi	o:dza
iNg	掴む	miNgjaN	miNgjo	miNgi	miNgjuN	miNgi	miNdza

r	売る	uraN	uro	urī	urjuN	uri	uta
	通る	tu:raN	tu:ro	tu:rī	tu:rjuN	tu:ri	tu:ta
ir1	もらう	jiraN	jiro	jiri	jirjuN	jiri	jita
ir2	座る	jiraN	jiro	jiri	jirjuN	jiri	jifa
	煮る	jiraN	jiro	jiri	jirjuN	jiri	jifa
ir3	着る	kʰiraN	kʰiro	kʰiri	kʰirjuN	kʰiri	kʰitʃa
	走る	pʰaʃiraN	pʰaʃiro	pʰaʃiri	pʰaʃirjuN	pʰaʃiri	pʰaʃitʃa
ir4	入る	iraN	iro	iri	irjuN	iri	ittʃa
bir	括る	kʰubiraN	kʰubiro	kʰubiri	kʰubirjuN	kʰubiri	kʰupitʃa
bur	被る	haburaN	haburo	haburī	haburjuN	haburi	hapūta
	眠る	nīburaN	nīburo	nīburī	nīburjuN	nīburi	nīpūta
	吸う	ʃiburaN	ʃiburo	ʃiburī	ʃiburjuN	ʃiburi	ʃipūta
gir	握る	ɲigiraN	ɲigiro	ɲigiri	ɲigirjuN	ɲigiri	ɲikitʃa
	たぎる	tagiraN	—	—	tagirjuN	tagiri	takitʃa
i	出る	idziraN	idziro	idzirī	idziN	idzi	idzita
ī	投げる	nagīraN	nagīro	nagīrī	nagīN	nagi	nagīta
e	開ける	jʰe:raN	jʰe:ro	jʰe:rī	jʰe:N	jʰe:	jʰe:ta
ë	替える	hë:raN	hë:ro	hë:rī	hëN	hë:	hë:ta
u	植える	u:raN	u:ro	u:rī	uN	u:	u:ta
	起きる	u:raN	u:ro	u:rī	u:N	u:	u:ta
	探す	tu:raN	tu:ro	tu:rī	tu:N	tu:	tu:ta
	溜める	tauraN	tauro	taurī	tauN	tau	tauta
o	召し上がる	miʃoraN	miʃoro	miʃorī	miʃoN	miʃoi	miʃoʃa
	いらっしゃる	o:raN	o:ro	o:rī	o:N	o:i	o:ʃa
特殊	居る	wuraN	wuro	wurī	wuN	wuri	wuta
	ある／ない	nëN	—	—	aN	ari	ata
	する	sīraN	sīro	sīrī	ʃuN	ʃi:	ʃa
	言う	jʰaN	jʰo	i	jʰuN	i:	iʃa
	見る	ɲaN	ɲo(:)	ɲi(:)	ɲuN	ɲi:	ɲiʃa
	来る	kuN	ku:	ku:ja:	kjuN	ki:	kʰitʃa

引用文献

上野善道（1996）「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告—名詞の部」『琉球の方言』20:26-57.

上野善道（1997）「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告—用言の部」『琉球の方言』21:1-42.

狩俣繁久（2003）『奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙』吹田：大阪学院大学情報学部.

重野裕美（2014）「北琉球奄美大島佐仁方言の敬語形式」『広島経済大学研究論集』36(4):75-85.

沖縄県伊平屋方言の名詞の格体系

沖縄県伊平屋方言の名詞の格体系

平良尚人（人文社会科学研究院院生）・備瀬百合音（琉球大学法文学部学生）

1. 伊平屋村の概要

伊平屋村は、沖縄島本部半島の北方海上約 40 kmに位置し、伊平屋島・野甫島の二島からなる。南には無人島である具志川島をはさんで伊是名島がある。集落は東海岸に立地し、北から田名、前泊、我喜屋、島尻、野甫の五字が分布する。人口は 1,405 人、世帯数 575 世帯（平成 21 年時）。

田名、前泊、我喜屋、島尻の 4 つの集落をもつ伊平屋島は、沖縄県の有人島のなかでは最北に位置する。島は北東 - 南西方向にのびる細長い形で、長さ約 14 km、最大幅約 3 km、面積 20.66 km²。島の骨格をなす山地・丘陵地は島軸にそって北東 - 南西方向に並び、5 つほどの山塊にわかれている。このため、島を洋上から眺望すると、複数の島々が連なる列島のように見える。山塊を構成する主要地質は琉球石灰岩ではなく、中生代・古生代のチャートと中生代の砂岩頁岩互層である。山塊間には比較的広い沖積低地が分布し、稲作を支える地形的基盤をなしてきた。島の北部東海岸には俗に天の岩戸とも呼ばれるくまや洞窟がある。また、田名の北北東 1.5 kmにある念頭平松(推定樹齢 200～250 年のリュウキュウマツ)は国の天然記念物に指定されている。

野甫集落をもつ野甫島は、伊平屋島の南端・米崎の西方約 500mに位置し、面積 1.06 km²である。島の形は台形で、伊平屋島とは異なり、琉球石灰岩からなる低平な島である。1979 年(昭和 54 年)には、両島間に全長 680mの野甫大橋が架橋された。

本報告では 2016 年 9 月 3～6 日にかけて行った伊平屋島でのフィールドワークで得た用例から、伊平屋島我喜屋集落で話される我喜屋方言の名詞の格について報告をおこなう。

今回我喜屋方言について、

昭和 8 年生まれ A.H さん (85) [生 我喜屋→長期移住歴ナシ]

昭和 12 年生まれ Y.H さん (80) [生 南洋→7 歳 我喜屋→16 歳 本島(浦添)→20 歳 我喜屋]

昭和 28 年生まれ K.T さん (63) [生 我喜屋→16 歳 那覇→約 5 年 大阪→30 代 我喜屋]

昭和 29 年生まれ N.H さん (63) [生 我喜屋→16 歳 那覇→神奈川→30 代 我喜屋]

の四名の方に面接調査をおこない教えていただいた。

格の意味の分類は、鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』に従っておこない、現代日本語の格の意味とは異なるものがある場合は、名護市史編さん委員会 2006『名護市史本編・10 言語』の「第 5 節 山原方言の名詞のはたらき」を参考に分類している。

2. 我喜屋方言の格形式と意味

格について鈴木 1972 では、「名詞が文や連語のなかで他の単語に対してとる事柄上の関係（素材＝関係的な意味）のちがいをあらわす文法的なカテゴリーを格という¹」と述べている。

我喜屋方言の格形式には次のものが確認できた。ハダカ格、ga 格、nu 格、ke 格、ni 格、ne:格、he:格、kara 格、madi 格、tu 格、jakane 格、について以下に個々の形式ごとに意味を述べていく。

¹ 鈴木重幸 1972:p.205

表1 我喜屋方言の形式と意味

形式	意味	用例
ハダカ格	動作や状態の持ち主	?ja: jakuba:=ke ike:. おまえ 役場へ 行け。
	対象	irana=ne: kusa: hare:. 鎌で 草 刈れ。
	属性	wan kutsu ma:=ni ajo. おれの 靴は どこに ある。
	側面	taro:=ja mi: su:=tu ju: ni:joŋ. 太郎は 目が お父さんと よく 似ている。
	量	kiŋnu: mi:bai mi:ŋi kwa:hoŋdo:. 昨日 めばるを 三つ(匹) 釣っているよ。
	動作や状態がなりたつ時	amma:=ja aŋa: to:kjo:=ke: ndze: musuko=ke: iŋantero:ja:. 母さんは 明日 東京へ 行って 息子に 会うんだよね。
	うつりうごく場所	miŋi=nu mannaka atŋe: naranro:ja:. 道の まんなかを 歩いて いけないよ。
	呼びかけ	dziro: unu ni: basutei=madi muŋe ndze: turaçi:. 次郎、この 荷物 バス停まで 持って 行って くれ。
ga格	動作や状態の持ち主	?tamme:=ga wara=he: dzo:ri anaŋ . おじいさんが 藁で 草履を 編んだ。
	対象	taro:=ja sa:ta:andagi:=ga dzo:gu:jatando:. 太郎は サーターアンドギーが 好きだったよ。
	属性	kadzuko=ga ja:=nu indza=ne: u:ru=ga ŋusarijo:ndo:. かずこの 家の 上に 布団が 干されているよ。
	側面	hanako=ja ŋira=ga amma:ke ju: ni:joŋ. 花子は 顔が 母さんに よく 似ている。
	目的	amma:=ja iŋiba=ke koimuŋi=ga idzaŋ. 母さんは 市場へ 買物に 出かけた。
nu格	属性	teruŋima=ja i:nuka:=nu midzi=kara tsukurariŋdo:. 照島(酒)は イースカー(河川名)の 水から 作られる。
	動作や状態の持ち主	ami=nu ŋuinu ba:=ja saburo:=ja ja:=ne maŋga=bike: juno:ŋ. 雨が 降る 時は 三郎は 家で 漫画ばかり 読んでいる。
ke格	ゆくさき	amma:=ja iŋiba=ke koi=ga idzaŋ. 母さんは 市場へ 買物に 行った。
	あい手	taro:=ja uttu=ke kwa:ŋi wakije: turuŋaŋ. 太郎は 弟に お菓子を 分けて あげた。
	くつつくところ	matsuri=nu harigami ko:minkan=nu kabi=ke hajo:taŋ. 祭の 貼り紙が 公民館の 壁に 貼ってあった。
	対象	jurumiŋi=ja atŋi:ne habu=ke ŋu:ihaŋko: narando. 夜道は 歩くなら ハブに 注意しなさいよ。

	原因	dʒiro:=ja <u>ami=ke</u> nrije: ja:=ke ke:ʃaŋ. 次郎は <u>雨に</u> 濡れて 家へ 帰ってきた。
ni 格	動作や状態がなりたつ時	haʃiɡwaʃi:=ni ke:ʃuntedo:ja. <u>八月に</u> 帰ってくるようだ。
	動作や状態がなりたつ場所	jodʒi=madi <u>basutei=ni</u> maʃo:kido:ja. 四時まで <u>バス停で</u> 待っておけよ。
	ありか	wan kutsu <u>ma:=ni</u> ajo. おれの 靴 <u>どこに</u> ある。
ne: 格	ありか	anu <u>jama=ne:</u> inoʃiʃi=ga unro:ja. あの <u>山に</u> いのししが いるそうだ。
	道具	dʒiro:=ga <u>monosaʃi=ne</u> saburo: kuruʃaŋ. 次郎が <u>ものさしで</u> 三郎を 殴った。
	手段	maʃi=ke=ja <u>takuʃi=ne</u> indʒuʃiŋkan basu=ne indʒuʃiga maʃi arani. 町には <u>タクシーで</u> 行くより バスで 行くのが良いんじゃないか。
	材料	dʒiro:=ja <u>kabi=ne</u> koinobori tsukutaŋ. 次郎は <u>紙で</u> こいのぼり 作った。
	量	to:kaʃi=ja ja:guna <u>mu:ru=ne</u> ju:bei ʃundo:ja:. 米寿は 家族 <u>みんなで</u> お祝いを するんだよね。
	動作や状態がなりたつ場所	ami=nu ʃui=nu ʃi:=ja saburo:=ja <u>ja:=ne</u> maŋga=bike: juno:ŋ. 雨が 降る 日には 三郎は <u>家で</u> 漫画ばかり 読んでいる。
	原因	ma:ga=ga <u>hanaʃiʃi=ne:</u> nu:jo:ŋ. 孫が <u>風邪で</u> 寝ている。
動作や状態がなりたつ時	ho:neŋsai=nu <u>tufi=ne:</u> haŋʃi=madi=n mo:taŋ. 豊年祭の <u>時に</u> ばあさんまでも 踊った。	
he: 格	材料	dʒiro:=ja <u>kabi=he</u> koinobori tsukutaŋ. 次郎は <u>紙で</u> こいのぼりを 作った。
	量	unu te:buru=ja ŋbuhanu <u>ju:tte=he:</u> muʃe ikaja:. この テーブルは 重いから <u>四人で</u> もって いこう。
	動作や状態がなりたつ場所	unu uwagi=ja <u>jamatu=he:</u> nisenen=he: ko:tando:ja. この 上着は <u>東京で</u> 二千元で 買ったよね。
	原因	me:=nu ʃu: miyagi=nu tamme:=ja <u>bjo:ki=he:</u> ma:ʃando:. 先週 宮城の おじいさんは <u>病気で</u> 死んだよ。
kara 格	とりはずすところ	ni:ke:=kara ʃuton mutʃe: ʃu:ja:. <u>二階から</u> 布団を 持って こい。
	あい手	dʒiro:=ja <u>tamme:=kara</u> jagamahante mugeraretaŋ. 次郎は <u>じいさんから</u> うるさいと 怒られた。
	材料	saki=ja <u>ʃumi=kara</u> tsukuŋdo:. 酒は <u>米から</u> 作るよ。
	出発点	taro:=ja iʃi <u>jamatu=kara</u> ke:ʃuntega. 太郎は いつ <u>東京から</u> 帰ってくるか。

	うつりうごく場所	<u>tin=kara</u> maʃʃira: tui=ga tuno:ndo:. 空を 真っ白な 鳥が 飛んでいる。
	動作や状態がはじまる時	tara:=ja <u>ɸudzu=kara</u> to:kjo:=ne=ru unro:ja:. 太郎は 去年から 東京に いるよね。
	原因	tabaku=nu <u>çi=kara</u> kadzi=ke: najo:nro:. 煙草の 火から 火事に なっているよ。
madi 格	到達点	dziro: unu ni: <u>basutei=madi</u> muʃe ndze: turaçi:. 次郎 この 荷を <u>バス停まで</u> 持って 行って くれ。
	動作や状態がおわる時	dziʃkaŋ=ga aitu <u>godzi=madi</u> terebi na:ni. 時間が あるから <u>五時まで</u> テレビを 見ないか。
tu 格	仲間	dziro:=ja uttu=nu <u>saburo:=tu</u> o:taŋ. 次郎は 弟の <u>三郎と</u> 喧嘩した。
	状態があらわれるために必要な対象	taro:=ja mi: <u>su:=tu</u> ju: ni:joŋ. 太郎は 目が <u>お父さんと</u> よく 似ている。
jakane 格	比較	<u>jasaiandaqi:=jakane</u> saʃimi=ga=ru ma:hassa:. <u>野菜天ぷらより</u> 刺身が 旨いよ。

2. 1 ハダカ格

名詞に格助辞がつかないハダカ格の形式がある。このハダカ格は名詞の基本的な格であり、格助辞がくつつかないことが形式上の特徴である。我喜屋方言のハダカ格の名詞は、主語や独立語や修飾語や状況語や補語としてはたらき、〈動作や状態の持ち主〉、〈対象〉、〈属性〉、〈側面〉、〈数量〉、〈動作や状態がなりたつ時〉、〈うつりうごく空間〉、〈よびかけ〉、をあらわす。

2. 1. 1 動作や状態の持ち主

ハダカ格の人代名詞や現象名詞が主語としてはたらき、〈動作や状態の持ち主〉をあらわす。

1. ?ja: jakuba:=ke ike: .
おまえ 役場へ 行け。
2. ai nama=ja ami ɸundo: .
あ、今 雨 降るよ。
3. to:kafʃi=ja ja:guna mu:ru=he ju:bei ɸundo:ja: .
米寿は 家族 みんなで お祝いを するよね。

2. 1. 2 対象

ハダカ格の物名詞や人名詞が補語としてはたらき、述語になる動詞の〈対象〉をあらわす。

4. irana=ne: kusa: hare: .
鎌で 草を 刈れ。
5. waŋ=ja kiŋnu: ʃimbun jumaŋtaŋ.
おれは 昨日 新聞を 読まなかった。
6. dziro:=ga monosaʃi=ne saburo: kuruʃaŋ.
次郎が ものさしで 三郎を 殴った。
7. matsuri=nu harigami ko:minkan=nu kabi=ke hajo:taŋ.
祭の 張り紙が 公民館の 壁に 貼っていた。

〈能力の対象〉

8. ?ja:=ja unu ju:=nu na: wakaimi.
おまえは この 魚の 名前が 分かるか。

次の例も補語としてはたらくハダカ格の〈対象〉の例だが、上記のハダカ格の〈対象〉とは少し異なり、現代日本語のを格ではなく、に格に相当する例だと思われる。

9. aʃa: musuko iʃai=ga ndʒunro:ja.
明日 息子に 会いに 行くよね。
10. uttu:=ja ʃudʒu ʃu:gaku=nu ʃinʃin nataŋ.
妹は 去年 中学の 先生に なった。
11. hanako=ja kiŋnu:=kara jamme: kakaje: nu:jo:ŋ.
花子は 昨日から 病気に かかり 寝ている。

2.1.3 属性

ハダカ格の人代名詞や物名詞が連体修飾語としてはたらき、あとに続く名詞の〈属性〉をあらわす。

12. wan kutsu ma:=ni ajo.
おれの 靴 どこに ある。

2.1.4 側面

ハダカ格の名詞が主語にあらわされる人の部分などの〈側面〉をあらわす。

13. taro:=ja mi: su:=tu ju: ni:joŋ.
太郎は 目が お父さんと よく 似ている。

2.1.5 量

ハダカ格の数量名詞や量をあらわす疑問詞が連用修飾語としてはたらき、〈量〉をあらわす。

14. kiŋnu: mi:bai mi:ʃi kwa:hoŋdo:.
昨日 めばるを 三つ(匹) 釣っているよ。
15. nago=kara naʃa=madinu unʃin=ja iʃa: kakaigaja.
名護から 那覇までの 運賃は いくら かかるかね。

2.1.6 動作や状態がなりたつ時

ハダカ格の時間名詞が状況語としてはたらき、〈動作や状態がなりたつ時〉をあらわす。

16. wan=ja ʃu: iʃunahaŋ.
おれは 今日 忙しい。
17. amma:=ja aʃa: to:kjo:=ke: ndʒe: musuko=ke: iʃantero:ja:.
母さんは 明日 東京へ 行って 息子に 会うんだよね。
18. uttu:=ja ʃudʒu ʃu:gaku=nu ʃinʃin=ke nataŋ.
妹は 去年 中学の 先生に なった。

2.1.7 うつりうごく空間

ハダカ格の空間名詞が状況語としてはたらき、述語の移動動詞の動作がおこなわれる〈うつりうごく空間〉をあらわす。

19. miʃi=nu mannaka aʃe: naranro:ja:.
道の まんなかを 歩いて いけないよ。
20. aʃa:=nu namadʒibun wata: ware:=ja jama=nu naka aʃfo:saja:.
明日の 今頃 うちの 子は 山の 中を 歩いているね。

2.1.8 呼びかけ

ハダカ格の人名詞（固有名詞）が独立語としてはたらき、きき手への〈呼びかけ〉をあらわす。

21. dziro: unu ni: basutei=madi muŋe ndze: turaçi:
次郎、この 荷物 バス停まで 持って 行って くれ。
22. hariro: u:mi mi:=ga ikani: hamaro:.
晴れたら 海を 見に 行こうか ハマロー（人名）。

・ 述語の要素

ハダカ格の名詞と huŋ（する）などの単語とがくみあわさって述語としてはたらくとき、ハダカ格の名詞は連語述語の要素となる。

23. to:kaf̄i=ja ja:guna mu:ru=ne ju:bei φundo:ja:
米寿は 家族 みんなで お祝い するんだよね。

2.2. ga 格

我喜屋方言の ga 格の名詞は、主語や修飾語や状況語としてはたらき、〈動作や状態の持ち主〉、〈対象〉、〈属性〉、〈側面〉、〈目的〉をあらわす。

2.2.1 動作や状態の持ち主

ga 格の名詞が主語としてはたらく場合は、〈動作や状態の持ち主〉をあらわす。主語になれる名詞は、人名詞や物名詞や現象名詞など様々である。

24. ?tamme:=ga wara=he: dzo:ri anaŋ.
おじいさんが 藁で 草履を 編んだ。
25. i: jakuba=ke wan=ga ifusa.
うん、 役場へ おれが 行く。
26. ko:fo:finfin=ga basu=kara urie ŋaŋ.
校長先生が バスから 降りて きた。
27. dziikan=ga aitu godzi=madi terebi na:ni.
時間が あるから 5時まで テレビを 見ないか。
28. a: ami=ga φue ŋaŋ.
あ、 雨が 降り きた。
29. wan=ja saki=ga airo:ja nu:=n ŋimuŋ.
俺は 酒が あれば なにも いらぬ。

2.2.2 対象

ga 格の物名詞などが補語としてはたらき、述語になる動詞の〈対象〉をあらわす。
(心が向かっていく対象)

30. taro:=ja sa:ta:andaqi:=ga dzo:gu: jatando:.
太郎は サーターアンダギーが 好きだったよ。
31. wan=ja irabuŋa:=nu safimi=ga:=du kamiŋfahaŋ.
俺は イラブチャーの 刺身が 食いたい。
(能力の対象)
32. hanako=ja iŋkafi=kara sanŋin=ga çiŋiφuŋ.
花子は 昔から 三線が 弾ける。
33. taro:=ja je:go=nu ŋimuŋi=ga jumiφuŋ.
太郎は 英語の 本が 読める。

2.2.3 属性

ga 格の人名詞や人代名詞が連体修飾語としてはたらき、あとに続く名詞の〈属性〉をあらわす。

34. kadzuko=ga ja:=nu indza=ne: u:ru=ga φusarijo:ndo:.
 かずこの 家の 上に 布団が 干されているよ。
35. unu kasa=ja wan=ga mun jasa.
 その 傘は おれの ものだよ。
36. ja:=ga bo:fi=ja di:ruga.
 お前の 帽子は どれだ。

2.2.4 側面

ga 格の名詞は動詞とくみあわさって連語述語をつくる。このばあい、ga 格の名詞は主語のあらわすものの部分やもちものなどの〈側面〉をあらわす。

37. hanako=ja fiira=ga amma:ke ju: ni:joŋ.
 花子は 顔が 母さんに よく 似ている。

2.2.5 目的

ga 格の動作性名詞が状況語としてはたらき、述語のあらわす移動動作の〈目的〉をあらわす。

38. amma:=ja ifiiba=ke koimufi=ga idzaŋ.
 母さんは 市場へ 買物に 出かけた。
39. taŋme:=ja fikama:=kara jama=ke kinoko: tui=ga ŋdzaŋ.
 じいさんは 早朝から 山へ きのこを 取りに 行った。
40. hariro: u:mi mi:=ga ikani: hamaro.
 晴れたら 海を 見に 行こうよ ハマロー (名前)。

2.3. nu 格

我喜屋方言の nu 格の名詞は、修飾語や主語としてはたらき、〈属性〉、〈動作や状態の持ち主〉をあらわす。

2.3.1 属性

nu 格の名詞が連体修飾語としてはたらき、あとに続く名詞の〈属性〉をあらわす。

41. wan=ja irabuŋa:=nu saŋimi=ga=du maŋi jadu.
 俺は ぶだいの 刺身が 良い。
42. terufima=ja i:nuka:=nu midzi=kara tsukurariŋdo:.
 照島 (酒) は イヌカー (河川名) の 水から 作られる。
43. dŋiro:=ja uttu=nu saburo:=tu o:taŋ.
 次郎は 弟の 三郎と 喧嘩した。
44. dŋiro:=ke niwa=nu kusatui ŋimirani.
 次郎に 庭の 草取り させよう。
45. unu ŋimbuŋ=ja kinnu=nu ŋimbuŋ jaŋiga ŋfu:numuŋ=ja uriru jaŋdo:.
 その 新聞は 昨日の 新聞だが 今日のものは これだよ。
46. ho:nensai=nu tuŋfi=ne: haŋŋi=madi=n mo:taŋ.
豊年祭の 時に ばあさんまでも 踊った。

2.3.2 動作や状態の持ち主

nu 格の名詞が主語としてはたらき〈動作や状態の持ち主〉をあらわす。現段階では主語になれる名詞は、現象名詞の例だけが確認できた。

47. ami=nu φuinu ba:=ja saburo:=ja ja:=ne maŋga=bike: juno:ŋ.
 雨が 降る 時は 三郎は 家で 漫画ばかり 読んでいる。

2.4. ke 格

我喜屋方言の ke 格の名詞は、間接対象の補語と状況語としてはたらき、〈ゆくさき〉、〈あい手〉、〈くつつくところ〉、〈対象〉、〈原因〉をあらわす。

2.4.1 ゆくさき

ke 格の場所名詞が間接対象の補語としてはたらき、移動動作の〈ゆくさき〉をあらわす。

48. amma:=ja ifiba=ke koi=ga idʒaŋ.
 母さんは 市場へ 買物に 行った。
49. dʒiro:=ja ami=ke nrije: ja:=ke ke:ʃaŋ.
 次郎は 雨に 濡れて 家へ 帰ってきた。

2.4.2 あい手

ke 格の人名詞が間接対象の補語としてはたらき、動作の〈あい手〉をあらわす。

50. taro:=ja uttu=ke kwa:ʃi wakije: turuʃaŋ.
 太郎は 弟に お菓子を 分けて あげた。
51. hanako=ja amma:=ke me: kamaharitaŋ.
 花子は 母さんに ごはんを 食べさせてもらった。
52. dʒiro:=ja gaŋbarihe: tamme:=ke mugeraritaŋ.
 次郎は いたずらして じいさんに 叱られた。
53. dʒiro:=ke niwa=nu kusatui ʃimirani.
 次郎に 庭の 草とりを させよう。

2.4.3 くつつくところ

ke 格の物名詞が間接対象の補語としてはたらき、くつつき動詞とくみあわさり、〈くつつくところ〉をあらわす。

54. matsuri=nu harigami ko:minkan=nu kabi=ke hajo:taŋ.
 祭の 貼り紙が 公民館の 壁に 貼ってあった。
55. dʒiro:=ga ke:bije: φa:ja=ke ʃiʃibu utsukitaŋ.
 次郎が ころんで 柱に 頭を ぶつけた。
56. tamme:=ga ʃiʃibu=ke: sa:dʒi maʃo:taŋ.
 おじいさんが 頭に タオルを 巻いていた。

2.4.4 対象

ke 格の物名詞が間接対象の補語としてはたらき、心理的な態度をあらわす動詞とくみあわさり、〈対象〉をあらわす。

〈態度の対象〉

57. jurumitʃi=ja atʃi:ne habu=ke ʃu:i haŋko: narando.
 夜道は 歩くなら ハブに 注意しなさいよ。
58. bjo:in=ne: ware:=ga ʃu:ʃa=ke: ururuʃo:ŋ.
 病院で こどもが 注射に 驚いている。
 〈状態が現れるために必要な対象〉
59. hanako=ja ʃiʃira=ga amma:=ke mattaʃi ni:joŋ.
 花子は 顔が 母さんに よく 似ている。

2.4.6 原因

ke 格の現象名詞が状況語としてはたらき、動作や状態の〈原因〉をあらわす。

60. dʒiro:=ja ami=ke nrije: ja:=ke ke:ʃaŋ.
次郎は 雨に 濡れて 家へ 帰ってきた。

・ 述語の要素

ke 格の名詞が naŋ (なる) とくみあわさって、述語としてはたらくとき、連語述語の要素となる例も確認できた。

61. uttu:=ja ɸudʒu ʃu:gaku=nu ʃiŋʃiŋ=ke nataŋ.
妹は 去年 中学の 先生に なった。
62. tabaku=nu ɕi:=kara kadʒi=ke: najo:nro:.
煙草の 火から 火事に なっている。

2.5. ni 格

我喜屋方言の ni 格の名詞は、状況語や間接対象の補語としてはたらき、〈動作や状態がなりたつ時〉、〈動作や状態がなりたつ場所〉、〈ありか〉をあらわす。

2.5.1 動作や状態がなりたつ時

ni 格の時間名詞が状況語としてはたらき、〈動作や状態がなりたつ時〉をあらわす。

63. haʃiqwaʃi:=ni ke:ʃuntedo:ja.
八月に 帰ってくるようだ。
64. iʃiŋiʃi=ni mike:=ʃika harantedo:ja:.
(バスは) 一日に 三本しか 走らないよね。

2.5.2 動作や状態がなりたつ場所

ni 格の場所名詞が状況語としてはたらき、〈動作や状態がなりたつ場所〉をあらわす。

65. jodʒi=madi basutei=ni maʃo:kido:ja.
四時まで バス停で 待っておけよ。

2.5.3 ありか

ni 格の場所名詞が間接対象の補語としてはたらき、物の〈ありか〉をあらわす。現段階では、疑問詞の例しか確認できていない。また、この用例は現代日本語の影響があるとも考えることができる。

66. wan kutsu ma:=ni ajo.
おれの 靴 どこに ある。

2.6. ne:格

我喜屋方言の ne:格の名詞は、間接対象の補語や状況語や連用修飾語としてはたらき、〈ありか〉、〈道具〉、〈手段〉、〈材料〉、〈量〉、〈動作や状態がなりたつ場所〉、〈原因〉、〈動作や状態がなりたつ時〉をあらわす。

〈材料〉、〈量〉、〈動作や状態がなりたつ場所〉、〈原因〉の意味は、後述する he:格でもあらわすことができるが、ne:格は 60 代の話者がこれらの意味をあらわすときに使用する傾向がある。

2.6.1 ありか

ne:格の場所名詞が間接対象の補語としてはたらき、人や物の〈ありか〉をあらわす。

67. anu jama=ne: inoʃiʃi=ga unro:ja.
あの 山に いのししが いるそうだ。

68. waŋ=ga kutsu=ja da:=ne ajo.
おれの 靴は どこに ある。
69. tara:=ja φudzu:=kara jamatu:=ne=ru unro:ja:.
太郎は 去年から 東京に いるそうだ。

2.6.2 道具

ne:格の物名詞が間接対象の補語としてはたらき、動作にもちいる〈道具〉をあらわす。

70. dʒiro:=ga monosafi=ne saburo: kurufʌŋ.
次郎が ものさしで 三郎を 殴った。

2.6.3 手段

ne:格の物名詞が間接対象の補語としてはたらき、移動のための〈手段〉をあらわす。

71. maʃi=ke=ja takufi:=ne indʒuʃi=ŋkan basu=ne indʒuʃiga maʃi arani.
町には タクシーで 行くより バスで 行くのが 良いんじゃないか。

2.6.4 材料

ne:格の物名詞が間接対象の補語としてはたらき、生産活動の〈材料〉をあらわす。

72. dʒiro:=ja kabi=ne koinobori tsukutaŋ.
次郎は 紙で こいのぼりを 作った。
73. su:=ga ki:=ne: tsukue tsukuje: turafʌŋ.
お父さんが 木で 机を 作って くれた。
74. ?tamme:=ga wara=ne: dʒo:ri ano:ŋ.
おじいさんが 藁で 草履を 編んでいる。

2.6.5 量

ne:格の名詞が連用修飾語としてはたらき、〈量〉をあらわす。

75. to:kafʃi=ja ja:guna mu:ru=ne ju:bei φundo:ja:.
米寿は 家族 みんなで お祝いを するんだよね。

2.6.6 動作や状態がなりたつ場所

ne:格の場所名詞が状況語としてはたらき、〈動作や状態がなりたつ場所〉をあらわす。

76. ami=nu φui=nu çi:=ja saburo:=ja ja:=ne maŋga=bike: juno:ŋ.
雨が 降る 日には 三郎は 家で 漫画ばかり 読んでいる。
77. harita:=nu çi:=ja saburo:=ja u:mi=ne ju: kwa:hoŋ.
晴れた 日には 三郎は 海で 釣りをするよ。
78. haŋʃi:=ja nibandʒa:=ne terebi nooŋ.
ばあさんは 二番座で テレビを 見ている。
79. miʃi=ne ʃo:gakko:=nu ko:ʃoʃinʃiŋ=ke iʃataŋ.
道で 小学校の 校長先生に 会った。

2.6.7 原因

ne:格の現象名詞が状況語としてはたらき、動作や状態の〈原因〉をあらわす。

80. ma:ga=ga hanafʃi=ne: nu:jo:ŋ.
孫が 風邪で 寝ている。
81. me:=nu fu: mijagi=nu tamme:=ja bjo:ki=ne: ma:ʃando:.
先週 宮城の おじいさんは 病気で 死んだよ。

2.6.8 動作や状態がなりたつ時

ne:格の時間名詞が状況語としてはたらき、〈動作や状態がなりたつ時〉をあらわす。

82. ho:nensai=nu tufi=ne: haŋfi=madi=n mo:taŋ.
 豊年祭の 時に ばあさんまでも 踊った。

2.7. he:格

我喜屋方言の he:格の名詞は、間接対象の補語や状況語や連用修飾語としてはたらき、〈材料〉、〈量〉、〈動作や状態がなりたつ場所〉、〈原因〉をあらわす。he:格は動詞 huŋ (する) の中止形から格助辞に移行した形式であると考えられ、現代日本語ので格のようなはたらきをする。

he:格のこれらの意味は前述した ne:格でもあらわすことができるが、80 代の話者は he:格を使用する傾向がある。

2.7.1 材料

he:格の物名詞が間接対象の補語としてはたらき、生産活動の〈材料〉をあらわす。

83. dʒiro:=ja kabi=he koinobori tsukutaŋ.
 次郎は 紙で こいのぼりを 作った。
84. ?tamme:=ga wara=he: dʒo:ri anaŋ.
 おじいさんが 藁で 草履を 編んだ。

2.7.2 量

he:格の名詞が連用修飾語としてはたらき、〈量〉をあらわす。

85. unu te:buru=ja mbuhanu ju:tte=he: muŋfe ikaja:.
 この テーブルは 重いから 四人で 持って 行こう。
86. ni:=ga mbuhan tei=he: muŋfe: ikaja.
 荷物が 重いから 二人で 持って 行こう。
87. to:kafʃi=ja ja:guna mu:ru=he ju:bei ɸundo:ja:.
 米寿は 家族 みんなで お祝いを するんだよね。

2.7.3 動作や状態がなりたつ場所

he:格の場所名詞が状況語としてはたらき、〈動作や状態がなりたつ場所〉をあらわす。

88. unu uwagi=ja jamatu:=he: nisenen=he: ko:tando:ja.
 この 上着は 東京で 二千円で 買ったよね。

2.7.4 原因

he:格の現象名詞が状況語としてはたらき、動作や状態の〈原因〉をあらわす。

89. me:=nu ju: mijagi=nu tamme:=ja bjo:ki=he: ma:ɸando:.
 先週 宮城の おじいさんは 病気で 死んだよ。

2.8. kara 格

我喜屋方言の kara 格の名詞は、間接対象の補語や状況語としてはたらき、〈とりはずすところ〉、〈あい手〉、〈材料〉、〈出発点〉、〈うつりうごく場所〉、〈動作や状態がはじまる時〉、〈原因〉をあらわす。

2.8.1 とりはずすところ

kara 格の場所名詞が間接対象の補語としてはたらき、〈とりはずすところ〉をあらわす。

90. ni:ke:=kara ɸuton mutŋe: ɸu:ja:.
二階から 布団を 持って こい。

2.8.2 あい手

kara 格の人名詞が間接対象の補語としてはたらき、動作の〈あい手〉をあらわす。

91. amma:=kara sa:dʒi ji:je: du: su:taŋ.
 母さんから タオルを もらって 体を 拭いた。
92. ne:ne:=kara dʒiŋ i:taŋ.
 姉から 金を もらった。
93. dʒiro:=ja tamme:=kara jagamahante mugeraretaŋ.
 次郎は じいさんから うるさいと 怒られた。

2.8.3 材料

kara 格の物名詞が間接対象の補語としてはたらき、生産活動の〈材料〉をあらわす。

94. saki=ja ɸumi=kara tsukuŋdo:.
 酒は 米から 作るよ。
95. to:ɸu=ja to:ɸuma:mi=kara tsukuŋdo:.
 豆腐は 大豆から 作るよ。

2.8.4 出発点

kara 格の場所名詞が状況語としてはたらき、〈出発点〉をあらわす。

96. taro:=ja iŋi jamatu=kara ke:tsuntega.
 太郎は いつ 東京から 帰ってくるか。
97. naɸo=kara naɸa=ke:=nu basuunŋin=ja iŋfaha jagaja:.
名護から 那覇への バス運賃は いくら だろう。
98. ko:ŋo:ŋinŋin=ga basu=kara urie ŋaŋ.
 校長先生が バスから 降りて きた。

2.8.5 うつりうごく場所

kara 格の場所名詞が状況語としてはたらき、移動動作の〈うつりうごく場所〉をあらわす。

99. tin=kara maŋŋira: tui=ga tuno:ndo:.
空を 真っ白な 鳥が 飛んでいるよ。
100. unu ware:=ja mata haru=nu naka=kara atŋo:saja:.
 この 子供は また 畑の 中を 歩いているね。

2.8.6 動作や状態がはじまる時

kara 格の時間名詞が状況語としてはたらき、〈動作や状態がはじまる時〉をあらわす。

101. hanako=ja kinnu:=kara jaŋme: kakaje: nu:jo:ŋ.
 花子は 昨日から 病気に かかり 寝ている。
102. tara:=ja ɸudʒu:=kara to:kjo:=ne=ru unro:ja:.
 太郎は 去年から 東京に いるよね。
103. taŋme:=ja ŋikama:=kara jama=ke kinoko: tui=ga ŋdʒaŋ.
 じいさんは 朝から 山へ きのこを 取りに 行った。

2.8.7 原因

kara 格の現象名詞が状況語としてはたらき、動作や状態の〈原因〉をあらわす。

104. tabaku=nu ci:=kara kaɸʒi=ke: najo:nro:.
 煙草の 火から 火事に なっているよ。
105. tabaku:=kara kaɸʒi=ke: najo:nro:.
煙草から 火事に なっているよ。

2.9. madi 格

我喜屋方言の madi 格の場所名詞や時間名詞は、間接対象の補語と状況語としてはたらき、〈到達点〉と〈動作や状態がおわる時〉をあらわす。

2.9.1 到達点

madi 格の場所名詞は間接対象の補語としてはたらき、移動動作の〈到達点〉をあらわす。

106. dži:ro: unu ni: basutei=madi muŋe ndže: turaçi:.
次郎 この 荷を バス停まで 持って 行って くれ。

2.9.2 動作や状態がおわる時

madi 格の時間名詞は状況語としてはたらき、〈動作や状態がおわる時〉をあらわす。

107. dži:kaŋ=ga aitu godzi=madi terebi na:ni.
時間が あるから 五時まで テレビを 見ないか。
108. kudzi=madi taro:=tu ko:miŋkan=ne utando:.
九時まで 太郎と 公民館に いたよ。

2.10. tu 格

我喜屋方言の tu 格の名詞は、修飾語と間接対象の補語としてはたらき、〈仲間〉〈状態があらわれるために必要な対象〉をあらわす。

2.10.1 仲間

tu 格の人名詞は相互的な動作をあらわす動詞とくみあわさると、文の部分として間接対象の補語としてはたらき、〈仲間〉をあらわす。

(相互的な動作のあい手)

109. dži:ro:=ja uttu=nu saburo:=tu o:taŋ.
次郎は 弟の 三郎と 喧嘩した。

また、tu 格の人名詞は、相互的な動作ではない動詞とくみあわさると、文の部分として修飾語としてはたらき、〈一緒におこなう仲間〉をあらわす。

(一緒におこなう仲間)

110. kudzi=madi taro:=tu ko:miŋkan=ne utando:.
九時まで 太郎と 公民館に いたよ。
111. dufiŋfa:=tu jamatu:=he: do:butsuen=ke: ndžatu ironna do:butsu=ga u:tando:ja.
友達と 本土で 動物園へ 行ったら いろんな 動物が いたよね。

2.10.2 状態があらわれるために必要な対象

tu 格の人名詞は間接対象の補語としてはたらき、述語のあらわす〈状態があらわれるために必要な対象〉をあらわす。

112. taro:=ja mi: su:=tu ju: ni:joŋ.
太郎は 目が お父さんと よく 似ている。

また、tu の形式は以下のように同じ要素をもつ他の名詞と並べる〈並べ〉の例も確認できた。

113. kadzuko=tu hanako=tu dufigwa:jasu.
かず子と 花子と 友達だ。

2.11. jakane 格

我喜屋方言の jakane 格の名詞は、間接対象の補語としてはたらき、〈比較〉をあらわす。

2. 11. 1 比較

jakane 格の名詞は、主語でしめされるものと〈比較〉されるものをあらかわす。

114. kinnu:=jakane ʃu:=ja hadʒi tsu:sanja.
昨日より 今日 風 強かったね。

115. jasaiandagi:=jakane saʃimi=ga=ru ma:hassa:.
野菜天ぷらより 刺身が 旨いよ。

動詞を名詞化させ「行くより」をあらわすときは、jakane ではない形式があらわれた。

116. maʃi=ke=ja takuʃi:=ne indʒuʃi=nkan basu=ne indʒuʃiga maʃi arani.
町には タクシーで 行くより バスで 行くのが 良いんじゃないか。

3. おわりに

本報告では伊平屋島我喜屋方言の名詞の格形式と意味について、分析・記述をおこなった。各々の格形式の意味ごとに用例数に偏りがあるため明確なことは述べられないが、いくつかの形式と意味についてすこし述べる。

〈動作や状態の持ち主〉は、主語としてはたらくハダカ格、ga 格、nu 格の名詞があらわす。ハダカ格は人名詞や現象名詞が確認でき、ga 格は人名詞や現象名詞や物名詞などが確認でき、nu 格は現象名詞の用例しか確認できない。このことから、〈動作や状態の持ち主〉をあらわすときは、ga 格が主となる用法であり、ハダカ格や nu 格は少し限られる用法だと考えることができる。

〈属性〉は、連体修飾語としてはたらくハダカ格、ga 格、nu 格の名詞があらわす。nu 格は様々な名詞が確認できるが、ハダカ格と ga 格は人名詞や人代名詞の用例しか確認できない。このことから、〈属性〉をあらわすときは、nu 格が主となる用法であり、ハダカ格と ga 格が人名詞や人代名詞に限られる用法であると考えられる。

〈量〉、〈原因〉、〈材料〉、〈動作や状態がなりたつ場所〉は、間接対象の補語や状況語としてはたらく he:格、ne:格の名詞であらわす例が確認できる。話者の年齢が 80 代なら he:格、60 代なら ne:格を使用するようである。このふたつの格は、he:格は動詞 huŋ (する) の中止形から格助辞に移行した形式であり、ne:格は古い日本語のに格からきた形式であると考えられ、発生が異なるものだろう。he:格と ne:格は同じ意味をあらわすが、〈ありか〉や〈動作や状態がなりたつ時〉は ne:格でしか確認できていないため、詳しい調査が必要である。

参考文献

- かりまたしげひさ 2016 『『あたらしい にっぽんご』テキストとその解説—第 6 章くつつき (1)、7 章くつつき (2) —』『教育国語 4・14』むぎ書房 pp. 99-130
- 言語学研究会 1983 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 當山奈那 2015 「琉球語平安座方言の名詞の格」『国際琉球沖縄論集』 pp. 47-59
- 名護市史編さん委員会 2006 『名護市史本編・10 言語』名護市役所
- 琉球方言研究クラブ 2016 『うるま市与那城屋慶名の名詞の格ととりたて』
- 諸見清吉編・伊平屋村史発行委員会 1981 『伊平屋村史』伊平屋村
- 伊平屋村 HP <http://www.vill.iheya.okinawa.jp> (最終閲覧日 2017/2/9 21:15)

伊平屋島田名方言の動詞の活用

伊平屋島田名方言の動詞の活用

崎山拓真 上門梨緒

1. はじめに

動詞は、人やものの動きや変化、状態を語彙的な意味としてあらわす述語になることから、文法的なカテゴリーとしてのテンスとアスペクトをもつ。また、人の意志的な動作をあらわすため、ムード形式をもっていて、命令形、勧誘形、禁止形などがある。

今回は 2016 年 9 月 4 日、5 日に伊平屋島田名集落で調査した、38 個の動詞の活用について報告する。なお調査した形式は、非過去形、否定形、過去形、継続相、中止形である。調査した動詞は以下のとおりである。

飛ぶ、遊ぶ、持つ、行く、縛る、漕ぐ、出す、くれる、落とす、飲む、食べる、降る、蹴る、起きる、降りる、落ちる、捨てる、洗う、買う、言う、掘る、売る、被る、閉じる、寝る、降りる、酔う、着る、切る、する、ない、ある、いる、来る、見る、食う

2. 動詞活用のタイプ

伊平屋島田名方言（以下、田名方言）の動詞の個々の形態論的な形は、標準語と同様に語幹、語尾、助辞などの形づくりの要素に分化している。語幹は「原則として、それぞれの活用形に共通な要素であって、それらが特定の動詞の（活用以外の）特定のカテゴリーに属することを表現する役割をもっている要素」であり、語尾は、「同一の（活用以外の）カテゴリーに属する個々の活用形を特徴づける役割をもった要素のうち、基本的なもの」である。語尾は文法的な意味に応じて変化する部分で、のこりの変化しない部分が語幹である¹。

田名方言の動詞の語幹には、基本語幹、音便語幹、連用語幹のみつつの変種が存在する。基本語幹と音便語幹は現代日本語にもみられるが、連用語幹は、奄美沖繩諸方言に特徴的にみられる。動詞の語幹（基本語幹、連用語幹、音便語幹）と語尾のつくり方から、田名方言の動詞は規則変化動詞と特殊変化動詞にわけることができる。規則変化動詞はさらに、強変化動詞と混合変化動詞にわかれる。強変化動詞は、基本語幹の末尾に子音があらわれ、音便語幹をもつ。

混合変化動詞は、音便語幹をもたず、基本語幹末に子音があらわれ、連用語幹末に母音があらわれる、子音語幹と母音語幹の混合した動詞である。

強変化動詞も、混合変化動詞も語幹のつくりかたによって、それぞれに下位の変種がある。強変化動詞は、基本語幹末にあらわれる子音のちがいに応じて語幹の変種のあらわれ方や語尾の変種のあらわれ方が異なるため、m 語幹動詞、b 語幹動詞のように名付けて呼び

¹語幹、語尾の定義は、鈴木重幸（1972）、同（1983a）、同（1983b）にしたがう。

分ける。混合変化動詞は、中止形の語幹が1音節か、1音節以上かで分かれる。それぞれ1音節動詞、2音節動詞と呼び分ける。なお、基本語幹は否定形の語幹を代表させて、それぞれ分類していく。語幹と語尾の境界には「-」を挿入する。

・語幹について

基本語幹とは命令形、勧誘形のような動詞の屈折の語幹である。基本語幹を構成要素にもつ動詞の形式は、否定形、命令形、勧誘形などがある。今回は調査のデータから否定形を代表させている。音便語幹とは音便によって生じた語幹で、基本語幹から派生したかわり語幹である。音便語幹を構成要素にもつ形式は過去形である。連用語幹は奄美沖繩諸方言に特徴的にみられる語幹で、構成要素にもつ形式は中止形、非過去形、継続相である。

2.1 強変化動詞

強変化動詞は、現代日本語の強変化動詞(鈴木重幸 1972 の第一変化)に対応するもので、混合変化動詞と活用のタイプが異なっている。現代日本語の強変化動詞のように田名方言の強変化動詞も音便語幹を有する。基本語幹は否定形、音便語幹は過去形、連用語幹は中止形、非過去形、継続相にみられる。

(1) k 語幹動詞

k 語幹動詞は、mucun(持つ)、kuncun(縛る)、ntsun/ncun(見る)、icun(行く)などがある。この動詞は、基本語幹の末尾がkで、連用語幹末の子音はcである。なお、icun(行く)は、過去形と中止形のとき有声子音zjであられるk語幹動詞のバリエーションである。

今回の調査では得られなかったが、過去に調査された全集落調査票の調査結果では、「見る」の活用は、nu:n(見る) na:n(見ない) nca(見た) ne:n(見て)という形式になっている。今後「見る」には2つの形式がある可能性も考慮しながら調査する必要がある。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
k	持つ	muk-an	mu-can	muc-un	muc-e:	muc-o:n
k	縛る	kunk-an	kun-can	kunc-un	kunc-e:	kunc-o:n
k	見る	ink-an	n-can	nts-un/nc-un	nc-e:	
k	行く	ik-an	n-zjan	ic-un	nzj-i ²	

(2) g 語幹動詞

g 語幹動詞には huzjun(漕ぐ)がある。基本語幹末子音はgで、連用語幹末子音はzjである。

² 田名方言の中止形は muc-e: (持つて)、kunc-e: (縛って) のように-e:であられるが、今回の調査で、他の琉球諸方言にみられる-iで終わる形式がいくつかあらわれた。これは首里方言や他の地域の方言との接触による可能性がある。これらの形式については要検討である。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
g	漕ぐ	hug-an	hu-zjan	huzj-un	huzj-i ³	huzj-on

(3) h 語幹動詞

h 語幹動詞は nzjahun (出す)、turahun (くれる)、utusun (落とす)、hun (する) がある。基本語幹末子音と連用語幹末子音は h である。「落とす」は、s 語幹動詞のような形式であらわれたが、田名方言では、*s>h の変化がみられることから、この「落とす」も h 語幹動詞である可能性が高い。これは首里方言や他の方言との接触によって s 語幹動詞のような活用になっていると考えられる。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
h	出す	nzjah-an	nzja-can	nzjah-un	nzjah-e:	nzjah-on
h	くれる	turah-an	tura-can	turah-un		
h	落とす	utus-an	utu-can	utus-un	utusj-e:	
h	する	h-an		h-un	h-e:	

(4) m 語幹動詞

m 語幹動詞には、numun(飲む)、kamun(食べる)などがある。この動詞は基本語幹末子音、連用語幹末子音が m である。なお、過去形の語尾の子音は nu-nan (飲んだ) のように n になる単語と、ka-dan (食べた) のように d になる単語がある。これは他の m 語幹動詞 (つかむ、頼む、縮むなど) の過去形を調査し、検討しなければならない。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
m	飲む	num-an	nu-nan	num-un	num-e:	num-o:n
m	食べる	kam-an	ka-dan	kam-un	kam-e:	

(5) b 語幹動詞

b 語幹動詞には、tubun (飛ぶ) asibun (遊ぶ) などがある。基本語幹末子音、連用語幹末子音は b である。遊ぶについては、asibun とは別に asuwun という形式が確認できた。伊平屋方言では、wa:ki(ざる)や、wa:pe:(まちがい)のように、他の琉球諸方言で ba であらわれるものが wa になる音韻変化がみられる (*ba>wa)。否定形などでも tuw-an (飛ばない)、asuw-an (遊ばない) の形式になることが予想されるが、今回そのような語形は確認できなかった。他の方言との接触によって、b 語幹動詞は全体的にゆれている可能性があるため、

³ この形式も述べたシ中止形であらわれる例

他の b 語幹動詞でも調査する必要がある。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
b	飛ぶ	tub-an		tub-un	tub-e:	tub-on
b	遊ぶ			asib-un		
b	遊ぶ		asu-dan	asuw-un	asub-e:	

(6) r 語幹動詞

r 語幹動詞には、hujun (降る)、ki:jun (蹴る)、ko:-in (買う)、ara-in (洗う) などがある。基本語幹末子音は r で、連用語幹末は母音になっている。「洗う」、「買う」は現代日本語では語幹末が母音になるが、田名方言のばあい語幹末に r があらわれていて両者の語幹末が対応しない。同様に現代日本語の弱変化動詞に対応する田名方言の動詞の基本語幹末子音も r になっている。この現象をかりまた (2006) にならい、「r 語幹化」とよぶ。

		基本語幹	音便語幹	連用語幹		
		否定形	過去形	非過去形	中止形	継続相
r	降る	hur-an	hu-tan	hu-jun	hu-e:	hu-jo':N
r	被る	haur-an	hau-tan	hau-in	hau-e:	hau-jo':N
r	掘る	hur-an	hu-tan	hu-in	huj-e: (hui-e:')	hu-jo':N
r	売る	ur-an	u-tan	u-in	u-e:	u-jo':N
r	閉じる	ku:r-an	ku:-tan	ku:-in	ku:-e:	
r	寝る	nu:r-an	nu:-tan	nu-in	nu:-e:	nu:-jo':N
r	いる	ur-an	u:-tan	u-n		
r	買う	ko:r-an	ko:-tan	ko:-in	ko:-e:	
r	洗う	arar-an	ara-tan	ara-in	ara-e:	ara-jo':N

2.2 混合変化動詞

混合変化動詞は、現代日本語の弱変化動詞 (鈴木 1972 の第二変化、いわゆる一段動詞) に対応し、音便語幹をもたない。現代日本語の弱変化動詞の基本語幹が母音でおわり、強変化動詞の基本語幹が子音でおわっているのに対して、田名方言の混合変化動詞の基本語幹の末尾は子音になっていて、その点は現代日本語とはことなっている。これは前述したように田名方言のばあい、弱変化動詞の基本語幹が r 語幹化したためである。混合変化動詞は、音便語幹をとりたてて設定する必要がなく、連用語幹の末尾が母音でおわるなど、現代日本語の弱変化動詞とおなじ特徴も有して、田名方言のばあい、弱変化動詞と強変化動詞の混合の活用をするようになっている。

現代日本語の弱変化動詞に対応する伊平屋方言の混合変化動詞は、基本語幹の末尾が -r

になっていて、ここでも r 語幹化がみられる。現代日本語の弱変化動詞に対応する伊平屋方言の動詞を混合変化動詞とする要因になっている。

現代日本語のばあい、弱変化動詞には基本語幹末の母音が～e（下二段活用）になる動詞と、～i（上二段活用）になる動詞とがあるが、伊平屋方言のばあい、前者の～e に統一されている。琉球語全体におきたせま母音化のため、いずれも i になっていて、わかりにくいのであるが、i に先行する子音が口蓋音化していないことから、いずれも *e（下二段活用）に対応する。過去形、中止形の語幹末母音が i であれば混合変化動詞である。

		基本語幹				
		否定形	音便語幹	過去形	連用語幹	連用語幹
1	着る	cir-an	ci:-tan	ci:-N		ci-e:
1	蹴る	ki:r-an	ki:-tan	ki:j-un		ki:-e:
1	酔う	wi:r-an	wi:-tan (bi:-tan)	(w)i:-N	wi:-jo:N	wi:-e:
1	言う	ir-an	is-san	i:r-un		j-e:
2	起きる	ukir-an	uki-tan	uki-un (uki-N)	uki-jo:N	uki-e:
2	落ちる	utir-an	uti-tan	uti-N		uti-ti
2	捨てる	sitir-an	siti-tan	siti-N	siti-jo:N	siti-e:

2.3 特殊変化動詞

「ある」は基本語幹がわからなかったため、今回は特殊変化動詞に分類した。だが、「いる」と同様に r 語幹動詞である可能性がある。「食う」については、不規則な活用をしているため特殊変化動詞に分類したが、その他の形式も調査し、分類する必要がある。

		基本語幹				
		否定形	音便語幹	過去形	連用語幹	連用語幹
I	ある		a:-tan	a-N		a-e:
II	ない		ne:n-tan	ne:-N		ne:na
III	来る	k-u:N	c-a:N	c-un	c-o:N	c-i: ⁴
IV	食う	kwa:-N	kwa:-tan	kwe:-N(hwe:-N)		kwa:-e:

活用のタイプ

田名方言の強変化動詞は、現代日本語の強変化動詞に対応し、混合変化動詞とことなり、音便語幹を有する。混合変化動詞は、現代日本語の弱変化動詞に対応し、音便語幹をもたない。現代日本語の弱変化動詞の基本語幹が母音でおわり、強変化動詞の基本語幹が子音でおわっているの

⁴ シ中止形であらわれている例

に対して、田名方言の混合変化動詞の基本語幹の末尾は、子音になっていて、その点は現代日本語とはことなっている。これは田名方言のばあい、弱変化動詞の基本語幹が r 語幹化したためである。混合変化動詞は、音便語幹をとりたてて設定する必要がなく、連用語幹の末尾が母音でおわるなど、現代日本語の弱変化動詞とおなじ特徴も有している。田名方言のばあい、弱変化動詞と強変化動詞の混合の活用をするようになってきているためである。以下に活用のタイプをまとめる。非過去形の語尾のタイプは、-N、-uN、-iN の3つのタイプに分かれる。

表 1

		基本語幹	連用語幹	音便語幹
k1	持つ	muk-an	muc-un	mu-can
k2	行く	ik-an	ic-un	n-zjan
g	漕ぐ	hug-an	huzj-un	hu-zjan
h	出す	nzjah-an	nzjah-un	nzja-can
m1	飲む	num-an	num-un	nu-nan
m2	食べる	kam-an	kam-un	ka-dan
b	遊ぶ	asib-an	asib-un	asu-dan
r1	降る	hur-an	huj-un	hu-tan
r2	被る	haur-an	hau-in	hau-tan
r3	買う	ko:r-an	ko:-in	ko:-tan
r4	洗う	arar-an	ara-in	ara-tan
混合変化動詞 (弱変化)				
1	着る	ci:r-an	ci:-N	ci:-tan
1	蹴る	ki:r-an	ki:j-un	ki:-tan
1	酔う	wi:r-an	(w)i:-N	wi:-tan(bi:tan)
2	起きる	ukir-an	uki-un (uki-N)	uki-tan
2	降りる	urir-an	uri-N	uri-e:
2	落ちる	utir-an	uti-N	uti-tan
2	捨てる	sitir-an	siti-N	siti-tan
特殊変化動詞				
I	ある		a-N	a:-tan
II	ない		ne:-N	ne:n-tan
III	来る	ku:-N	cu-N	ca:-N
IV	食う	kwa:-N	kwe:-N(hw-e:N)	kwa:-tan

まとめ

今回調査した結果をまとめると、田名方言の動詞には、強変化動詞、混合変化動詞、特殊変化動詞のみつつのタイプがある。また、語幹のタイプとして、基本語幹、連用語幹、音便語幹の3つのバリエントが存在する。前述したように、田名方言の中止形の語幹は、連用語幹とおなじ形式になっている。音便語幹は現代日本語で、過去形と強変化動詞の中止形のときにあらわれるが、田名方言は、第二中止形（シテ形式）がなく、第一中止形はシアリ相当形式で中止形をつくるため、語幹末が子音となり、連用語幹と同じ形式になる。

今後の課題としては、動詞の語数を増やして、伊平屋方言の動詞活用の体系を記述する必要があることである。また、nzj-i（漕いで）、uti-ti（落ちて）などのように、中止形の形式が他の地域の語形であるシ形、シテ形であらわれているものがある。またその他の活用形でも、他の地域の方言の影響によるものと考えられる特徴がみられたものもあった。そのような点をふまえて、今後また調査が必要である。

【資料】動詞活用表

強変化動詞

		否定形	過去形	非過去形	継続相	中止形
k	持つ	muk-an	mu-can	muc-un	muc-o:N	muc-e:
k	縛る	kunk-an	kun-can	kunc-un	kunc-o:N	kunc-e:
k	見る	ink-an	n-can	nts-un/nc-un		nc-e:
k	行く	ik-an	n-zjan	ic-un		nzj-i
g	漕ぐ	hug-an	hu-zjan	huzj-un	huzj-on	huzj-i
h	出す	nzjah-an	nzja-can	nzjah-un	nzjah-on	nzjah-e:
h	くれる	turah-an	tura-can	turah-un		
h	落とす	utus-an	utu-can	utus-un		utusj-e:
h	する	h-an		hw-un		h-e:
m	飲む	num-an	nu-nan	num-un	num-o:N	num-e:
m	食べる	kam-an	ka-dan	kam-un		kam-e:
b	飛ぶ	tub-an		tub-un	tub-on	tub-e:
b	遊ぶ	asib-an	asu-dan	asib-un	asir-o:N	asub-e:
r	降る	hur-an	hu-tan	huj-un	hu-jo:N	hu-e:
r	被る	haur-an	hau-tan	hau-in	hau-jo:N	hau-e:
r	掘る	hur-an	hu-tan	hu-in	hu-jo:N	huj-e: (hui-e:)
r	売る	ur-an	u-tan	u-in	u-jo:N	u-e:
r	閉じる	ku:r-an	ku:-tan	ku:-in		ku:-e:

r	寝る	nu:r-an	nu:-tan	nu-in	nu:-jo:N	nu:-e:
r	いる	wur-an	wu:-tan	wu-N		
r	洗う	arar-an	ara-tan	ara-in	ara-jo:N	ara-e:
r	買う	ko:r-an	ko:-tan	ko:-in		ko:-e:

混合変化動詞（弱変化）

1	着る	ci:r-an	ci:-tan	ci:-N		ci:-e:
1	蹴る	ki:r-an	ki:-tan	ki:j-un		ki:-e:
1	酔う	wi:r-an	wi:-tan(bi:tan)	(w)i:-N	wi:-jo:N	wi:-e:
1	言う	ir-an	is-san	i:r-un		j-e:
2	起きる	ukir-an	uki-tan	uki-un (uki-N)	uki-jo:N	uki-e:
2	降りる	urir-an		uri-N		uri-e:
2	落ちる	utir-an	uti-tan	uti-N		uti-ti
2	捨てる	sitir-an	siti-tan	siti-N	siti-jo:N	siti-e:

特殊変化動詞

I	ある		a:-tan	a-N		a-e:
II	ない		ne:n-tan	ne:-N		ne:na
III	来る	k-u:N	c-a:N	c-un	c-o:N	c-i:
IV	食う	kwa:-N	kwa:-tan	kwe:-N(hwe:-N)		kwa:-e:

参考文献

- 上村幸雄（1963）「首里方言の文法」（『沖縄語辞典』国立国語研究所編）
- かりまたしげひさ（2010）「琉球語田名方言の動詞の形づくり」『琉球の方言』34号
- 鈴木重幸（1983a）「形態論的なカテゴリーについて」（『教育国語』72号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録）
- 鈴木重幸（1983b）「動詞の形態論的な形の内部構造について」（『横浜国大 国語研究』創刊号、『形態論・序説』1996、むぎ書房に再録）
- 鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 仲宗根政善（1983）『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店

沖縄県西表船浮方言

沖縄県西表船浮方言

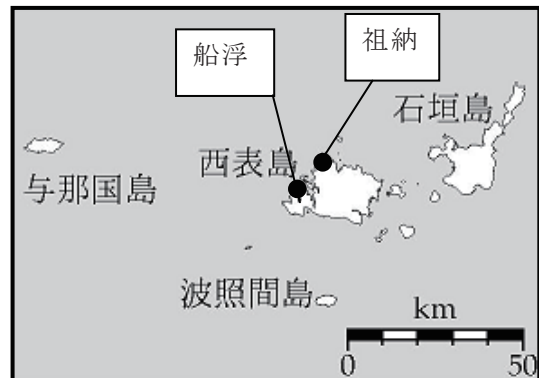
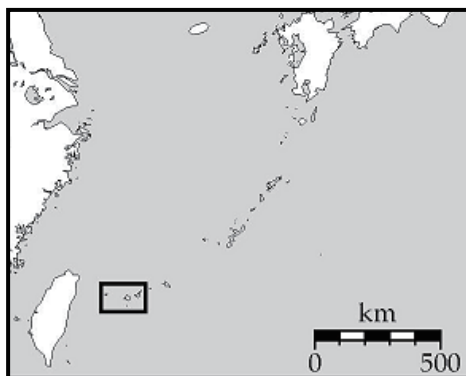
荻野千砂子

1 沖縄県八重山郡竹富町西表島の船浮（ふなうき）集落

竹富町地区人口動態票（平成 29（2017）年 1 月）によると、舟浮集落の人口は 51 名である¹。役場の書類上の表記は「舟浮」とあるが、話者によると、元来「船浮」が正しく、役場に間違っって届けたため、現在のような表記になったのだという。調査に協力してくださっている船浮方言の話者は、清水光江氏（昭和 3 年生まれ女性）と戸眞伊廣氏（昭和 15 年生まれ男性）のお二人である。お二人とも、現在、石垣市に在住している。話者の見解を尊重するため、今後「船浮」と表記することにする。船浮方言を話せる話者数を尋ねたところ、石垣市在住者と船浮在住者を含めた話者の数は 10 名にも満たないことが分かった。早急な記述が望まれる言語の一つである。

話者の話を聞いていると、西表島の西側の、祖納（そない）、干立（ほしたて）、白浜（しらはま）、船浮、網取（あみとり、1971 年廃村）で一つの文化圏を作っていた様子が分かる。西表島の東側の古見（こみ）や大原（おおはら）とは異なる文化圏である。この中で船浮は、天然の港に恵まれており、沖縄の本土復帰の頃まで台風の前夜など国際的な避難港として賑わっていたという。そのため、来港する船からもたらされる本土の音楽や文化に直に接する機会が多く、「船浮は、内地なみ（の文化環境）だった」と語る。生活について聞いてみると、確かに一般的な八重山の文化とは異なるところがある。一点目は「山羊を食べない」ことである。山羊を飼育はしていたが、糞を肥料とするのが目的であり、食べることはなかったという。二点目は「イノシシを刺身で食べない」ことである。西表島ではイノシシを捕獲して食べるが、祖納では新鮮なイノシシの肉を刺身で食べる習慣があった。それに対し船浮では「決して刺身で食べない。必ず火を通す。」と言う。同じ西表島でも異なる生活様式が伺われて興味深い。

（図）西表島船浮の位置²



¹ 竹富町 HP による。

² 国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard 氏が作成した地図に加筆をしている。

2 先行研究

西表島方言に関しては祖納方言の報告がある。まず、久野真（1988）による音韻体系の分析があり³、金田章宏（2009）⁴（2010）⁵（2011）⁶では、格助詞や動詞の活用等の分析がなされている。船浮方言に関しては、町博光（1984）があるが⁷、これ以外に詳しい記述が無い。そこで、金田章宏（2009）で述べられている祖納方言の格助詞・とりたて助詞を参考にしながら、荻野千砂子（2017）では、助詞に関して意味用法の記述を深めることを試みた⁸。その結果、格助詞やとりたて助詞の形態は、祖納方言とよく似ていることが明らかになった。しかし、形態は同じでも、異なる用法があることも明らかとなった。祖納方言をさらに調査をすると、同様の現象が確認できるかもしれない。今後、両方の方言を比較考察することで、記述を深めることができると考えている。

3 音素に関して

今回の予備調査では、音素について主に調べた。久野（1988）では祖納方言の音素を次のように分析している。

母音音素：/a, i, u, e, o, ā/

半母音要素：/j, w/

子音要素：/ʔ, h, g, k, d, t, z, c⁹, s, r, n, b, p, m/

拍音素：/N, Q, R/

船浮方言話者の感覚では船浮方言は祖納方言と似ているという話ではあるが、荻野（2017）では次のように音素を考えた。

母音：/a, i, u, e, o, ā, a̠, u̠, (i)/

半母音：/j, w/

子音：/k, s, t, ts, tɕ, φ, h, m, n, r, k^w, g^w, z, p, b, g, d/

これに拍音素として、撥音 N、促音 Q、長音 R が加わる。祖納方言との相違として、無声化した母音を音素として立てることができるのではないかと考える。/a̠/が、[p]の前でミニマルペアができるためである¹⁰。

/a/：pari（針）

/a̠/：pa̠ri（走って）

話者は「走って（「走る」の連用形）」の[p̠a̠]を[pa]とは違う音であると判断する。そこで、

³ 久野真（1988）「西表島祖納方言の音韻体系」『琉球の方言』13

⁴ 金田章宏（2009）「沖縄西表島（祖納）方言の格ととりたての意味用法」『琉球の方言』33

⁵ 金田章宏（2010）「沖縄西表島祖納方言ーアスペクト・テンス・ムード体系の素描」『日本語形態の諸問題ー鈴木泰教授東京大学退職記念論文集』ひつじ書房

⁶ 金田章宏（2011）「八重山西表島（祖納）方言動詞の活用タイプ」『琉球の方言』35

⁷ 町博光（1984）「西表島舟浮集落の方言敬語法」『広島女子大学文学部紀要』19

⁸ 荻野千砂子（2017）「西表島船浮方言の格助詞ととりたて助詞」『福岡教育大学国語科学研究論集』58

⁹ 久野真（1988）の p73 の表より、音声は[ts]である。

¹⁰ この例については白田理人氏よりご教示を頂いた。

他の子音の後でも無声音と有声音との対立があるかを調べることにした。音節は CV 構造で揃えた。

(1) /a/について

① /p/の後で対立がある。

/pa/ : pabu (はぶ), pada (肌), padanaga (なまけもの)

/pa/ : paŋi (走って), paŋi (羽), paŋa (花)

② /k/の後で対立がある。

/ka/ : kagaN (鏡), kazera (背中の中の肩の下あたり), kabutca (かぼちゃ)

/ka/ : kaŋi (亀), kaŋapai (鋏), kaŋmai (イノシシ)

③ /t/の後で対立がある。

/ta/ : tabi (旅), ta (taa) (田んぼ), tadema (今)

/ta/ : taŋi (竹), taŋi (種), taŋrai (桶)

④ /s/の後で対立がある。

/sa/ : saba (草履), saja (サヤ)

/sa/ : saŋa (砂糖), saŋi (月桃), saŋi (酒)

用例をみると /a/ は、後続子音が無声子音でも有聲子音でも出現していることが分かる。よって、音声的な環境による母音の無声化ではないと考える。/a/ を音素として認めてよいのではないかと考える。

(2) /u/について

次に、/u/ について調査を行った。以下のように /u/ も、後続子音の無声・有聲に関わらず出現しているため、/u/ も音素として認めてよいのではないかと考える。

⑤ /p/の後で対立がある。

/pu/ : puri jui (豊年祭)

/pu/ : puŋi (骨), puŋi (星)

⑥ /k/の後で対立がある。

/ku/ : kukuru (心), kutusi (今年)

/ku/ : kuŋmu (蜘蛛), kuŋsine (腰),

⑦ /t/の後で対立ある。

/tu/ : tubu (飛ぶ), kutusi (今年)

/tu/ : tuŋno (卵), tuŋtei (妻)

⑧ /s/の後で対立ある。

/su/ : sunupa (藻)

/su/ : suŋnee (祖納), suŋuru (もずく)

⑨ /hu/では対立がある。

/hu/ : huna (魚の名。本土の鮒より小さい), huruja (便所), huku (肺)

/hɯ/ : hɯta (ふた), maihɯna (お利口さん), hɯteimu (挟む)

(3) /i/について

荻野(2017)では、/i/について無声と有声の対立があるか不明としていた。/ɯ/に関しては、/hu/と/hɯ/の対立があることがわかっていたので音素と考えていたが、/i/に関しては/kɨmissai/ (すばらしい) で音声が揺れることがあった。しかし、その後の調査で、/kɨmu/ (肝臓) の/kɨ/は無声化し、/kizari/ (法事) の/ki/は無声化しないことが明らかとなった。/ki/も音素として考えてよいのではないかと考える。ただし、用例は少ない。語頭の[tei]は今のところすべて無声化する。⑫はどちらも「道」の意味だが、-na が下接したときのみ無声化する。

⑩ /k/の後で対立がある。

/ki/ : kizari (法事), kibusi (煙)

/kɨ/ : kɨmu (肝臓), kɨmissai (すばらしい)

⑪ /s/の後で対立がある。

/si/ : siba (心配), sikja (小バエ)

/sɨ/ : sɨma (島), sɨna (するな), sɨdatei (醤油)

⑫ /te/の後で対立がある。

/tei/ : mitei (道)

/teɨ/ : miteɨna (道)

4 まとめ

以上、本報告では、無声化した母音の/ḁ/, /ɯ̥/, /i̥/が音素として考えられる可能性を示した。ただ、無声化が起こるのは、無声子音 (/p//k//s/等) の後で、かつ音節構造がCVのときであり、音節構造がCVVの場合や、CVNのときには、母音の無声化が起こった例が見られない。/paisa/ (早く), /taaboo/ (たばこ), /huNda/ (廊下) のような例では無声化が起こらない。よって今後、無声化する条件が明らかになれば、音素ではなく母音の無声化と分析する可能性もある。さらに、無声化とアクセントとの関連も考える必要があるだろう。

そのほか、無声化した母音の後に鼻音の子音が来ると、音声的に鼻母音のように聞こえることがある。例えば、/maihɯna/ (お利口さん) は、[hɯ]の母音は[ū]のように聞こえる。また、無声母音の後の子音は無声化して聞こえる。例えば、/maihɯ̥na/ (お利口さん), /tɯ̥no/ (卵) のように聞こえる。これらは今のところ、音声的な現象ではないかと考えている。

文化庁委託事業報告書

平成28年度
危機的な状況にある言語・方言の
アーカイブ化を想定した実地調査研究

2017年3月
琉球大学
国際沖縄研究所

